

士師記終

路得記

第一章 士師の世をおさむる時にあたりて國に饑饉ありければ一箇の人その妻と二人の男子をひきつれてベテレヘムエダを去りモアアの地にゆきて寄寓るニその人の名はエリメレク、その妻の名はナオミその二人の男子の名はマロンおよびキリオンといふ、ベテレヘムエダのエフラテ人あり彼等モアアの地にいたりて其處に在りしが三ナオミの夫エリメレク死てナオミとその二人の男子のこざる四彼等おのゝモアアの婦人を妻にめざるその一人の名はオルバといひ一人の名はルツといふ彼處にすむこと十年許にして五マロルとキリオルの二人もまた死り斯ナオミは二人の男子と夫に後れしが六モアアの地にて彼エホバその民を背みて食物を之にたまふと聞ければその地より起てモアアの地より歸んせしその在る處を尋ねて出たりて二人の地これさうもにあり彼等エダの地にかへらん途にすむ八愛にナオミとその二人の地にいひけるは汝らはゆきておのゝ母の家に へれ汝らがかの死たる者我を善く待ひしごとくに汝がはくはエホバまたなんぢらを善くあつかひたまへんれはくはエホバなんぢらをして各々その夫の家に安んずるをえせしめたまへさ乃ちかれらに接吻しければ彼等聲をあげて哭き十之にいひけるは我ら汝さうもに汝の民にかへらんさ十一ナオミいひけるは女子よ返れ汝らなんぞ我さうもにゆくべけんや汝らの夫さなるべき子續わが胎にあらんや十二女子よかへりゆけ我は老たれば夫をもつをえざるなり假設われ指望ありといふさ今夜夫を有つさも而してまた子を生まむさ十三汝等これがために其子の生 長までまちをるべけんや之がために夫をもたずしてひきこもりをるべけんや女子よ然すべきにあらす我はエホバの手のよみてわれを攻しことを汝らのために痛くうれふるなり十四彼等また聲をあげて哭く而してオルバはその姑に接吻せしがルツは之を離れず十五是によりてナオミまたいひけるは視よ汝の姉妹はその民さその神にかへり往く汝も姉妹にしたがひてかへるべし十六ルツいひけるは汝を棄て汝をばなれて歸ることを我に催すなれ我は汝のゆくところに往き汝の宿るところにやざらん汝の民はわが民汝の神はわが神なり十七汝の死るところに我は死て其處に歸

らるべし若死別にあらずして我なんぢさわかればエホバわれにかくなし又かされてかくなしたまへ 十八
 彼婦が固く心をさだめて己さうもに來らんとするを見しかば之に言ふことを止たり十九かくて彼等二人ゆき
 て終にベテレヘムにいたりしがベテレヘムにいたれる時邑こそりて之がためにさわきたち婦女等 是はナオ
 ミなるやさいふ二十ナオミかれらにいひけるは我をナオミ(樂し)と呼なかれマラ(苦し)とよぶべし全能者
 痛く我を苦めたまひたればなりニ一我盈足て出たるにエホバ我をして空くなりて歸しめたまふエホバ我を
 攻め全能者われをなやましたまふに汝等あんぞ我をナオミと呼や二三期ナオミそのモアアの地より歸れる
 婦モアアの女ルツさうもに歸り來り即ち彼ら大麥刈の初にベテレヘムにいたる

第二章一ナオミにその夫の知己あり即ちエリメクク族にして大なる力の人なりその名をボアズといふニ
 茲にモアアの女ルツナオミにいひけるは請ふわれをして田にゆかしめよ我何人かの目のまへに恩をうる
 ことあらばその人の後にしたがひて穂を拾はんさナオミ彼に女子よ往べしさいひければ三乃ち往き遂に至り
 て刈者の後にしたがひて田にて穂を拾ふ彼意はずもエリメククの族なるボアズの田の中にいたれり四時にボア
 ズベテレヘムより來りその刈者等に言ふれはエホバ汝等さうもに在せ彼等すなはち答てれははく
 はエホバ汝を祝たまへさいふ五ボアズその刈者を督る僕にいひけるは此は誰の女なるや六刈者を督る人
 こたへて言ふ是はモアアの女にしてモアアの地よりナオミさうもに還りし者なるが七いふ請ふ我をして刈者
 の後にしたがひて禾束の間に穂をひろひあつめしめよ而して來りて朝より今にいたるまで此にあり其家に
 やすみし間は暫時のみ八ボアズ、ルツにいひけるは女子よ聽け他の田に穂をひろひにゆくなれ又此よりい
 づるなわれわが婢等に離すして此にをるべし九人々の刈さるるの田に目をさめてその後にしたがひゆけ我少
 者等に汝にさはるなわれと命ぜしにあらずや汝渴く時は器の所にゆきて少者の汲るを飲めさ十彼すなは
 ち伏して地に拜し之にいひけるは我如何して汝の目の前に恩恵を得たるかなんぢ異邦人なる我を顧みること
 十一ボアズこたへて彼にいひけるは汝が夫の死にたるより已來 姑に盡したる事汝がその父母ふよび生

れたる國を離れて見す識すの民に來りし事皆われに聞えたり十二れははくはエホバ汝の行爲に報いたまへ
 れがはくはイスラエルの神エホバ即ち汝がその翼の下に身を寄んて來れる者汝に十分の報施をたま
 はんことを十三彼いひけるは主よ我をして汝の目の前に恩をえせしめたまへ我は汝の仕女の一人にも及ざる
 に汝が我を慰め斯仕女に懇切に語りたまふ十四ボアズかれにいひけるは食事の時此にきたりてこのパ
 ンを食ひ且汝の食物をこの醋に濡せよさ彼すなはち刈者の傍に坐しければボアズ炊麥をかれに與ふ彼
 らひて飽き其餘を懷む十五かくて彼また穂をひろはんさて起あがりければボアズその少者に命じていふ彼
 をして禾束の間に穂をひろはしめよかれを蓋しむるなれ十六且手の穂を故に彼がために抽落しお
 きて彼に拾はしめよ叱るなれ十七彼かく薄暮まで田に穂をひろひてその拾ひし者を携しに大麥一斗許あ
 りき十八彼すなはち之を携へて邑にいり姑にその拾ひし者を見せ且その飽たる後に懷めおきたる者取出
 して之にあたふ十九姑かれにいひけるは汝今日何處にて穂をひろひしや何の處にて工作しや願は汝
 を眷顧する者に福祉あれ彼すなはち姑にその誰の所に工作しかを告ていふ今日われに工作をなさしめたる
 人の名はボアズといふ二十ナオミ姑にいひけるは願はエホバの恩かれにいたれ彼は生る者さ死者を棄
 すして恩をほごすナオミまた彼にいひけるは其人は我等に縁ある者にして我等の贖業者の一人なり二二
 モアアの女ルツいひけるは彼また我にかりて汝わが獲刈の盡く終るまでわが少者の傍をばなるよな
 れさいへりさ二三ナオミその婦ルツにいひけるは女子よ汝がれの婢等さうもに出るは善し然れば他の田にて
 人に見らるることを免かれん二三是によりて彼ボアズの婢等の傍を離れずして穂をひろひ大麥刈さ小麥
 刈の終にまでおよぶ彼の姑さうもにをる

第三章一爰に姑ナオミ彼にいひけるは女子よ我汝の安身所を求めて汝を幸ならしむべきにあらず
 や二夫汝が儲にありし婢等を有る彼ボアズは我等の知己なるにあらずや視よ彼は今夜禾場にて大麥を簸る
 三然ば汝の身を洗て膏をぬり衣服をまさひて禾場に下り汝をその人にしらせすしてその食飲を終るを待て

而て彼が臥す時に汝その臥す所を見さめおき入てその脚を掀開りて其處に臥せ彼なんちの爲べきことを汝につげんさ五ルツ姑にいひけるは汝がわれに言さるは我皆なすべしさ六すなはち禾場に下り凡てその姑の命せしこくなせり七倍ボアズは食飲をなしてその心をたのしませ往て麥を積る所の傍に臥す是に於て彼潜にゆきその足を掀開りて其處に臥す八夜半におよびて其人畏懼をふこし起かへりて見るに一人の婦その足の方に臥たれば九汝は誰なるやさいふに婦たへて我は汝の婢ルツなり汝の裾をもて婢を覆ひたまへ汝は贖業者なればなり十ボアズいひけるは女子よれがはくはエホバの恩典なんちにしたれ汝の後の誠實は前のよりも勝る其は汝貧き富きを論す少き人に従ふことをせざればなり十一されば女子よ懼るなかれ汝が言ふさころの事は皆われ汝のためになすべし其はわが邑の人皆なんちの賢き女なるをすればなり十二我はまことに贖業者なりと雖も我よりも近き贖業者あり十三今夜は此に住宿れ朝におよびて彼もし汝のために贖ふならば善し彼に贖はしめよ然も彼もし汝のために贖ふことを好まずばエホバは活く我汝のため

に贖入朝まで此に臥せよ十四ルツ朝までその足の方に臥て誰彼の辨がたき頃に起あがる、ボアズ此女の禾場に來りしこを人にしらしむべからずさいへり十五而していひけるは汝の着る袷衣を將きたりて其を開けよ即ち開けられれば大麥六升を量りて之に貢せたり斯して彼邑にいたりぬ十六爰にルツその姑の許に至るに姑いふ女子よ如何ありしや彼すなはち其人の己になしたる事をこころしく之につけて十七而していひけるは彼空手にて汝の姑の許に往くなかれさいひて此六升の大麥を我にあたり十八姑いひけるは女子よ坐して待ち事の如何になりゆくかを見よ彼人今日その事を爲終すば安んぜざるべければなり

第四章 爰にボアズ門の所にのぼり往て其處に坐しけるに前にボアズの言たる贖業者過りければ之に言ふ某よ來りて此に坐せよ即ち來りて坐すニボアズまた邑の長老十人を招き汝等此に坐せよさいひければ即ち坐す三時に彼その贖業者にいひけるはモアアの地より還りしナオミ我等の兄弟エリメレクの地を賣る我汝につげしらせて此に坐する人々の前わが民の長老の前にて之を買へと言ふ言ふ想へり汝もし

之を贖はんさおもはば贖ふべし然もし之を贖はずば吾に告てしらしめよ汝の外に贖ふ者なければなり我はなんちの次なりと彼我これを贖はんさいひければ五ボアズいふ汝ナオミの手よりその地を買ふ日には死者の妻なりしモアアの女ルツを買て死者の名をその産業に存すべきなり六贖業者いひけるは我はみづから贖ふあたはす恐くはわが産業を壞はん汝みづから我にかはりてあがなへ我あがなふこゝあたはさればありさ七昔イスラエルにて物を贖ひ或は交易んとする事につきて萬事を定めたる慣例は斯のごとし即ち此人鞋を脱て彼人にわたせり是イスラエルの中の証なりき八是によりてその贖業者ボアズにむかひみづから買ふべしさいひてその鞋を脱たり九ボアズ長老および諸の民にいひけるは汝等今日見証をなす我エリメレクの凡の所有およびキリオンとマロンとの凡の所有をナオミの手より買たり十我またマロンの妻なりしモアアの女ルツを買て妻をなして死者の名をその産業に存すべし是かの死者の名をその兄弟の中その處の門に絶らしめんためなり汝等今日証をなす十一門に在る人々および長者等いひけるはわれら証をなす願くはエホバ汝の家にいるさころの婦人をして彼イスラエルの家を造りなしたるラケルとレアの二人のごさくならしめたまはんことを願くは汝エフラタにて能を得ベテレヘムにて名をあげよ十二れがはくはエホバが此若き婦よりして汝にたまはんさころの子に由て汝の家かのタマルがユダに生たるベレツの家のごさくなるにいたれ十三斯てボアズルツを娶りて妻をなし彼の所にいりければエホバ彼を孕ましめたまひて彼男子を生り十四婦女等ナオミにいひけるはエホバは贖べきかな汝を遺すして今日汝に贖業者あらしめたまふその名イスラエルに揚れ十五彼は汝の心をなぐさむる者汝の老を養ふ者ならん汝を愛する汝の媳即ち七人の子よりも汝に善もの之をうみたり十六ナオミその子をさきて之を贖に置き之が養育者となる十七その隣人なる婦女等これに名をつけて云ふナオミに男子うまれたりさその名をオベデと稱り彼はダビデの父なるエサイの父なり十八倍ベレツの系圖は左のごとしレツ、ヘツロンを生み十九ヘツロン、ラミを生みラム、アミナダブを生み二十アミナダブ、ナシオンを生みナシオンサルモンを生みニニサルモン、

ボアズを生みボアズ、ナベテを生みニニナベテ、エサイを生みエサイ、ダビデを生み

路得記 終

撒母耳前書

第一章 エフライムの山地のラマタイムゾビムにエルカナと名くる人ありエフライテ人にしてエロハムの子なりエロハムはエリウの子エリウはトフの子トフはツフの子なりニエルカナに二人の妻ありてひざりの名をハンナといひひざりの名をベンナといふベンナには子ありたれどもハンナには子あらざりき此人毎歳に其邑をいで上りてシロにおいて萬軍のエホバを拜み之に祭物をささぐ其處にエリの二人の子ホフニとピ子ハスなりてエホバに祭司たり四エルカナ祭物をささぐる時其妻ベンナを其すべての息子女子にわかしあたへしが五ハンナには其倍をあたふ是はハンナを愛するが故なりされどエホバ其孕みをささめたまふ六其敵もまた痛くこれをなやましてエホバが其はらみをささめしを怒らせん七歳々ハンナエホバの家のぼるごにエルカナかくなせしかばベンナかくのごさく之をなやます是故にハンナないてもくはざりき入其夫エルカナにいひけるはハンナよ何故になくや何故にもくはざるや何故に心かなしむや我は汝のために十人の子よりもまさるにあらすや九かくてシロにて食飲せしものハンナたちあがり時に祭司エリエホバの宮の柱の傍にある壇に坐すハンナ心にくるしみエホバにいのりて甚く哭き十一誓をなしていひけるは萬軍のエホバよ若し誠に婢の惱をかへりみ我を憶ひ婢を忘れずして婢に男子をあたへたまはば我これを一生のあひだエホバにささぐげ剃髮刀を其首にあてまじ十二ハンナエホバのまへに長くいのりければエリ其口を目をさめたり十三ハンナ心の中にもいへば只唇うごこのみにて聲きこえず是故にエリこれを酔たる者と思ひ十四之にいひけるは何時まで酔ひたるか爾の酒をされよ十五ハンナたへていひけるは主よ然るにあらす我は氣のわづらふ婦人にして葡萄酒をも濃き酒をものます惟わが心をエホバのまへに明せるあり十六婢を邪ある女さなすなかれ我はわが憂さ悲みの多きよりして今までかたれり十七エリ答へていひけるは安んじて去れ願くはイスラエルの神汝の求むる願ひを許したまはんことを十八ハンナいひけるはれがばくは仕女の汝のまへに恩をえんことを斯てこの婦さりて食ひ其顔ふたつび哀しげならざりき

サムエルゼンシヨ

第一章

自一至十八節

十九 是に於て彼等朝はやくおきてエホバのまへに拜をしかりてラマの家にいたる而してエルカナ其つまハ
 ナとまじはるエホバ之をかりみたまふ二十 ハンナ孕みてのち月みちて男子をうみ我これをエホバに求め
 し故なりて其名をサムエル(エホバに聽る)となづく二 爰に其人エルカナ及び其家族みな上りて年々
 の祭物及び其誓ひし物をささぐ三 然もハンナは上らず其夫にいひけるは我はこの子の乳ばなれする
 に及びてのち之をたづさへゆきエホバのまへにあらはれしめ恒にかしこに居らしめん 三三 其夫エルカナ之
 にいひけるは汝の善き思ふさころを爲し此子を乳ばなすまでささまるべし只エホバの 其言を確實ならしめ
 賜んことをねがふと斯くこの婦止まりて其子に乳をのませ其ちばなれするをまちしが 三四 乳ばなせしとき
 牛三頭、粉壹斗、酒壹壺を取り其子をたづさへてシロにあるエホバの家にいたる其子なほ幼稚し二五 是に
 於て牛をころしその子をエリの許に携へゆきぬ 二六 ハンナにいひけるは主よ汝のたましひは活くわれはかつて
 こゝにてなんちの 傍にたちエホバにいのりし婦なり 二七 われ此子のためにいのりしにエホバわが求めしも
 のをあたへたまへり 二八 此故にわれまたこれをエホバにささぐげん 其一生のあひだ之をエホバにささぐ斯て
 かしこにてエホバをむかひり

第二章 一 ハンナ禱りて言けるは我心はエホバによりて喜び我角はエホバによりて高し我口はわが敵の上
 にはりひらく是は我汝の救拯によりて樂むが故なり 二 エホバのごさく聖き者はあらず其は汝の外に有る者
 なければあり又われらの神のごさき響はあることなし 三 汝等重ねて甚く誇りて語るなれ汝等の口より慢
 言を出すなれエホバは全知の神にして行爲を裁度りたまふなり 四 勇者の弓は折れ倒るる者は勢力を帯ぶ五
 飽足る者は食のために身を備はせ飢たる者は憩へり石女は七人を生み多くの子を有る者は衰ふるにいたる六
 エホバは殺し又生したまひ陰府に下した上らしめたまふ七 エホバは貧からしめ又富しめたまひ卑くした
 高くしたまふ八 荏弱者を塵の中より擧げ窮乏者な埃の中より升せて王公の中に坐せしめ榮光の位をつがし
 めたまふ地の柱はエホバの所屬なりエホバ其上に世界を置きたまへり九 エホバ其聖徒の足を守りたまはん 惡

き者は黒暗にありて黙すべし其は人力をもて勝つべからざればなり十 エホバは悖逆者を破砕き天より雷
 を彼等の上にくだしエホバは地の極をさばき其王に力を與へ其膏そさぎし者の角を高くしたまはん 十一 エ
 ルカナラマに往て其家にいたりしが稚子は祭司エリのまへにありてエホバにつかふ 十二 さてエリの子は邪
 なるものにしてエホバをしらざりき 十三 祭司の民に於ける習慣は斯のごとし人祭物をささぐる時肉を煮る
 あひだに祭司の僕三の齒ある肉又を手にとりて來り 十四 之を釜あるひは鼎又は炮烙に突きい
 れ肉又の引きあぐるさころの肉は祭司みなこれを己にさる是くシロに於て凡てそこに來るイスラエル人にな
 せり 十五 脂をやく前にも亦祭司のしもべ來り祭物をささぐる人にいふ祭司のために焼くべき肉をあたへよ
 祭司は汝より添たる肉を受けず生腥の肉をこのむさ 十六 もし其人これにむかひ直ちに脂をやくべければ後心
 のこのむまうに取れさいはと僕之にいふ否今あたへよ然らずば我強て取んさ 十七 故に其壯者の罪エホバ
 のまへに甚だ大なりそは人々エホバに祭物をささぐることなさいとひたればなり 十八 サムエルなほ幼し
 て布のエホデを着てエホバのまへにつかふ 十九 また其母これがために小き明衣をつくり歳毎にその夫さよも
 に年の祭物をささぐげにのぼる時これをもちきたる 二十 エリエルカナとその妻を祝していひけるは汝がエホ
 バにささぐげたる者のためにエホバ此婦よりして子を汝にあたへたまはん 二一 此をねがふと斯てかれら其婦に
 かへる二二 しかしてエホバハンナをかりみたまひければハンナ孕みて三人の男子と二人の女子をうめ
 り童子サムエルはエホバのまへにありて生育てり 二三 ころにエリ甚だ老て其子等がイスラエルの人々にな
 せし諸の事を聞きまた其集會の幕屋の門にいづる婦人たちを聽たるを聞て 二三 ころにいひけるは何ぞ斯
 る事をなすや我このすべての民より汝らのあしき行をきく 二四 わが子よ然すべからずわがきくさころの風
 聞よからず爾らエホバの民をしてあやまたしむ 二五 人もし人にもむかひて罪をおかさば神之をさばかんされど
 人もしエホバにむかひて罪をおかさば誰かこれがためにさりなしをなさんやさしかれども其子父のこさばを
 聽ざりきそはエホバかれらなるさんと思ひたまへばなり 二六 童子サムエル生長ゆきてエホバ人々に愛せ

らるニ七 茲に神の人エリの許に來りこれにいひけるはエホバ斯くいひたまふ爾の先祖の家エツプトにおいて
 パロの家におりしとき我明かに之にあらはれしにあらすや二八 我これをイスラエルの諸の支派のうちよ
 り選みてわが祭司となしわが壇の上に祭物をささげ香をたかしめ我前にエホバを衣しめまたイスラエルの
 人の火祭を悉く汝の父の家にあたり二九 なんぞわが命せし犠牲と禮物を汝の家にてふみつくるや何
 ぞ我よりもなんちの子をたふさみわが民イスラエルの諸の祭物の最も嘉きところをもて己を肥すや三十
 是ゆゑにイスラエルの神エホバいひたまはく我誠に曾ていへり汝の家よびあんちの先祖の家永くわがま
 へにあゆまん然ども今エホバいひたまふ決めてしからず我をたふさむ者は我もこれをたふさむ我を賤しむ
 る者ばかりんぜらるべし三一 視よ時いたらん我汝の腕を絶ち汝の家に老たるもの元ら
 しめん 三二 我大いにイスラエルを善すべけれど汝の家内には災見えん汝の家にはこのうち永く老るものな
 かるべし 三三 またわが壇より絶ざる汝の族の者は汝の目をそこなひ汝の心をいたましめん 又汝の家に
 うまれいづるものは壯年にして死なん 三四 汝のふたりの子ホフニとピチハスの遇さころの事を其徴させよ
 即ち二人ともに同じ日に死なん 三五 我はわがために忠信なる祭司をおこさん其人わが心さわが意にしたがひ
 ておこなはんわれその家をかたうせんかれわが膏そさし者のまへに恒にあゆむべし 三六 しかして汝の家に
 のこれる者は皆きたりてこれに屈み一厘の金と一片のパンを乞ひ且いはんればはくは我を祭司の職の一に
 任じて些少のパンにても食ふことをえせしめよ

第三章 童子サムエルエリのまへにありてエホバにつかふ當時はエホバの言まれにして黙示あること恒な
 らざりき 二 偕エリ目漸くもりて見ることをえず此時其室に寢たり 三 神の燈なほきえずサムエル神の
 櫃あるエホバの宮に寢ぬ 四 時にエホバサムエルをよびたまふ彼我ここにありといひて五 エリの許に趨ゆき
 ひけるは汝われをよぶ我ここにありエリいひけるは我よばす反りて臥さ乃ちゆきていぬ六 エホバまたかま
 れてサムエルよびたまへばサムエル起きてエリのもとにいたりいひけるは汝われをよぶ我ここにありエ
 リこたへけるは我よばすわが子よ反りていれよ七 サムエルいまだエホバをしらすまたエホバのこさばいまだ
 かれにあらはれず八 エホバ三たびめに又サムエルをよびたまへばサムエル起きてエリの許にいたりいひける
 は汝われをよぶ我ここにありとエリ乃ちエホバの童子をよびたまひしをささる九 故にエリサムエルにいひ
 けるはゆきて寢れよ彼若し汝をよぶと僕聽くエホバ語りたまへといへばサムエルゆきて其室にいれしに十 エ
 ホバ來りて立ちまへの如くサムエルサムエルよびたまへばサムエル僕き語りたまへといふ十一 エホバ
 サムエルにいひ賜けるは視よ我イスラエルのうちに一の事をなさんこれをきくものは皆其耳ふたつながら
 鳴ん 十二 其日にはわれ曾てエリの家について言しことを始より終までこさぐくエリになすべし 十三 われか
 つてエリに其惡事のために永くその家をさばかんさめせりそは其子の詛ふべきをなすをきて之をささ
 めざればなり 十四 是故にわれエリのいへに誓ひてエリの家を穢しあるひは禮物をもて永くあがなふ能
 はずといへり 十五 サムエル朝までいれてエホバの家を閉きしが其異象をエリにしめすことをおそる
 十六 エリサムエルをよびていひけるはわが子サムエルよ答へけるはわれここにあり十七 エリいひけるは何事
 を汝につげたまひしや請ふ我にかくすなかれ汝もし其汝に告げたまひしところを一にてもかくすときは神
 汝にかくなし又かされてかくなしたまへ十八 サムエル其事をこさぐく去めして彼に隠すことなかりきエリ
 いひけるは是はエホバなり其よしと見たまふことをなしたまへ十九 サムエルそだちぬエホバこれさうもに
 いましてそのこさばをして一も地におちさらしめたまふニ 二十 ダンよりベエルシバにいたるまでイスラエルの
 人みなサムエルがエホバの預言者さだまれるをしりニ 二十一 エホバふたたびシロにてあらはれたまふエホバ
 シロにおいてエホバの言によりてサムエルにおのれをしめしたまふなりサムエルの言あまれくイスラエル人
 におよぶ

第四章 一 イスラエル人ベリシテ人にいであひて戦はんさしエベ子セルの邊に陣をさりベリシテ人はアベ
 クに陣をさるニ 二 ベリシテ人イスラエル人にむかひて陣列をなせり戦ふにおよびてイスラエル人ベリシテ人
 におよぶ

のまへにやぶるハリシテ人戦場において其軍四千人ばかりをころせり三民陣營にいたるにイスラエルの長老曰けるはエホバ何故に今日我等をハリシテ人のまへにやぶりたまひしやエホバの契約の櫃をシロより此にたづさへ來らん其櫃われらのうちに來らば我らを敵の手よりすくひいだすことあらんさ四かくて民人をシロにつかはしてケルビムの上に座したまふ萬軍のエホバの契約の櫃を其處よりたづさへきたらしむ時にエリの二人の子ホフニとビ子ハス神の契約のはこころもに彼處にありき五エホバの契約の櫃陣營にいたりしときイスラエル人皆大によばよりさげびければ地なりひたり六ハリシテ人嗚呼の聲を聞いていひけるはヘブル人の陣營に起れる此大なるさげびの聲は何ぞや遂にエホバの櫃の其陣營にいたれるを知るセハリシテ人おそれていひけるは神陣營にいたる又いひけるは嗚呼われら禍なるかな今にいたるまで斯ることなかりき八あゝ我等禍なるかな誰かわれらを是らの強き神の手よりすくひいださんや此等の神は昔し諸の災を以てエツプト人を曠野に撃し者なり九ハリシテ人強くなり豪傑のごとく爲せハブル人がかつて汝らに事しごさく汝らこれに事ふるなけれ豪傑のごとく爲して戦へよ十かくてハリシテ人戦ひしかばイスラエル人やぶれて各其天幕に逃かへる戦死はなほ多くイスラエルの歩兵の仆れし者三萬人なりき十一又神の櫃は奪はれエリの二人の子ホフニとビ子ハス殺さる十二是日ベニヤミンの一人軍中より走きたり其衣を裂き土をかむりてシロにいたる十三其いたれる時エリ道の傍に壇に座して觀望居たり其心に神の櫃のこころを思ひ煩らひたればなり其人いたり邑にて人々に告げれば邑こそりてさげびたり十四エリ此呼號の聲をききていひけるは是暗睡の聲は何なるや其人いそぎきたりてエリにつぐ十五時にエリ九十八歳にして其目かたまりて見るこゝろあたまはす十六其人エリにいひけるは我は軍中より來れるも我今日軍中より逃れたりエリいひけるは吾子よ事いかん十七使人答へていひけるはイスラエル人ハリシテ人の前に逃げ且民の中に大なる戦死ありまた汝の二人の子ホフニとビ子ハスは殺され神の櫃は奪はれたり十八神の櫃のこころを演しきエリ其壇より仰げに門の傍におち頭をれて死れり是はかれ老て身重かりければなり其イスラエルを鞠しは

四十年ありき十九エリの嫡子ハスの妻孕みて子産ん時ちかよりしが神の櫃の奪はれしと舅と夫の死にしさの傳言を聞きかば其痛みもこりきたり身をわがめて子を産めり二十其死なんとする時傍にたてる婦人これにいひけるは懼るゝなけれ汝男子を生り然れども答へず又かへりみす二一只榮光イスラエルをさりぬといひて其子をイカボテ(榮なし)と名く是は神の櫃奪はれしによりまた舅と夫の故に因るなり二三またいひけるは榮光イスラエルをさりぬ神の櫃うばはれたればなり

第五章 一ハリシテ人神の櫃をさりて之をエベ子セルよりアシドドにもちきたる二即ちハリシテ人神の櫃をさりて之をダゴンの家にもちきたりダゴンの傍に置ぬ三アシドド人次の日夙く起きエホバの櫃のまへにダゴンの俯伏に地にたふれをるをみ乃はちダゴンをさりて再びこれを本の處におく四また翌朝夙く興きエホバの櫃のまへにダゴン俯伏に地にたふれをるを見るダゴンの頭と其兩手門闕のうへに斷ち切れなり只ダゴンの體のみのこれり五是をもてダゴンの祭司およびダゴンの家にいるもの今日にいたるまでアシドドにあるダゴンの闕をふます六かくてエホバの手もくアシドド人にくはよりエホバこれをほろぼし腫物をもてアシドドおよび其四周の人をくるしめたまふ七アシドド人その斯るを見ていひけるはイスラエルの神の櫃を我らのうちにさぐむべからず其は其手いたくわれらおよび我らの神ダゴンにくはよればなり八是故に人をつかはしてハリシテ人の諸君主を集めていひけるはイスラエルの神の櫃をいかにすべきや彼らいひけるはイスラエルの神のはこはガテに移さん遂にイスラエルの神のはこをうつす九之をうつせるのち神の手其邑にくはよりて滅亡るもの甚だおほし即ち老たるも幼きをいはす邑の人をうちたまひて腫物人々におこれり十是において神のはこをエクロンにおくりたるに神の櫃エクロンにいたりしときエクロン人さげびていひけるは我等さわが民をころさんさてイスラエルの神のはこを我らにうつす十一かくて人を遣はしてハリシテ人の諸君主をあつめていひけるはイスラエルの神の櫃をかくりて本のこころにかへさん然らば我さわが民をころすこゝろなからん蓋は邑中に恐ろしき滅亡おこり神の手甚だおほく其處にくはよればなり十二死なざ

る者は腫物にくるしめられ邑の號呼天に達せり
 第六章 エホバの櫃七月のあひだペリシテ人の國にありニペリシテ人祭司ト箴師をよびていひけるは
 我らエホバの櫃をかへすときはこれを空しくかへすなかれ必ず彼に過祭をなすべし然らば汝ら愈こ
 ルの神の櫃をかへすときはこれを空しくかへすなかれ必ず彼に過祭をなすべし然らば汝ら愈こ
 さをえ且彼の手の汝らをはなれざる故を知にいたらん四人やいひけるは如何なる過祭をなすべ
 きや答へけるはペリシテ人の諸君主の數にしたがひて五の金の腫物五の金の鼠をつくれ是は汝ら皆汝ら
 の諸伯におよべる災は一なるに五汝らの腫物の像および地をあらす鼠の像をつくりイスラエルの
 神に榮光を返すべし庶幾は其手を汝等および汝等の神と汝等の地にくはふることを軽くせん六汝らなん
 そエジプト人さバロの其心を頑にせしごとくおのれの心をかたくなにするや神かれらの中に數度其
 力をしめせしものち彼ら民をゆかしめ民つひにさりしにあらすや七されば今あたらしき車一輛をつくり乳牛
 のいまだ軛をつけざるもの二頭をとり其牛を車に繋ぎ其轡をばなして家につれゆきエホバの櫃をとりて
 之を其車に載せ汝らが過祭をなす金の製作物を積にをさめて其轡におき之をおくりて
 去らしめ九しかして見よ若し其境のみちよりペテシメシにのぼらばこの大なる災を我らになせるものは
 彼なり若し去かせずば我儕をうちしは彼の手にあらずしてそのこの偶然をりしをせるべし十人々つひに斯
 なし二つの乳牛をとりて之を車につなぎその轡を室にさちめ十一エホバの櫃および金の鼠其腫物の像
 をおさめたる積を車に載す十二牝牛直にあひみてペテシメシの路をゆき鳴つゝ大路をすゝみゆきて右左に
 まがらずペリシテ人の君主ベテシメシの境まで其うしろにしたがひゆけり十三時にペテシメシ人谷に
 を刈り居たりしが目をあげて其櫃をみ見るをよるこべり十四車ベテシメシ人ヨシユアの田にいりて其
 處にささまる此に大なる石あり人々車の木を劈り其牝牛を燔祭としてエホバにささげたり十五レビの人エ
 ホバの櫃をこれささる積の金の製作物をおさめたる者を取りおろし之を其大石のうへにおくしかして

ベテシメシ人此日エホバに燔祭をそなへ犠牲をささげたり十六ペリシテ人の五人の君主これを見て同じ日
 にエクロンにかへれり十七さてペリシテ人が過祭をなしてエホバになせし金の腫物はこれなり即ちアシ
 ドドのために一ガザのために一アシケロンのために一ガテのために一エクロンのために一なりき
 十八また金の鼠は城邑と郷里をいはず凡て五人の君主に属するペリシテ人の邑の數にしたがひて造れりエホ
 バの櫃をおろせし大石今日にいたるまでベテシメシ人ヨシユアの田にあり十九ベテシメシの人々エホバ
 の櫃をうかすひしによりエホバこれをうちたまふ即ち民の中七十人をつてりエホバ民をうちて大にこれをこ
 ろしたまひしかば民をささげべり二十ベテシメシ人いひけるは誰かこの聖き神なるエホバのまへに立つこと
 をえんエホバ我らをはなれて何人のところのぼりゆきたまふべきや二かくて使者をキリアテヤリムの人
 に遣はしていひけるはペリシテ人エホバの櫃をかへしたれば汝らくだりて之を汝らの所に携へるべ
 し

第七章 キリアテヤリムの人來りエホバの櫃を携へて山の上へなるアビナダブの家にもちき
 たり其子エレアザルを聖てエホバの櫃をまもらしむ二其櫃キリアテヤリムにささまること久しくして二十
 年をへたりイスラエルの全家エホバをしたひて歎けり三時にサムエルイスラエルの全家に告げていひけるは汝
 らもし一心を以てエホバにかへり異る神とアシタロテを汝らの中より棄て汝らの心をエホバに定め之のみ
 事へなばエホバ汝らにペリシテ人の手より救ひいださん四このうへにいてイスラエルの人々バアルとアシ
 タロテをすてエホバにのみ事ふ五サムエルいひけるはイスラエル人をこさくくミツパにあつめよ我汝
 らのためにエホバにいのらん六かれらミツパに集まり水を汲て之をエホバのまへに注ぎ其日斷食して彼處
 にいひけるは我等エホバに罪をおかしたりとサムエルミツパに於てイスラエルの人を鞠く七ペリシテ人イス
 ラエルの人々のミツパに集れるを聞しかばペリシテ人の諸君主イスラエルにせめのぼれりイスラエル人これ
 を聞てペリシテ人をおそれたり八イスラエルの人々サムエルにいひけるは我らのために我らの神エホバに

斬ることをやむるなければ然らばエホバ我らをペリシテ人の手よりすくひいださん九サムエル 哺乳羊をこ
 り燔祭となしてこれをまつたくエホバにささぐりまたサムエルイスラエルのためにエホバにいのりければエホ
 バこれにこたへたまふサムエル燔祭をささげ居し時ペリシテ人イスラエル人と戦はんとて近づきぬ是
 日エホバ 大なる雷をくだしペリシテ人をうちて之を亂し賜ければペリシテ人イスラエルのまへに敗
 れたり十一イスラエル人ミツパをいでペリシテ人をあひ之をうちてベテカルの下にいたる十二サムエル
 一の石をとりてミツパとセンの間にちきエホバはまで我らを助けたまへりさいひて其名をエベ子ゼル(助け
 の石)と呼ぶ十三ペリシテ人 攻伏られて再びイスラエルの境にいらすサムエルの一生のあひだエホバの
 手ペリシテ人をふせげり十四ペリシテ人のイスラエルより取たる邑々はエクロンよりガテまでイスラエルに
 かへりぬまた其周囲の地はイスラエル人これをペリシテ人の手よりとりかへせりまたイスラエル人アモリ
 人嗜好をむすべり十五サムエル一生のあひだイスラエルをささげ十六歳をベテルとギルガルおよびミツ
 パをめぐりて其處々にてイスラエル人をささげ十七またラマに歸れり此處に其家あり此にてイスラエルをさ
 ばき又此にてエホバに壇をきづけり

第八章一サムエル年老て其子イスラエルの士 師となす二兄の名をヨエルさいひ弟の名をアビヤ
 さいふベエルツバにありて士 師たり三其子父の道をあゆますして利にむかひ賄賂をとりて審判を曲ぐ四
 是においてイスラエルの長老みなあつまりてラマにゆきサムエルの許に至りて五これにいひけるは視よ汝は
 老い汝の子は汝の道をあゆますさればわれらに王をたてしめわれらを鞠かしめ他の國々のことくならしめよ
 六その我らに王をあたへて我らを鞠かしめよさいふを聞てサムエルよろこばず而してサムエルエホバにいの
 りしかば七エホバサムエルにいひたまひけるは民のすべて汝にいふところのこさばを聽け其は汝を棄るにあ
 らす我を棄て我をして其王とならざらしめんとするなり八彼らわがエツプトより救ひいだせし日より今日
 にいたるまで我をすて他の神につかへて種々の所行をなせしこさく汝にもまた然す九然どもいま其言を

きけ但し深くいさめて其治むべき王の常例をしめすべし十サムエル王を求むる民にエホバのこさばをこ
 ごさく告て十一いひけるは汝等をおさむる王の常例は斯の如し汝らの男子をとり己の爲に之をたてし車の
 御者となし騎兵となしまた其車の前驅となさん十二また之をあのの爲に千 夫 長五十夫 長さな
 しました其地をたがへし其作物を刈らしめまた武器と車器とを造らしめん十三また汝らの女子をとりて製香
 者となし厨婢となし炙麵者となさん十四又汝らの田畝と葡萄園と橄欖園の最も善きところを取て其
 臣僕にあたへ十五汝らの穀物と汝らの葡萄の什分一をとりて其官吏と臣僕にあたへ十六また汝らの僕婢
 および汝らの最も善き牛と汝らの驢馬を取てあのの爲に作かしめ十七又汝らの羊の十分一をとり又
 汝ら其僕となさん十八其日において汝等己ののために擇みし王のこさによりて呼號らんされどエホバ其
 日に汝らに聽たまはざるべし十九然に民サムエルの言にしたがふことをせずしていひけるは否われらに
 王あるべからず二十我らも他の國々の如くなり我らの王われらを鞠きわれらを率て我らの戦にたづひは
 んニサムエル民のこさばを盡くきうて之をエホバの耳に告ぐニエホバサムエルにいひたまひけるは
 れらのこさばを聽きかれらのために王をたてよサムエルイスラエルの人々にいひけるは汝らあのく其邑に
 かへるべし

第九章 一茲にベニヤミンの人にてキシと名くる力の 大なるものありキシはアビエルの子アビエルはゼロ
 ンの子ゼロンはベコラテの子ベコラテはアビヤの子アビヤはベニヤミンの子なりニキシにサウロと名くる子
 あり壯にして美はしイスラエルの子孫の中に彼より美はしき者なく肩より上民のいづれの人よりも高し三サ
 ウルの父キシの驢馬失ぬキシ其子サウルにいひけるは一人の 僕をさもなひ起ちてゆき驢馬を尋ねよ四サウ
 ロエフライムの山地を通り過ぎシヤリシヤの地を通りすぐれども見あたらすシヤリムの地を通りすぐれども
 居らすベニヤミンの地をさほりすぐれども見あたらす五かれらツフの地にいたる時サウル其さもなへる僕
 にいひけるはいざ還らん恐らくはわが父驢馬の事を措て我等の事を思ひ煩はん六 僕これにいひけるは此邑

に神の人あり尊き人にして其言ふところは皆必ず成る我らかしこにいたらんか我らがゆくべき路をわれらにしめすことあらん七 サウル 僕にいひけるは我らもしゆかば何を其人におくらんか器のパンは既に罄て神の人に置くべき禮物あらす何かあるや八 僕またサウルにこたへていひけるは視よ我が手に銀一シケルの四分の一あり我これを神の人にあたへてわれらに路をしめさしめん九 昔イスラエルにおいて是人神にさはんさてゆくべきはいざ先見者にゆかんさいへり其は今の預言者は昔しは先見者さよばれたればなり十 サウル 僕にいひけるは善くいへりいざゆかんさて神の人のなる邑におもむけり十一 彼ら邑にいる坂をのぼれる時 童女 數人の水くみにいづるにあひ之にいひけるは先見者は此に在るや十二 答ていひけるはをる視よ汝のまへに急ぎゆけ今日民崇邱にて祭をなすにより彼けふ邑にきたれり十三 汝ら邑にいる時彼が崇邱にのぼりて食に就くまへに直ちにかれにあはん其は彼まづ祭品を祝してしかるのち招かれたる者食ふべきに因りかれが来るまでは民食はざるなり故に汝らのばれ今かれにあはん十四 かれら邑にのぼりて邑のなかにいるとき視よサムエル崇邱にのぼらんさてかれらにむかひて出きたりぬ十五 エホバサウルのきたる一日まへにサムエルの耳につけていひたまひけるは十六 明日いまごろ我ベニヤミンの地より一箇の人を汝につかはさん汝かれに膏を注ぎてわが民イスラエルの長となせかれわが民をベリシテ人の手より救ひいださんわが民のさけび我に達せしにより我これをかへりみるあり十七 サムエルサウルを見るときエホバこれにいひたまひけるは視よわが爾につげしは此人なり是人わが民をおさむべし十八 サウル門の中にサムエルにちかづきいひけるは先見者の家はいつくにあるや請ふ我につげよ十九 サムエルサウルにこたへていひけるは我はすなはち先見者あり爾わがまへにゆきて崇邱にのぼれ爾ら今日我さうもに食す可し明日われ汝をさらしめ汝の心にあることを悉く汝にしめさん二十三日まへに失たる汝の驢馬は既に見あたりたれば之をおもふなかれ抑もイスラエルの總ての實は誰の者なるや即ち汝さ汝の父の家のものならずや二十一 サウルこたへていひけるは我はイスラエルの支派の最も小き支派なるベニヤミンの人にしてわが族はベニヤミンの支

派の諸の族の最も小き者に非やなんぞ斯ることを我にさたるや 二三 サムエルサウルを其 僕をみちびきて堂にいり招かれたる三十人ばかりの者の中の最も上に坐せしむ 二三 サムエル 庖人にいひけるはわが汝にわたして汝の許におけいひし分をもちきたれ 二四 庖人 肩と肩に属する者をさりあげて之をサウルのまへに置くサムエルいひけるは視よ是は存へおきたる物なり汝のまへにおきて食へ其はわれ民をまねきし時よりにこれ汝の爲にたくはへおきたればなりかくてサウル此日サムエルさうもに食せり 二五 崇邱をくだりて邑にいりし時サムエルサウルさうもに屋脊の上にてものがたる 二六 かれら早くおちちりサムエル 曙に屋脊の上なるサウルをよびていひけるは起よわれ汝をかへさんさサウルすなはちおきあがるサウルさサムエルさもに外にいで 二七 邑の極處にくだれるときサムエルサウルにいひけるは 僕に命じて 我等の先にゆかしめよ 二八 僕 先にゆく) しかして 汝 暫くさうまれ 我汝に神の言をしめさん

第十章 一 サムエルすなはち膏の瓶をさりてサウルの頭に沃ぎ口授していひけるはエホバ汝をたてし其産業の長さなしたまふにあらずや 二 汝 今日我をばなれて去りゆく時ベニヤミンの境のセルザにあるラケルの墓のかたはらにて二人の人にあふべしかれら汝にいはん汝がたづねにゆきし驢馬は見あたりぬ汝の父驢馬のこさをすて汝らのこさをおもひわづらひわが子のこさをいかさすべきやさいへりさ三 其處より汝向すすみてダボルの橡の樹のところにいたらん彼處にてベテルにのぼり神にまうでんさする三人の者汝にあはん 一人は三頭の山羊羔を携へ一人は三團のパンをたづさへ一人は一壺の酒をたづさふ四 かれら汝に安否をこひ二團のパンを汝にあたへん 汝之を其手よりうくべし五 其の後汝神のギベアにいたらん其處にベリシテ人の代官あり 汝 彼處にゆきて邑にいるとき一群の預言者の瑟と笛と琴を前に執らせて預言しつゝ崇邱をくだるにあはん六 其の時神のみたま汝にのぞみて汝かれらさうもに預言し變りて新しき人さならん七 是らの徴 汝の身におらば手のあたるにまかせて事を爲すべし 神汝さうもにいませばなり八 汝 我にさきだちてギルガルにくだるべし 我汝の許にくだりて燔祭を供へ酬恩祭を献げんわが汝のもさに至り汝の

爲すべきことを示すまで汝七日のあひだ待つべし九サウル背をひしてサムエルを離れし時神之に新しき心をあたへたまふしかして此しるし皆其日におこれり十ふたり彼處にゆきてギベアにいたれるときみよ一群の預言者これにあふしかして神の靈サウルにのぞみてサウルかれらの中にありて預言せり十一素よりサウルを識る人々サウルの預言者どもに預言するを見て互ひにいひけるはキシの子サウル今何事にあふやサウルも預言者の中にあるや十二其處の人ひさり答へて彼等の父は誰ぞやさいふ是故にサウルも預言者の中にあるやさいふは諺さなれり十三サウル預言を終て崇邱にいたるに十四サウルの叔父サウルと僕にいひけるは汝ら何處にゆきしやサウルいひけるは驢馬を尋ねに出しが何處にもならざるを見てサムエルの許にいたり十五サウルの叔父いひけるはサムエルは汝に何をいひしか請ふ我につげよ十六サウル叔父にいひけるは明かに驢馬の見あたりしを告げたり然どもサムエルが言る國王の事はこれにつげざりき十七サムエル民をミツバにてエホバのまへに集め十八イスラエルの子孫にいひけるはイスラエルの神エホバ斯くいひたまふ我イスラエルをみちびきてエツプトより出し汝らをエツプト人の手および凡て汝らを虐ぐる國人の手より救ひいだせり十九然るに汝らおのれを患難と難苦のうちより救ひいだしたる汝らの神を棄て且否われらに王をたてよさいへり是故にいま汝等の支派を群にしたがひてエホバのまへに出よ二十サムエルイスラエルの諸支派を呼よせし時ベニヤミンの支派にあたりぬ二一またベニヤミンの支派を其族のかすにしたがひて呼よせしときマテリの族にあたりキシの子サウルにあたり人々かれを尋ねしかども見出されば二三またエホバに其人は此に来るや否やを問しにエホバ答たまはく視よ彼は行李のあひだにかくるさ二三人々はせゆきて彼を其處よりつれきたれり彼民の中にたつに肩より以上民の何の人よりも高かりき二四サムエル民にいひけるは汝らエホバの擇みたまひし人を見るか民のうちには是人の如き者なし民みなよばざりいひけるは願くは王のちながられ二五時にサムエル王國の典章を民にしめして之を書にしるし之をエホバのまへに藏めたりまかしてサムエル民をこころよく其家にかへらしむ二六サウルもまたギベアの家にへるに神に心を感ぜられたる勇士等これさよもにゆけり二七然ども邪なる人々は彼人いかで我らを救はんやさいひて之を藐視り之に禮物をまくらざりしかぞサウルは啞のこころせり

第十一章 アンモニ人 ナハシギレアデのヤベシにのぼりて之を圍むヤベシの人々ナハシにいひけるは我らと約をなせ然らば汝につかへん二アンモニ人ナハシこれに答へけるは我がかくして汝らと約をなさん即ち我汝らの右の目を抉りてイスラエルの全地に恥辱をあたへん三ヤベシの長老これにいひけるは我らに七日の猶豫をあたへて使をイスラエルの四方の境におくることを得さしめよ而して若し我らを救ふ者なくば我ら汝にくだらん四斯で使サウルのギベアにいたり此事を民の耳に告しかば民皆聲をあげて哭ぬ五爰にサウル田より牛にしたがひて来るサウルいひけるは民何によりて哭くや人々これにヤベシ人の事を告ぐ六サウル之を聞きし神の靈これに臨みてその怒甚だしく燃えたち七一輛の牛をころしてこれを切り割き使の手をもてこれをイスラエルの四方の境にあまねくおくりていはしめけるは誰にてもサウルとサムエルにしたがひて出ざる者は其牛かくのごとくせらるべし八民エホバを畏み一人のごとく均くいでたり九サウルベセクにてこれを數ふるにイスラエルの子孫三十萬ユダの人三萬ありき九斯で人々來れる使にいひけるはギレアデのヤベシの人にかくいへ明日日の熱き時汝ら助を得ん使がへりてヤベシ人に告げれば皆よろこびぬ十是をもてヤベシの人いひけるは明日汝らに降らん汝らの善と思ふさころを爲せ十一明日サウル民を三隊にわち曉更に敵の軍の中にいりて日の熱くなる時までアンモニ人をころしければ還れる者は皆ちりくなりなりて二人俱にあるものなかりき十二民サムエルにいひけるはサウル豈我らの王となるべけんやと言しは誰ぞや其人を引き來れ我ら之をころさん十三サウルいひけるは今日エホバ救をイスラエルに施したまひたれば今日人は人をころすべからず十四茲にサムエル民にいひけるはいざギルガルに往て彼處にて王國を新にせんさ十五民みなギルガルにゆきて彼處にてエホバのまへにサウルを王となし彼處にて酬恩祭をエホバのまへに獻げサウルとイスラエルの人々皆かしこにて大に祝へり

第十二章一サムエルイスラエルの民にいひけるは我汝らに我にいひし言をこころよく聽て汝らに王を立たり二見よ今王汝らのまへにあゆむ我は老て髪しろし視よわが子ども汝らと共にあり我幼稚時より今日にいたるまで汝等のまへにあゆみ三視よ我こころにありエホバのまへに其膏そよぎし者のまへに我を訴へよ我誰の牛を取りしや誰の驢馬をとりしや誰を掠めしや誰を虐遇しや誰の手より賄賂をとりてわが目を瞞せしや有ば我これを汝らにかへさん四彼らにいひけるは汝は我らをかすめくるしめす又何をも人の手より取りしこころなし五サムエルかれらにいひけるは汝らに我手のうちは何をも見いださざるをエホバ汝らに証したまふ其膏そよぎし者も今日証す彼ら答へけるは証したまふ六サムエル民にいひけるはエホバはモーセとアロンをたてし者汝らの先祖をエジプトの地より導いだせしものなり七立ちあがれエホバは汝らにおよび汝らの先祖になしたまひし諸の義しき行爲につきて我エホバのまへに汝らに論ぜん八ヤコブのエジプトにいたるにおよびて汝らの先祖のエホバに呼はりし時エホバモーセとアロンを遣はしたまひて此二人汝らの先祖をエジプトより導きいだして此處にすましめたり九しかるに彼れ其神エホバを忘れしかばエホバこれをハゾルの軍の長シセラの手さべりシテ人の手およびモアア王の手にわたしたまへり斯て彼れこれを攻ければ十民エホバに呼はりていひけるは我らエホバを棄てバアルとアシタロテに事へてエホバに罪を犯したりされど今我らを敵の手より救ひいだしたまへ我ら汝らにつかへん十一是に於てエホバエルバアルとバラクとエフタとサムソンを遣はして汝らを四方の敵の手より救ひいだしたまひて汝ら安らかに住めり十二しかるに汝らアンモンの子孫の王ナハシの汝らを攻んきて来るを見て汝らの神エホバ汝らの王なるに汝ら我にいふ否我らをかすむる王なるべからず十三今汝らを選みし王汝らにがれがひし王を見よ視よエホバ汝らに王をたてたまへり十四汝らもしエホバを畏みて之につかへ其言にしたがひてエホバの命にそむかすまた汝らに汝らをかすむる王恒に汝らの神エホバに從はざる善し十五しかれども汝らもしエホバの言にしたがはずしてエホバの命にそむかばエホバの手汝らの先祖をせめしごとく汝らにせむべし十六汝ら今たちて

エホバに爾らの目のまへになしたまふ此大なる事を見よ十七今日は夢判時にあらずや我エホバを呼んエホバ雷と雨をくだして汝らが王をもめてエホバのまへに爲したる罪の大なるを見しらしめたまはん十八かくてサムエルエホバをよびければエホバ其日雷と雨をくだしたまへり民み大にエホバとサムエルを恐る十九民みなサムエルにいひけるは僕らのために汝の神エホバにいひて我らを死なざらしめよ我ら諸の罪にまた王を求むるの惡をくはへたればなり二十サムエル民にいひけるは懼るなかれ汝らこの總ての惡をなしたりされどエホバに從ふことを息す心をつくしてエホバに事へ二虚しき物に迷ひゆくなかれ是は虚しき物なれば汝らに助くることも救ふことも得ざるなり三エホバ其大なる名のために此民をすてたまはざるべし其はエホバ汝らをおのれの民となすことを善ししたまへばあり四また我は汝らのために祈ることをやめてエホバに罪をかすことは決してせざるべし且われ善き正しき道をもて汝らをおしへん四汝ら只エホバをかしくみ心をつくして誠にこれにつかへし如何に大なることをエホバ汝らになしたまひしかを思ふ可し五しかれども汝らもしなほ惡をなさば汝らに汝らの王をもほろぼさるべし

第十三章一サムエル三十歳にて王の位に即く彼二年イスラエルをおさめたり二爰にサウルイスラエル人三千を擇む其二千はサウルとさうもにミクマシおよびベテルの山地にあり其一千はヨナタンとさうもにベニヤミンのギベアにあり其餘の民はサウルおのく其幕屋にかへらしむ三ヨナタンとさうもにありシテ人の代官をころせりハシリテ人之れをきく是に於いてサウル國中にあまれくラツバを吹ていはしめけるはヘアル人よ聞くべし四イスラエル人皆聞けるに云くサウルハシリテ人の代官を撃りしかしてイスラエルハシリテ人の中に惡まるる斯て民めされてサウルにしたがひてギルガルにいたる五ハシリテ人イスラエルと戦はんさて集りけるが兵車三百騎兵六千にして民は濱の砂の多きがごとくなり彼らのぼりてベテアベンにむかへるミクマシに陣をされり六イスラエルの人苦められ其危きを見て皆巖穴に林叢に崗巒に高塔に坎阱にいくれたり七また或るヘアル人はヨルダンを渉りてカドシギレアテの地にいたる然るにサウルは尙ギルガ

ルにあり民皆戰慄て之にしたがふハサウルサムエルの定めし期にしたがひて七日ささまりしがサムエルギル
 ガルに來らず民はなれて散れば九サウルいひけるは燔祭を我にもちきたれと遂に燔祭をささげ
 たり十燔祭をささぐることを終しききに視よサムエルいたるサウル安否を問はんさてこれをいで迎ふに 十一
 サムエルいひけるは汝何をなせしやサウルいひけるは我民の我をばなれてちりまた汝の定まれる日のうちに
 來らずしてベリシテ人のミクマシにあつまれるを見しかば 十二ベリシテ人ギルガルに下りて我をおそはん
 に我いまだエホバをなごめずさいひて勉めて燔祭をささげたり十三サムエルサウルにいひけるは汝あるかあ
 ることをあせり汝その神エホバのなんぢに命じたまひし命令を守らざりしなり若し守りしならばエホバイス
 ラエルをおさむる位を永く汝にさだめたまひしならん 十四然もいま汝の位たもたざるべしエホバ其心
 に適ふ人を求めてエホバ之に其民の長を命じたまへり汝がエホバの命ぜしことを守らざるによる 十五かく
 てサムエルたちてギルガルよりベニヤミンのギベアにのぼりいたるサウルおのれささるもにある民をかぞふる
 に凡そ六百人ありき十六サウルおよび其子ヨナタン並にこれささるもにある民はベニヤミンのゲバに居り
 ベリシテ人はミクマシに陣を張る十七劫掠人三隊にわかれてベリシテ人の陣よりいで一隊はオフラの路に
 むかひてシユアルの地にいたり十八一隊はベテホロン道の道にむかひ一隊は曠野の方にあるセボイム谷の
 そむ境の路にむかふ十九時にイスラエルの地のうち何處にも鐵工をかりきしはベリシテ人ヘブル人の劍あ
 るひは槍を作ることを恐れたればなり二十イスラエル人皆其相劔斧未即ち相劔三齒劔斧の鍔に欠
 ありてこれを鍛ひ改さんとする時又は鞭を突らさんとする時は常にベリシテ人の所にくだれり 二二是をもて
 戦の日にサウルおよびヨナタンささるもにある民の手には劍も槍も見えず只サウルと其子ヨナタンのみ持り
 二三茲にベリシテ人の先陣ミクマシの渡口に進む

第十四章 一其時サウルの子ヨナタン武器を執る若者にいひけるはいざ對面にあるベリシテ人の先陣に逃
 りゆかん然其父には告げざりきニサウルギベアの極においてミカロンにある石榴の樹の下に住まりしが

俱にある民はおよそ六百人なりき又アヒヤエホデを衣てささるもにあるアヒヤはアヒトブの子アヒトブはイ
 カボテの兄弟イカボテはビ子ハスの子ビ子ハスはシロにありてエホバの祭司たりしエリの子なり民ヨナタ
 ンの行けるをしらすりきヨナタンの透りてベリシテ人の先陣にいたらんとする渡口の間に此傍に燔祭あ
 り彼傍にも燔祭あり一の名をボゼツといひ一の名をセ子といふ五其一は北に向ひてミクマシに對し一は
 南にむかひてゲバに對す六ヨナタン武器を執る少者にいふいざ我ら此割禮なき者ごもの先陣にわたらん
 エホバ我らのためにはたらきたまふことあらん多くの人をもて救ふも少き人をもてすくふもエホバにおいて
 は助けなし七武器をさるもの之にいひけるは總て汝の心にあるところをなせ進め我汝の心にしたがひ
 て汝ささるもにあり八ヨナタンいひけるは見よ我らかの人々のささるもにわたり身をかれらにあらはさん九かれ
 ら若し我らが汝らにいたるまでささるもにされど斯く我らにいはば我らはこのまうささるもにわたらば
 じ十されど若し我らのささるもにのぼれどかくいはば我らのぼらんエホバかれらを我らの手にわたしたまふな
 り是を徴ささん十一斯て二人其身をベリシテ人の先陣にあらはしければベリシテ人いひけるは視よヘ
 ブル人其かくれたる穴よりいで來る十二すなはち先陣の人ヨナタンと其武器を執る者にこたへて我等の
 所に上りきたれ目に物見せんといひしかばヨナタン武器を執る者にいひけるは我にしたがひてのぼれエホバ
 彼らをイスラエルの手にわたしたまふなり 十三ヨナタン攀のぼり其武器を執るもの之にしたがふベリシテ人
 ヨナタンのまへに仆る武器をさる者も後にしたがひて之をささるもに十四ヨナタンと其武器を取るもの手はじめ
 に殺せし者およそ二十人此事田畑半段の内になれり十五しかして野にある陣の者および凡ての民の中に戰
 慄おこり先陣の人および劫掠人もまたなのさき地ふるひ動けり是は神よりの戰慄なりき十六ベニヤミン
 のギベアにあるサウルの成卒望見しに視よベリシテ人の群衆くづれて此彼にちらばる十七時にサウルおの
 れささるもなる民にいひけるは汝ら點驗て誰が我らの中よりゆきしかを見よすなはちしらべたるにヨナタン
 さその武器を執るもの居らざりき十八サウルアヒヤにエホバを持きたれといふ其はかれ此時イスラエルの

まへにエホバを着たれば也十九サウル祭司にたれる時ペリシテ人の軍の驕いよくましたりければサウル祭司にいふ姑く汝の手を掲げ二十かくてサウルおよびサウルと共にある民皆呼はりて戦ひに至りシテ人おのく剣を以て互に相撃ちければ其敗績はなほ大なりき二一また此時よりまへにペリシテ人さもにありてペリシテ人と共に上りて陣に来るさころのヘブル人もまた翻へりてサウルおよびヨナタンと共にあるイスラエル人に合せり二三又エフライム山地にたれたるイスラエル人皆ペリシテ人の逃るを聞てまた戦ひに出これを追撃り二三是の如くエホバ此日イスラエルをすくひたまふ而して戦はベテアベンにつれり二四されど此日イスラエル人苦めり其はサウル民を誓はせて夕まで即ちわが敵に仇をむくゆるまでに食物を食ふ者は呪詛れんと言たればなり是故に民の中に食物を味ひし者なし二五爰に民みな林森に至るに地の表に蜜あり二六即ち民森にいたりて蜜のなごるをみる然ども民誓を畏るれば誰も手を口につくる者なし二七然にヨナタンは其父が民をちかばせしを聞きければ手にある杖の末をのびして蜜にひたし手な口につけたり是に由て其目あきらかになりぬ二八時に民のひさり答て言けるは汝の父がたく民をちかばせて今日食物をくらふ人は呪詛れんと言り是に由て民つかれたり二九ヨナタンいひけるはわが父國を煩せり請ふ我この蜜をすこしく嘗しによりて如何にわが目の明かになりしかを見よ三十ましてや民今日敵よりうばひし物を十分に食しならばペリシテ人をころすこと更にほかるべきにあらずや三一イスラエル人の日ペリシテ人を撃てミクマシよりアヤロンにいたるしかして民はなほだ疲たり三二是において民劫掠物に走かり羊と牛と犢とを取りて之を地のうへにころし血のまゝに之をくらふ三三人々サウルにつけていひけるは民肉を血のまゝに食ひて罪をエホバにをらすサウルいひけるは汝ら背けり直ちにわがもに大石をまろばしきたれ三四サウルまたいひけるは汝らわかれて民のうちにいりていへ人各其牛と各其羊とをわがもに引き取り此處にてころしくらへ血のまゝにくらひて罪をエホバに犯すなれど此において民おのくの夜其牛を手ひき取りたりて之をかしこにころせり三五しかしてサウルエホバに一つの壇をきつ

く是はサウルのエホバに壇を築ける始なり三六かくてサウルいひけるは我ら夜のうちにペリシテ人を追くだり夜明までかれらを掠めて一人をも残すまじ皆いひけるは凡て汝の目に善さみゆる所をなせと時に祭司いひけるは我ら此にちかより神にもさめん三七サウル神に我ペリシテ人をあひくだるべきか汝かれらをイスラエルの手にわたしたまふやと問ければ此日はこたへたまはざりき三八是においてサウルいひけるは民の長たちよ皆此にちかよれ汝らみて今日のこの罪のいづくにあるを知れ三九イスラエルを救ひたまへるエホバはいく假令わが子ヨナタンにもあれ必ず死なざるべからずとされど民のうち一人もこれにこたへざりき四十サウルイスラエルの人々にいひけるはなんぢらは彼處にをれ我とわが子ヨナタンは此處にをらん民いひけるは汝の目によしさみゆるさころをなせ四一サウルイスラエルの神エホバにいひけるはわがはくは眞實をしめたまへさかくてヨナタンとサウルとにあり民はのがれたり四二サウルいひけるは我とわが子のあひだの鬮を撃てさ即ちヨナタンこれにあたり四三サウルヨナタンにいひけるは汝がなせしころを我につげよヨナタンつけていひけるは我は只わが手の杖の末をもて少許の蜜をなめしのみなるが我しなざるをえす四四サウルこたへけるは神かくなしたまはざりてかくなしたまへヨナタンよ汝しなざるべからず四五民サウルにいひけるはイスラエルの中に此大いなるすくひをなせるヨナタン死ねばけんや決めてしからずエホバは生くヨナタンの髪を毛ひさすちも地におつべからず其はかれ神さよもに今日はたらきたればなりとかく民ヨナタンをすくひて死なざらしむ四六サウルペリシテ人を追こたを息てのぼりぬペリシテ人其國にかへり四七かくてサウルイスラエルの王の位につきて四方の敵を攻む即ちモアブアンモンの子孫エドムゾバの王たちおよびペリシテ人をせめけるに凡てむかふさころにて勝利を得たり四八サウル力をえアマレク人をうちてイスラエルを其劫掠人の手よりすくひいだせり四九サウルの男子はヨナタンエスイおよびマルキシユアなり其二人の女子の名は姉はメラブさいひ妹はミカルさいふ五十サウルの妻の名はアヒノアムさいひてアヒマアズの女子なり其軍の長の名はアブアルさいひてサウルの叔父なる子の子なり五一サウルの父キシマアブ

子ルの父子ルはアビエルの子なり五ニサウルの一 生のあひだ恒にヘリシテ人々を苦しめ戦ありサウルは力ある人または勇ある人を見るにこれをかゝりたり

第十五章 茲にサムエルサウルにいひけるはエホバ我をつかはし汝に膏を沃きて其民イスラエルの王となさしめたりさればエホバの言の聲をきけ二萬軍のエホバかくいひたまふ我アマレクがイスラエルになせし事すなはちエジプトよりのぼれる時其途を遮りしをへりみる三今ゆきてアマレクを撃ち其有る物をこそごこく滅しつくし彼らを憐れむなれ男 女童稚哺乳兒牛 羊 駱駝驢馬を皆ころせ四サウル民をよびあつめてこれをテライムに核ふ歩兵二十萬ユダの人 一萬あり五しかしてサウルアマレクの邑にいたりて谷に兵を伏たり六サウルケ二人にいひけるは汝らゆきてさりアマレク人をはなれくたるべし恐らくはかれらさうもに汝らをはるばすにいたらんイスラエルの子孫のエジプトよりのぼれる時汝らこれに恩みをほごしたりさ即ちケ二人アマレク人をはなれてさり七サウルアマレク人をうちてハビラよりエジプトの東面なるシエラにいたる八サウルアマレク人の王アガクを生擒り刃をもて其民をころしほろぼせり九然れどもサウルと民アガクをゆるしまた羊と牛の最も嘉きもの及び肥たる物並に 羔と凡て善き物を殘して之をほろぼしつくすをこのます但惡き弱き物をほろぼしつくせり十時にエホバの言サムエルにのぞみていはく十一我サウルを王となせしを悔ゆ其は彼背きて我にしたがはずわが命をこなはざればなりとサムエル憂て終夜エホバによははれり十二かくてサムエルサウルにあはんとて夙早起けるにサムエルにつぐるものありていふサウルカルメルにいたり勝利の表を立て轉り進みてギルガルにくだれり十三サムエルサウルの許に至りければサウルこれにいひけるは汝がエホバより福祉を得んことをなれがふ我エホバの命を行へり十四サムエルいひけるは然らばわが耳にいる此羊の聲をよびわがきく牛のこゑは何ぞや十五サウルいひけるは人々これをアマレク人のところより引ききたれり其は民汝の神エホバにさうげんために羊と牛の最も嘉きものをのこせばなり其ほかは我らほろぼしつくせり十六サムエルサウルにいひけるは止まれ昨夜エホバの我にかたり

たまひしことを汝につげんサウルいひけるはいへ七サムエルいひけるはさきに汝が 撒き者さみづから憶へるさきに 爾イスラエルの支派の長となりしにあらすや即ちエホバ汝に膏を注いでイスラエルの王となせり十八エホバ汝を途に遣はしていひたまはく往て惡人あるアマレク人をほろぼし其盡るまで戦へよと十九 何故に 汝エホバの言をきかずして敵の所有物にはせかりエホバの目のまへに惡をなせしや二十サウルサムエルにいひけるは我 誠にエホバの言にしたがひてエホバのつかはしたまふ途にゆきアマレクの王アガクを執きたりアマレクをほろぼしつくせり二一たゞ民其ほろぼしつくすべき物の最初としてギルガルにて汝の神エホバにさうげんして敵の物の中より羊と牛をされり二二サムエルいひけるはエホバはその言にしたがふ事を善したまふごこく燔祭と犠牲を善したまふや夫れ順ふ事は犠牲にまさり聽く事は牡羊の脂にまさるなり二三其は 違逆は魔術の罪のごこく 抗 戻は虚しき物につかふる如く偶像につかふるがごこし 汝エホバの言を棄たるによりエホバもまた汝をすて王たらざらしめたまふ二四サウルサムエルにいひけるは我エホバの命と汝の言をやぶりに罪をおかしたり是は民をおそれて其言にしたがひたるによりてなり二五されば今わがはくはわがつみをゆるし我さうもにかへりて我をしてエホバを拜するごこきをえさしめよ二六サムエルサウルにいひけるは我 汝さうもにかへらじ 汝エホバの言を棄たるによりエホバ 汝をすてイスラエルに王たらしめたまはざればなり二七サムエル去らんとして振還しきサウルその明衣の裾を捉へしかば裂たり二八サムエルかれにいひけるは今日エホバイスラエルの國を裂て汝よりはなし汝の 隣なる汝より善きものにこれをあたへたまふ 二九またイスラエルの能力たる者は誰らず悔す其はかれは人にあらざればよくるごこし三十サウルいひけるは我罪をおかしたれどわがはくはわが民の長老のまへもよびイスラエルのまへにて我をたふさみて我さうもにかへり我をして汝の神エホバを拜むごこきをえさしめよ三一ごこしにおいてサムエルサウルにしたがひてかへるしかしてサウルエホバを拜む三二時にサムエルいひけるは汝らわが許にアマレクの王アガクをひききたれとアガク 喜ばしげにサムエルの許にきたりアガクいひけるは死の苦みは必

す過ぎりぬ三三サムエルいひけるは汝の劔はもはくの婦人を子なき者させりかくのごとく汝の母は婦人の中の最も子なき者なるべしサムエルギルガルにてエホバのまへにおいてアガガを斬り三四かくてサムエルはラマにゆきサウルはサウルのギベアにのぼりてその家にいたる三五サムエル其しぬる日までふたたびきたりてサウルをみざりしけれどもサムエルサウルのためにかなしめりまたエホバはサウルをイスラエルの王となせしを悔たまへり

第十六章 爰にエホバサムエルにいひたまひけるは我すでにサウルを棄てイスラエルに王たらしめざるに汝いつまでかれのために歎くや汝の角に膏油を満してゆけ我汝をベテレヘム人エサイの許につかはさん其は我其子の中にひさりの王を尋ねえたらばなりニサムエルいひけるは我いつて行くことなえんサウル聞て我をころさんエホバいひたまひけるは汝一轎を攜へゆきて言へエホバに犠牲をささげんために来ること三しかしてエサイを犠牲の場によべ我汝が爲すべき事をしめさんわが汝に告るること人の膏をそぐ可し四サラムエルエホバ語たまひしごとくなしてベテレヘムにいたる邑の長老おそれて之をむかへいひけるは汝平康なる事のためにきたるや五サムエルいひけるは平康あることのためなり我はエホバに犠牲をささげんきてきたる汝ら身をきよめて我ごとくもに犠牲の場にくたれと斯てエサイと其諸子を潔めて犠牲の場によびきたる六かれらに至れる時サムエルエリアアを見ておもへらくエホバの膏そぐものは必ず此人ならんせしむるにエホバサムエルにいひたまひけるは其容貌と身長を觀るなかれ我すでにかれをすてたりわが視ることは人に異なり人は外の貌を見エホバは心を見るなり八エサイアビナダブをよびてサムエルのまへに過しむサラムエルいひけるは此人もまたエホバ擇みたまはず九エサイシヤンマを過ぎしむサムエルいひけるは此人もまたエホバえらみたまはず十二サムエルエサイにいひけるは汝の男子は皆此に在るやエサイいひけるは尙季子のこれり彼は羊を牧するなり十三サムエルエサイにいひけるは彼を迎へきたらしめよかれが此にいたるまで

我ら食に就かざるべし十二是において人をつかはしてかれをつれきたらしむ其人色赤く目美しくして其貌麗しエホバいひたまひけるは起てこれにあぶらを沃げ是其人なり十三サムエル膏の角をとりて其兄弟の中にてこれに膏をそぐげり此日よりのちエホバの靈ダビデにのぞむサムエルはたちてラマにゆけり十四かくてエホバの靈サウルをはなれエホバより來る惡鬼これを惱せり十五サウルの臣僕これにいひけるは視よ神より來れる惡鬼汝をなやます十六れがほくはわれらの主汝のまへにつかふる臣僕に命じて善く琴を鼓く者一人を求めしめよ神よりきたれる惡鬼汝に臨む時彼手をもて琴を鼓て汝いゆることをえん十七サウル臣僕にいひけるは我ために巧に鼓琴者をたづねてわがもこにつれきたれ十八時に一人の少者たへていひけるは我ベテレヘム人エサイの子を見しが琴に巧にしてまた豪氣して善くたふす辯舌さはやかなる美しき人なりかつエホバこれさうもにいます十九サウルすなはち使者をエサイにつかはしていひけるは羊をかふ汝の子ダビデをわがもこに遣はせせ二十エサイすなはち驢馬にパンを負せ一壺の酒と山羊の羔を執りてこれを其子ダビデの手によりてサウルにおくれり二ダビデサウルの許にいたりて其まへに事ふサウル大にこれを愛し其武器を執る者となす二三サウル人をエサイにつかはしていひけるは汝がはくはダビデをしてわが前に事へしめよ彼はわが心になへり二三神より出たる惡鬼サウルに臨めるさきダビデ琴を執り手をもてこれを弾にサウル慰さみて愈え惡鬼かれをはなる

第十七章 爰にベリシテ人其軍を集めて戦はんとしユダに屬するシヨコにあつたりシヨコミアセカの間なるバスタミムに陣をさるニサウルとイスラエルの人々集まりてエラの谷に陣をさりベリシテ人にむかひて軍の陣列をたつ三ベリシテ人は此方の山にたちイスラエルは彼方の山にたつ谷は其あひだにあり四時にベリシテ人の陣よりガテのゴリアテと名くる挑戦者いできたる其身の長六キエビト半五首に銅の盔を戴き身に鱗綴の鎧甲を着たり其よろひの銅のおもさは五千シケルなり六また脛には銅の脛當を着け肩の間に銅の矛戦を負ふ七其槍の柄は機梁のごとく槍の鋒刃の鉄は六百シケルなり楯を執る者其前

にゆく入ゴリアテ立てイスラエルの諸行伍によばりいひけるは汝らはあんぞ陣列をなしていできたるや我
 はベリシテ人にして汝らはサウルの臣下にあらすや汝ら一人をえらみて我さころにくだせ九其人もし我さた
 たかひて我をころすことをえば我ら汝らの臣僕ならんされど若し我らちてこれを殺さば汝ら我らの僕さな
 りて我らに事ふ可し十かくて此ベリシテ人いひけるは我今日イスラエルの諸行伍を挑む一人をいだして我
 さ戦はしめよ十一サウルおよびイスラエルみなベリシテ人のこの言を聞き驚きて大いに懼れたり十二抑
 ダビデはかのベレヘムエダのエフラタ人エサイさなづくる者の子なり此人八人の子ありしがサウルの
 世には年邁みてすでに老たり十三エサイの長子三人ゆきてサウルにしたがひて戦争にいづ其戦いでし
 三人の子の名は長をエリアアさいひ次をアビナダブさいひ第三をシヤンマさいひ十四ダビデは季子にして其
 兄三人はサウルにしたがへり十五ダビデはサウルに往來してベレヘムにて其父の羊を牧ふ十六彼ベリシ
 テ人四十日のあひだ朝夕近づきて前にたてり十七時にエサイ其子ダビデにいひけるは今汝の兄のため
 に此燂麥一斗さ此十のパンを取りて陣營にたる兄のさころにいそぎゆけ十八また此十の乾酪をとりて其
 千夫の長におくり兄の安否を視て其返事をもちきたれ十九サウルさ彼等およびイスラエルの人は皆ベリ
 シテ人さたさかひてエラの谷にありき二十ダビデ朝風くおきて羊をひさりの牧者にあづけエサイの命せし
 ごこく携へゆきて車營にいたるに軍勢いでる行伍をなし鯨波をあげたり二一しかしてイスラエルさベ
 リシテ人陣列をたて行伍を行伍に相むかはせたり二二ダビデ其荷をふるして荷をまもる者の手にわたし行
 伍の中にはせゆきて兄の安否を問ふ二三ダビデ彼等と俱に語れる時視よベリシテ人の行伍よりガテのベリシ
 テのゴリアテさなづくる彼の挑戦者のぼりきたり前のさころに言しかばダビデ之を聞けり二四
 イスラエルの人其人を見て皆逃て之をばなれ痛く懼れたり二五イスラエルの人いひけるは汝らこのさぼり
 來る人を見しや誠にイスラエルを挑んきて上りきたるなり彼をころす人は王大なる富を以てこれをさまし
 其女子をこれにあたへて其父の家にはイスラエルの中にて租税をまぬいれしめん二六ダビデ其傍にたて

る人々にかりていひけるは此ベリシテ人をころしイスラエルの耻辱を雪ぐ人には如何なることをなすや此
 割禮なきベリシテ人は誰なればか活る神の軍を擧む二七民まへのさく答へていひけるはかれを殺す人には
 斯のさくせらるべし二八兄エリアアブダビデが人々さかたるを聞きかばエリアアブダビデにむかひて怒りを
 發しいひけるは汝なのために此に下りしや彼の野にあるわづかの羊を誰にあづけしや我汝の傲慢と悪き
 心を知る其は汝戦争を見んきて下ればなり二九ダビデいひけるは我今なにをなしなるや只一言にあらす
 やさ三十又ふりむきて他の人にむかひ前のさく語れるに民まへのさく答たり三人々ダビデが語れる言
 をききてこれをサウルのまへにつげればサウルかれを召す三二ダビデサウルにいひけるは人々かれがため
 に氣をおさすべからず僕ゆきてかのベリシテ人さたさかはん三三サウルダビデにいひけるは汝はかのベリシ
 テ人をむかへてたさかふに勝す其は汝は少年なるにかれは若き時よりの戦士なればなり三四ダビデサウ
 ルにいひけるは僕さきに父の羊を牧るに獅子さ熊さ來りて其群の羔を取れば三五其後をふひて之を搏ち
 羔を其口より援ひいだせりしかして其獸我に猛りかよりければ其鬚をさらへてこれを撃ちころせり三六
 僕は既に獅子さ熊さを殺せり此割禮なきベリシテ人活る神の軍をいごみたれば亦かの獸の一のさく
 なるべし三七ダビデまたいひけるはエホバ我を獅子の爪さ熊の爪より援ひいだしたまひければ此ベリシテ人
 の手よりも援ひいだしたまはんさサウルダビデにいふ往ければはくはエホバ汝ささもにいませ三八是にお
 いてサウルものれの戎衣をダビデに衣せ銅の盛を其首にかむらせ亦鱗綴の鎧をこれにきせたり三九
 ダビデ戎衣のうへに劍を佩て往かんことを試む未だ驗せしことなればなりしかしてダビデサウルにい
 ひけるは我いまだ驗せしことなれば是を衣ては往くあたはず四〇ダビデこれを脱ぎすて手に杖をさり驗
 問より五の光滑なる石を拾ひて之を其持てる牧羊者の具なる袋に容れ手に投石索を執りて彼ベリシテ人にち
 かづく四一ベリシテ人進みきてダビデに近づけり楯を執るもの其まへにあり四二ベリシテ人環視てダビ
 デを見て之を藐視る其は少くして赤くまた美しき貌なればなり四三ベリシテ人ダビデにいひけるは汝杖を

持てきたる我豈犬ならんやペリシテ人其神の名をもつてダビデを呪詛ふ四十四かしてペリシテ人ダビ
 テにいひけるは我がもこに來れ汝の肉を空の鳥の野の獸にあたへんよ四十五ダビデペリシテ人にいひけるは汝
 は劍を槍を矛戟をもて我にきたる然れども我は萬軍のエホバの名すなはち汝を翳みたるイスラエルの軍の神の名
 をもて汝にゆく四十六今日エホバ汝をわが手に付したまはんわれ汝をうちて汝の首級を取りペリシテ人の軍
 勢の尸體を今日空の鳥の野の獸にあたへて全地をしてイスラエルに神あることをしらしめん四十七且又この
 群衆みなエホバは救ふに劍を槍を用ひたまはざることをしるにいたらん其は戰はエホバによれば汝ら我
 らの手にわたしたまはんよ四十八ペリシテ人すなはち立ちあがり進みちかづきてダビデをむかへしかばダビデ
 そぎ陣にはせゆきてペリシテ人をむかふ四十九ダビデ手を腰にいれて其中より一つの石をとり投てペリシテ人
 の額を撃ければ石其額に突き入りて俯伏に地にたふれたり五十かくダビデ投石索をもちてペリシテ人に
 かちペリシテ人をうちて之をころせり然れどもダビデの手には劍をかりしかば五十一ダビデはしりてペリシテ人の
 上にのり其劍を取て之を輪より抜きはなしこれをもてかれをころし其首級を斬りたり爰にペリシテ人の
 其勇士の死るを見てにげしかば五十二イスラエルエダの人をこり嗚呼をあげてペリシテ人をむかひガテの入口
 およびエタロンにいたるペリシテ人の負傷人シヤライムに侍れてガテおよびエタロンにおよぶ五十三
 イスラエルの子孫ペリシテ人をあふてかへり其陣を掠む五十四ダビデかのペリシテ人の首を取りて之をエル
 サレムにたづさへきたりしが其甲冑はものれの天幕におけり五十五サウルダビデがペリシテ人にむかひて出
 るを見て軍長アブナルにいひけるはアブナル此少者はたれの子なるやアブナルいひけるは王汝の
 魂は生くわれしらざるなり五六王いひけるは少年はたれの子なるかを尋ねよ五七ダビデかのペリシテ人
 を殺してかへれる時アブナルこれをひきて其ペリシテ人の首級を手にもてるまうサウルのまへにつれゆきけ
 れば五八サウルかれにいひけるは若き人よ汝はたれの子なるやダビデこたへけるは汝の僕バテレム人
 エサイの子なり

第十八章一ダビデサウルにかたることを終しよナタンの心ダビデの心にもすびつきてヨナタンおの
 れの命のごとくダビデを愛せり二此日サウルダビデをかくへて父の家にかへらしめす三ヨナタンおのれの命
 のごとくダビデを愛せしかばヨナタンとダビデ契約をむすべり四ヨナタンおのれの衣たる明衣を脱てダビデ
 にあたふ其戎衣および其刀も弓も帯もまたしかり五ダビデは凡てサウルが遣はすところにいひてゆき
 て功をあらはしければサウなかれを兵隊の長となせり六かしてダビデ民の心にかはひ又サウルの僕に
 もかなふ六衆人かへりきたれる時すなはちダビデペリシテ人をころして還れる時婦女イスラエルの邑々より
 いできたり七祝歌を唱へて歌ひまひつゝサウル王を迎ふ七婦女踊躍つゝ相こたへて歌ひけるはサウ
 ルは千をうち殺しダビデは萬をうちころす八サウル甚だ怒りこの言をよるこばすしていひけるは萬をダ
 ビデに歸し千をわれに飯す此上かれにあたふべき者は唯國のみさ九サウルこの日より後ダビデを目がけたり
 十次の日神より出たる惡鬼サウルにのぞみてサウル家のなかにて預言したりしかばダビデ故のごとく手をも
 つて琴をひけり時にサウルの手に投槍ありければ十一サウル我ダビデを壁に刺さばんといひて其投槍を
 さしあげしがダビデ二度身をかはしてサウルをさけたり十二エホバサウルをはなれてダビデと共においでに
 よりてサウル彼をおそれたり十三是故にサウル彼を遠ざけて千夫長となせりダビデすなはち民のまへに
 出入す十四またダビデすべて其ゆくところにて功をあらはし且エホバかれさうもにいませり十五サウルダビ
 デが大に功をあらはすをみてこれを恐れたり十六しかれどもイスラエルエダの人はいみなダビデを愛せり彼
 が其前に出入するによりてなり十七サウルダビデにいひけるはわれわが長女メラブを汝に妻さん汝たゞ
 わがために勇みエホバの軍に戦ふべし其はサウルわが手にてかれを殺さてペリシテ人の手にてころさん
 さおもひたればなり十八ダビデサウルにいひけるは我は誰ぞわが命はなんぞわが父の家はイスラエルにおい
 て何なる者ぞや我いかでか王の婿となるべけん十九然るにサウルの女子メラブはダビデに嫁ぐべき時に
 まびてメホラ人アタリエルに妻されたり二十サウルの子女ミカルダビデを愛す人これを王に告げばサウル其

事を善しとせりニサウルいひけるは我ミカルをわれにあたへて彼を謀る手段をなしハリシテ人の手にてか
 れを殺さんといひてサウルダビデにいひけるは汝今日ふたつびわが婿となるべし二三かくてサウル其僕
 に命じけるは汝ら密にダビデにかりて言へ視よ王汝を悦び王の僕みな汝を愛すされば汝王の婿と
 なるべしとニサウルの僕此言をダビデの耳に語りしかばダビデいひけるは王の婿となること汝らの目
 には易き事とみゆるや且われは貧しく賤しき者なりとニサウルの僕サウルにつけてダビデ是の如くかた
 れりといへりニサウルいひけるはあんぢらかくダビデにいへ王は聘禮を望ますたゞハリシテ人の陽皮
 一百をえて王の仇をむくいんことを望むと是はサウルダビデをハリシテ人の手に殞没しめんともへるな
 りニサウルの僕此言をダビデにつげしかばダビデは王の婿となることを善しとせり斯て其時いまだ満さ
 るあひだにニサウル起て其從者さうもにゆきハリシテ人二百人をころして其陽皮をたづさへきたり
 之を悉く王にさうげて王の婿ならんさすサウル乃ち其女ミカルをダビデに妻せたりニサウル見て
 エホバのダビデさうもにいますを知りぬまたサウルの女ミカルはダビデを愛せりニサウルさらにもすま
 すダビデを恐れサウル一生のあひだダビデの敵となれり三十爰にハリシテ人の諸伯攻きたりしがダビデ
 かれらが攻めきたるごとにサウルの諸臣僕よりは多くの功をたてしかば其名はなはだ尊まる

第十九章一サウル其子ヨナタンおよび諸の臣僕にダビデをころさんとするを語れりニされどサウル
 の子ヨナタン深くダビデを愛せしかばヨナタンダビデにつけていひけるはわが父サウル汝をころさんこと
 を求むこのゆゑに今わがはくは汝翌朝謹恪で潛みわたりて身を隠せ我いでゆきて汝を野にてわが
 父の旁にたちわが父さうもに汝の事を談はんしかして我其事の如何なるを見て汝に告ぐべしヨナタン
 其父サウルにむかひダビデを褒揚ていひけるは願くは王其僕ダビデにむかひて罪をおかすなかれ彼は汝
 に罪をおかすなまたかれが汝にあす行爲はうなはだ善し五またかれは生命をかけてかのハリシテ人をころし
 たりしかしてエホバイスラエルの人々のためにおほいなる救をほごしたまふ汝見てよろこべりしかるに何

ぞゆゑなくしてダビデをころし無辜者の血をながして罪をおかさんとするやサウルヨナタンの言を聴い
 れサウル誓ひけるはエホバはいくわれかならずかれをころさんとせヨナタンダビデをよびてヨナタン其事をみ
 なダビデにつげ遂にダビデをサウルの許につれきたりければダビデさきのごとくサウルの前にをる爰に再
 び戦争おこりぬダビデすなほちいでるハリシテ人さうもに大いにかれらを殺せしかばかれら其まへを逃げ
 されりサウル手に投槍を執て室に坐する時エホバより出たる悪鬼これにのりうつれり其時ダビデ乃ち手
 をもて琴を弾くサウル投槍をもてダビデを壁に刺さほさんしたりしがダビデサウルのまへを避ければ投
 槍を壁に衝たてたりダビデ其夜逃さりぬ十一サウル使者をダビデの家につかはしてかれを守らしめ朝におよ
 びてかれをころさんとしめんとすダビデの妻ミカルダビデにつけていひけるは若し今夜爾の命を援すば明朝
 汝は殺さん十二ミカル即ち屬よりダビデを緇おろしければ往て逃されり十三斯てミカル像をさりて其
 牀に置き山羊の毛の編物を其頭におき衣服をもて之をおほへり十四サウルダビデを執ふる使者をつかはし
 ければミカルいふかれは疾ありと十五サウル使者をつかはしダビデを見させんさていひけるはかれを牀のま
 ま我にたづさへきたれ我これをころさん十六使者いりて見たるに牀には像ありて其頭に山羊の毛の編物あ
 りき十七サウルミカルにいひけるはなんぞかく我をあざむきてわが敵を逃しやりしやミカルサウルにこたへ
 けるは彼我にいへり我をはなちてさらしめよ然らずば我汝をころさんと十八ダビデにげさりてラマにゆき
 サムエルの許にいたりてサウルがそのれになせしことをこくくつげたりしかしてダビデサムエルはゆ
 きてナヨテにすめり十九サウルに告る者ありていふ視よダビデはラマのナヨテに在るに二十サウル乃ちダ
 ビデを執ふる使者をつかはせしむ彼等預言者の一群の預言しをりてサムエルが其中の長となりて立てるを見
 るにおよび神の靈サウルの使者にのぞみて彼等もまた預言せり二一人々これを告げればサウル他の使者を
 遣しけるにかれらも亦預言せしかばサウルまた三度使者を遣はしけるが彼等もまた預言せり三是において
 サウルもまたラマにゆきけるがセクの大井にいたれる時間ていひけるはサムエルとダビデは何處に在るや答

へていふラマのナヨテにたるニ三サウルかしこにゆきてラマのナヨテにいたりけるに神の靈また彼にのぞみて彼ラマのナヨテにいたるまで歩きつゝ預言せり二四彼もまた其衣服をぬぎすて同くサムエルのまへに預言し其一日一夜裸体にて仆臥たり是故に人々サウルもまた預言者のうちにあるかといふ

第二十章一ダビデラマのナヨテより逃きたりてヨナタンにいひけるは我何をなし何のあしき事あり汝の父のまへに何の罪を得てか彼わが命を求むるニヨナタンかれにいひけるは汝 決して殺さるることあらじ親よわが父は事の大きいなるも小なるも我につげずしてなすことなしわが父なんぞこの事を我にかくさんやこの事しからず三ダビデまた誓ひていひけるは汝の父必ずわが汝のまへに恩恵をうるを知る是をもてかれ思へらく恐らくはヨナタン 悲むべければこの事をかれにしらしむべからずさしかれどもエホバはいくまたなんぢの靈魂はいくわれは死なざることを只一步のみヨナタンダビデにいひけるはなんぢの心なをれがふか我爾のために之をなさん三ダビデヨナタンにいひけるは明日は月朔なれば我王さうもに食につかざるべからず然ども我をゆるして去らしめ三日の晩まで野に隠ることをえさしめよ六若 汝の父まことに我をもとめなば其時言へダビデ切に其邑ベテレヘムにはせゆかんことを我に請り其は彼處に全家の歳祭 あればなり七彼もし善しさいはよ僕やすからんされど彼もし甚しく怒らば彼の害をくはへんさ決ししれ汝 エホバのまへに僕と契約をむすびたれば願くは僕に恩をほごせ然も若我に悪き事あらば汝 自ら我をころせ何ぞ我を汝の父に引ゆくべけんや九ヨナタンいひけるは斯る事かならず汝にあらざれ我わが父の害を汝にくはへんさ決るをしらば必ず之を汝につげん十ダビデヨナタンにいひけるは若し汝の父荒々しく汝にきたる時は誰か其事を我に告ぐべきや十一ヨナタンダビデにいひけるは若し我ら野にいでゆかんを俱に野にいでゆけり十二しかしてヨナタンダビデにいひけるはイスラエルの神エホバよ明日か明後日の今ころ我わが父を窺ひて事のダビデのために善きを見なからん人を汝に遣はして告しらすせばエホバヨナタンに斯あじまた重て斯くなしたまへ十三されど若しわが父汝に害をくはへんさ欲せば我これを告げしらせて汝をにがし汝を安

らかにさらしめん願くはエホバわが父さうもに坐せしごさく汝さうもにいませ十四汝 只わが生るあひだエホバの恩を我にしめて死ざらしむるのみならず十五エホバがダビデの敵を悉く地の表より絶ちさりたまふ時にもまた汝わが家を永く汝の恩にはなれしむるなれ十六かくヨナタンダビデの家と契約をむすぶエホバ之に關てダビデの敵を討したまへり十七しかしてヨナタンふたゝびダビデに誓はしむかれを愛すればなり即ちものれの生命を愛するごさく彼を愛せり十八またヨナタンダビデにいひけるは明日は月朔なるが汝の座空かるべければ汝求めらるべし十九汝三日さうまりて速かに下り嘗てかの事の日に隠れたるごころに至りてエセルの石の傍に居るべし二十我的を射るごさくして其石の側に三本の矢をはなたん二十一しかしてゆきて矢をたづねよさいひて童子をつかはすべし我もし故に童子に視よ矢は汝の此旁にあり其を取よ曰はばんちきたるべしエホバは生く汝安くして何もなかるべければなり二十二されど若し我少年に視よ矢は汝の彼旁にありさいはば汝さるべしエホバ 汝をさらしめたまふなり二三汝さかたれるごころについて願くはエホバ恒に汝と我との間にいませよ二四ダビデ 即ち野にかくれぬ月朔になりければ王坐して食に就く二五即ち王は常のごさく壁によりて座を占むヨナタン立ちあがりアブナサルサウルの側に坐すダビデの座はむなし二六されど其日にはサウル何をも曰さりき其は何事か彼におこりしならん彼さよからす定て潔からずと思ひたればなり二七明日すなはち月の二日にもよびてダビデの座なほ虚しサウル其子ヨナタンにいひけるは何ゆゑにエサイの子は昨日も今日も食に來らざるや二八ヨナタンサウルにこたへけるはダビデ切にベテレヘムにゆかんことを我にこひて曰けるは二九れがはくは我をゆるしてゆかしめよわが家邑にて祭をなすによりわが兄我にきたることを命ぜり故に我もし汝のまへにめぐみをえたるならばれがはくは我をゆるして去しめ兄弟をみることを得さしめよ三是故にかれは王の席に來らざるなり三十サウルヨナタンにむかひて怒りを發しかれにいひけるは汝は曲り且悖れる婦の子なり我あに汝がエサイの子を簡みて汝の身をほづかしめまた汝の母の膚を辱しむることを知らんや三一エサイの子の此世にながらふるあひだは汝さ 汝の位

固くたつを得ず是故に今人をつかはして彼をわが許に引きたれ彼は死ぬべき者なり三三ヨナタン父サウルに對へていひけるは彼なによりて殺さるべきか何をなしたるや三三ヨナタンに對してサウルヨナタンを撃んとて投槍をさしあげたりヨナタンすなはち其父のダビデを殺さんか決しをしれり三四かくてヨナタン烈しく怒りて席を立ち月の二日には食をなさざりき其は其父のダビデをばづかしめしによりてダビデのために憂へたればなり三五翌朝ヨナタン一小童子を従がへダビデと約せし時刻に野にいでゆき三六童にいひけるは走りて我はなつ矢をたづねよ童子はしる時ヨナタン矢を彼のさきに發てり三七童子がヨナタンの發ちたる矢のさきよにいたれる時ヨナタン童子のうしろに呼はりていふ矢は汝のさきにあるにあらずや三八ヨナタンまた童子のうしろによばりていひけるは速かにせよ急げ止まるなれとヨナタンの童子矢をひるひあつめて其主人のまごにかへる三九されど童子は何をも知ざりき只ヨナタンとダビデ其事をしりたるのみ四十かくてヨナタン其武器を童子に授ていひけるは往けこれを邑に攜へよ四一童子すなはち往けり時にダビデ石の傍より立ちあがり地にふして三たび拜せりしかしてふたり互に接吻してたがひに哭くダビデ殊にはあはだし四二ヨナタンダビデにいひけるは安じて往け我ら二人ともにエホバの名に誓ひて願くはエホバ恒に我と汝のあひだに坐し我が子孫と汝の子孫のあひだにいませさいへりとダビデすなはちたちて去るヨナタン邑にいりぬ

第二十一章 一ダビデノアにゆきて祭司アロメレクにいたるアロメレク懼れてダビデを迎へこれにいひけるは汝をんぞ獨にして誰も汝さうもあらざるや二ダビデ祭司アロメレクにいふ王我一の事を命じて我にいふ我が汝を遣はすことこの事おまひわが汝に命じたる所については何を人も人にしらするなわれと我某處に我少者を出をけり三いま何か汝の手にあるや我手に五のパンか或はなにうてもある所を與よ四祭司ダビデに對へていひけるは常のパンはわが手になされど若し少者婦女をだに備みてありしならば聖きパンあるありと五ダビデ祭司に對へていひけるは實にわがいでしより此三日は婦女われらにちかつかず且少者等

の器は潔し又パンは常の物のことし今日器に潔きパンあれば殊に然と六祭司かれに聖きパンを與たり其はかしこに供前のパンの外はパン无りければ即ち其パンは下る日に熱きパンをさよげんさて之をエホバのまへより取されるなり七其日かしこにサウルの僕一人留められてエホバのまへにあり其名をドエガといふエドミ人にしてサウルの牧者の長なり八ダビデまたアロメレクにいふ此に汝の手に槍か劍あらぬか王の事急なるによりて我は刀も武器も携へざりしと九祭司いひけるは汝がエラの谷にて殺したるペリシテ人ゴリアテの劍布に裹みてエホバの後れあり汝もし之をさらんさるもはと取れ此にははかの劍なしダビデいひけるはそれにまさるものなし我にあたへよと十ダビデ其日サウルををそれて立てガテの王アキシのまごころに逃げゆきぬ十一アキシの臣僕アキシに曰けるは此は其地の王ダビデにあらずや人々舞蹈のうちこの人のことなを歌ひあひてサウルは千をうちころしダビデは萬をうちころすといひしにあらすや十二ダビデこの言を心に藏め深くガテの王アキシをおそれ十三人々のまへにて伴て其氣を變じ執はれて狂人のさまをなし門の扉に盡き其淫沫を鬚にながれくらしむ十四アキシ僕にいひけるは汝らの見ること此人は狂人なり何ぞかれを我にひきよたるや十五我なんぞ狂人を須ひんや汝ら此者を引きたりてわがまへに狂しめんとするや此者なんぞ吾が家にいるべけんや

第二十二章 一是故にダビデ其處をいでたちてアドラムの洞穴にのゐる其兄弟および父の家みな聞きおよびて彼處にくだり彼の許にいたる二また惱める人負債者心に嫌ぬ者皆かれの許にあつまりて彼其長さなれりかれさうもにある者はおよそ四百人なり三ダビデ其處よりモアアのミツパにいたりモアアの王にいひけるは神の我をいかになしたまふかを知るまでわがはわが父母をして出て汝らさうもにをらしめよと四つひに彼らをモアアの王のまへにつれきたるかれらダビデが要害になる間王さうもにありき五預言者ガデアダビデにいひけるは要害に住るなかれゆきてエダの地にいたれとダビデゆきてハレテの叢林にいたる六爰にサウルダビデおよびかれさうもなる人々の見露されしを聞けり時にサウルはギベアにあり手に槍

を執て岡の柳の樹の下にをり臣僕ども皆其傍にたてり七サウル側たてる僕にいひけるは汝らベニヤ
 ミン人聞けよエサイの子汝らおのくに田を葡萄園をあたへ汝らおのくに千夫長百夫長をな
 すこそあらんや汝ら皆我に敵して謀り一人もわが子のエサイの子と契約をむすびしを我につげしらす者
 なしまた汝ら一人もわがために憂へずわが子が今日のごまくわが僕をばげまして道に伏て我をおそはしめん
 まするを我につげしらす者なし九時にエドミ人ドエグサウルの僕の中にたち居りしが答へていひけるは我
 エサイの子のノアにゆきてアヒトプの子アロメレクにいたるを見しがアロメレクかれのためにエホバに問
 ひまたかれに食物をあたへメリシテ人ゴリアテの劔をあたへたりと十二王すなはち人をつかはしてアヒト
 プの子祭司アヒメレクおよびその父の家すなはちノアの祭司たる人々を召したればみな王の許にきたる十二
 サウルいひけるは汝アヒトプの子聽よ答へけるは主よ我ここにあり十三サウルかれにいふ汝なんぞエサイ
 の子さうもに我に敵して謀り汝かれにパンと劔をあたへ彼が爲に神に問ひかれをして今日のごまく道に伏て
 われをおそはしめんとするや十四アロメレク王にたへていひけるは汝の臣僕のうち誰かダビデのごまく忠義
 なる彼は王の婿にして親しく汝に見ゆるもの汝の家に尊まるる者にあらずや十五我其時かれのために神に
 問こそを始めしや決してしからずればは王僕およびわが父の全家に何を歸するなかれ其は僕此事に
 ついては多少をいはず何をもしらざればなり十六王いひけるはアヒメレク汝必ず死ぬべし汝の父の全家
 もしかりと十七王旁にたてる前驅の人々にいひけるは身をひるがへしてエホバの祭司を殺せかれらも
 ダビデを合するが故またかれらダビデの逃たるをしりて我に告ざりし故なりと然と王の僕手をいだして
 エホバの祭司を撃つことを好まざれば十八王ドエグにいふ汝身をひるがへして祭司をころせとエドミ人ドエ
 グ乃ち身をひるがへして祭司をうち其日布のエホバを衣たる者八十五人をころせり十九かれまた刃を以て
 祭司の邑ノアを撃ち刃をもて男女童稚嬰孩牛驢馬羊を殺せり二十アヒトプの子アヒメレクの一人の子
 アピヤタルさなづくる者逃れてダビデにはしりしたがふニ二アピヤタルサウルがエホバの祭司を殺したるこ

さをダビデに告しかばニ二ダビデアピヤタルにいふかの日エドミ人ドエグ彼處にをりしければ我かれが必ら
 すサウルにつげんことを知り我汝の父の家の人々の生命を喪へる源由さなれり二三汝我さうもに居れ
 懼るなかれわが生命を求むる者汝の生命をも求むるなり汝我さうもにあらば安全なるべし

第二十三章 一人々ダビデにつげていひけるは視よメリシテ人ケイラを攻め穀場を掠むとニ二ダビデアホバに

問ていひけるは我ゆきて是のメリシテ人を撃つべきかエホバダビデにいひたまひけるは往てメリシテ人を
 うちてケイラを救へ三ダビデの従者かれにいひけるは視よわれら此にエダにあるすら尙ほおそる況やケイラ
 にゆきてメリシテ人の軍にあたるをや四ダビデふたたびエホバに問ひけるにエホバ答ていひたまひける
 は起てケイラにくだれ我メリシテ人を汝の手にわたすべし五ダビデとその従者ケイラにゆきてメリシテ人
 きたりかひ彼らの家畜を奪ひとり大にかれらうちころせりかくダビデケイラの居民をすくふ六アヒメレク
 の子アピヤタルケイラにのがれてダビデにいたれる時其手にエホバを執てくだれり七爰にダビデのケイラに
 いたれる事サウルに聞えたればサウルいふ神かれを我手にわたしたまへり其はかれ門あり關ある邑にいりた
 れば閉こめらるればなり八サウルすなはち民をこまかく軍によびあつめてケイラにくだりてダビデと其従
 者を圍んとす九ダビデはサウルのものを害せん謀るを知りて祭司アピヤタルにいひけるはエホバを持ち
 きたれと十しかしてダビデいひけるはイスラエルの神エホバよ僕たしかにサウルがケイラにきたりてわがた
 めに此邑をほろぼさんと求むるを聞き十一ケイラの人々我をかれの手にわたすならんか僕のきけることく
 サウル下るならんかイスラエルの神エホバよ請ふ僕につげたまへ十二エホバいひたまひけるは彼下るべしと
 十二ダビデいひけるはケイラの人々われをわが従者をサウルの手にわたすならんかエホバいひたまひけるは
 彼らわたすべし十三是においてダビデと其六百百人ばかりの従者起てケイラをいで其ゆきうる所にゆけ
 りダビデのケイラをにげはなれしことサウルに聞えければサウルいづることを止たり十四ダビデは曠野にを
 り要害の地になりまたツアの野にある山に居るサウル恒にかれを尋ねたれども神かれを其手にわたしたまは

ざりき十五ダビデサウルがものれの生命を求めんために出たるを見る時にダビデはツフの野の叢林に在りしが十六サウルの子ヨナタンたちて叢林にいりてダビデにいたり神によりて其力を強うせしめたり十七即ちヨナタンかれにいひけるは懼るゝなかれわが父サウルの手汝にささぐることあらじ汝はイスラエルの王となりん我は汝の次なるへし此事はわが父サウルもしれり十八かくて彼ら二人エホバのまへに契約をむすびダビデは叢林にささまりヨナタンは其家にかへり十九時にツフ人ギベアにのぼりサウルの許にいたりていひけるはダビデは曠野の南にあるハキラの山の叢林の中なる要害に隠れて我らささぐもに在るにあらずや二十今王汝のくだらんとする望のごとく下りたまへ我らはかれを王の手にわたさん二十二サウルいひけるは汝ら我をあはれめば願くは汝等エホバより福祉をえよ二三請ふゆきて尙ほ心を用ひ彼の踪跡ある處を誰がかれを見たるかを見きはめよ其は人我にかれが甚だ機巧く事を爲すを告たれば也二三されば汝ら彼が隠るゝ逃處を皆たしかに見きはめて再び我にきたれ我汝らささぐもにゆかん彼もし其地にあらば我エダの郡中をあまれく尋れて彼を獲ん二十四かれらたちてサウルに先てツフにゆけりダビデは其從者は曠野の南のアラバにあるマオンの野に在る三五斯てサウルと其從者ゆきて彼を尋ぬ人々これをダビデに告げればダビデは下てマオンの野に在るサウル之を聞てマオンの野に至りてダビデを追ふ二六サウルは山の此旁に行ダビデと其從者は山の彼旁に行ダビデは周章てサウルの前を避んさしサウルと其從者はダビデと其從者を圍んで之を取んさす二七時に使者サウルに來て言けるはペリシテ人國をおかす急ぎきたりたまへ二八故にサウルダビデを追ふことを止てかへり往てペリシテ人にあたることをもて人々そのところをセラマレコテ(逃岩)さなづく二九ダビデ其處よりのぼりてエンゲテの要害に在る

第二十四章 一サウルペリシテ人を追ふことをやめて還りし時人々かれにつけていひけるは視よダビデはエンゲテの野にあり二サウルイスラエルの中より選みたる三千の人を率ゆきて野羊の窟にダビデと其從者を尋ぬ三途にて羊の棧にいたるに其處に洞穴ありサウル其足を掩んさていりぬ時にダビデと其從者

洞の隅に居たり四ダビデの從者これにいひけるはエホバが汝に告て視よ我汝の敵を汝の手にわたし汝をして善き見るを彼にまさしめんといひたまひし日は今なりとダビデすなはち起てひそかにサウルの衣の裾をきり五ダビデサウルの衣の裾をきりしによりて後其心みづから責む六ダビデ其從者にいひけるはエホバの膏そそぎし者なるわが主にわが此事をなすをエホバ禁じたまふかれはエホバの膏そそぎし者なればかれに敵してわが手をのぶるは善からず七ダビデ此ことをもつて其從者を止めサウルに撃ちかふる事を容さすサウルたちて洞を出て其道にゆく八ダビデもまた後よりたちて洞をいでサウルのうしろに呼はりて我主王よといふサウル後をかへりみる時ダビデ地にふして拜す九ダビデサウルにいひけるは汝なんぞダビデ汝を害せんことを求むといふ人の言を聽くや十視よ今日汝の目エホバの汝を洞のうちに今日わが手にわたしたまひしことを見たり人々我に汝をころさんことを勧めたれども我汝を惜めり我いひけらくわが主はエホバの膏そそぎし者なればこれに敵してわが手をのぶべからず十一わが父よ視よわが手にある汝の衣の裾を見よわが汝の衣の裾をきりて汝を殺さざるを見ればわが手には悪も罪過もなきことを汝見て知るべし我汝に罪をおかせしことなし然るに汝わが生命をさらんされらふ十二エホバ我と汝の間を審きたまはんエホバわがために汝に報いたまふべし然らばわが手は汝に加へざるべし十三古への諺にいふごとく悪は悪人よりいづされざわが手は汝にくはへざるべし十四イスラエルの王は誰を趕んさて出たるや汝たれを追ふや死たる犬をおひ一の蚤をおふなり十五わがはくはエホバ審判者となりて我と汝のあひだをさばきかつ見てわが訟を理し我を汝の手よりすくひいだしたまはんことを十六ダビデこれらの言をサウルに語りてへしききサウルいひけるはわが子ダビデよ是は汝の聲なるかサウル聲をあげて哭きぬ十七しかしてダビデにいひけるは汝は我よりも正し我は汝に悪をむくゆるに汝は我に善をむくゆ十八汝今日いかに汝が我に善くなすかを明かにせりエホバ我を爾の手にわたしたまひしに爾我をころさざりしなり十九人もし其敵にあはざれば安らかに去しむべけん爾が今日我になしたる事のためにエホバ爾に善をむくいたまふべし二十視よ我汝が

必ず王ならんことを知りまたイスラエルの王國の爾の手によりて堅くたゞんことをしる 二 今爾エホバをさして我にわが後にてわが子孫を斷すわが名をわが父の家に滅せざらんことを誓へ 三 二ダビデすなほちサウルにちかふ是においてサウルは家にかへりダビデを其從者は要害にのぼれり

第二十五章 爰にサムエル死にしかばイスラエル人皆あつまりて之をかなしみラマにあるその家にてこれを葬むれりダビデたちてパランの野にくだるニマオンに一箇の人あり其所有はカルメルにあり其人甚だ大いなる者にして三千の羊と一千の山羊をもちしがカルメルにて羊の毛を剪り居たり 三 其人の名はナバル さいひ其妻の名はアピガルさいふアピガルは賢く顔美き婦なりされど其夫は剛愎にして其爲すこと悪かりきかれはカレブの人なり四ダビデ野においてナバルが其羊の毛を剪りたるを聞き五ダビデ十人の少者を遣はすダビデ其少者にいひけるはカルメルにのぼりナバルにいたりわが名をもてかれに安否をさひ六 我爾のごさくいへ願くは壽ながかれ爾平安なれ爾の家やすらかなれ爾が有ることこの物みなやすらかなれ七 我爾が羊毛を剪せざるを聞き爾の牧羊者は我らさうもにありしが我らこれを害せざりきまたかれらにカルメルにありしあひだかれらの物何も失たることなし八 爾の少者に問へかれら爾につげん願くは少者をして爾のまへに恩をえせしめ我ら吉日に來る請ふ爾の手にあることこの物を爾の僕らちよび爾の子ダビデにあたへ九ダビデの少者いたりダビデの名をもつて是らのことばの如くナバルに語りてやめり十ナバルダビデの僕にこたへていひけるはダビデは誰なるエサイの子は誰なる此頃は主人をすて遁逃るる僕もほし十一 我あにわがパンと水もよびわが毛羊をさる者のために殺したる肉をさりて何處よりか知れざるころの人々にあたふべけんや十二ダビデの少者ふりかへりて其道に就き歸りきたりて此等の言のごさくダビデに告ぐ十三 是においてダビデ其從者に爾らものく劍を帶ふと言ければ各劍をおぶダビデもまた劍をおぶ而して四百人ばかりダビデにしたがひて上り二百人は輻重のころに止れり十四 時にひさりの少者ナバルの妻アピガルにつけていひけるは視よダビデ野より使者をおくりて我らの主人を祝したるに主人かれらを言れり

十五 されどかの人々はわれらに甚だ善くなし我らは害をかうむらずまた我ら野にありし時かれらさうもになるあひだはなにをも失なはざりき十六 我らが羊をかひて彼らさうもにありしあひだ彼らは日夜われらが増えあれり十七 されば爾今しりてなにをなさんかを考ふべし其はわれらの主人ちよび主人の全家に定めて善きたるべければなり主人は邪寃なる者にして語ることをえず十八 アピガルいそぎパン二百、酒の革囊二、既に調へたる羊五、烘麥五セア、乾葡萄百球、乾無花果の團塊二百を取て驢馬にのせ十九 其少者にいひけるはわが先に進め視よ 我爾らの後にゆく然る其夫ナバルには告げざりき二十 アピガル驢馬にのりて山の僻處にくだれる時視よダビデを其從者かれにむかひてくだりければかれ其人々にあふ二一ダビデかつていひけるは誠にわれ徒に此人の野にて有る物をみなまもりてその物をして何もうせざらしめたりかれは惡をもてわが善にむくゆ二三 ねがはくは神ダビデの敵にかくしまた重れてかくなしたまへ 明晨までに我はナバルに屬する總ての物の中ひさりの男をもつてささるべし二三 アピガルダビデを視しとき急ぎ驢馬より降りダビデのまへに地に俯して拜し二四 其足もさふしていひけるはわが主よ此答を我に歸したまへ但し婢をして爾の耳にいふことを得さしめ婢のこさばを聽たまへ 二五 ねがはくはわが主よこの邪なる人ナバル(愚)の事を意に介むるかかれ其はかれは其名のごさくなればなりかれの名はナバルにしてかれは愚なりわれなんちの婢はわが主のつかはせし少ものを見ざりき二六 さればわがしゆよエホバはいくまたなんちのたましひはいくエホバなんちのきたりて血をながした爾がみづから仇をむくゆるを阻めたまへりねがはくは爾の敵たるものもよびわが主に害をくはへんさする者はナバルのごさくなれ 二七 さて仕女がわが主にもちきたりしこの禮物をねがはくはわが主の足跡にあゆむ少者になてまつらしめたまへ 二八 請ふ婢の過をゆるしたまへエホバ必ずわが主のために堅き家を立たまはん是はわが主エホバの軍に戦ふにより又世にいでるは爾の神エホバさうもに生命の包裏の中に包みあり爾の敵の生命は投石器のうちより投すつることさくエホバ

これをなげすてたまはん三十エホバその爾につきて語りたまひし諸の善き事をわが主になして爾をイスラエルの主宰に命じたまはん時にいたりて三二爾の故なくして血をながしたることも又わが主のみづから其仇をむくいし事も爾の憂さなることなくまたわが主の心の責さなることなかるべし但しエホバのわが主に善くなしたまふ時にいたらばれがはくは婢を憶たまへ三三ダビデアビガルにいふ今日汝をつかはして我をむかへしめたまふイスラエルの神エホバは頌美べきかな三三また汝の智慧はほむべきかな又汝はほむべきかな汝今日わがきたりて血をながし自ら仇をむくゆるを止めたり三四わが汝を害するを阻めたまひしイスラエルの神エホバは生く誠さにもし汝いそぎて我を來り迎はずば必ず翌朝までにナバルの所にひさりの男ものこらざりしならん三三ダビデアビガルの携へきたりし物を其手より受てかれにいひけるは安かに汝の家にいへりのばれ視よわれ汝の言をききいれて汝の顔を立たり三六わがアビガルナバルにいたりて視にかれは家に酒宴を設け居たり王の酒宴のごとしナバルの心これがために樂みて甚だしく酔たればアビガル多少をいはす何をも翌朝までかれにつげざりき三七朝にいたりナバルの酒のさめたる時妻かれに是等の事をつけたるに彼の心そのうちに死て其身石のごさくなりぬ三八十日ばかりありてエホバナバルを撃ちたまひければ死り三九ダビデアビガルの死たるを聞いていひけるはエホバは頌美べきかなエホバわが蒙むりたる恥辱の訟を理してナバルにむくい僕を阻めて悪をおこなはざらしめたまふ其はエホバナバルの悪を其首に歸し賜へばなりと爰にダビデアビガルの妻にめくらんさて人を遣はしてこれさかたらはしむ四〇ダビデの僕カルメルに在るアビガルの許にいたりてこれにかたりいひけるはダビデアを妻にめくらんさて我らを汝に遣はすこ四一アビガルたちて地にふして拜しいひけるは視よ婢はわが主の僕等の足をあらふ仕女なりと四二アビガルいそぎたちて驢馬に乗り五人の侍女さきもにダビデの使者にしたがひゆきてダビデの妻さなる四三ダビデまたエズレルのアヒノアムを娶れりかれら二人ダビデの妻さなる四四但しサウルはダビデの妻なりし其女ミカルをガリムの人なるライシの子バルテにあたへたり

第二十六章 シフ人ギベアにきたりサウルの許にいたりていひけるはダビデアは曠野のまへなるハキラの山にかくれをるにあらずやニサウルすなほち起ちシフの野にダビデアを尋ねん三イスラエルの中より選みたる三千の人をしてシフの野にくだる三サウルは曠野のまへなるハキラの山において路のほざりに陣を取るダビデアは曠野に居てサウルのものをおふて曠野にきたるをささりければ四ダビデア斥候を出してサウルの誠に來しをしれり五三三においてダビデアたちてサウルの陣をさるるころにいたりサウルおよび其軍の長子の子アブナルの寢たるところを見たりすなほちサウルは車營の中に寢ぬ民其まほりに陣をはれり六ダビデア答へてヘテ人アヒメレクおよびセルヤ此子にしてヨアブの兄弟なるアビシヤイにいひけるは誰が我さうもにサウルの陣にくだらんかアビシヤイいふ我汝さうもにくだらん七ダビデアアビシヤイすなほち夜にいたりて民の所にいたるに視よサウルは車營のうちに臥寢し其槍地にさして枕邊にありアブナルは民は其まほりに寢たり八アビシヤイダビデアにいひけるは神今日爾の敵を爾の手にわたしたまふ請ふいま我に槍をもてかれを一度地にさしおはさしめよ再びするにおよばじ九ダビデアアビシヤイにいふ彼をころすなかれ誰かエホバの膏そよぎし者に敵して其手をのべて罪なからんや十ダビデアまたいひけるはエホバは生くエホバかれを撃たまはんあるひはその死ぬる日來らんあるひは戦ひにくだりて死うせん十一わがエホバのあぶらそよぎしものに敵して手をのぶるこはさばはめて善らすエホバ禁じたまふされごいま請ふ爾そのまくらもこの槍さ水の瓶をされしとして我らさりゆかん十二ダビデアサウルの枕邊より槍と水の瓶を取てかれらさりゆきしが誰も見ず誰もしらす誰も目を醒さざりき其はかれら皆眠り居たればなり即ちエホバかれらをつかへしめたまふ十三かくてダビデアは彼旁にわたりて遙に山の頂にたり彼を此のへだより大いなり十四ダビデア民と子の子アブナルによばざりいひけるはアブナルよ爾こたへざるかアブナルこたへていふ王をよぶ爾はたれなるや十五ダビデアアブナルにいひけるは爾は勇士ならずやイスラエルの中にて誰か爾に如ものあらんしかるに爾なんぞ爾の主なる王をまもらざるや民のひさり爾の主なる王を殺さんさていりぬ十六爾がなせ

る此事このことよからずエホバは生いくまんぢらの罪死つみしにあたり爾らエホバの膏あぶらそそぎし爾らの主しよをまもらざればあ
 り今王の槍やりと王の枕邊まくらもとにありし水の瓶びんはいづくにあるかを見よ十七サウルダビデの聲こゑをしりていひけるは
 わが子ダビデよ是は爾の聲なるかダビデいひけるは王わが主よわが聲なり十八ダビデまたいひけるはわが主
 なにゆゑに斯くその僕をおふや我なにをなせしや何の悪き事わが手にあるや十九王わが主よ請こふいま僕しもべの
 音を聴きたまへ若しエホバ汝を我に敵せしめたまふならばわがはくはエホバ禮物そなへものをうけたまへされど若
 し人ならばわがはくは其人々エホバのまへのるはれよ其は彼等爾ゆきて他の神につかへよといひて今
 日我を追ひエホバの産業さんぎふに連なることをえざらしむるが故なり二十わがはくはわが血をしてエホバのまへな
 はなれて地にちりしむるをわかれその人の山にて鷓鴣しよこをおふがごとくイスラエルの王一の蛋たまごをたづねにい
 たればなり二サウルいひけるは我罪をおかせりわが子ダビデよ歸れわが生命今日爾の目に實みに見なされた
 る故により我われかされて爾に害を加へざるべし嗚呼あゝわが愚なることをなして甚だしく過あやまり二二ダビデこたへ
 ていひけるは王よ槍を視よ請こふひさりの少者をしてわたりてこれを取しめよ二三わがはくはエホバの
 其義そのぎと眞實しんじつとしたがひて報むかひたまへ其はエホバ今日爾をわが手にわたしたまひしに我エホバの受あぶら膏そ
 者に敵してわが手をおふることをせざればなり二四爾の生命を今日わがおもんぜし如くわがはくはエホバわ
 が生命をおもんじて 諸の艱難かんなんのうちより我をすくひいだしたまへ二五サウルダビデにいひけるはわが子ダ
 ビデよ爾はほむべきかな爾 大なる事を爲さん亦かならず勝をえんさしかしてダビデは其道そのみちにさりサウル
 はおのれの所にかへれり

第二十七章 一ダビデ 心の中にいひけるは是のごとくば我早晚サウルの手にほろびん速にペリシテ人の
 地ちにのがるゝにまさることあらす然らばサウルかされて我をイスラエルの四方の境にたづぬることをやめて
 われ
 我かれの手をのがれん二ダビデたちておのれさうもなる六百人のものさうもにわたりてガテの王マオクの
 子アキシにいたる三ダビデと其從者ガテにてアキシさうもに住ておのく其家族さうもにおるダビデはそ

の二人の妻すなはちエズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりしアビガルさうもにあり四ダビデ
 のガテにげしこさサウルにきこえければサウルかされて彼をたづねざりき五こくにダビデアキシにいひけ
 るは我もし爾のまへに恩を得たるならばわがはくは郷里にある邑のうちにて一のさうもを我にあたへて其處
 にすむことを得さしめよ僕なんぞ爾さうもに王城にすむべけんや六アキシ其日チクラガをわかれにあたへた
 り是故にチクラガは今日にいたるまでユダの王に屬す七ダビデのペリシテ人の國にわたりし日數は一年と四箇
 月なりき八ダビデ其從者と共にのぼりゲシユル人ゲゼリ人アマレク人を襲ふたり昔よりは等はシユルに
 いたる地にすみてエジプトの地にまでおよべり九ダビデ其地をうちて男をも女をも生し存さす羊と牛と駱駝
 と衣服をとりて還りてアキシに至る十アキシいひけるは爾ら今日何地を襲ひしやダビデいひけるはユダの南
 西エラメルみなんの南とケニ人の南をおかせり十一ダビデ 男も女も生存らしめすして一人をもガテにひきゆか
 ざりき其はダビデ 恐おそくはかれらダビデかくなせりさいひて我等の事を告んさいひたればなりダビデペリシ
 テ人の地にすめるあひだは其なすこころ常にかくのごとくなりき 十二アキシダビデを信じていひけるは彼は
 其民イスラエルをして全くおのれを悪ましむされば永くわが僕なるべし

第二十八章 一其頃ペリシテ人イスラエルと戦はんさて軍のために軍勢を集めたればアキシダビデにいひ
 けるは 爾 明かにこれをしれ 爾さ爾の從者我さうもに出で軍にくはざるべし二ダビデアキシにいひけ
 るはされば 爾 僕のなさんさころをしるべし三アキシダビデにさらば我爾を永くわが身をまもる者さな
 さんさいへり三サムエルすでに死たればイスラエルみなこれをかなしみてこれをそのまちらマにはうむれり
 またサウルは口寄者くちよせと卜筮師うらなひしを其地よりおひいだせり四ペリシテ人あつまりきたりてシユテムに陣をさりけ
 ればサウルイスラエルを悉くあつめてギルボアに陣をされり五サウルペリシテ人の軍を見しきおそれて
 其心 大いにふるへたり六サウルエホバに問ひけるにエホバ 對たまはず夢によりてもウリムによりても預
 言者によりてもこたへたまはず七サウル僕等にいひけるは口寄の婦を求めわれそのさうもにゆきてこれに

尋れんと僕等かれにいひけるは視よエンドルに口寄の婦ありハサウル形を變へて他の衣服を着二人の人を
 さもあひてゆき彼等夜の間に其婦の所にいたるサウルいひけるは請ふわがために口寄の術をおこなひてわ
 が爾に言ふ人をわれに呼ぶこせ九婦かれにいひけるはなんぢサウルのなしたる事すなはち如何にかれが口寄
 者ト筮師を國より斷さりたるを知る爾なんぞ我を死しめんとてわが生命を亡す謀計をなすやサウルエ
 ホバを指てかれに誓ひいひけるはエホバは生く此事のためになんぢ罪にあふこさあらじ十一婦いひけるは誰
 を我なんぢに呼起すべきかサウルいふサムエルをよびおこせ十二婦サムエルを見て大なる聲にてさけびい
 だせりしかして婦サムルにいひけるは爾なにゆゑに我を欺きしや爾はすあはちサウルなり十三王かれにい
 ひけるは恐るゝなれ爾なにを見しや婦サムルにいひけるは我神の地よりのぼるを見たり十四サウルかれ
 にいひけるは其形容は如何彼いひけるは一人の老翁のぼる其人明衣を衣たりサウル其人のサムエルなるをし
 りて地にふして拜せり十五サムエルサウルにいひけるは爾なんぞ我をよびおこして我をわづらはすやサウル
 こたへけるは我いたく憐むべりシテ人我にむかひて軍をおこし又神我をばあれて預言者によりても又夢に
 よりてもふたふび我にこたへたまはずこのゆゑに我なすべき事を爾にまなばんとて爾を呼り十六サムエルい
 ひけるはエホバ爾をばなれて爾の敵となりたまふに爾なんぞ我にさふや十七エホバわれをもて語りたまひ
 しことをみづから行てエホバ國を爾の手より割きはなち爾の隣人ダビデにあたへたまふ十八爾エホバ
 の言にしたがはず其烈しき怒をアマレクにもらさざりしによりてエホバ此事を今日爾になしたまふ十九エ
 ホバイスラエルをも爾さうもにべりシテ人の手にわたしたまふべし明日爾と爾の子等我さうもなるべしまた
 イスラエルの陣營をもエホバべりシテ人の手にわたしたまはんぞ二十サウル直ちに地に伸びたふれサムエル
 の言のため痛くおそれ又其力を失へり其はかれ其一日一夜食物食ざりければなり二一の婦サムルに
 いたり其痛く慄くを見てこれにいひけるは視よ仕女爾の言をきくわが生命をかけて爾が我にいひし言にし
 たがへり二三されど請ふ爾も仕女の言を聽て我をして一口のパンを爾のまへにそなへしめよしかして爾くら

ひて途に就く時に力を得よ二三されどサウル否みて我は食はじさいひしを其僕および婦強ければ其言
 をきういれて地よりたちあがり床のうへに坐せり二四婦の家に肥たる糧ありしかば急ぎて之を殺したる粉を
 さり擗て酔いれぬパンを炊き二五サウルのまへに其僕等のまへに持ちきたりければ彼等くらひて立ちあが
 り其夜のうちにされり

第二十九章 爰にべりシテ人其軍をこころよくアマレクにあつむイスラエルはエズレルにある泉水の傍
 に陣をさるニべりシテ人の君等あるひは百人或は千人をひきめて進みダビデと其從者はアキシさうも
 に其後にすむ三べりシテ人の諸伯いひけるは是等のへブル人は何なるやアキシべりシテ人の諸伯にいひ
 けるは此はイスラエルの王サウルの僕ダビデにあらずやかれ此日ころ此年ころ我さうもにをりしがその逃
 げおちし日より今日にいたるまで我かれの身に咎あるを見ず四べりシテ人の諸伯これを怒る即ちべりシテ
 人の諸伯彼にいひけるは此人をかへらしめて爾が之をおきし其所にふたふびいたらしめよ彼は我らさう
 もに戦ひにくだるべからず然ば彼戦争においてわれらの敵ならざるべしかれ其主と和がんとせば何をも
 てすべきやこの人々の首級をもてすべきにあらずや五是はかつて人々が舞蹈の中にて歌ひあひサウルは千を
 うちころしダビデは萬をうちころすさいひたるダビデにあらずや六アキシダビデをよびてこれにいひけるは
 エホバは生くまことになんぢは正し爾の我さうもに陣營に出入するはわが目には善き見ゆ其は爾が我に來り
 し日より今日にいたるまで我爾の身に惡き事あるを見ざればなり然と諸伯の目には爾よからず七されば今
 かへりて安かにゆきべりシテ人の諸伯の目に惡く見ゆることをなすなかれ八ダビデアキシにいひけるは我何
 をなせしやわが爾のまへに出し日より今日までに爾何を僕の身に見たれば我ゆきてわが主なるわうの敵
 さたふかふこさをえざるぞ九アキシこたへてダビデにいひけるは我爾のわが目には神の使のごさく善きを
 するされどべりシテ人の諸伯かれは我らさうもに戦にのぼるべからずさいへり十されば爾および爾の主の
 僕の爾さうもにきたれる者明朝夙く起ふ爾ら朝はやくおきて夜のあくるに及ばざるべし十一是をも

てダビデと其從者ハリシテ人の地にかへらん朝はやく起てされりしかしてハリシテ人はエズレルにのぼれり

第三十章 一ダビデと其從者第三日にチクラグにいたるにアマレク人すでに南の地をチクラグを侵したりかれらチクラグを撃ち火をもて之を燬き二其中に居りし婦女を擄にし老たるをも若きをも一人も殺さずして之をひきて其途にもむけり三ダビデと其從者邑にいたりて視に邑は火に燬けその妻と男子女子は擄にせられたり四ダビデおよびこれさうもにある民聲をあげて哭き終に哭く力もなきにいたり五ダビデのふたりは妻すなはちエズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻ありしアビガルも虜にせられたり六時にダビデ大いに心を苦めたり其は民のく其男子女子のために氣をいらだてダビデを石にて撃んさいひたればなりされざダビデ其神エホバによりてものをあげませり七ダビデアヒメレクの子祭司アビヤタルにいひけるは請ふエホバを我にもちきたれアビヤタルエホバをダビデにもちきたる人ダビデエホバに問ていひけるは我此軍の後を追ふべきや我これに追つくことをえんかエホバかれにこたへたまはく追ふべし爾かならず追つてたしかに取らざることをえん九ダビデおよびこれさうもなる六百人の者ゆきてベソル川にいたり後このこれる者はこゝにさうまる十即ちダビデ四百人をひきめて追ゆきしが憊れてベソル川をわたるとあたはざる者二百人はさうまれり十一衆人野にて一人のエジプト人を見これをダビデにひきよたりてこれに食物をあたへれば食へりまたこれに水をのませたり十二すなはち一段の乾無花果と二球の乾葡萄をこれにあたへたり彼くらひて其氣ふたうび爽かになれりかれは三日三夜物をもくはず水をものまざりしなり十三ダビデかれにいひけるは爾は誰の人なる爾はいづくの者なるやかれいひけるは我はエジプトの少者にて一人のアマレク人の僕なり三日まへに我疾にかうりしゆへにわが主人我をすてたり十四我らクレテ人の南にユダの地とカレブの南をおかしま火をもてチクラグをやりけり十五ダビデかれにいひけるは爾我を此軍にみちびきくだるやかれいひけるは爾我をこらさすまた我をわが主人の手にわたさざるを神をさして

われに警へ我爾を此軍にみちびきくだらん十六かれダビデをみちびきくだりしが視よ彼等はハリシテ人の地をユダの地より奪ひたる諸の大きいなる掠取物のためによるこびて飲食し踊りつゞ地にあまれく散りひるかりて居る十七ダビデ暮あひより次日の晩にいたるまでかれらを撃しかば駱駝にのりて逃げたる四百人の少者の外は一人ものかれたるもの无りき十八ダビデはすべてアマレク人の奪ひたる物を取りもせり其二人の妻もダビデせりもせり十九小きも大なるも男子も女子も掠取物もすべてアマレク人の奪りし物は一も失はずダビデこゝろよく取かへせり二十ダビデまた凡の羊と牛をされり人々この家畜をそのまへに驅きたり是はダビデの掠取物なりさいへり二一かくてダビデかの憊れてダビデにしたがひ得ずしてベソル川のほとりに止まりし二百人の者のさうろにいたるに彼らダビデをいでむかへまたダビデさうもなる民をいでむかふダビデかの民にちかづきてその安否をたづぬニダビデさうもにゆきし人々の中の悪く邪なる者みなこたへていひけるは彼等は我らさうもにゆかざりければ我らこれに取りもごしたる掠取物をわけあたふべからず唯むのくその妻子をあたへてこれをみちびきさらしめんニダビデ言けるはわが兄弟よエホバ我らをまもり我らにせめきたりし軍を我らの手にわたしたまひたれば爾らエホバのわれらにたまひし物をしかりしは宜からず二四誰か爾らにかうることをゆるさんや戦ひにくだりし者の取る分のごとく輻重のかたばらに止まりし者の取る分もまた然あるべし共にひさしく取るべし二五この日よりのちダビデこれをイスラエルの法となし例となせり其事今日にいたるニ六ダビデチクラグにいたりて其掠取物をユダの長老なる其朋友にわかちむくりて曰しめけるは是はエホバの敵よりせりて爾らにおくる饋物なりニ七ベテルに在るもの南のラモテに在るものヤツテルに在る者ニ八アロエルに在る者シフモテに在るものエシテモに在るものニ九ラカルに在るものエラメル人の邑に在るものタニ人の邑に在るもの三十ホルマに在るものコラシヤンに在るものアタクに在るもの三一ヘブロンに在るものおよびすべてダビデが其從者さうもに毎にゆきし所にこれをわかちむくれり

第三十一章 一 べリシテ人イスラエルに戦ふイスラエルの人々べリシテ人のまへより逃げ負傷者ギルボア山に斃れたりニべリシテ人サウルと其子等に攻よりべリシテ人サウルの子ヨナタンアビナダブおよびマルキシエアを殺したりニ 戦はげしくサウルにせまりて射手の者サウルを射さめければ彼痛く射手の者のために苦しめり四サウル武器を執る者にいひけるは爾の劍を抜き其をもて我を刺さば恐らくは是等の割禮なき者きたりて我を刺し我をばづかしめん然も武器をさるもの痛くおそれて肯せざればサウル劍をさりて其上に伏したり五 武器を執るものサウルの死たるを見ておのれも劍の上にもふしてかれさるもに死り六 小サウルと其三人の子およびサウルの武器をさるもの並に其従者みな此日俱に死り七 イスラエルの人々の谷の對向に在るもの及びヨルダンの對面に在るものイスラエルの人々の逃るを見サウルと其子等の死るをみて諸邑を棄て逃げればべリシテ人きたりて其中に在る八 明日べリシテ人戦没せる者を剝んきてきたりサウルと其三人の子のギルボア山にたふれるを見たり九 彼等すなはちサウルの首を斬り其鎧甲をはぎさりべリシテ人の地の四方につかはして此好報を其偶像の家および民の中につげしむ十 またかれら其鎧甲をアシタロテの家におき其體をベテシヤンの城垣に釘けたり十一 ヤベシギレアデの人々べリシテ人のサウルになしたる事を聞きしかば十二 勇士みなこり終夜ゆきてサウルの體と其子等の體をベテシヤンの城垣より取りおろしヤベシにいたりて之を其處に焚き十三 其骨をさりてヤベシの柳樹の下にはうむり七日のあひだ斷食せり

撒母耳前書終

撒母耳後書

第一章 一 サウルの死後ダビデアマレク人を撃てかへりチクラグに二日とまりけるが二 第三日におよびて一個の人其衣を裂き頭に土をかむりて陣營より即ちサウルの所より來りダビデアの許にいたり地にふして拜せり三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

なり是はヤシル書に記さる十九イスラエルと汝の榮耀は汝の崇 耶に殺さる嗚呼勇士は介れたるかな
 二十 此事をガテに告るなけれアシケロンの邑に傳るなけれ恐くはバリステ人の女等 喜ん恐くは判禮を受
 ざる者の女等樂み祝はんニニギルボアの山に願は汝の上に雨露降ることあらざれ亦 供物の田圃もあ
 らざれ其は彼處に勇士の干棄らるればなり即ちサウルの干膏を沃すして彼處に棄らるニニ殺せし者の血
 をのみすしてヨナタンの弓は退かず勇士の脂を食すしてサウルの劔は空く歸らずニニサウルとヨナタン
 は愛らしく樂げにして生死ともに離れ二人は驚よりも捷く獅子よりも強かりきニ四イスラエルの女等よサ
 ウルのために哀げサウルは練き衣をもて汝等を華麗に粧ひ金の飾を汝等の衣に著たりニ五 嗚呼勇士は
 戦の中に介たるかヨナタン 汝は崇 耶に殺されぬニ六 兄弟ヨナタンよ 我汝のために悲慟む汝は
 大に我に樂き者なりき汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず婦の愛にも勝りたりニ七 嗚呼勇士は介たるかな
 戦の具は失せたるかな

第二章 此のちダビデエホバに問ていひけるは我ユダのひさつの邑にのぼるべきやエホバかれにいひたま
 ひけるはのほれ、ダビデいひけるは何處にのぼるべきやエホバいひたまひけるはヘブロンにのぼるべしニ
 ダビデすなほち彼處にのぼれりその二人の妻エズレル人アヒンアムおよびカルメル人ナバルの妻なりしア
 ビガルもともにのぼれりミダビデ其ものれさすもにありし從者其家族をこまなく將のぼりければ皆ヘブ
 ロンの諸邑にすめり四時にユダの人々きたり彼處にてダビデに膏をそそぎてユダの家の王となせり人々ダビ
 デにつけてサウルを葬りしはアベシギレアデの人なりさいひければ五ダビデ使者をヤバシギレアデの人にお
 くりてこれにいひけるは汝らこの厚意を汝らの主サウルにあらはしてかれを葬りたればは汝ら
 エホバより福祉をえよ六 汝らにはエホバ恩寵を直實を汝等にしめしたまへ汝らこの事をなしたるにより我
 亦汝らに此恩恵をしめすなり七 汝ら手をつよくして勇ましくなれ汝らの主サウルは死たり又ユダの
 家我に膏をそそぎて我をかれらの王となしたればなり八 爰にサウルの軍の長子アブナサウルの

子イシホセテを取りてこれをマハナイムにみちびきわたり九ギレアデとアシユリ人とエズレルとエフライム
 とニニヤミンとイスラエルの衆の王となせり十サウルの子イシホセテはイスラエルの王となりし時四十歳
 にして二年のあひだ位にありしがユダの家はダビデにしたがへり十一ダビデがヘブロンにありてユダの
 家の王たりし日數は七年と六ヶ月なりき十二子アブナサウルの子なるイシホセテの臣僕等
 マハナイムを出てギベオンに至れり十三セルヤの子ヨアブとダビデの臣僕もいでゆけり彼らギベオンの池の
 傍にて出會一方は池の此時に一方は池の彼時に座す十四アブナサウルの子イシホセテに屬するベニヤミンの人
 て我らのまへに戯れしめんヨアブいひけるは起しめんさ十五サウルの子イシホセテに屬するベニヤミンの人
 其數十二人およびダビデの臣僕十二人起て前み十六ものく其敵手の首を執へて劔を其敵手の脊に刺し斯
 して彼等俱に斃れたり是故に其處はヘルカテハヅリム(利劔の地)と稱らる即ちギベオンにあり十七 此日
 戦甚だ烈しくしてアブナサウルの子イシホセテの臣僕のみへに敗る十八 其處にセルヤの三人の子
 ヨアブ、アビシヤイ、アサヘル居たりしがアサヘルは疾足なること野にをる鹿のごとくなりき十九アサヘル
 アブナサウルの後を追ひけるが行に右左にまがらずアブナサウルの後をしたふニニアブナサウルの後を顧みていふ汝は
 アサヘルなるか彼しかりき答ふニニアブナサウルの後をいひけるは汝の右の左に轉向て少者の一人を擒へて其戎
 服を取れ然らばアサヘルアブナサウルの後をいひけるは汝の右の左に轉向て少者の一人を擒へて其戎
 汝我を追ふことをやめて外に向へ我なんぞ汝を地に撃ち介すべけんや然せば我いひてわが面を汝の兄ヨア
 ブにむくべけんさニニ然どもかれ外にむかふことをいひなむによりアブナサウルの後を追きたりしがギベオンの野の道傍にギア
 ンに槍の背後にいでたりかれ其處にたふれて立時に死り斯しかばアサヘルの介れて死るること来る者
 は皆たちごまれりニ四されどヨアブとアビシヤイはアブナサウルの後を追きたりしがギベオンの野の道傍にギア
 の前にあるアンマの山にいたれる時日暮ぬニ五 ベニヤミンの子孫アブナサウルの子にたがひて集まり一隊となりて
 ひさつの山の頂にたてりニ六 爰にアブナサウルの子イシホセテの孫アブナサウルの子にたがひて集まり一隊となりて
 其

終りには怨恨を結ぶにいたるを知らざるや、汝何時まで民に其兄弟を追ふことをやめてかへることを命ぜざるや。ニセヨアブイひけるは、神は活く若し汝が言出さざりしならば、民はものゝく其兄弟を追はずして、今晨のうちにさりゆきしならん。ニセヨアブを刺しつけ、民皆たちごまりて、再イスラエルの後を追はず。またかされて戦はざりき。ニセヨアブと其従者、終夜アラバを經ゆきて、ヨルダンを濟り、ビテロンを過りて、マハナイムにいたれり。三十三ヨアブアブを追ふことをやめて、歸り民をこましく集めたるに、ダビデの臣僕十九人、アサヘル、缺てをらざりき。三十一されど、ダビデの臣僕は、ベニヤミンとアブアブの従者三百六十人を、撃ち殺せり。三十二人々アサヘルを取りあげて、ベテレヘムにある其父の墓に葬る。ヨアブと其従者は、終夜ゆきて、黎明にヘブロンにいたれり。

第三章 一 サウルの家とダビデの家の間の戦争久しかりしが、ダビデは益々強くなり、サウルの家はますます弱くなれり。ニセヨアブに、ヘブロンにてダビデに、男子等生る其首出の子は、アムノンといひて、エズレル人アヒノアムより生る。三 其次は、ギレアドといひて、カルメル人ナバルの妻なりし、アビガルより生る。第三は、アブサロムといひて、ゲシユルの王タルマイの女子マカルの子なり。第四は、アドニヤといひて、ハギテの子なり。第五は、シバテヤといひて、アビタルの子なり。第六は、イテレヤムといひて、ダビデの妻エグラの子なり。是等の子へ、ヘブロンにてダビデに生る。六 サウルの家とダビデの家の間に、戦争ありし間、アブアブは堅くサウルの家を、荷擔り、七 嚮にサウル一人の妾を有り、其名をリツバといふ。アヤの女なり、爰にイシボセテアアブに、いひけるは、汝何ぞわが父の妾に通じたるや。八 アアブ、甚しくイシボセテの言を怒りて、いひけるは、我今日、汝の父サウルの家と、その兄弟、そのの朋友に、厚意をあらはし、汝をダビデの手にわたさざるに、汝今日、婦人の過を擧て、我を責む。我めに、犬の首ならんや。ユダにくみする者ならんや。九 神アブアブに、斯なしまたかされて、斯なしたまへ。エホバのダビデに、誓ひたまひしごとく、我れに、然なすべし。十 即ち國をサウルの家より、移し、ダビデの位を、ダンより、ベエルシバにいたるまで、イスラエルとユダの上にて、十一 イシボセテアアブを、恐れたれば、かされて、一言もこれに、こまふ

るをえざりき。十二 アアブの代に、使者をダビデにつかはして、いひけるは、此地は誰の所有なるや。又いひけるは、汝我と契約を爲せ。我力を添へて、イスラエルを悉く、汝を歸せしめん。十三 ダビデいひけるは、善し。我汝と契約をなさん。但し、我一の事を、汝に索む。即ち、汝來りて、わが面を觀る時、先づサウルの女、ミカルを携きたらざれば、我面を觀るを得じ。十四 ダビデ使者をサウルの子、イシボセテに遣はして、いひけるは、わがベリシテ人の陽皮、一百を以て、聘たるわが妻、ミカルを我に交すべし。十五 イシボセテ人をつかはして、かれを其夫、ライシの子、バルテより、取しかば、十六 其夫、哭つゝ歩みて、其後に、したがひて、俱に、バホルムにいたりしが、アアブかれに、歸り、往けといひければ、すなはち、歸りぬ。十七 アアブイスラエルの長老等と語りて、いひけるは、汝ら前より、ダビデを、汝らの王と、なさん。こまを求め、居たり。十八 されば、今これを、あすべし。其は、エホバ、ダビデに、付て語りて、我わが、僕、ダビデの手を以て、わが民、イスラエルを、ベリシテ人の手より、またその、諸の敵の手より、救ひいださん。さいひたまひたれば、なり。十九 アアブ亦、ベニヤミンの耳に、語りしかして、アアブ自ら、イスラエルも、よび、ベニヤミンの全家の善さ、もふ所を、ヘブロンにて、ダビデの耳に、告げん。さて、往り、二十 すなはち、アアブ二十人、をしたがへて、ヘブロンに、ゆきて、ダビデの許に、いたりければ、ダビデ、アアブと、其したるが、へる従者のために、酒宴を、設けたり。ニセヨアブ、タル、ダビデに、いひけるは、我起て、ゆき、イスラエルを、こましく、治むるに、いたらしめん。是に、おの所に、集めて、彼等に、汝と契約を、立しめ、汝をして、心の望む所の者、をこましく、治むるに、いたらしめん。是に、おいて、ダビデ、アアブを、歸して、かれ、安然に、去り、ニセヨアブ、タル、ダビデの臣僕も、よび、ヨアブ人の國を、侵して、歸り、大なる、掠取物を、携へきたれり。然るに、アアブは、ダビデと、もに、ヘブロンに、はをらざりき。其は、ダビデ、かれを、歸して、かれ、安然に、去りたれば、なり。ニセヨアブ、よび、もに、ありし、軍兵、皆、かへりきたりし。さき人々、ヨアブに、告げて、いひけるは、子ルの子、アアブ、王の所に、きたりしが、王、かれを、返して、かれ、安然に、されり。二四 ヨアブ、王に、詣りて、いひけるは、汝、何を、爲したるや。アアブ、汝の所に、きたりしに、汝、何故に、かれを、返して、去ゆかしめしや。二五 汝、子ルの子、アアブ、汝を、誑かさん。さて、きたり、汝の出入を、知り、また、汝の、すべて、爲す所を、知んために、來りしな

かたりていひけるは汝此に入るこゝ能はざるべし反て盲者跛者汝を追はらん是彼らダビデ此に入る
 あたはずし思へるなり七然るにダビデシオン要害を取り是即ちダビデの城邑なり八ダビデ其日いひける
 は誰にても水道にいたりてエブス人を撃ちまたダビデの心の悪める跛者盲者を撃つ者は(首なし)長さん
 さん)是にりて人々盲者跛者は家に入るべからずさいひなせり九ダビデ其要害に住て之をダビデの
 城邑と名けたりまたダビデミロ(城塞)より内の四方に建築をなせり十かくてダビデはますく大いに成り
 ゆき且萬軍の神エホバこれ共にいませり十一ソロの王ヒラム使者をダビデに遣はして槍および木匠さ
 石工をおくれり彼らダビデの爲に家を建つ十二ダビデエホバのかたく己をたててイスラエルの王となしたま
 へるを曉りまたエホバの民イスラエルのために其國を興したまひしを曉れり十三ダビデヘブロンより來り
 し後エルサレムの中よりまた妾と妻を納たれば男子女子またダビデに生る十四エルサレムにて彼に生れたる
 者の名はかくのことしシヤンマ、シヨバブ、ナタン、ソロモン、十五イブハル、エリシエア、子ヘグ、ヤヒア、十六エリ
 シヤマ、エリアダ、エリパレテ十七爰に膏を沃いでダビデをイスラエルの王と爲し事ヘリシテ人に聞えければ
 ヘリシテ人皆ダビデを獲んきて上るダビデ聞て要害に下れり十八ヘリシテ人繰りてレバイム谷に布き備
 へたり十九ダビデエホバに聞ていひけるは我ヘリシテ人にむかひて上るべきや汝われらわが手に付したま
 ふやエホバダビデにいひたまひけるは上れ我必らずヘリシテ人を汝の手にわたさん二十ダビデパアルベラツ
 ムに至りかれらを其所に撃ていひけるはエホバ水の破壊り出ること我敵をわが前に破壊りたまへり是故
 に其所の名をパアルベラツム(破壊の處)と呼ぶ二彼處に彼等其偶係を遣たればダビデと其從者こ
 れを取あげたり三ヘリシテ人再び上りてレバイム谷に布き備へたれば三ダビデエホバに問ふにエホ
 バいひたまひけるは上るべからず彼等の後にまはりベカの樹の方より彼等を襲へ四汝ベカの樹の上に進行
 の音を聞ばすなはち突出つべし其時にはエホバ汝のまへにいでありヘリシテ人の軍を撃たまふべければなり
 五三ダビデエホバのものに命じたまひしことくをしヘリシテ人を撃てダバよりガセルにいたる

第六章 一ダビデ再びイスラエルの選抜の兵士三萬人を悉く集むニダビデ起てものれ共になる民
 とも一バアレンユダに往て神の匱を其處より昇上らん其匱はケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバの
 名をもて呼る三すなはち神の匱を新しき車に載せて山にあるアビナダブの家より昇いだせり四アビナダブの
 子ウザアヒオ神の匱を載たる其新車を御しアヒオは匱のまへにゆけり五ダビデおよびイスラエルの
 全家琴瑟と鈴と鏡鉢をもちて力を極め謡を歌ひてエホバのまへに躍躍り六彼等がナコンの禾場にい
 たれる時ウザ手を神の匱に伸してこれを扶へたり其は牛振たればなり七エホバウザにむかひて怒りを發し其
 誤謬のために彼を其處に撃ちたまひければ彼を二神の匱の傍に死れり八エホバウザを撃ちたまひしに
 りてダビデ怒り其處をベレツウザ(ウザ撃ち)と呼り其名今日にいたる九其日ダビデエホバを畏れていひける
 はエホバの匱いかで我所にいたるべけんや十ダビデエホバの匱を己に移してダビデの城邑にいらしむる
 を好まず之を轉してガテ人オベデエドムの家に移し十一エホバの匱がテ人オベデエドムの家に在るこ
 そ三月なりきエホバオベデエドム其全家を恵みたまふ十二エホバ神の匱のためにオベデエドムの家を其所
 有を皆恵みたまふさいふ事ダビデ王に聞えければダビデゆきて喜樂を以て神の匱をオベデエドムの家よりダ
 ビデの城邑に昇上れり十三エホバの匱を昇者六歩行たる時ダビデ牛と肥たる者を献たり十四ダビデ力を
 極めてエホバの前に踊躍り時にダビデ布のエホバを着け居たり十五ダビデおよびイスラエルの全家歡呼さ
 喇の聲をもてエホバの匱を昇のぼれり十六神の匱ダビデの城邑にいりし時サウルの女ミカル窺ひ
 てダビデ王のエホバのまへに舞躍るを見其心にダビデを藐視む十七人々エホバの匱を昇入てこれをダビデ
 が其爲に張たる天幕の中なる其所に置りしとしてダビデ燔祭を酬恩祭をエホバのまへに献げたり十八ダ
 ビデ燔祭を酬恩祭を献ぐることを終し時萬軍のエホバの名を以て民を祝せり十九また民の中即ちイ
 スラエルの衆席の中に男にも女にも俱にパン一箇肉一斤乾葡萄一塊を分ちあたへたり斯て民皆おの
 の其家にかへりぬ二十爰にダビデ其家族を祝せんとて歸りしかばサウルの女ミカルダビデを出てむかへて

いひけるはイスラエルの王今日如何に威光ありしや自ら遊蕩者の其身を露すごこく今日其臣僕の婢女のまへに其身を露したまへりご二ダビデミカルにいふ我はエホバのまへに即ち汝の父よりもまたその全家よりも我を選びて我をエホバの民イスラエルの首長に命じたまへるエホバのまへに躍り三我は此よりも尙鄙からんまたみづから賤しと思はん汝が語る婢女等ごもにありて我は尊榮をえんご三是故にサウルの女ミカルは死ぬる日まで子あらざりき

第七章 一 王其家に住にいたり且エホバ其四方の敵を壞て彼を安かならしめたまひし時二 王預言者ナタンにいひけるは視よ我は楡の家に住む然ごも神の匱は幔幕の中にあリ三 ナタンにいひけるはエホバ汝と共に在せば往て凡て汝の心にあるごころを爲せ四 其夜エホバの言ナタンに臨みていはく五 往てわが僕ダビデに言へエホバ斯く言ふ汝わがために我の住むべき家を建んごするや六 我はイスラエルの子孫をエジプトより導き出せし時より今日にいたるまで家に住しごこなくして但天幕幕屋の中に歩み居たり七 我イスラエルの子孫と共に凡て歩める處にて汝ら何故に我に楡の家を建ざるやごわが命じてわが民イスラエルを牧養しめしイスラエルの士師の一人に一言も語りしごこあるや八 然ば汝わが僕ダビデに斯く言ふべし萬軍のエホバ斯く言ふ我汝を牧場より取り羊に隨ふ所より取りてわが民イスラエルの首長ごなし九 汝はすべて往くごころにて汝と共にあり汝の諸の敵を汝の前より斷さりて地の上的大なる者の名のごこく汝に大なる名を得さしめたり十 又我わが民イスラエルのために處を定めてかれらを植つけかれらをして自己の處に住て重て動くごこなからしめたり十一 また惡人昔のごこくまたわが民イスラエルの上に士師を立てたる時よりの如くふたごび之を惱ますごこなるべし我汝の諸の敵をやぶりて汝を安かならしめたり十二 又エホバ汝に告ぐエホバ汝のために家をたてん十三 汝の日の満て汝が汝の父祖等と共に寢らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後たてて其國を堅うせん十四 彼わが名のために家を建ん我永く其國の位を堅うせん十四 我はかれの父ごなり彼はわが子ごなるべし彼もし迷はば我人の杖ご人の子の鞭を以て之を懲ら

ん十五 されご我の恩恵はわが汝のまへより除きしサウルより離れたるごこくに彼よりは離るごごあらじ十六 汝の家ご汝の國は汝のまへに永く保つべし汝の位は永く堅うせらるべし十七 ナタン凡て是等の言のごこくまたすべてこの異象のごこくダビデに語りければ十八 王入りてエホバの前に坐していひけるは主エホバよ我は誰わが家は何なればか 爾此まで我を導きたまひしや十九 主エホバよ此は汝の目には少き事なり汝また僕の家の遙か後の事を語りたまへり主エホバよ是は人の法なり二十 主エホバよ此上何れに言ふを得ん其は主エホバ汝を知らたまへばなり二一 汝の言のためまた汝の心に隨ひて汝此諸の大なるごこを爲し僕に之をしらしめたまふ二二 故に神エホバよ爾は大いなり其は我らが凡て耳に聞る所に依は汝の如き者あくまた汝の外に神なければなり二三 地の何れの國も汝の民イスラエルの如くなる其は神ゆきてかれらに贖ひ己の民ごなして大なる名を得たまひまた彼らの爲に大なる畏るべき事を爲したまへばなり即ち汝がエジプトより贖ひ取たまひし民の前より國々の人ご其諸神を逐拂ひたまへり二四 汝は汝の民イスラエルをかぎりなく汝の民ごして汝に定めたまへりエホバよ汝はかれの神ごなりたまふ二五 されば神エホバよ汝が僕ご其家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひしごこく爲たまへ二六 汝は汝の民イスラエルの名を崇めて萬軍のエホバはイスラエルの神なり二七 曰しめたまへれははくは僕ダビデの家をして汝のまへに堅く立しめたまへ二七 其は萬軍のエホバはイスラエルの神よ 汝の耳に示して我汝に家をたてん二八 言たまひたればなり是故に 僕此祈禱を汝に爲す道を心の中に得たり二九 主エホバよ汝は神なり汝の言は眞なり汝の恵を僕に語りたまへり三〇 願くは僕の家を祝福して汝のまへに永く續くごこを得さしめたまへ其は主エホバ 汝これを語りたまへばなりれははくは汝の祝福によりて僕の家に永く祝福を蒙らしめたま

第八章 一 此後ダビデハリシテ人を撃てこれを服すダビデまたハリシテ人の手よりメテグアンマをされり二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

條の繩をもて生しおく者を量度るモアア人は貢物を納てダビデの臣僕となれり三ダビデまたレホブの子なるソバの王ハダテセルがユフラテ河の邊にて其勢を新にせんさて往るを撃り四しかしてダビデ彼より騎兵千七百歩兵二萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬は皆其筋を切斷り五ダマスコのスリア人ソバの王ハダテセルを援きて來りければダビデスリア人二萬二千を殺せり六しかしてダビデダマスコのスリアに代官を置きスリア人は貢物を納てダビデの臣僕となれりエホバダビデを凡て其往く所にて助けたまへり七ダビデハダテセルの臣僕等の持る金の楯を奪ひてこれをエルサレムに攜きたる八ダビデ王又ハダテセルの邑ベタサベロダより基た多くの銅を取り九時にハマテの王トイダビデがハダテセルの軍を撃破りしを聞て十トイ其子ヨラムをダビデ王につかはし安否を問ひかつ祝を宣しむ其はハダテセル皆トイを戦を爲したるにダビデハダテセルきたりてこれを撃つたればなりヨラム銀の器と金の器と銅の器を攜へ來りければ十一ダビデ王其攻め伏せたる諸の國民の中より取り納めたる金銀と共には是等をもエホバに納めたり十二即ちエドムよりモアアよりアンモンの子孫よりベリシテ人よりアマレクよりえたる物もよびソバの王レホブの子ハダテセルより得たる掠取物さうもこれを納めたり十三ダビデ鹽谷にてエドム人一萬八千を撃て歸て名譽を得たり十四ダビデエドムに代官を置り即ちエドムの全地に編く代官を置てエドム人は皆ダビデの臣僕となれりエホバダビデを凡て其往くころにて助けたまへり十五ダビデイスラエルの全地を治め其民に公道と正義を行ふ十六セルヤの子ヨアアは軍の長アヒルデの子ヨシヤパテは史官十七アヒトブの子ザドクはアビヤタルの子アヒメレクは祭司セラヤは書記官十八エホヤダの子ベナヤはケレテ人およびベレテ人の長ダビデの子等は大臣なりき

第九章 一爰にダビデいひけるはサウルの家の遺存れる者尙あるや我ヨナタンの爲に其人に恩恵をほごころんごニサウルの家の僕なるザバと名くる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれにいひけるは汝はザバなるか彼いふ僕是なり三王いひけるは尙サウルの家の者あるか我其人に神の恩恵をほごころんご

サバ王にいひけるはヨナタンの子尙あり彼者なり四王かれにいひけるは其人は何處に在るやサバ王にいひけるはロテバルにてアンミエルの子マキルの家なる五ダビデ王人を遣はしてロテバルより即ちアンミエルの子マキルの家よりかれを攜來らしむ六サウルの子ヨナタンの子なるメヒボセテダビデの所に來り伏て拜せり七ダビデメヒボセテよこいひければ答て僕此にありと曰ふセダビデかれにいひけるは恐るるなかれ我必ず汝の父ヨナタンの爲に恩恵を汝にしめさん我汝の父サウルの地を悉く汝に復すべし又汝は恒に我席において食ふべしと入かれ拜して言けるは僕何なればか汝死たる犬のごとき我を眷顧たまふ九王サウルの僕ザバを呼てこれにいひけるは凡てサウルの家の物は我皆汝の主人の子にあたり十汝汝の子等汝の僕かれのために地を耕へして汝の主人の子に食ふべき食物を取りきたるべし但し汝の主人の子メヒボセテは恒に我席において食ふべしとザバは十五人の子と二十人の僕あり十一ザバ王にいひけるは總て王わが主の僕に命じたまひしごこく僕をすべしとメヒボセテは王の子の一人のごこくダビデの席にて食へり十二メヒボセテに一人の若き子あり其名をミカさいふザバの家に住る者は皆メヒボセテの僕なりき十三メヒボセテはエルサレムに住みたり其はかれ恒に王の席にて食ひたればなりかれは兩の足さもに跛たる者なり

第十章 一此後アンモンの子孫の王死て其子ハモン之に代りて位に即く二ダビデ我ナハシの子ハモンにその父の我に恩恵を示せしごこく恩恵を示さんといひてダビデかれを其父の故によりて慰めんさて其僕を遣はせりダビデの僕アンモンの子孫の地にいたるに三アンモンの子孫の諸伯其主ハモンにいひけるはダビデ慰者汝に遣はしたるによりて彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆるやダビデ此城邑を親ひこれを探りて陥れんために其僕を汝に遣はせるにあらずや四是においてハモンダビデの僕を執へ其鬚の半を剃り落し其衣服を中より斷て股までにしてこれを歸せり五人ハモンをダビデに告げればダビデ人を遣はしてかれらを迎へしむ其人々大に恥たればなり即ち王いふ汝ら鬚の長るまでエリコに止まりて然るのち歸るべしと六

アンモンの子孫自己のダビデに悪まるるを見しかばアンモンの子孫人を遣はしてベテレホアのスリア人
 ソバのスリア人の歩兵二萬人およびマアカの王より一千人トブの人より一萬二千人を雇ひたり七ダビ
 デア聞てヨアアを勇士の總軍を遣はせりアンモンの子孫出て門の入口に軍の陣列をなしたりソバレホア
 のスリア人もよびトブの人とマアカの人は別に野に居り九ヨアア戦の前後より己に向ふを見てイスラエル
 の選抜の兵の中を選みこれをスリア人に對ひて備へしめ其餘の民をば其兄弟アビシヤイの手に交し
 てアンモンの子孫に向て備へしめて十一いひけるは若スリア人我に手強からば汝を助けよ若アンモン
 の子孫汝に手剛からば我ゆきて汝をたすけん十二汝勇ましくなれ我ら民のためさわれらの神の諸邑の
 ために勇しく爲んればはくはエホバ其目によしと見ゆるをなしたまへ十三ヨアア己と共に在る民と
 共にスリア人にむかひて戦んて近つきければスリア人彼のまへより逃たり十四アンモンの子孫スリ
 ア人の逃たるを見て亦自己等もアビシヤイのまへより逃て城邑にいりぬヨアアすなはちアンモンの子孫の所
 より還りてエルサレムにいたる十五スリア人其イスラエルのまへに敗れたるを見て俱にあつまれり十六ハ
 ダゼル人を作りて河の河岸に在るスリア人を將お出して皆ヘラムにきたらしむハダゼル軍の長シヨ
 バクかれらを率ゐたり十七其事ダビデに聞えければ彼イスラエルを悉く集めてヨルダンを渡りてヘラムに
 來れりスリア人ダビデに向ひて備へ之と戦ふ十八スリア人イスラエルのまへより逃ければダビデスリアの
 兵車の人七百騎兵四萬を殺し又其軍の長シヨバクを撃てこれを其所に死しめたり十九ハダゼル
 の臣なる王等其イスラエルのまへに壞れたるを見てイスラエルと平和をなして之に事へたり斯スリア人は
 恐れて再びアンモンの子孫を助くることをせざりき

第十一章 一年歸りて王等の戦に出る時におよびてダビデヨアアおよび自己の臣僕並にイスラエルの全
 軍を遣はせり彼等アンモンの子孫を滅ぼしてラバを圍めりされダビデはエルサレムに止りぬニ爰に夕暮に
 ダビデ其床より興きいで王の家の屋蓋のうへに歩みしが屋蓋より一人の婦人の体をあらふを見たり其

婦人觀るに甚だ美し三ダビデ人を遣して婦人を探らしめしに或人いふ此はエリアムの女バテシバにてヘ
 テ人ウリヤの妻あるにあらすや四ダビデ乃ち使者を遣はして其婦人を取らば婦人來りて彼婦を寢
 たりしかして婦人不潔を清めて家に歸りぬ五かくて婦人みければ人をつかはしてダビデに告いでいひける
 は我子を孕めり六是においてダビデ人をヨアアにつかはしてヘテ人ウリヤを我に遣はせさいひければヨ
 アウリヤをダビデに遣はせりセウリヤダビデにいたりしかばダビデこれにヨアアの如何なる民の如何な
 ると戦争の如何なるを問ふ入しかしてダビデウリヤにいひけるは汝の家に下りて足を洗へウリヤ王の家を
 出るに王の贈物其後に從ひてきたる九然とウリヤは王の家の門に其主の僕等さうもに寢ておのれの家
 にくたりいたらず十人々ダビデに告てウリヤ其家にくたり至らざいひければダビデウリヤにいひけるは
 汝は旅路をなして來るにあらすや何故に自己の家にくだらざるや十一ウリヤダビデにいひけるは置さいス
 ラエルとユダは小屋の中に住まり我主ヨアアと我主の僕は野の表に陣を取るに我いかでわが家にゆきて食ひ
 飲しました妻と寝へけんや汝は生きた汝の靈魂は活く我此事をなさじ十二ダビデウリヤにいふ今日も此にさ
 まれ明日我汝を去しめんさウリヤ其日さ次の日エルサレムにさままりし十三ダビデかれを召て其まへ
 に食ひ飲せしめダビデかれを酔しめたり晩にいたりて彼出て其床に其主の僕と共に寢たりされおのれの家
 にはくたりゆかざりき十四朝におよびてダビデヨアアへの書を認めて之をウリヤの手によりて遣れり十五ダ
 ビデ其書に書いていはいく汝らウリヤを烈しき戦の先鋒にいだしてかれの後より退きて彼をして戦死せしめ
 よ十六是においてヨアア城邑を窺ひてウリヤをば其勇士の居るさ知る所に置り十七城邑の人出てヨアアと戦
 ひしかばダビデの僕の中の數人仆れへテ人ウリヤも死り十八ヨアア人をつかはして軍の事を悉くダビデ
 に告げしむ十九ヨアア其使者に命じていひけるは汝が軍の事を皆王に語り終しとき二十王もし怒りを發し
 て汝に汝らなんぞ戦はんぞ城邑に近づきしや汝らは彼ら石垣の上より射ることを知らざりしや二十一エ
 ルベセテの子アビメレクを撃し者は誰なるや一人の婦人が石垣の上より磨の上石を投て彼をテベツに殺せしに

あらずや何ぞ汝ら城垣に近づきしやと言はば汝言へし汝の僕ヘテ人ウリヤもまた死りて三使者ゆきて
 ダビデにいたりモアブが道はしたるころのこころをこころく告げたり二三使者ダビデにいひけるは敵我等
 に手強かりしが城外にいであれ我等これに迫りて門の入口にまでいたれり四時に射手の
 者城垣の上より汝の僕を射たりければ王の僕或者死に亦汝の僕ヘテ人ウリヤも死りて三五ダビデ
 使者にいひけるは斯汝ヨアブに言へし此事を憂ふるなれ刀劍は此をも彼をも同じく殺すなり強く城邑を
 攻て戦ひ之を陥るべし汝ヨアブを勵ますべし六ウリヤの妻其夫ウリヤの死たるを聞て主のため
 に悲哀りニ七其喪の過し時ダビデ人を遣はしてかれをその家の家に召する彼すなばちその妻となりて男子
 を生り但しダビデの爲たる此事はエホバの目に悪かりき

第十一章 エホバナタンをダビデに遣はしたまへば彼ダビデに至りてこれにいひけるは一の邑に二箇の人
 あり一は富て一は貧し其富者は甚だ多くの羊と牛を有り三され貧者は唯自己の買て育てたる一の
 小き牝羊の外は何をも有ざりき其牝羊彼およびかれの子女さうも生長ちかれの食物を食ひかれの椀に飲
 みまた彼の懐に寝て彼には女子の如くなりき四時に一人の旅人其富る人の許に來りけるが彼おのれの羊
 と牛の中を取りてそのものに來る旅人のために烹を惜みてかの貧し人の牝羊を取りて之をそののれに來れ
 る人のために烹たり五ダビデ其人の事を大に怒りてナタンにいひけるはエホバは生く誠に此をなしたる人は
 死べきなり六且彼此事をなしたるに因りまた憐憫まざりしによりて其牝羊を四倍になして償ふべし七ナ
 タンダビデにいひけるは汝は其人なりイスラエルの神エホバ斯いひたまふ我汝に膏を沃いでイスラエルの
 王となし我汝をサウルの手より救ひいだし八汝に汝の主人の家をあたへ汝の主人の諸妻を汝の懐に與
 へまたイスラエルとエダの家を汝に與へたり若し少くは我汝に種々の物を増くはへしならん九何ぞ汝
 エホバの言を藐視じて其目のまへに惡をなせしや汝刃劍をもてヘテ人ウリヤを殺し其妻をとりて汝の妻と
 なせり即ちアンモンの子孫の劍をもて彼を斬殺せり十汝我を輕んじてヘテ人ウリヤの妻をとり汝の妻とな

したるに因て劍何時までも汝の家を離るることあるべし十一エホバ斯いひたまふ視よ我汝の家の中より
 汝の上に禍を起すべし我汝の諸妻を汝の目のまへに取て汝の隣人に與へん其人此日のまへにて汝の諸妻
 さうもに寢ん十二其は汝は密に事をなしたれ我はイスラエルの衆のまへに日このまへに此事をなすべし
 ればなりき十三ダビデナタンにいふ我エホバに罪を犯したりナタンダビデにいひけるはエホバまた汝の罪を
 除きたまへり汝死さるべし十四されど汝此行によりてエホバの敵に大なる罵る機會を與へたれば汝に生
 れし其子必ず死べし十五かくてナタン其家にへり爰にエホバウリヤの妻がダビデに生る子を撃たま
 ひければ痛く疾めり十六ダビデ其子のために神に乞求む即ちダビデ斷食して入り終夜地に臥したり十七
 ダビデの家の年寄等彼の傍に立ちてかれを地より起しめんさせしかども彼肯せず又かれらさうもに食を
 爲ざりき十八第七日に其子死りダビデの僕其子の死たることを告げたり十九ダビデに告ることを恐れたりひけ
 るは子の向生る間に我等彼に語たりしに彼我等の言を聽いれざりき如何ぞ彼に其子の死たるを告ぐべけん
 や被害を爲んぞ十九然にダビデ其僕の私語くを見てダビデ其子の死たるを曉れりダビデ乃ち其僕に子
 は死たるやさいひければかれら死りさいふ二十是に於いてダビデ地よりあきあがり身を洗ひ膏をぬり其衣服
 を更てエホバの家にいりて拜し自己の家に至り求めてそののれのために食を備へしめて食へり二一僕等彼に
 いひけるは此の汝がなせる所は何事なるや汝子の生るあひだはこれのために食を斷食して哭きたるは我誰かエホバの
 に汝は起て食を爲すぞニ二ダビデいひけるは嬰孩の向生るあひだにわが斷食して哭きたるは我誰かエホバの
 我を憐れみて此子を生しめたまふを知らざりしと思ひたればなり二三されど今死たれば我なんぞ斷食すべけんや我
 再びかれをかへらしむるを得んや我の所に往べければ彼は我の所にかへらざるべし二四ダビデ其妻バ
 テシバを慰めかれの所にいりてかれさうもに寢たりければ彼男子を生りダビデ其名をソロモンと呼ぶエ
 ホバこれを愛したまひて二五預言者ナタンを遣はし其名をエホバの故によりてエデデア(エホバの愛する者)
 と名けしめたまふ二六爰にヨアブアンモンの子孫のラバを攻めて王城を取れり二七ヨアブ使者をダビデにつ

かはしていひけるは我ラバを攻めて水城を取れり二八されば汝今餘の民を集め斯城に向て陣どりて之を取れ恐らくは我此城を取て人我名をもて之を呼にいたらん二九是に於いてダビデ民を悉くあつめてラバにゆき攻て之を取り三十しかしてダビデアンモン王の屍を其首より取はなしたり其金の重は一タラントなりまた寶石を嵌たりこれをダビデの首に置ダビデ其邑の掠取物を基に多く持出せり三十一かくてダビデ其の民を將いだしてこれを鋸と鉄の千齒と鉄の斧にて斬りまた瓦陶の中を通行しめたり彼斯のごさくアンモンの子孫の凡ての城邑になせりしかしてダビデは皆エルサレムに遷りぬ

第十三章 此後ダビデの子アサロムにタマルと名くる美しき妹ありしがダビデの子アムノンこれを戀ひたりニアムノン心を苦しめて遂に其姉妹タマルのためにわづらへり其はタマルは處女なりければアムノンかれに何事をも爲しがたしと思ひたればなり三然るにアムノンに一人の朋友ありダビデの兄弟シメアの子にして其名をヨナダブといふヨナダブは甚だ有智き人なり四彼アムノンにいひけるは汝王の子なんぞ日に斯く瘠ゆくや汝我に告ざるやアムノン彼にいひけるは我わが兄弟アサロムの妹タマルを戀ふ五ヨナダブかれにいひけるは床に臥て病を伴り汝の父の來りて汝を見る時これにいへ請ふわが妹タマルをして來りて我に食を手へしめわが見て彼の手より食ふことをうる様にわが目のまへにて食物を調理しめよ六アムノンすなはち臥して病を伴りしが王の來りておのれを見る時アムノン王にいひけるは請ふ吾妹タマルをして來りてわが目のまへにて二の菓子を作へしめて我にかれの手より食ふことを得さしめよ七是に於いてダビデタマルの家にいひつかはしけるは汝の兄アムノンの家にゆきてかれのために食物を調理よ八タマル其兄アムノンの家にいたるにアムノンは臥し居たりタマル乃ち粉をとりて之を搗てかれの目のまへにて菓子を作へ其菓子を焼き九鍋を取て彼のまへに傾出たりされども彼食ふことを否めりしかしてアムノンいひけるは汝ら皆我を離れていでよ皆かれをばなれていでたり十アムノンタマルにいひけるは食物を寢室に持きたれ我汝の手より食はんとタマル乃ち己の作りたる菓子を取りて寢室に持ゆきて其

兄アムノンにいたる十一タマル彼に食しめんきて近く持たれたる時彼タマルを執へて之にいひけるは妹よ來りて我と寝よ十二タマルかれにいひけるは否兄上よ我を辱しむるなれ是のごとき事はイスラエルに行はれず汝此愚なる事をなす可らず十三我は何處にわが恥辱を棄んか汝はイスラエルの愚人の一人となるべしされば請ふ王に語れ彼我を汝に予さることなかるべし十四然どもアムノン其言を聽ずしてタマルより力ありければタマルを辱しめてこれと偕に寢たりしが十五遂にアムノン甚だ深くタマルを惡むにいたる其かれを惡む所の惡みはかれを戀ひたるごころの戀よりも大なり即ちアムノンかれにいひけるは起て往けよ十六かれアムノンにいひけるは我を返して此惡を作るなかれ是は汝がさきに我になしたる所の惡よりも大なりさしかれども聽いれず十七其側に仕ふる少者を呼ていひけるは汝此女をわが許より遣りいだして其後に月を纏せよ十八タマル振袖を着たり王の女等の處女なるものは斯のごとき衣服をもて纏ひたりアムノンの侍者かれを外にいだして其後に月を纏せり十九タマル灰を其首に蒙り着たる振袖を裂き手を首にのせて呼はりつゝ去ゆけり二十其兄アサロムかれにいひけるは汝の兄アムノン汝と偕に在しや然ぞ妹よ黙せよ彼は汝の兄なり此事を心に留るあかれさかくてタマルは其兄アサロムの家に棲しく住み居れり二二ダビデ王是等の事を悉く聞て甚だ怒れり二三アサロムはアムノンにむかひて善も惡きも語ざりき其はアサロムアムノンを惡みたればなり是はかれがあのれの妹タマルを辱しめたるに由り二三全二年の後アサロムエフライムの邊なるバアルハツルにて羊の毛を剪しめ居て王の諸子を悉く招けり二四アサロム王の所にいりていひけるは視よ僕羊の毛を剪しめたるがはくは王と王の僕等僕さうもに來りたまへ二五王アサロムにいひけるは否わが子よ我等を皆いたらしむるなかれおそらくは汝の費を多くせんアサロムダビデを強ふしかれどもダビデ往てこれを視せり二六アサロムいひけるは若しからずば請ふわが兄アムノンをして我らさうもに來らしめよ王かれにいひけるは彼なんぞ汝さうもにゆくべけんや二七されどアサロムかれを強ければアムノン王の諸子を皆アサロムさうもにゆかしめたり

二人 後にアブサロム其少者等に命じていひけるは請ふ汝らアムノン心の酒によりて樂む時を視すまして
わが汝等にアムノンを撃て言ふ時に彼を殺せ懼るなかれ汝等に之を命じたるは我にあらすや汝ら勇し
く武くなれとニルアブサロムの少者等アブサロムの命ぜしごとくアムノンになしければ王の諸子皆起て各
其驛馬に乗て逃たり三十彼等が路にある時風聞ダビデにいたりていはくアブサロム王の諸子を悉く殺し
て一人も遺るものなしと三王乃ち起ち其衣を裂きて地に臥す其臣僕皆衣を裂て其傍にたてり三
ダビデの兄弟シメアの子ヨナダブ答へていひけるは吾主王の御子等なる少年を皆殺したりと思たまふな
かれアムノン獨り死るのみ彼がアブサロムの妹タマルを辱かしたる目よりアブサロム此事をさだめおき
たるなり三三されば我主王王の御子等皆死りといひて此事をさしめ煩ひたまふなかれアムノン 獨り死
たるなればなりと三四 斯てアブサロムは逃れたり爰に守望のたる少者目をあげて視たるに視ふ山の傍よりし
て己の 後の道より多くの人來れり三五 ヨナダブ王にいひけるは視よ王の御子等來る僕のいへるがごとくし
かりと三六 彼語ることを終し時視よ王の子等來り聲をあげて哭り王と其僕等も皆大に基く哭り三七 偕ア
ブサロムは逃てゲシユルの王アミホデの子タルマイにいたるダビデは日々其子のために悲めり三八 アブサロ
ム逃てゲシユルにゆき三年彼處に居たり三九 ダビデ王アブサロムに逢ふと思ひ煩らふ其はアムノンは死たる
によりてダビデかれの事はあきらめられたればなり

第十四章 一ゼルヤの子ヨアア王の心のアブサロムに趨くを知れりニヨア乃ちテコアに人を遣りて彼處
より一人の 哲婦を呼きたらしめて其婦にいひけるは請ふ汝喪にある眞似して喪の服を着油を身にぬら
す死者のために久しく哀しめる婦のごとく爲りて三王の所にいたり是のごとくかれに語るべしとヨア其
語言をかれの口に授けたり四 テコアの 婦王にいたり地に伏て拜し王にいひけるは王よ助けたまへ五 王婦
にいひけるは何事なるや婦にいひけるは我は實に 婦にしてわが夫は死り六 仕女に二人の子あり俱に野に
争ひしが誰もかれらを排解ものなきにより此遂に彼を撃て殺せり七 是において視よ全家仕女に逼りていふ

其兄弟を撃殺したる者を付せ我らかれをその殺したる 兄弟の生命のために殺さんと斯く嗣子をも滅ぼし
存れるわが炭火を熄てわが夫の名をも遺存をも地の面に無らしめんすと八 王婦にいひけるは汝の家に往け
我汝の事につきて命令を下さん九 テコアの 婦王にいひけるは王わが主よれがはくは其罪は我とわが父の
家に歸して王と王の位には罪あらざれ十 王にいひけるは誰にても爾に語る者をば我に將來れしかせば彼がされ
て爾に觸ることを元るべし十一 婦にいひけるは願くは王爾の神エホバを憶えてかの仇を報ゆる者をして重て滅
すことを爲しめすわが子を斷ごすなからしめたまへ十二 王にいひけるはエホバは生く爾の子の鬚毛一すちも地に
限ることなかるべし十三 婦にいひけるは請ふ仕女をして一言わが主王に言しめたまへダビデにいひけるは言ふべ
し十三 婦にいひけるは爾をんぞ斯る事を神の民にむかひて思ひたるや王此言を言ふにより王は罪ある者のご
とく其は王その放れたる者を歸らしめざればなり十四 抑我等は死ざるべからず我等は地に瀉れたる水の再
び聚る能はざるがごとし神は生命を取りたまはず方法を設けて其放れたる者をして己の所より放たれを
ることなからしむ十五 我此事を王我主に言んさて來れるは民我を恐れしめたるが故に仕女謂らく
王に言ん王婢の言を行ひたまふならん十六 其は王聞て我とわが子を共に滅して神の産業に離れしめん
とさする人の手より婢を救ひいだしたまふべければなり十七 仕女また思ひ王わが主の言は慰さなるべしと其
は神の使のごとく王わが主は善も悪も聽たまへばなりれがはくは爾の神エホバ爾と共に在せと十八 王こた
へて婦にいひけるは請ふわが爾に問んごころの事を我に隠すなかれ婦いふ請ふ王わが主言たまへ十九 王いひ
けるは此すべての事においてヨアの手爾とるもにあるや婦答へていひけるは爾の靈魂は活く王わが主
よ凡て王わが主の言たまひしごころは右にも左にもまがらす實に爾の僕ヨア我に命じ是等の言を悉く
仕女の口に授けたり二十 其事の見ゆるごころを變んさて爾の僕ヨア此事をなしたるなり然らざれば主は神
の使の智慧のごとく智慧ありて地にある事を悉く知たまふと二十一 是において王ヨアにいひけるは視よ我
此事を爲すされば往て少年アブサロムを攜歸るべし三三 ヨア地に伏て拜し王を祝せりしかしてヨアい

ひけるは王わが主よ王僕のことをおこなひたまへば今日僕わが爾に悪るるを知るこ三三ヨアブ乃ち起てゲシエルに往きアブサロムをエルサレムに擲きたれり二四王いひけるは彼は其家に退くべしわが面を見るべからず故にアブサロム己の家へ退きて王の面を觀ざりき二五僭イスラエルの中にアブサロムのごまく其美觀のために讚られたる人はなかりき其足の跡より頭の頂にいたるまで彼には瑕疵あることなし二六アブサロム其頭を剪る時其頭の髪を衡るに王の權衡の二百シケルあり毎年の終にアブサロム其頭を剪り是は己の重によりて剪たるなり二七アブサロムに三人の男子一人のタマルさいふ女子生れたりタマルは美女なり二八アブサロム二年のあひだエルサレムに在りたれども王の顔を見ざりき二九是によりてアブサロム王に遣さんとしてヨアブを呼に遣はしけるも彼來ること肯せず再び遣せしかども來ること肯せざりき三〇アブサロム其僕にいひけるは視よヨアブの田地は私の近くありて其處に大麥あり往て其に火を放てアブサロムの僕等田地に火を放てり三一ヨアブ起てアブサロムの家に入りてこれにいひけるは何故に爾の僕等田地に火を放たるや三二アブサロムヨアブにいひけるは我人を爾に遣はして此に來れ我爾を王につかはさんと言ひ即ち爾をして王に我何のためにゲシエルよりきたりしや彼處に尙あらば我ために反て善しと言しめんさせり然ば我今王の面を見ん若し我に罪あらば王我を殺すべし三三ヨアブ王にいたりてこれに告たれば王アブサロムを召す彼王にいたりて王のまへに地に伏て拜せり王アブサロムに接吻す

第十五章 此後アブサロム己のために戰車馬を備へて己のまへに驅る者五十人を備たり二アブサロム夙興きて門の途の傍にたち人の訴訟ありて王に裁判を求めんきて來る時はアブサロム其人を呼ていふ爾は何の邑の者なるや其人僕はイスラエルの某の支派の者なりさいへば三アブサロム其人にいふ見ふ爾の事は善くまた正し然れども爾に聽くべき人は王いまだ立す二四アブサロム又嗚呼我を此地の士師となす者もかな然れば凡て訴訟公事ある者は我に來りて我之に公義を爲しあたへんさいふ五また人彼を拜せんきて近づく時は彼手をのびして其人を扶け之に接吻す六アブサロム凡て王に裁判を求めんきて來るイスラエル

人に是のごまくなせり斯アブサロムはイスラエルの人々の心を取り七斯て四年の後アブサロム王にいひけるは請ふ我をして往てヘブロンにてエホバに我誓て立し願を果さしめよ八其は僕スリヤのゲシエルに居し時願を立て若しエホバ誠にて我をエルサレムに擲歸りたまはば我エホバに事へんと言たればなり九王かれにいひけるは安然に往け彼すなはち起てヘブロンに往り十しかしてアブサロム窺ふ者をイスラエルの支派の中に偏く遣はして言せけるは爾等喇叭の音を聞ばアブサロムヘブロンにて王となれりと思ふべし一二二百人の招かれたる者エルサレムよりアブサロムさうもにゆけり彼らは何心なくゆきて何事をもしらすりき十二アブサロム犠牲をささぐる時にダビデの讒官ギロ人アトヘルを其邑ギロより呼よせたり徒黨強くして民次第にアブサロムに加はりぬ十三爰に使者ダビデに來りてイスラエルの人の心アブサロムにしたがふさいふ十四ダビデのれ共ニエルサレムに居る凡ての僕にいひけるは起てよ我ら逃ん然らずば我らアブサロムより遁るゝあたはざるべし急ぎ往け恐らくは彼急きて我らに追ひつき我等に害を蒙らせ刃をもて邑を撃ん十五王の僕等王にいひけるは視よ僕等王わが主の選むところを凡て爲ん十六王いでゆき其全家これにしたがふ王十人の妾なる婦を遣して家をまもらしむ十七王いでゆき民みな之にしたがふ彼等遠の家に息めり十八かれの僕等みな其傍に進みケレテ人さバレテ人さび彼にしたがひてガテよりきたれる六百人のガテ人みな王のまへに進めり十九時に王ガテ人イツタイにいひけるは何ゆゑに爾もまた我らさうもにゆくや爾かへりて王さうもにをれ爾は外國人にして移住て處をもさむる者なり二十爾は昨日來たり我は今日わが得るころに往くなれば豈爾をして我らさうもにさまよはしむべけんや爾歸り爾の兄弟をも擲歸るべしれがばくは恩を眞實爾さうもにあれ二一イツタイ王にこたへていひけるはエホバは活王わが主は活王誠に王わが主いかなる處に坐すとも生死さうもに僕もまた其處に居るべし二二ダビデイツタイにいひけるは進みゆけガテ人イツタイ乃ち進みかれのすべての從者およびかれさうもにある妻子皆進めり二三國中皆大聲をあげて哭き民皆進む王もまたギテロン川を渡りて進み民皆進みて野の道にもむけり二四視よザ

さく爾のまへに事べし二十爰にアサロムアヒトベルにいひけるは我等如何に爲べき爾等計を爲すべしとニアヒトベルアサロムにいひけるは爾の父が遺して家を守しむる妾等の處に入れ然ばイスラエル皆爾が其父に悪まるるを聞かして爾さうもに在る總の者の手強くなるべしとニ三是に於いて屋脊にアサロムのために天幕を張ればアサロムイスラエルの目のまへにて其父の妾等の處に入りぬニ三當時アヒトベルも謀れる謀計は神の言に問たることくなりきアヒトベルの謀計は皆ダビデアサロムに俱に是のことく見えたりき

第十七章一時にアヒトベルアサロムにいひけるは請ふ我一萬二千の人を擇み出さしめ我起て今夜死ビデの後を追ひニ彼が繼れて手弱なりし所を襲ふて彼をおびえしめん而して彼さうもに在る民の逃ん時に我王一人を撃さり三總の民を爾に歸せしむべし夫衆の歸するは爾が求むる此人に依なれば民みな平穩になるべし四此言アサロムの目イスラエルの總の長老の目に的當見えたり五アサロムいひけるはアキル人ホシヤイをも召きたれ我等かれが言ふ所をも聞かざらばホシヤイ乃ちアサロムに至るにアサロムかれにいたりていひけるはアヒトベル是のことく語り我等其言を爲すべき若し可ずば爾言ふべし七ホシヤイアサロムにいひけるは此時にあたりてアヒトベルが授けし計略は善らすハホシヤイまたいひけるは爾の知ることく爾の父さ其從者は勇士なり且彼等は野にて其子を奪れたる熊の如く其氣激怒をれり又爾の父は戦士なれば民さ共に宿らざるべし九彼は今何の穴にか何の處にか匿れる若し數人の者手始に仕なば其を聞く者は皆アサロムに従ふ者の中に敗ありと言はん十しからば獅子の心のごさき心ある勇猛き夫といふことも全く挫碎ん其はイスラエル皆爾の父の勇士にして彼さうもに在る者の勇猛き人なるをすればなり十一我は計議るイスラエルをダンよりベエルシバにいたるまで海濱の沙の多きが如くに悉く爾の處につごへ集めて爾親ら戦陣に臨むべし十二我等彼の見出さるる處にて彼を襲ひ露の地に下るごさく彼のうへに降らんしかして彼および彼さうもに在るすべての人々を一人も遺さざるべし十三若し彼何かの城邑に集ら

ばイスラエル皆繩を其城邑にかけ我等これを河に曳きたふして其處に一の小石も見ぬざらしむべしと十四アサロムイスラエルの人々皆アルキ人ホシヤイの謀計はアヒトベルの謀計よりも善しといふ其はエホバアサロムに禍を降さんさてエホバアヒトベルの善き謀計を破ること定めたまひたればなり十五爰にホシヤイ祭司ザドクアビヤタルにいひけるはアヒトベルアサロムイスラエルの長老等のために斯々に謀れりまた我は斯々に謀れり十六されば爾ら速に人を遣してダビデに告て今夜野の渡場に宿ることなく速かに渡りゆけさいへおそらくは王および俱に在る民皆呑つくされん十七時にヨナタンアヒマアズはエンロゲルに侯居たり是は城邑に在るを見られざらんさてなり爰に一人の仕女ゆきて彼等に告げれば彼らダビデ王に告んさて往く十八しかるに一人の少者かれらを見てアサロムにつげたりされど彼等二人は急ぎさりてパホルムの或人の家にとりて其の庭に井ありてかれら其處にくだりければ十九婦蓋をさきて井の口のうへに掩け其上に擲たる麥をひろげたり故に事知れざりき二十時にアサロムの僕等其婦の家に來りていひけるはアヒマアズヨナタンは何處に在るや婦かれらに彼人々は小川を濟れりといふかれら尋れたれども見當ざればエルサレムに歸れりニ二彼等が去し時かの二人は井よりのぼりて往てダビデ王に告げたり即ちダビデに言けるは起て速かに水を濟れ其はアヒトベル斯爾等について謀計を爲したればなりとニ三ダビデ起て己さうもに在る凡ての民さうもにヨルダンを濟れり四アサロムアマサをヨアの代りに軍の長と爲りあるイスラエルの凡の人々さうもにヨルダンを濟れり五アサロムアマサをヨアの代りに軍の長と爲りアマサは夫のナハシの女にてヨアの母セルヤの妹なるアビガルに通じたるイシマイル人名はエテルさいふ人の子なりニ六かくてイスラエルアサロムはギレアデの地に陣ざれりニ七ダビデマハナイムにいたれる時アンモンの子孫の中なるラバのナハシの子シヨビとロテバルのアンミエルの子マギルおよびロゲリムのヤ

レアデ人パルツライニ臥床と鍋釜と陶器と小麦と大麦と粉と烘麥と豆と小豆の烘たる者も二九蜜と牛酪と羊と膾をダビデおよび俱にある民の食ふために持來れり其は彼等民は野にて飢餓れ渴くならんと言

たればなり

第十八章一爰にダビデ己さうもにある民を核べて其上に千夫の長百夫の長を立たり二しかしてダビ

デ民を三分ちて其一をヨアブの手に託け一をセルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイの手に託け一をガテ

人イツタイの手に託けたりかくして王民にいひけるは我もまた必ず汝らさうもに出んま三されど民いふ汝

は出べからず我等如何に逃るも彼等は我等に心をさめじ又我等牛死さも我等に心をさめざるべしされど

汝は我等の一萬に等し故に汝は城邑の中より我等を助けなば善し四王かれらにいひけるは汝等の目に善き見

ゆるさころを爲すべしとかくて王門の傍に立ち民皆或は百人或は千人となりて出づ五王ヨアブアビ

シヤイおよびイツタイに命じてわがために少年アブサロムを寛に待へよといふ王のアブサロムの事につ

いて諸の將官に命を下せる時民皆聞り爰に民イスラエルにむかひて野に出でエフライムの叢林に戦ひし

がセイスラエルの民其處にてダビデの臣僕のままに敗る其日彼處の戦死大にして二萬にいたれり入し

て戦偏く其地の表に廣がりぬ是日叢林の滅ぼせる者は刀劍の滅ぼせる者よりも多かりき九爰にアブサロ

ムダビデの臣僕に行き遣り時にアブサロム驛馬に乘居たりしが驛馬大なる橡樹の繁き枝の下を過ければアブ

サロムの頭其椽に繋りて彼天地のあひだにあがり驛馬はかれの下より行過たり十一個人見てヨアブに

告ていひけるは我アブサロムが橡樹に懸りをるを見たり三十一ヨアブ其告たる人にいひけるはさらば爾見て

何故に彼を其處にて地に墜落さとりしや我爾に銀十枚一本の帯を與へんものを十二其人ヨアブにいひ

けるは假令我わが手に銀千枚を受へきも我は手をいだして王の子に敵せじ其は王我等の聞るまへにて爾さ

アビシヤイとイツタイに命じて爾ら各少年アブサロムを害するなれさいひたまひたればなり十三我若

し反いてかれの生命を殺せば何事も王に隠るる所なければ爾自ら立て我を責んま十四時にヨアブ我

を衝通せり十五ヨアブの武器を執る十八の少者繞きてアブサロムを撃ち之を死しめたり十六かくてヨアブ

喇叭を吹ければ民イスラエルの後を追ふことを息てかへりヨアブ民を止めたればなり十七衆アブサロム

を將て叢林の中なる大なる穴に投げいれ其上に甚だ大きく石を疊あげたり是においてイスラエル皆あひひ

其天幕に逃かへり十八アブサロム我わが名を傳ふべき子なしと言て其生る間に己のために一の表柱

を建たり王の谷にあり彼あそのれの名を其表柱に與たり其表柱今日にいたるまでアブサロムの碑と解る

十九爰にザドクの子アヒマアズいひけるは請ふ我をして趨りて王にエホバの王をまもりて其敵の手を免かれ

しめたまひし音信を傳へしめよと二十ヨアブかれにいひけるは汝は今日音信を傳ふる者さなるべからず他日

に音信を傳ふべし今日は王の子死たれば汝音信を傳ふべからず二一ヨアブクシ人にいひけるは往て爾

見たる所を王に告ぐクシ人ヨアブに禮をなして走り三ザドクの子アヒマアズ再びヨアブにいひけるは請

ふ何にもあれ我をも亦クシ人の後より走ゆかしめよヨアブいひけるは我子爾は充分の音信を持ざるに何故

に走りゆかんとするや二三かれいふ何れにもあれ我をして走りゆかしめよヨアブかれにいふ走るべし是に

おひてアヒマアズ低地の路をはしりてクシ人を走越たり二四時にダビデは二の門の間に座しわたり爰に守望

者門の蓋上にのぼり石牆にのぼりて其目を擧て見るに視よ獨一人にて走きたる者あり二五守望者呼はりて

王に告ければ王いふ若し獨なれば口に音信を持つならん其人進み來りて近づけり二六守望者復一人の

走りきたるを見しかば守望者守門者に呼はりて言ふ獨一人にて走きたる者あり王いふ其人もまた音信

を持たぬなりニ七守望者言ふ我先者の走を見るにザドクの子アヒマアズの走るが如し王いひけるは

彼は善人あり善き音信を持來るならん二八アヒマアズ呼はりて王にいひけるはれがはくは平安なれさかくて

王のまへに地に伏していふ爾の神エホバは讃べきかなエホバの手をあげて王わが主に敵したる人々を付し

たまへり二九王いひけるは少年アブサロムは平安なるやアヒマアズこたへけるは王の僕ヨアブ僕を遣

はせし時我大なる噪を見たれども何を知らざるなり三十王いひけるは側にいたりて其處に立よこ乃ち側
にいたりて立つ三時に視よクシ人來れリクシ人いひけるははくは王音信を受たまへエホバ今日
爾をまもりて凡て爾たちに逆ふ者の手を免かれしめたまへり三王クシ人にいひけるは少年アブサロムは
平安なるヤクシ人いひけるははくは王わが主の敵および凡て汝に起ち逆いて害をなさんとする者は彼少
年のごまくなれよ三王大に感み門の樓にのぼりて哭り彼行ながらかくいへりわが子アブサロムよわが子
わが子アブサロムよ嗚呼われ汝に代りて死たらん者をアブサロムわが子よわが子よ
第十九章一時にヨアブに告る者ありていふ視よ王はアブサロムの爲に哭き悲しむよ二其日の勝利は凡の民
の悲哀となり其は民其日王は其子のために憂ふ言ふを聞たればなり三其日民は戦争に逃て着たる民の竊
て去がごまくなれ城邑にいりぬ四王は其面を掩へり王大聲に叫てわが子アブサロムよアブサロムわが子よ
わが子よいふ五こよにヨアブ家にいり王の許にいたりていひけるは汝今日汝の生命を救ひたる汝の
女子の生命および汝の妻等の生命を汝の妾等の生命を救ひたる汝の凡の臣僕顔を羞せたり六是は汝
おのれを惡む者を愛しおのれを愛する者を惡むなり汝今日汝が諸侯伯をも諸僕をも顧みざるを示せり今日
我さざる若しアブサロム生をりて我等皆死たらば汝の目に適ひしならん七され今立て出で汝の諸僕を慰
めてかたるべし我エホバを指て誓ふ汝若し出ずば今夜一人も汝さるも止るものなかるべし是は汝が若き時
より今にいたるまでに蒙りたる諸の災禍より汝に惡かるべし八是に於て王たちて門に坐す人々凡の民
に告て視よ王は門に坐し居るさいひければ民皆王のまへにいたる然ぞイスラエルはのく其天幕に逃
かへり九イスラエルの諸の支派の中に民皆争ひていひけるは王は我等を敵の手より救ひいだしたる我
等をハリシテ人の手より助けいだせりされ今アブサロムのために國を逃いでたり十また我等が膏そそぎ
て我等の上におきしアブサロムは戦争に死れりされ爾ら何ぞ王を導きかへらんこを言さるや十一ダビデ
王祭司サドクとアビヤタルに言つのはしけるはユダの長老等に告て言へイスラエルの全家の言語王の家に

達せしに爾ら何ぞ王を其家に導きかへる最後なるや十二爾等はわが兄弟爾らわが骨肉なりしかるに
あんぞ爾等王を導き歸る最後なるや十三又アマサに言へし爾らわが骨肉にあらすや爾ヨアブにか
はりて常にわがまへにて軍長たるべし若しからずば神我に斯なし又重れてかくなしたまへ十四かくダ
ビデユダの凡人をして其心を傾けて一人のごまくならしめければわが王にわがはくは爾らよび爾の
諸の臣僕歸りたまへさいひひるくれり十五是に於て王歸りてヨルダンにいたるにユダの人々王を迎へんこ
て來りてギルガルにいたり王を送りてヨルダンを濟らんす十六時にバホルムのベニヤミン人ゲラの子シメ
イ急きてユダの人々さるもに下りダビデ王を逐ふ十七一千のベニヤミン人彼さるもにあり亦サウルの家の
僕ザバも其十五人の男子と二十人の僕をしたがへて偕に居たりしが皆王のまへにむかひてヨルダンをこぎ
渡れり十八時に王の家族を濟しまた王の目に善き見ゆるを爲んさて濟舟を濟せり爰にゲラの子シメ
イヨルダンを濟れる時王のまへに伏して十九王にいひけるはわが主よれがはくは罪を我に歸するなれまた
王わが主のエルサレムより出たまへる日に僕が爲たる惡き事を記憶たまふなれわがはくは王これを心に
置たまふなれ二十其は僕我罪を犯したるを知ればなり故に視よ我今日ヨセフの全家の最初に下り來り
て王わが主を逐ふこ二然にセルヤの子アビシヤイ答へていひけるはシメイはエホバの膏そそぎし者を誣た
るに因て其がために誅さるべきにあらすや三二ダビデいひけるは爾らセルヤの子よ爾らのあづかるこころ
にあらす爾等今日我に敵さる今日豈イスラエルの中にて人を誅すべけんや我豈わが今日イスラエルの王と
なりたるをしらざらんや三三是をもて王はシメイに爾は誅されじさいひて王わがはくは王にサウル
の子メヒボセテ下りて王をむかふ彼は王の去し日より安かに歸れる日まで其足を飾らず其髪を飾らず又其
衣を濯ざりき三五彼エルサレムよりきたりて王を逐ふる時王わがはくはいひけるはメヒボセテ爾なんぞ我を
さるもに往ざりしや二六彼はたへけるはわが主王よわが僕我を欺けり僕はわが驢馬に鞍おきて其に乗て王の
處にゆかんさいへり僕跛者なればなり二七しかるに彼僕を王わが主に讒言せり然も王わが主は神の使

十三 アマサ大路より移されければ人皆ヨアブにしたがひ進みてビクリの子シバの後を追ふ十四 彼イスラエルの凡の支派の中を行てアベルさベテマアカに至るに少年皆集りて亦かれにしたがひゆけり十五 かくて彼等來りて彼をアベルベテマアカに圍み城邑にむかひて壘を築けり是は城の中にてりかくしてヨアブさよもにある民皆石垣を崩さんさてこれを撃居りしが十六 一箇の哲き婦城邑より呼はりていふ爾ら聽よ爾ら聽よ請ふ爾らヨアブに此に近よれ我爾に言んと言へ十七 かくれ其婦にちかよるに婦いひけるは爾はヨアブなるやかれ然りさいひければ婦彼にいふ婢の言を聽けかれ我聽くさいふ十八 婦即ち語りていひけるは昔人々誠語りて人必ずアベルにおいて索問べしさいひて事を終ふ十九 我はイスラエルの中の平和なる忠義なる者なりしかるに爾はイスラエルの中にて母さもいふべき城邑を滅さんことを求む何ゆゑに爾エホバの産業を呑み盡さんとするや二十 ヨアブ答へていひけるは決めてしからず決めてしからずわれ呑み盡し或は滅ぼさんとするこゝなし二一 其事しからずエフライムの山地の人ビクリの子名はシバさいふ者手を擧て王ダビデに敵せり爾ら只彼一人を付せ然らば我此邑をさらん婦ヨアブにいひけるは視よ彼の首級は石垣の上より爾に投いだすべし二三 かくて婦其智慧をもて凡の民の所にいたりければ人々散て邑より退きておの首級を刎てヨアブの所に投出せり是においてヨアブ喇叭を吹あらしければ人々散て邑より退きておの其天幕に還りぬヨアブはエルサレムにかへりて王の處にいたれり二三 ヨアブはイスラエルの全軍の長なりエホヤダの子ベナヤはクレテ人とベレテ人の長なり二四 アドラムは徴募長なりアヒシルの子ヨシヤバテは史官なり二五 シヤは書記官なりザドクはアビヤタルは祭司なり二六 亦ヤイル人イラはダビデの大官なり

第二十一章 一ダビデの世に年復年三年饑饉ありければダビデエホバに問にエホバ言たまひけるは是は

サウルと血を流せる其家のためなり其は彼嘗てギベオン人を殺したればなり二 是において王ギベオン人を召てかれらにいへりギベオン人はイスラエルの子孫にあらすアモリ人の殘餘なりしがイスラエルの子孫昔彼等に誓をなしたり然るにサウルイスラエルとユダの子孫に熱心なるよりして彼等を殺さん求めたり三 即ちダビデギベオン人にいひけるは我爾等のために何を爲すべきか我何の賠償を爲さば爾等エホバの産業を祝するや四 ギベオン人彼にいひけるは我等はサウルと其家の金銀を取じ又汝は我らのために爲ん五 彼等王にいひけるの中の人一人をも殺すなかれダビデいひけるは汝等言ふ所は我汝らのために爲ん五 彼等王にいひけるは我等を滅したる人我等を贖してイスラエルの境の中に居留せらしめんさて我等にむかひて謀を設けし人六 請ふ其人の子孫七人を我等に與へよ我等エホバの選みたるサウルのギベアにて彼等をエホバのまへに懸ん王いふ我與ふべし七 されど王サウルの子ヨナタンの子なるメヒボセテを惜めり是は彼等のあひだ即ちダビデとサウルの子ヨナタンの間にエホバを指して爲る誓あるに因り入されど王アヤの女リツバがサウルに生し二人の子アルモニとメヒボセテおよびサウルの女メラブがメホラ人バルツライの子アデリエルに生し五人の子を取りて九 かれらをギベオン人の手に與へければギベオン人かれらを山の上にてエホバの前に懸たり彼等七人俱に斃れて刈穫の初日即ち大麥刈の初時に死り十 アヤの女リツバ麻布を取りて刈穫の初時より其屍上にて天より雨ふるまでこれをののれのために磐の上に布きおきて晝は空の鳥を屍の上に止らしめす夜は野の獸をちかよらしめざりき十一 爰にアヤの女サウルの妾リツバの爲しこゝダビデに聞えければ十二 ダビデ往てサウルの骨と其子ヨナタンの骨をヤベシギレアデの人々の所より取り是はベリシテ人がサウルをギルボアに殺してベテシヤンの衢に懸たるをかれらが竊みさりたるものなり十三 ダビデ其處よりサウルの骨と其子ヨナタンの骨を携へ上れりまた人々其懸られたる者等の骨を斂たり十四 かくてサウルと其子ヨナタンの骨をベニヤミンの地のゼラにて其父キシの墓に葬り都て王の命じたる所を爲り此より後神其地のために祈禱を聽たまへり十五 べリシテ人復イスラエルと戦争を爲すダビデ其臣僕さよもに下りてべリシテ人と戦ひけるがダビデ困倦居りければ十六 イシビベノアダビデを殺さんと思へり(イシビベノアは巨人の子等の一人にて其槍の銅の重は三百シケルあり彼新しき劔を帶たり)十七 しかれどもセ

ルヤの子アビシヤイダビテを助けて其ペリシテ人を撃ち殺せり是においてダビテの従者かれに誓ひていひけるは汝は再 我等ととも戦争に出べからず恐らくは爾イスラエルの燈光を消さん 十八 此後再びゴアにおいてペリシテ人と戦あり時にホシヤ人シベカイ巨人の子等の一人なるサフを殺せり十九 爰に復ゴアにてペリシテ人と戦あり其處にてベテレヘム人ヤレオレギムの子エルハナンガテのゴリアテの兄弟ラミを殺せり其槍の柄は機如くなりき 二十 又ガテに戦ありしが其處に一人の身長き人あり手には各六の指あり足には各六の指ありて其數合せて二十四なり彼もまた巨人の生る者なり 二一 彼イスラエルを挑みしかばダビテの兄弟シメアの子ヨナタンかれを殺せり 二二 是らの四人はガテにて巨人の生るものなりしがダビテの手と其臣僕の手に斃れたり

第二十二章一ダビテエホバカ己を諸の敵の手とサウルの手より救ひいだしたまへる日に此歌の言をエホバに陳たり曰くニエホバはわが敵わが要害我を救ふ者三 わが磐の神なりわれ彼に倚頼むエホバはわが干わが救の角わが高槽わが逃處わが救主なり 爾我をすくひて暴き事を免れしめたまふ 四 我ほめまつるべきエホバに呼はりてわが敵より救はる五 死の波濤われを繞み邪曲なる者の河われをふそれしむ六 冥府の繩われをさりまき死の機檻われにのぞめり七 われ艱難のうちにエホバをよびまたわが神に頼りエホバ其殿よりわが聲をききたまひわが喊呼其耳にいりぬ八 爰に地震ひ撼き天の基 動き震へりそは彼怒りたまへばなり九 烟其鼻より出たのぼり火その口より出て焼きつくしむ此の炭かれより燃いづ十 彼天を傾けて下りたまふ黒雲その足の下にあり十一 ケルブに乗て飛び風の翼の上にあらはれ 十二 其周圍に黒暗をおき集まれる水密雲を暮したまふ 十三 そのまへの光より炭火燃いづ 十四 エホバ天より雷をくだし最高者 聲をいだし 十五 又箭をはなちて彼等をちらし 電をはなちて彼等をうちやぶりたまへり 十六 エホバの吐略その鼻の氣吹の風によりて海の底あらはれいで地の基あらはになりぬ 十七 エホバ上より手をたれて我をさり洪水の中より我を引あげ 十八 またわが勁き敵および我をにくむ者より我をすくひたまへり 彼等は我よりも強かりけ

ればなり 十九 彼等はわが當災の日にわれに臨めりされごエホバわが支柱となり 二十 我を廣き處にひきいだしわれを喜ぶがゆゑに我をすくひたまへり 二一 エホバわが義にしたがひて我に報い吾手の清潔にしたがひて我に酬したまへり 二二 其はわれエホバの道をまもり惡をなしてわが神に離れしことなればなり 二三 その律例は皆わがまへにあり其法憲は我これを離れざるなり 二四 われ神にむかひて完全かり又身を守りて惡を避たり 二五 故にエホバわが義にしたがひ其目のまへにわが潔白あるに 循てわれに報いたまへり 二六 矜恤者には 爾矜恤ある者のことごとくし完全人には 爾完全者のことごとくし 二七 潔白者には 爾潔白ものことごとくし 邪曲者には 爾嚴刻者のことごとくしたまふ 二八 難る民は爾これを救たまふ然と矜高者は 爾の目見て之を卑したまふ 二九 エホバ 爾はわが燈火なりエホバわが暗をてらしたまふ 三十 われ爾によりて軍隊の中を驅さほりわが神に由て石垣を飛こゆ 三一 神はその道まつたしエホバの言は純粹し彼は都て己に倚頼む者の干となりたまふ 三二 夫エホバのほか誰か神たらん我等の神のほか孰か磐たらん 三三 神はわが強き堅素にてわが道を全うし 三四 わが足を塵の如くなし我をわが崇 耶に立しめたまふ 三五 神わが手に戦を教へたまへばわが腕は 鋼の弓をも挽を得 三六 爾我に爾の救の干を與へ爾の慈悲われを大ならしめたまふ 三七 爾わが身の下の歩を厭靡しめたまへば我 蹶 ふるへす 三八 われわが敵を追て之をほろぼし之を絶すまではかへらす 三九 われ彼等を絶し彼等を破碎せ彼等たちえずわが足の下にたふる 四十 汝 戦 のために力をもて我に帶しめ又われに逆ふ者わが下に 拜 跪しめたまふ 四一 爾わが敵をして我に後を見せしめたまふ 我を惡む者はわれ之をほろぼさん 四二 彼等環視せご救ふ者なしエホバを仰視せ彼等に應たまはず 四三 地の塵の如くわれ彼等をうちくだき又衢間の泥のごこくわれ彼等をふみにじる 四四 爾われをわが民の争闘より救ひ又われをまもりて異邦人等の首長となしたまふわが知ざる民我につかふ 四五 異邦人等は我に媚び耳に聞き均しく我にしたがふ 四六 異邦人等は衰へ其衛所より戰慄て出づ 四七 エホバは活る者なりわが磐は讚べきかなわが救の磐の神はわがめまつるべし 四八 此神われに仇を報いしめ國々の民わが下にくだらしめたまひ 四九 又わが敵の中より我

を出し我にさからふ者の上に我をあげまた強暴人の許よりわれを救ひいだしたまふ 五十是故にエホバよわれ
 異邦人等のうちに爾をほめ爾の名を稱へん 五一エホバその王の救をばいにしその受膏者なるダビデ
 と其裔に永久に恩を施したまふなり

第二十三章一ダビデの最後の言は是なりエサイの子ダビデの詔言即ち高く擧られし人ヤコブの神に膏を
 そくかれし者イスラエルの善き歌人の詔言ニエホバの靈わが中にありて言たまふ其詔言わが舌にあり三イス
 ラエルの神いひたまふイスラエルの磐石に語たまふ人を正く治むる者神を畏れて治むる者は四日の出の朝
 の光のごとき雲なき朝のごとき又雨の後の日の光明によりて地に蒔いづる新草のごとき五わが家かく神さ
 もにあるにあらずや神萬具備りて鞏固なる永久の契約を我になしたまへり吾が救喜を皆いかで生ぜ
 しめたまはざらんや六しかれども邪なる者は荆棘の如くにして手をもて取がたければ皆どもにすてられん
 七之にふるゝ人は鐵槍の柄を其身に備ふべし是は火にやけて焼たゆるにいたらん八是等はダビデの勇士
 の名なりタクモニ人ヤシヨベアムは三人衆の長なりしが一時八百人にむかひて槍を揮ひて之を殺せり
 九彼の次はアホア人ドの子エルアザルにして三勇士の中の者なり彼其處に戦はんとて集まれるベリシテ人
 にむかひて戦を挑みイスラエルの人々の進みのぼれる時にダビデさうもに居たりしが十たちてベリシテ人
 を撃ち終に其手疲て其手劍に固着て離れざるにいたれり此日エホバ大なる救拯を行ひたまふ民は彼の
 跡にしたがひゆきて只獲取而已なり十一彼の次はハラリ人アゲの子シヤンマなり一時ベリシテ人一隊さ
 なりて集まれり彼處に扁豆の満たる地の處あり民ベリシテ人のまへより逃るに十二彼其地の中に立て禦さ
 べリシテ人を殺せりしかしてエホバ大なる救拯を行ひたまふ十三刈穫の時に三十人衆の首長なる三人
 下りてアドラムの洞穴に行てダビデに詣り時にベリシテ人の隊レバイムの谷に陣されり十四其時ダビデ
 は要害に居りベリシテ人の先陣はベテレヘムにあり十五ダビデ慕ひていひけるは誰かベテレヘムの門にあ
 る井の水を我にのましめんかと十六三勇士乃ちベリシテ人の陣を衝き過てベテレヘムの門にある井の水を

汲取てダビデの許に携へ來り然るにダビデ之をのむことをせずこれをエホバのまへに灌ぎて十七いひけるは
 エホバよ我決てこれを爲し是は生命をかけて往し人の血なりと彼これを飲こを好まざりき三勇士は是等
 の事を爲り十八ヤルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人衆の首たり彼三百人にむかひて槍を揮
 ひて殺せり彼其三十人衆の中に名を得たり十九彼は三十人衆の中の最も尊き者にして彼等の長さな
 り然るに三人衆には及ばざりき二十エホバの子カブツエルのベナヤは勇氣あり多くの功績ありし者な
 り彼モアブの人の獅子の如きもの二人を撃殺せり彼は亦雪の時に下りて穴の中に獅子を撃殺せり二彼ま
 た容貌魁偉たるエシブト人を撃殺せり其エシブト人は手に槍を持たるに彼は杖を執て下りエシブト人の手よ
 り槍を振さりて其槍をもてこれを殺せり三エホバの子ベナヤは是等の事を爲し三十勇士の中に名を得たり
 四三彼は三十人衆の中に尊かりしかども三人衆には及ばざりきダビデかれを參議の中に列しむ 二四三
 十人衆の中にはヨアブの兄弟アサヘルベテレヘムの子エルハナン二五ハロデ人シヤンマハロデ人
 エリカニニパルテ人ヘレツテコア人イツケシの子イラニセア子トテ人アビエセルホシヤ人メブアンナイニ
 アホア人ザルモン子トバ人マハライニ九子トバ人バアナの子ヘレブベニヤミンの子孫のギベアより出た
 るリバイの子イツタイ三十三ヒラト人ベナヤガアシの谷のヒダイ三二アルパテ人アビアルボンバホルム人
 アズマウテ三十三シヤルボニ人エリヤバキゾニ人ヤセン三三三巴拉リ人シヤンマの子ヨナタンアラリ人シヤ
 ラルの子アヒアム三四ウルの子エリベレテマアカ人ヘベルギロ人アヒトベルの子エリアム三五カルメル人
 ヘツライアルバ人バアライ三六ソバのナタンの子イガルガド人バニ三七アンモニ人セルクセルヤの子ヨ
 アブの武器を執る者ヘエロテ人ナハライ三八エテリ人イラエテリ人ガレブ三九ヘテ人ウリヤあり都三十
 七人

第二十四章一エホバ復イスラエルにむかひて怒を發しダビデを感動して彼等に敵對しめ往てイスラエルさ
 エダを敷へよと言しめたまふ二王乃ちヨアブおよびヨアブさうもにある軍長等にいひけるは請ふイス

ラエルの諸の支派の中をダンよりベエルシバに至るまで行めぐりて民を核へ我をして民の數を知しめよヨ
 アア王にいひけるは幾何あるともれがはくは汝の神エホバ民を百倍に増たまへ而して王わが主の目それを
 視るにいたれ然りさいへども王わが主の此事を悦びたまふは何故ぞやと四されど王の言ヨアア軍長
 等に勝ければヨアア軍長等王の前を退きてイスラエルの民を核へに往り五かれらヨルダンを濟りアロ
 エルより即ち河の中の邑より始めてガドにいたりヤセルにいたり六ギレアデにいたりタテムホデシの地にい
 たり又ダニヤンにいたりてシドンに旋り七またツロの城にいたりヒビ人カナン人の諸の邑にいたりユダの
 南に出てベエルシバにいたり入彼等國を徧く行めぐり九月廿日を経てエルサレムに至り九ヨアア人
 口の數を王に告たり即ちイスラエルに劍を抜く壯士八十萬ありき又ユダの人は五十萬ありき十ダビデ民の數
 を書し後其心自ら責む是においてダビデエホバにいふ我これを爲して大に罪を犯したりれがはくはエホ
 バの僕を罪を除きたまへ我甚だ愚なる事を爲りき十一ダビデ朝興し時エホバの言ダビデの先見者も
 る預言者がテに臨みて曰く十二往てダビデに言へエホバ斯いふ我汝に三を示す汝其一を擇べ我其を汝
 に爲んき十三ガデダビデの許にいたりこれに告てこれにいひけるは汝の地に三年の饑饉いたらんり或は汝
 敵に追れて三月其前に遁んり或は爾の地に三日の疫病あらんり爾考へてわが如何なる答を我を遣はせ
 し者に爲べきかを決めよ十四ダビデガデにいひけるは我大に苦しむ請ふ我等をしてエホバの手に陥らしめ
 よ其憐憫大なればなり我をして人の手に陥らしむるなけれ十五是においてエホバ朝より集會の時まで疫
 病をイスラエルに降したまふダンよりベエルシバまでに民の死者七萬人なり十六天の使其手をエルサ
 レムに伸てこれを滅さんしたりしエホバ此害惡を悔て民を滅す天使にいひたまひけるは是なり今
 汝の手を住めよ時にエホバの使はエブス人アラウナノ禾場の傍にあり十七ダビデ民を撃つ天使を見
 し時エホバに申していひけるは嗚呼我は罪を犯したり我は惡き事を爲たり然も是等の羊群は何を爲たるや
 請ふ爾の手を我をわが父の家に対たまへき十八此日ガデダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りて

ス人アラウナノ禾場にてエホバに壇を建よ十九ダビデガデの言に隨ひエホバの命じたまひしことこのばれ
 り二十アラウナ觀望て王其臣僕の己の方に進み來るを見アラウナ出て王のまへに地に伏て拜せり二一かく
 てアラウナいひけるは何に因てか王わが主僕の所にきませるやダビデいひけるは汝より禾場を買ひりエ
 ホバに壇を築きて民に降る災をさめんとてなり二二アラウナダビデにいひけるは願くは王わが主其目に
 善き見ゆるものを取て獻たまへ燔祭には牛あり薪には打禾車牛の器ありき二三アラウナこれを悉く王に
 奉呈ぐアラウナ又王にれがはくは爾の神エホバ爾を受納たまはんことをいふ二四王アラウナにいひけ
 るは斯すべからず我必ず値をばらひて爾より買さらん我費なしに燔祭をわが神エホバに獻ぐることをせ
 じとダビデ銀五十シケルにて禾場と牛を買されり二五ダビデ其處にてエホバに壇を築き燔祭と酬恩祭を獻
 げたり是においてエホバ其地のために祈禱を聽たまひて災のイスラエルに降ること止りぬ

撒母耳後書 終

列王紀略上

第一章 一爰にダビデ王年邁みて老い寢衣を衣するも温らざりければ二其臣僕等彼にいひけるは王わが主のために一人の若き處女を求めしめて之をして王のまへにたちて王の左右さあり汝の懷に臥て王わが主を暖めしめん三彼等乃ちイスラエルの四方の境に美き童女を求めてシユナミ人アビシヤクを得て之を王に携きたれり四此童女甚だ美しくして王の左右さなり王に事たり然る王之と交はらざりき五時にハギテの子アドニヤ自ら高くし我は王とならんと言て己のために戰車と騎兵および自己のまへに驅る者五十人を備へたり六其父は彼が生れてより已來汝何故に然するやと言てかれを痛しめし事なかりきアドニヤも亦容貌の甚だ美き者にてアブサロムの次に生れたり七彼ゼルヤの子ヨアブおよび祭司アビヤタルと商議ひしかば彼等之に従ひゆきて助けたり八されど祭司ザドクとエホヤダの子ベナヤと預言者ナタンおよびシメイとレイナらびにダビデに屬したる勇士はアドニヤに與せざりき九アドニヤエンロゲルの近邊なるゾヘンテの石の傍にて羊と牛と肥畜を宰りて王の子なる己の兄弟および王の臣僕なるユダの人を盡く請けり十されども預言者ナタンとベナヤと勇士さおのれの兄弟ソロモンとをば招かざりき十一爰にナタンソロモンの母バテシバに語りていひけるは汝ハギテの子アドニヤが王となれるを聞ざるかしかるにわれらの主ダビデはこれを知ざるなり十二されば請ふ來れ我汝に計を授て汝をして己の生命と汝の子ソロモンの生命を救しめん十三汝往てダビデ王の所に入り之にいへ王わが主よ汝は婢に誓ひて汝の子ソロモンは我に繼て王となりわが位に坐せんといひたまひしにあらすや然にアドニヤ何故に王となれるやと十四われまた汝が尙其處にて王と語ふ時に汝に次て入り汝の言を證すべしと十五是に在りてバテシバ寢室に入りて王の所にいたるに王は甚だ老てシユナミ人アビシヤク王に事へ居たり十六バテシバ身を鞠め王を拜す王いふ何なるや十七かれ王にいひけるはわが主汝は汝の神エホバを指て婢に汝の子ソロモンは我に繼て王となりわが位に坐せんと言ひたまへり十八しかるに視よ今アドニヤ王となれり而て王わが主汝は知たまはず

レツワウキリヤクシヤウ

第一章

自一至十八節

四百八十一

十九 彼は牛と肥畜を羊を饒く宰りて王の諸子および祭司アビヤタルと軍の長ヨアブを招けりされど汝の僕ソロモンをば招きざりき 二十 汝王わが主よイスラエルの目皆汝に注ぎ汝が彼等に誰が汝に繼いで王わが主の位に坐すべきを告るを望む 二一 王わが主の其父祖と共に寝たまはん時に我らわが子ソロモンは罪人を見做さるるにいたらん 二二 マテシバ尙王と語ふうちに見預言者ナタンも亦入りければ 二三 人々王に告て預言者ナタン此にありと曰ふ彼王のまへに入り地に伏て王を拜せり 二四 しかしてナタンいひけるは王わが主 汝はアドニヤ我に繼いで王となりわが位に坐すべし 二五 彼は今日下りて牛を肥畜を羊を饒く宰りて王の諸子と軍の長等と祭司アビヤタルを招けりしかして彼等はアドニヤのまへに飲食してアドニヤ王を壽かれと言ふ 二六 されど汝の僕なる我と祭司ザドクとエホヤダの子ベナヤと汝の僕ソロモンとは彼請かざるなり 二七 此事は王わが主の爲たまふ所なるかしかるに汝誰が汝に繼いで王わが主の位に坐すべきを僕に知せたまはざるなり 二八 王答ていふマテシバをわが許に召せ 彼乃ち王のまへに入て王のまへにたつに 二九 王誓ひていひけるはわが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしエホバは活く三十 我イスラエルの神エホバを指て誓ひて汝の子ソロモン我に繼いで王となり我に代りてわが位に坐すべし 三一 我いひしごとくに我今日爲すべし 三二 是においてマテシバを鞠め地に伏て王を拜し願くはわが主ダビデ王長久に生ながらたまへといふ 三三 王答ていひけるはわが許に祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤを召せ 彼等乃ち王のまへに来る 三四 王彼等にいひけるは汝等の主の臣僕を伴ひわが子ソロモンをわが身の騾に乗せ彼をギホンに導き下り 三五 彼處にて祭司ザドクと預言者ナタンは彼に膏をそそぎてイスラエルの上に王を爲すべし しかして汝ら喇叭を吹てソロモン王を壽かれと言へ 三六 かくして汝ら彼に隨ひて上り來るべし 彼は來りてわが位に坐し我に代りて王となるべし 我彼を立てイスラエルの王と爲す 三七 王答ていひけるはアメン 彼はかくは王わが主の神エホバ然言たまはんことを三七 彼はかくはエホバ王わが主と爲すもに在せしごとくソロモンと爲すもに在してそ

の位をわが主ダビデ王の位よりも大いならしめたまはんことを 三八 斯て祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ並にケンテ人とベレテ人下りソロモンをダビデ王の騾に乗せて之をギホンに導きいたれり 三九 しかして祭司ザドク幕屋の中より膏の角を取てソロモンに膏をそそぎてわが喇叭を吹きならし民みなソロモン王を壽かれといへり 四十 民みな彼に隨ひ上りて笛を吹き大いに喜祝ひ地はかれらの聲にて裂たり 四一 アドニヤおよび彼等と居たる賓客其食を終たる時に皆これを聞きヨアブ喇叭の聲を聞いてひけるは城邑の中の聲音何ぞ喧囂や 四二 彼が言を聞くに視よ祭司アビヤタルの子ヨナタン來るアドニヤ彼にいひけるは入よ汝は勇ある人なり 嘉音を持きたるならん 四三 ヨナタン答へてアドニヤにいひけるは誠にわが主ダビデ王ソロモンを王となしたまへり 四四 王祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ並にケンテ人とベレテ人とベレテ人をソロモンと爲すもに遣したまふ即ち彼等はソロモンを王の騾に乗せてゆき 四五 祭司ザドクと預言者ナタンギホンにて彼に膏をそそぎて王となせり 而して彼等其處より歡て上るが故に城邑は喧囂し汝らに聞く聲音は是なり 四六 又ソロモン國の位に坐し 四七 且王の臣僕來りてわれらの主ダビデ王に祝を陳て願くは汝の神ソロモンの名を汝の名よりも美し其位を汝の位よりも大ならしめたまへと言ひし して王は牀の上にて拜せり 四八 王また斯いへりイスラエルの神エホバはほむべきかなエホバ今日わが位に坐する者を與たまひてわが目亦これを見るなり 四九 アドニヤとある賓客皆驚愕起て各其途に去りゆけり 五十 茲にアドニヤソロモンの面を恐れ起て往き壇の角を執へたり 五一 或人ソロモンに告ていふアドニヤソロモン王を畏る彼壇の角を執て願くはソロモン王今日我に劍をもて僕を殺じと誓ひたまへと言たり 五二 ソロモンいひけるは彼もし善人となるならば其髮の毛一すぢも地におちざるべし 然る彼の中に惡の見るあらば死しむべし 五三 ソロモン王乃ち人を遣て彼を壇より擲下らしむ彼來りてソロモン王を拜しければソロモン彼に汝の家に往さいへり

く丈夫のごとく爲れ三汝の神エホバの職守を守り其道に歩行み其法憲を其誠命を其律例を其証言をモーセの律法に録されたるごとく守るべし然らば汝凡て汝の爲さるるごとく凡て汝の向ふところにて榮ゆべし又エホバは其誓に我の事に付て語りて若汝の子等其道を慎み心を盡し精神を盡して直實をもて再前に歩ばイスラエルの位に上る人汝に缺ることなかるべしと言たまひし言を堅したまはん又汝はセルヤの子ヨアブが我に爲たる事即ち彼がイスラエルの二人の軍の長子ルの子アブサラエルの子アマサに爲たる事を知る彼此二人を切殺し太平の時に戦の血を流し戦の血を己の腰の周圍の帶に染たり六故に汝の智慧にしたがひて事を爲し其白髪を安然に墓に下らしむるなれ但しギレヤデ人バルジライの子等に恩恵を施し彼等を汝の席にて食ふ者の中にあらしめよ彼等はわが汝の兄弟アブサロムの面を避て逃し時我に就たるなり入視よ又バホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ汝さるるもに在り彼はわがマハナイムに往し時勵しき語言をもて我を誑へり然も彼ヨルダンに下りて我を迎へたれば我エホバを指て誓ひて我劍をもて汝を殺さじさいへり九然りさいへぎも彼を幸なき者とする勿れ汝は智慧ある人なれば彼に爲べき事を知るなり血を流して其白髪を墓に下すべし二十斯てダビデは其父祖と偕に寝りてダビデの城に葬らる十一ダビデのイスラエルに王たりし日は四十年なり即ちヘブロンにて王たりし事七年エルサレムにて王たりし事三十三年十二ソロモン其父ダビデの位に坐し其國は堅固く定まりぬ十三爰にハギテの子アドニヤソロモンの母バテシバの所に來りければバテシバいひけるは汝は平穩なる事のため來るや彼いふ平穩なる事のためなり十四彼又いふ我は汝に言さんとする事ありきバテシバいふ言されよ十五かれいひけるは汝の知ごこく國は我の有にしてイフラエル皆其面を我に向て王となさん爲りしに國は轉てわが兄弟の有さなれり其彼の有さなれるはエホバより出たるなり十六今我一の願を汝に求む請わが面を黜くるなれバテシバかれにいひけるは言されよ十七彼いひけるは請ふソロモン王に言て彼をしてシユナミ人アビシヤガを我に與て妻となさしめよ彼は汝の面を黜けざるべければなり十八バテシバいふ善し我汝のため

に王に言んご十九かくてバテシバアドニヤのために言きてソロモン王の許に至りければ王起てかれを迎へ彼を拜して其位に坐をほり王母のために坐を設けしむ乃ち其右に坐せり二十しかしてバテシバいひけるは我一の細小き願を汝に求むわが面を黜くるなれ王かれにいひけるは母上よ求めたまへ我汝の面を黜けざるなりニ彼いひけるは請ふシユナミ人アビシヤガをアドニヤに與て妻となさしめよニソロモン王答て其母にいひけるは何ぞアドニヤのためにシユナミ人アビシヤガを求めらるるや彼のために國をも求められよ彼は我の兄なればなり彼を祭司アビヤタルとセルヤの子ヨアブのために求められよニソロモン王乃ちエホバを指て誓ひていふ神我に斯なし又重斯なしたまへアドニヤは其身の生命を喪はんとて此言を言いだせり二四我を立てわが父ダビデの位に上しめ其約せしごこく我に家を建たまひしエホバは生くアドニヤは今日戮さるべしとニ五ソロモン王エホバの子ベナヤを遣はしければ彼アドニヤを撃て死しめたり二六王また祭司アビヤタルにいひけるは汝の故田アナトテにいたれ汝は死に當る者なれども嚮にわが父ダビデのまへに神エホバの匱を昇き又凡てわが父の艱難を受たる處にて汝も艱難を受たれば我今日は汝を戮さじとニ七ソロモンアビヤタルを逐いだしてエホバの祭司たらしめざりき斯エホバがシロにてエリの家につきて言たまひし言應たり二八爰に其風聞ヨアブに達りければヨアブエホバの幕屋に遁れて壇の角を執たり其はヨアブは轉てアブサロムには隨はざりしかどもアドニヤに隨ひたればなり二九ヨアブがエホバの幕屋に遁れて壇の傍に居るこソロモンに聞えければソロモンエホバの子ベナヤを遣はしひけるは往て彼を撃て三十ベナヤ乃ちエホバの幕屋にいたり彼にいひけるは王斯言ふ出來れ彼いひけるは否我は此に死んさベナヤ反て王に告てヨアブ斯言ひ斯我に答へたりさいふ三一王ベナヤにいひけるは彼が言ふごこく爲し彼を撃て葬りヨアブが故なくして流したる血を我さわが父の家より除去べし三二又エホバはヨアブの血を其身の首に歸したまふべし其は彼は已よりも義く且善りし二の人を撃ち劍をもてこれを殺したればなり即ちイスラエルの軍の長子ルの子アブサラエルの軍の長エテルの子アマサを殺せり然るに吾父ダビデは

與り知ざりき三三されば彼等の血は長久にヨアブの首に其苗裔の首に吸すべし然らば其苗裔の其家
 其位には上ホバよりの平安永久にあるべし三四エホヤダの子ベナヤすなはち上りて彼を撃ち彼を殺
 せり彼は野にある己の家を葬らる三五王乃ちエホヤダの子ベナヤをヨアブに代て軍の長とせり王また祭
 司ザドクをしてアピヤタルに代しめたり三六又王人を遣てシメイを召て之に曰けるはエルサレムに於て汝
 の爲に家を建て其處に住み其處より此にも彼にも出るなれ三七汝も出てキテロン川を濟る日には汝
 に知れ汝必ず戮するべし汝の血は汝の首に歸せん三八シメイ王にいひけるは此言は善し王わが主の
 言たまへるごさく僕然らずべし三九シメイ日久しくエルサレムに住り三九三年の後シメイの二人の僕が
 テの王マアカの子アキシの所に逃されり人々シメイに告ていふ視よ汝の僕はガテにありき四十シメイ
 乃ち起て其驢馬に鞍置きガテに往てアキシに至り其僕を尋れたり即ちシメイ往て其僕をガテより攜來り
 しガ四一シメイのエルサレムよりガテにゆきて歸りしとソロモンに聞えければ四二王人を遣てシメイを召て
 之にいひけるは我汝をしてエホバを指て誓しめ且汝を戒めて汝確に知れ汝が出て此彼に歩く日に
 は汝必ず戮するべしと言しにあらすや又汝は我に我聞る言葉は善しといへり四三しかるに汝なんぞエ
 ホバの誓さわが汝に命じたる命令を守ざりしや四四王又シメイにいひけるは汝は凡て汝の心の知る諸の
 惡即ち汝わが父ダビデに爲たる所を知るエホバ汝の惡を汝の首に歸したまふ四五されどソロモン王
 は福祉を蒙らんまたダビデの位は永久にエホバのまへに固く立べし四六王エホヤダの子ベナヤに命じけ
 れば彼出てシメイを撃ちて死しめたりしかして國はソロモンの手に固く立り
 第三章 一ソロモンエツプトの王パロと縁を結びパロの女を娶て之を攜來り自己の家エホバの家エ
 サレムの周圍の石垣を建築こを終るまでダビデの城に置り二當時までエホバの名のために建たる家なかり
 ければ民は崇邱にて祭を爲りソロモンエホバを愛し其父ダビデの法憲に歩めり但し彼は崇邱に
 て祭を爲し香を焚り四爰に王ギベオンに往て其處に祭を爲んさせり其は彼處は大なる崇邱なればなり

即ちソロモン一千の燔祭を其壇に獻たり五ギベオンにてエホバ夜の夢にソロモンに顯れたまへり神いひた
 まひけるは我何を汝に與ふべきか汝求めよ六ソロモンいひけるは汝は汝の僕わが父ダビデが誠實と公義
 と正心を以て汝と共に汝の前に歩みしに因て大なる恩恵を彼に示したまへり又汝彼のために此大なる恩
 恵を存て今日のごさくかれの位に坐する子を彼に賜へり七わが神エホバ汝は僕をして我父ダビデに代
 て王とならしめたまへり而るに我は小き子にして出入することを知ず八且僕は汝の選みたまひし汝の民の
 中におり即ち大なる民にて其數衆くして數ふることも書すことも能はざる者なり九是故に聽き別る心を
 僕に與へて汝の民を鞠しめ我をして善惡を辨別ることを得させしめたまへ誰か汝の此夥多き民を鞠くことを
 得んぞ十ソロモン此事を求めければ其言主の心になへり十一是に於いて神かれにいひたまひけるは汝
 此事を求めて己の爲に長壽を求めず又己の敵の生命をも求めずして惟
 を聽き別る才智を求めたるに因て十二視よ我汝の言に循ひて爲り我汝に賢明く聰慧き心と與ふれば汝
 の先には汝の如き者なく汝の後には汝の如き者興らざるべし十三我亦汝の求めざる者即ち富貴貴さを
 も汝に與ふれば汝の生の涯王等の中に汝の如き者あらざるべし十四又汝若汝の父ダビデの歩し如
 く吾道に歩みてわが法憲と命令を守らば我汝の目を長くせん十五ソロモン目寤て視るに夢なりき斯てソ
 ロモンエルサレムに至りエホバの契約の櫃の前に立ち燔祭を獻げ酬恩祭を爲して其諸の臣僕に饗宴を爲
 り十六爰に娼妓なる二人の婦王の所に來りて其前に立ちしが十七一人の婦いひけるはわが主我此婦
 は一の家に住む我此婦と偕に家にありて子を生子し居りし者なし家は只我等二人のみ十九然るに此婦其子の
 して我等偕にありき家には他人の我らと偕に居りし者なし家は只我等二人のみ十九然るに此婦其子の
 上に臥たるによりて夜の中に其子死たれば二十中夜に起て婢の眠る間にわが子をわれの側より取りて之を
 己の懷に臥しめ己の死たる子をわが懷に臥しめたり二朝に及びて我わが子に乳を飲せんさて興て見る
 に死ぬたり我朝にいたりて其を熱く視るに其はわが生るわが子にはあらざりしと三今一人の婦いふ否活

彼等を其足の跡の下に置たまふを待り、然るに今わが神エホバ我に四方の太平を賜ひて敵もなく、破もなげれば、我はエホバのわが父ダビデに語りわが汝の代に汝の位に上しむる汝の子其人はわが名の爲に家を建べしと言たまひしに、循ひてわが神エホバの名のために家を建入さす六されば、汝命じてわがためにレバノンより、檜を伐出さしめよわが、僕、汝の僕共にあるべし、又我は凡て汝の言ふ如く、汝の僕の賃銀を汝に付すべし、其は汝の知ごさく我等の中には、シドン人の如く木を砍に巧みある人なければなり、セヒラムソロモンの言を聞いて大に喜び、言けるは、今日エホバに稱譽あれ、エホバダビデに此夥多しき民を治むる賢き子を與たまへり、セヒラムソロモンに言遣りけるは、我汝が言ひ遣したる所の事を聽り、我、檜の材木を海樹の材木に付ては、凡て汝の望むごさく爲すべし、九わが、僕、レバノンより海に持下らんしかして、我これを海より、檜にみて、汝が我に言ひ遣す處におくり、其處にて之をくづすべし、汝之を受よ、又汝はわが家のために食物を與へて、わが望を成せ、十、期て、セヒラムソロモンに、其凡て望む如く、檜の材木を松の材木を與へたり、十一、又ソロモンは、セヒラムに、其家の食物として、小麥二萬石を與へ、また、清油二十石をあたへたり、ソロモンの年々、セヒラムに、與へたり、十二、エホバ其言たまひしごさく、ソロモンに、智慧を賜へり、また、セヒラムソロモンの間、睦しくして、二人偕に契約を結べり、十三、爰に、ソロモン王、イスラエルの全地に、徵募人を與せり、其徵募人の數は、三萬人なり、十四、ソロモンかれらを一ヶ月交代に、一萬人づゝ、レバノンに遣せり、即ち、彼等は、一ヶ月レバノンに、一ヶ月家にあり、アドニラムは、徵募人の督者なり、十五、ソロモン負載者七萬人、山に於て石を砍る者八萬人あり、十六、外に、又其工事の長なる、官吏三千三百人ありて、工事に作く民を統たり、十七、かくて、王命じて、大なる石、貴き石を鑿出さしめ、琢石を以て家の基礎を築かしむ、十八、ソロモンの建築者、セヒラムの建築者、および、ゲバル人之を、砍り、斯彼等材木を、石を家を建るに備へたり、

第六章 一、イスラエルの子孫のエジプトの地を出たる後、四百八十年、ソロモンのイスラエルに王たる第四年、ソフの月、即ち二月に、ソロモンエホバのために家を建るごさを始めたり、二、ソロモン王のエホバの爲に建た

る家は、長六十キユビト、潤二十キユビト、高三十キユビトなり、三、家の拜殿の廊は、家の潤に循ひて、長二十キユビト、家の前の其潤、十キユビトなり、四、彼家に造り附の格子ある窓を施たり、五、又家の牆壁に附て、四周に、連接屋を建て、家の牆壁、即ち、拜殿と神殿の牆壁の周圍に、環らせり、又、四周に、旁房を造れり、六、下層の連接屋は、潤五キユビト、中層の潤六キユビト、第三層の潤七キユビトなり、即ち、家の外に、階級を造り、環らして、何物をも家の牆壁に挿入せしむ、七、家は建る時に、鑿石所に、鑿り預備たる石にて、造りたれば、造れる間に、家中には、鑿も、鑿も、其外の鐵器も、聞えざり、八、中層の旁房の戸は、家の右の方にあり、螺旋梯より、中層の房にのぼり、中層の房より、第三層の房にいたるべし、九、斯彼家を建終り、檜の椽板をもて、家を葺り、十、又家に附て、五キユビトの高なる、連接屋を、建環し、檜をもて、家に、交接たり、十一、爰に、エホバの言、ソロモンに、臨みて、曰く、十二、汝、今、此家を、建つ若し、汝わが法憲に、歩みわが律例を行ひ、わが諸の誠命を守りて、之にしたがひて、歩まば、われは、わが汝の父、ダビデに、言し、語を、汝に、固うすべし、十三、我、イスラエルの子孫の中に、住わが、民、イスラエルを、棄ざるべし、十四、斯ソロモン家を、建終れり、十五、彼、檜の板を以て、家の牆壁の裏面を作り、則ち、家の牀板より、頂格の牆壁まで、木をもて、其裏面を、はり、また、松の板を以て、家の牀板を、はり、十六、又、家の奥に、二十キユビトの室を、牀板より、牆壁まで、檜をもて、造れり、即ち、家の内に、至聖所なる、神殿を、造れり、十七、家、即ち、前にある、拜殿は、四十キユビトなり、十八、家の内の、檜は、匂さ、咲る花を、雕刻める者を、り、皆、檜にして、石は、見えざり、十九、神殿は、彼其處に、エホバの契約の櫃を、置ん、さて、家の内の中に、設けたり、二十、神殿の内は、長二十キユビト、潤二十キユビト、高二十キユビトなり、純金を、もて、之を、蔽ひ、又、檜の壇を、覆へり、二、又、ソロモン、純金を、もて、家の内を、蔽ひ、神殿の前に、金の鏈をもて、間隔を、造り、金を、もて、之を、蔽へり、三、又、金を、もて、殘さ、ころなく、家を、蔽ひ、遂に、家を、飾るごさを、悉く、終たり、また、神殿の、傍にある、壇は、皆、金を、もて、蔽へり、三、神殿の内に、橄欖の木をもて、二の、ケルビムを、造れり、其、高、十キユビト、二、四、其、ケルプの、一の、翼は、五キユビト、又、其、ケルプの、他の、翼も、五キユビトなり、一の、翼の、末より、他の、翼の、末までは、十キユビトあり、二、五、他の、ケルプも、十キユビトなり、其、ケルビムは、偕に、同、量、同、形、あり、二、六、此の、ケル

アの高十キエト彼ケルプも亦しかりニセソロモン家の内の中にケルビムを置るケルビムを展しければ此ケルプの翼は此壁に及び彼ケルプの翼は彼の壁に及びて其兩翼家の中に相接れり二八彼金をもてケルビムを蔽へり二九家の周囲の壁には皆内外ともにケルビムを造れり其木匠の門柱は五分の一なり
 三二 其二の扉も亦橄欖の木なりソロモン其上にケルビムを造れり花の形を彫刻し金をもて蔽へり即ちケルビムを造る上には金を鍍たり三三 斯ソロモン亦拜殿の月のために橄欖の木を造れり即ち四分の一なり三四 其二月は松の木にして此月の兩扉は摺むべく彼月の兩扉も摺むべし三五 ソロモン其上にケルビムを造る上には金を鍍たり三三 斯ソロモン亦拜殿の月のために橄欖の木を造れり即ち四分の一なり三四 其二月は松の木にして此月の兩扉は摺むべく彼月の兩扉も摺むべし三五 ソロモン
 層の厚板一層をもて内庭を造れり三七 第四年のツフの月にエホバの家を築き 三八 第十一年の月の月即ち八月に凡て其箇條のごとく其定例のごとくに家成りぬ斯ソロモン之を建るに七年を
 第七年一ソロモン己の家を建し十三年を経て全く其家を建終たり二彼レバノン森の家を建たり其長は百キエト其潤は五十キエト其高は三十キエトなり 檜の柱 四行ありて柱の上に檜の梁あり三四十五本の柱の上なる梁の上は檜にて蓋へり柱は一行に十五本あり四また窓三行ありて廊と廊と三段に相對ふ五戸と戸柱は皆大木をもて角に造り廊と廊と三段に相對へり六 又柱の廊を造れり其長五十キエト其潤三十キエトなり柱のまへに一の廊ありまた其柱のまへに柱と階あり七 又ソロモン審判を爲すために位の廊即ち審判の廊を造り牀板より牀板まで 檜をもて蔽へり八 ソロモンの居る家は其廊の後の他の庭にありて其工作同じかりきソロモン亦其妻りたるパロの女のために家を建し此廊に同じかりき九 是等は内外とも基礎より檜にいたるまで又外面にては大庭にいたるまで皆鑿石の量に於て鋸にて割たる貴き石をもて造れるものなり十 又基礎は貴き石大なる石即ち十キエトの石八キ

エトの石なり十一 其上には鑿石の量に循ひて貴き石と檜あり十二 又大庭の周囲には三層の鑿石と一層の檜の厚板ありエホバの家の内庭と家の廊におけるが如し十三 爰にソロモン人を遣はしてヒラムをツロより召び來れり十四 彼はナフタリの支派なる賢婦の子にして其父はツロの人にて銅の細工人なりヒラムは銅の諸の細工を爲すの智慧と慧悟と智識の充ちたる者なりしがソロモン王の所に來りて其諸の細工を爲り十五 彼銅の柱二を鑄たり其高各十八キエトにして各十二キエトの繩を環らすべし十六 又銅を鑄して柱頭を鑄て柱の頭に置ゆ此の頭の高も五キエト彼の頭の高も五キエトなり十七 柱の上にある頭の爲に組物の網と網の撻物を造れり此頭に七つ彼頭に七つあり十八 又二行の石櫛を一の網工の上の四周に造りて柱の上にある頭を蓋ふ他の頭をも亦然せり十九 柱の上にある頭は四キエトの百合花の形にして廊におけるがごとし二十 二の柱の頭の上には又網工の外なる腹の所に接きて石櫛あり他の柱の四周にも石櫛二百ありて相列べり二一 此柱を拜殿の廊に鑿つ即ち右の柱を立て其名をヤキンと名け左の柱を立て其名をボアズと名く二二 其柱の上に百合花の形あり斯其柱の作成り二三 又海を鑄なせり此邊より彼邊まで十キエトにして其四周圓く其高五キエトなり其四周は三十キエトの繩を環らすべし二四 其邊の下には四周に匏瓜ありて之を環れり即ち一キエトに十つありて海の周圍を圍り其匏瓜は海を鑄たる時に二行に鑄たるなり二五 其海は十二の牛の上に立り其北に向ひ三は四に向ひ三は南に向ひ三は東に向ふ海其上にありて牛の後には皆内に向ふ二六 海の厚は手寬にして其邊は百合花にて杯の邊の如くに作り海は二千斗を容たり二七 又銅の臺十を造れり一の臺の長四キエト其潤四キエト 其二高三キエトなり二八 其臺の製作は左のごとし臺には嵌板あり嵌板は邊の中にある二九 邊の中にある嵌板の上に獅子と牛とケルビムあり又邊の上に座あり獅子と牛の下に花飾の垂下物あり三十 其臺には各四の銅の輪と銅の軸あり其四の足には肩のごとく者あり其肩のごとく者は洗盤の下にありて凡の花飾の旁に鑄つたり三一 其口は頭の内より上は一キエトなり其口は圓く一キエト

半にして座の作の如し又其口には雕工あり其鏡板は四角にして圓からず三二四の輪は鏡板の下にあり
 輪の手は臺の中に入り輪は各高一キユビト半三三輪の工作は戰車の輪の如し其手と縁と幅
 と戰とは皆鑄物なり三四臺の四隅に四の肩の如き者あり其肩のごきき者臺より出づ三五臺の上の所の高
 半キユビトは其周圍圓し又臺の上の所の手と鏡板も臺より出づ三六其手の板と鏡板には其各の隙處
 に循ひてケルビムと獅子と棕欄を雕刻み又其四周に花飾を造れり三七是のごきき十の臺を造れり其鑄法と
 量と形は皆同じ三八又銅の洗盤十を造れり洗盤は各四十斗を容れ洗盤は各四キユビトなり十の
 臺の上には各一の洗盤あり三九其臺五を家の右の旁に五を家の左の旁に置る家の右の東南に其
 海を置り四十ヒラム又銅と火鑪と鉢とを造れり斯ヒラムエホバの家の爲にソロモン王に爲る諸の細工を
 成終たり四一即ち二の柱と其柱の上なる頭の二の柱と柱の上なる其頭の二の柱を蓋ふ二の網工と
 四二其二の網工の爲の石櫛四百是は一の網工に石櫛二行ありて柱の上なる二の柱を蓋ふ四三又十の
 臺と其臺の上の十の洗盤と四四一の海と其海の下十二の牛四五又び銅と火鑪と鉢とを造れりヒラムソロモ
 ン王にエホバの家のために造りし此等の器は皆光明ある銅なりき四六王ヨルダンの低地に於てスコテサ
 ルタン間の黏土の地にて之を鑄たり四七ソロモン其器甚だしく多かりければ皆權手に措り其銅
 の重しれざりき四八又ソロモンエホバの家の諸の器を造れり即ち金の壇と供前のパンを載る金の案四九
 よび純金の燈臺是は神殿のまへに五は右に五は左にあり又金の花と燈臺と燈籠と五十純金と盆と
 剪刀と鉢と皿と滅燈器と至聖所なる内の家の戸のためふび拜殿ある家の戸の爲なる金の肘鉤是なり五一斯
 ソロモン王のエホバの家のために爲る諸の細工造れり是においてソロモン其父ダビデが奉納めたる物
 即ち金銀および器を擯へいりてエホバの家の寶物の中に置り

第八章 爰にソロモンエホバの契約の匱をダビデの城即ちシオンより昇上らんさてイスラエルの長老と
 諸の支派の首イスラエルの子孫の家の長等をエルサレムにてソロモン王の所に召集むニイスラエルの人皆

エタニムつぎすなはしちぐわつの月即ち七月の節筵いひあたに當てソロモン王の所に集まれり三イスラエルの長老皆至り祭司匱を執り
 あげて四エホバの匱と集會の幕屋と幕屋にありし諸の聖き器を昇上り即ち祭司レビの人を昇のぼれ
 り五ソロモン王および其許に集れるイスラエルの會衆皆彼と偕に匱の前にありて羊と牛を獻げたりし
 其數多くして書すしることも數ふることも能はざりき六祭司エホバの契約の匱を其處に昇ありたり即ち家の
 神殿なる至聖所の中のケルビムの翼の下に置めたり七ケルビムは翼を匱の所に俯べ且ケルビム上より匱と其
 杙を掩へり八杙長かりければ杙の末は神殿の前の聖所より見たり然ども外には見えざりき杙は今日まで
 彼處にあり九匱の内には二の石牌の外何もあらざりき是はイスラエルの子孫のエジプトの地より出たる時
 エホバの彼等と契約を結たまへる時にモーセがホレブにて其處に置めたる者なり十斯て祭司聖所より出ける
 に雲エホバの家に盈たれば十一祭司は雲のため立て供事るつこ能はざりき其はエホバの榮光エホバの家
 に盈たればあり十二是においてソロモンいひけるはエホバは濃き雲の中に居んさいひたまへり十三我誠まことに
 汝のために住むべき家永久に居べき所を建たりと十四王其面を轉てイスラエルの凡の會衆を視せり
 時にイスラエルの會衆は皆立たたり十五彼言けるはイスラエルの神エホバは譽べきかあるエホバは其口を
 て吾父ダビデに言ひ其手をもて之を成し遂げたまへり十六即ち我は吾民イスラエルをエジプトより導き
 出せし日より我名を置べき家を建しめんためにイスラエルの諸の支派の中より何れの城邑をも選えんみしこと
 なし但ダビデを選みてわが民イスラエルの上に立しめたりと言たまへり十七夫イスラエルの神エホバの名の
 ために家を建ることばわが父ダビデの心こころにありき十八しかるにエホバわが父ダビデにいひたまひけるはわが
 名のために家を建ることば汝の心こころにあり汝の心こころに此事あるは善し十九然ども汝は其家を建べからず汝の腰
 より出る汝の子其人吾名のために家を建べしと二十而してエホバ其言たまひし言を行ひたまへり即ち我
 わが父ダビデに代りて立ちエホバの言たまひし如くイスラエルの位に坐しイスラエルの神エホバの名のため
 に家を建たりニ我又其處にエホバの契約を藏めたる匱のために一の所を設けたり即ち我等の父祖をエジ

プトの地より導き出したまひし時に彼等に爲したまひし者なりと三ソロモンイスラエルの凡の會衆の前にてエホバの壇のまへに立ち其手を天に舒て二三言けるはイスラエルの神エホバよ上の天にも下の地にも汝の如き神なし汝は契約を持ちたまひ心を全うして汝のまへに歩むころの汝の僕等に恩恵を施したまふ

二四 汝は汝の僕わが父タビデに語たまへる所を持ちたまへり汝は口をもて語ひ手をもて成し遂たまへるこそ今日のごとし二五 イスラエルの神エホバよ然ば汝が僕わが父タビデに語りて若し汝の子孫其道を慎みて汝がわが前に歩めるこそくわが前に歩まばイスラエルの位に坐する人わがまへにて汝に缺ること無るべし

二六 然ばイスラエルの神よ爾が僕わが父タビデに言たまへる爾の言に效驗あらしめたまへ二七 神果して地のの上に住たまふや視よ天も諸の天の天も爾を容るに足す況て我が建たる此家をや二八 然どもわが神エホバよ僕の祈禱と懇願を願みて其號呼さ僕が今日爾のまへに祈る祈禱を聽たまへ二九 願くは爾の目を晝夜此家に即ち爾が我名は彼處に在べしといひたまへる處に向ひて開きたまへ願くは僕の此處に向ひて祈らん祈禱を聽たまへ三十 願くは僕と爾の民イスラエルが此處に向ひて祈る時に爾其懇願を聽たまへ爾は爾の居處なる天において聽き聽て赦したまへ三一 若し人其隣人に對ひて犯せることありて其人誓をもて誓ふことを要られんに來りて此家において爾の壇のまへに誓ひなば三二 爾天において聽て行ひ爾の僕等を鞠き悪き者を罪して其道を其首に歸し義き者を義として其義に循ひて之に報いたまへ三三 若爾の民イスラエル爾に罪を犯したるがために敵の前に敗られんに爾に歸りて爾の名を崇め此家にて爾に祈り願ひなば三四 爾天において聽き爾の民イスラエルの罪を赦して彼等を爾が其父祖に與へし地に歸らしめたまへ三五 若彼等が爾に罪を犯したるが爲に天閉て雨无らんに彼等若此處にむかひて祈り爾の名を崇め爾が彼等を苦めたまふべきに其罪を離れなば三六 爾天において聽き爾の僕等爾の民イスラエルの罪を赦したまへ爾彼等に其歩むべき善道を教へたまふ時は爾が爾の民に與へて産業となさしめたまひし爾の地に雨を降したまへ三七 若國に饑饉あるか若くは疫病枯死朽腐

瘞亡ぼす蝗蟲あるか若くは其敵國にいりて彼等を其門に圍むか如何なる災害如何なる病疾あるも三八 若一人か或は爾の民イスラエル皆各己の心の災を知りて此家に向ひて手を舒せば其人如何なる祈禱如何なる懇願を爲とも三九 爾の居處なる天に於て聽て赦し行ひ各の人に其心を知たまふ如く其道々にしたがりて報いたまへ其は爾のみ凡の人の心を知りたまへばなり四〇 爾かく彼等をして爾が彼等の父祖に與へたまへる地に居る日に常に爾を畏れしめたまへ四一 且爾の民イスラエルの者にあらずして爾の名のため遠き國より來る異邦人は四二 其は彼等爾の大なる名を強き手と伸たる腕を聞ふよふべければなりし若來りて此家にもむかひて祈らば四三 爾の居處なる天に於て聽き凡て異邦人の爾に願求むる如く爲たまへ爾かく地の諸の民をして爾の名をしらしめ爾の民イスラエルのこそく爾を畏れしめ又我が建たる此家は爾の名をもて稱呼るこそいふことを知しめたまへ四四 爾の民其敵と戦はんさて爾の遣はしたまふ所に出たる時彼等若爾が選みたまへる城さわか爾の名のために建たる家の方に向ひてエホバに祈らば四五 爾天において彼等の祈禱と懇願を聽て彼等を助けたまへ四六 人は罪を犯さざる者なければ彼等爾に罪を犯すことありて爾彼等を怒り彼等を其敵に付し敵われらるを處して遠近を論ず敵の地に引ゆかん時は四七 若彼等虜れゆきし地において自ら願みて悔い己を處へゆきし者の地にて爾に願ひて我等罪を犯し悖れる事を爲たり我等惡を行ひたりと言ひ四八 己を處ゆきし敵の地にて一心一念に爾に歸り爾が其父祖に與へたまへる地爾が選みたまへる城さわか爾の名のために建たる家の方に向ひて爾に祈らば四九 爾の居處なる天において爾彼等の祈禱と懇願を聽てかれらを助け五十 爾の民の爾に對て犯したる事と爾に對て過てる其凡の罪過を赦し彼等を虜ゆる者のまへにて彼等に憐れ得させ其人々をして彼等を憐ましめたまへ五一 其は彼等は爾がエシプトより即ち鉄の爐の中よりいだしたまひし爾の民爾の産業なればなり五二 願くは僕の祈禱と爾の民イスラエルの祈禱に爾の目を開きて凡て其爾に願求むる所を聽たまへ五三 其は爾彼等を地の凡の民の中より別ちて爾の産業となしたまへばなり神エホバ爾が我等の父祖をエシプトより導き出せし時モ一

セによりて言たまひし如し五十四ソロモン此祈禱を悉くエホバに祈り終りし時其天にむかひて手を
 舒へ膝を屈居たるを止てエホバの壇のまへより起あがり五十五立て大いなる聲にてイスラエルの凡の會衆を
 祝して言けるは五六エホバは響べきかなエホバは凡て其言たまひし如く其民イスラエルに太平を與へたま
 へり其僕モーセによりて言たまひし其善言は皆一も違はざりき五七願くは我等の神エホバ我等の父祖
 さ備に在せしごとく我等さるもに在せ我等を離れたまふなけれ我等を棄たまふなけれ五八願くは我等の心を
 己に傾けたまひて其凡の道に歩ましめ其我等の父祖に命じたまひし誠命と法憲と律例を守らしめたまへ
 五九願くはエホバの前にわが願し是等の言日夜われらの神エホバに近くあれ而してエホバ日々事の僕を
 助け其民イスラエルを助けたまへ六十斯して地の諸の民にエホバの神なることと他に神なきことを知し
 めたまへ六一されば爾等我等の神エホバさるもにありて今日の如く爾らの心を完全しエホバの法憲に歩み
 其誠命を守るべしと六二斯て王あまび王と儲にありしイスラエル皆エホバのまへに犠牲を献たり六三ソロ
 モン酬恩祭の犠牲を献げたり即ち之をエホバに献ぐ其牛二萬二千羊十二萬なりき斯王イスラエルの
 子孫皆エホバの家を開けり六四其日に王エホバの家の前なる庭の中を聖別め其處にて燔祭と論祭と酬恩祭
 の脂を献げたり是はエホバの前なる銅の壇小くして燔祭と論祭と酬恩祭の脂を受るにたらざりし
 故なり六五其時ソロモン七日に七日合て十四日我等の神エホバのまへに節筵を爲りイスラエルの大なる
 會衆ハマテの入處よりエジプトの河にいたるまで悉く彼儲にありき六六第八日にソロモン民を歸せり
 民は王を祝しエホバが其僕ダビデと其民イスラエルに施したまひし諸の恩惠のために喜び且心に樂
 みて其天幕に往り

第九章

一ソロモンエホバの家と王の家を建る事を終へ且凡てソロモンが爲んご欲し望を遂し時二エホバ
 再びソロモンに嘗てギベオンにて顯現たまひし如くあらはれたまひて三彼に言たまひけるは我は爾が我まへ
 に願し祈禱と祈願を聽たり我爾が建たる此家を聖別てわが名を永く其處に置べし且わが目さわが心は恒に

其處にあるべし四爾若爾の父ダビデの歩みし如く心を完うして正しく我前に歩みわが爾に命じたる如
 く凡て行ひてわが憲法と律例を守らば五我は爾の父ダビデに告てイスラエルの位に上る人爾に缺ること無
 るべしと言しと六爾のイスラエルに王たる位を固うすべし六若爾等又は爾等の子孫全く轉きて我にし
 たがはずわが爾等のまへに置たるわが誠命と法憲を守らずして往て他の神に事へ之を拜まば七我イスラエル
 をわが與へたる地の面より絶ん又わが名のために我が聖別たる此家をば我わがまへより投げ棄んしかしてイ
 スラエルは諸の民の中に諺語となり嘲笑さなるべし八且又此家は高くあれども其傍を過る者は皆之
 に驚き嘶きて言んエホバ何故に此地に此家に斯爲たまひしや九人答へて彼等は己の父祖をエジプトの
 地より導き出せし其神エホバを棄て他の神に附從ひ之を拜み之に事へしに因てエホバ此の凡の害惡を其
 上に降せるなりと言ん十ソロモン二十年を経て二の家即ちエホバの家と王の家を建はりヒラムにガリラ
 ヤの地の城邑二十を與へたり十一其はソロモンの王ヒラムはソロモンに凡て其望に備ひて檜松の木と金を
 供給たればなり十二ヒラムソロモンより出でソロモンが己に與へたる諸邑を見しに其目に善らざりければ十三我
 兄弟よ爾が我に與へたる此等の城邑は何なるやさいひて之をカブルの地となづけたり其名今日までのこ
 る十四嘗てヒラムは金百二十タラントを王に遣れり十五ソロモン王の徵募人を興せし事は是なり即ちエ
 ホバの家と自己の家とミロエサルムの石垣とハゾルとメギドンとゲゼルを建んが爲なりき十六エジプト
 の王パロ曾て上りてゲゼルを取り火を以て之を燬き其邑に住るカナン人を殺し之をソロモンの妻なる其女
 に與へて織倉と爲り十七ソロモンゲゼルと下ベテホロンと十八パアラと國の野にあるタデモル十九及びソ
 ロモンの有てる府庫の諸邑其戰車の諸邑其騎兵の諸邑並にソロモンがエサルムレバノンおよび
 其凡の領地に於て建んご欲し者盡く建たり二十凡てイスラエルの子孫に非るアモリ人ヘテ人ベリツ
 人ヒビ人エブス人の遺存る者二其地に在て彼等の後に遺存る子孫即ちイスラエルの子孫の滅し盡すこと
 を得ざりし者にソロモン奴隸の徵募を行ひて今日に至る三然ともイスラエルの子孫をばソロモン一人も奴

謀を爲さざりき其は彼等は軍人彼の臣僕、牧伯、大將たり、戦車と騎兵の長たればなり、二三ソロモンの工事を管理れる首なる官吏は五百五十人にして、工事に勤く民を治めたり、二四爰にパロの女ダビデの城より上りてソロモンが彼のために建たる家に至る其時にソロモンミロを建たり、二五ソロモンエホバに築きたる壇の上に年に三次燔祭と酬恩祭を献げ、又エホバの前なる壇に香を焚り、ソロモン斯家を全うせり、二六ソロモン王エドムの地紅海の濱に於てエラテの邊なるエシオンゲベルにて船數隻を造れり、二七ヒラム海の事を知られる舟人なる其僕をソロモンの僕に其船にて遣せり、二八彼等オフルに至り其處より金四百二十トラントを取てこれをソロモン王の所に携來る

第十章 一シバの女王エホバの名に關るソロモンの風聞を聞き及び難問を以てソロモンを試みんきて來れり、二彼甚だ多くの部從香物を甚だ多くの金と寶石を貢ふ駱駝を從へてエルサレムに至る彼ソロモンの許に來り其心にある所を悉く之に言たるに、三ソロモン彼に其凡の事を告たり、王の知ずして彼に告ざる事なかりき、四シバの女王ソロモンの諸の智慧と其建たる家と五其席の食物と其臣僕の列坐る事と其侍臣の伺候および彼等の衣服と其酒人とそのエホバの家に上る階級とを見て全く其氣を奪はれたり、六彼王にいひけるは我が自己の國にて爾の行爲と爾の智慧に付て聞たる言は眞實なりき、七然我來りて目に見るまでは其言を信ぜざりしが、今視るに其半も我に聞えざりしなり、爾の智慧と昌盛はわが聞たる風聞に越ゆ、八常に爾の前に立て爾の智慧を聽く是等の人爾の臣僕は幸福なるかな、九爾の神エホバは讚べきかな、エホバ爾を悦び爾をイスラエルの位に上らせたまへり、エホバ永久にイスラエルを愛したまふに因て爾を王となして公道を義を行はしめたまふなり、十彼乃ち金百二十トラント及び甚だ多くの香物と寶石とを王に饋れり、シバの女王のソロモン王に饋りたるが如き多くの香物は重て至ざりき、十一オフルより金を載來りたるヒラムの船は亦オフルより多くの白檀木と寶石とを運び來りければ、十二王白檀木を以てエホバの家と王の家とに欄干を造り歌詠者のために琴瑟を造れり、是の如き白檀木に至らざりき亦今日までも見たること

なし、十三ソロモン王の例に循ひてシバの女王に物を饋りたる外に、又彼が望に任せて凡て其求むる物を饋れり、斯て彼其臣僕等ととも歸りて其國に往り、十四借一年にソロモンの所に至れる金の重量は六百六十六トラントなり、十五外に又商賈および商旅の交易並にアラビヤの王等と國の知事等よりも至れり、十六ソロモン王展金の大楯二百を造れり、其大楯には各六百シケルの金を用ひたり、十七又展金の干三百を造れり、一の干に三斤の金を用ひたり、王是等をレバノン森林の家に置り、十八王又象牙をもて大なる寶座を造り、純金を以て之を蔽へり、十九其寶座に六の階級あり、寶座の後に圓き頭あり坐する處の兩旁に扶手ありて、扶手の側に二の獅子立てり、二十又其六の階級に十二の獅子此旁彼旁に立り是の如き者を作れる國はあらざりき、二一ソロモン王の用ひて飲る器は皆金なり、又レバノン森林の家の器も皆純金にして、銀の物無りき、銀はソロモンの世には貴まざりしなり、二二其は王海にタルシの船を有てヒラムの船と俱にあらしめタルシの船をして三年に一度金銀象牙猿猴および孔雀を載て來らしめ、たればなり、二三抑ソロモン王は富有と智慧に於て天下の諸の王よりも大なりければ、二四天下皆神がソロモンの心に授けたまへる智慧を聽んさて、ソロモンの面を見んことを求めたり、二五人々各其禮物を携へ來る即ち銀の器金の器衣服甲冑香物馬騾每歲定分ありき、二六ソロモン戦車と騎兵を集めたるに、戦車千四百輛、騎兵壹萬二千ありき、ソロモン之を戦車の城邑に置き、或はエルサレムにて王の所に置り、二七王エルサレムに於て銀を石の如くに爲し、檜を平地の桑樹の如くに爲して、多く用ひたり、二八ソロモンの馬を獲たるはエシプトとコアよりなり、即ち王の商賈コアより價値を以て取り、二九エシプトより上り出る戦車一輛は銀六百にして、馬は百五十なりき、斯のごとくヘテ人の凡の王等およびスリアの王等のために其手をもて取出せり、第三十一章 一ソロモン王パロの女の外に多の外國の婦を寵愛せり、即ちモアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人の婦を寵愛せり、二エホバ曾て是等の國民についてイスラエルの子孫に言たまひけらく、爾等は彼等と交るべからず、彼等も亦爾等と交るべからず、彼等必ず爾等の心を轉して、彼等の神々に從はしめ

なるべし 三入 爾若わが爾に命する凡の事を聽て吾が道に止みわが目に適ふ事を爲しわが僕ダビデが爲し
 如く我が法憲と誠命を守らば我爾と偕にありてわがダビデのために建しごさく爾のために鞏固家を建て
 イスラエルを爾に與ふべし 三九 我之がためにダビデの裔を苦めんされど永遠にて非じご 四十 ソロモンヤラ
 ペアムを殺さんご求めければヤラペアム起てエジプトに逃遁れエジプトの王シヤクに至りてソロモンの死
 めるまでエジプトに居たり 四一 ソロモンの其餘の行爲さ凡て彼が爲たる事および其智慧はソロモンの行爲の
 書に記さるるにあらすや 四二 ソロモンのエルサレムにてイスラエルの全地を治めたる日は四十年ありき 四三
 ソロモン其父祖と偕に寝りて其父ダビデの城に葬らる其子レハベアム之に代て王さるれり
 第十二章 一爰にレハベアムシケムに往り其はイスラエル皆彼を王さ爲んさてシケムに至りたればなりニ
 子バテの子ヤラペアム尙エジプトに在て聞りヤラペアムはソロモン王の面をさけて逃さりエジプトに住居
 たるなり 三時に入衆人を遣はして彼を招けり 斯てヤラペアムはイスラエルの會衆皆來りてレハベアム
 に告て言けるは 汝の父我等の軛を離くせり然ども 爾今 爾の父の難き役を 爾の父の我等に蒙らせたる
 重き軛を輕くせよ 然らば我等 爾に事へん 五レハベアム彼等に言けるは 去て三日を経て再び我に來れ 民乃
 ち去り六レハベアム王其父ソロモンの生る間 其前に立たる老人等と計りていひけるは 爾等如何に教へ
 て此民に答へしむるや 七 彼等レハベアムに告て言けるは 爾若今日 此民の僕となり之に事へて之に答へ善
 き言を之に語らば 彼等永く爾の僕となるべし 八 然に 彼老人の教へし教を棄て自己に生長て己のまへ
 に立つ少年等と計れり 九 即ち彼等に言けるは 爾等何を教へて我等をして此我に告て爾の父の我等に蒙ら
 せし軛を輕くせよと言ふ民に答へしむるや 十 彼と偕に生長たる少年彼に告ていひけるは 爾に告て爾の父
 我等の軛を重くしたれご 爾これを我等のために輕くせよと言たる此民に 爾斯言へし 我が小指はわが父の腰
 よりも大し 十一 またわが父爾等に重き軛を負せたりしが 我は更に爾等の軛を重くせん 我父は鞭にて爾等を
 懲したれごも 我は鞭をもて爾等を懲さんご 爾斯彼等に告べし 十二 ヤラペアムと民皆王の告て第三日に

再び我に來れと言しごさく 第三日にレハベアムに詣りしに 十三 王荒々しく民に答へ老人の教へし教を棄て
 十四 少年の教の如く彼等に告て言けるは 我父は爾等の軛を重くしたりしが 我は更に爾等の軛を重くせん 我父
 は鞭を以て爾等を懲したれごも 我は鞭をもて爾等を懲さんご 十五 王斯民に聽ざりき 此事はエホバより出た
 る者なり 是はエホバその昔てシロ人アヒヤに由て子バテの子ヤラペアムに告し言をさなはんさて爲たま
 へるなり 十六 斯イスラエル 皆王の己に聽ざるを見たり 是に於て 民王に答へて言けるは 我等ダビデの中に
 何の分あらんや エサイの子の中に産業なし イスラエルと爾等の天幕に歸れ 十七 爾の家を視よ 而し
 てイスラエルは 其天幕に去りゆけり 十七 然ども ユダの諸邑に住るイスラエルの子孫の上にはレハベアム其
 王さなれり 十八 王微 寡頭なるアドラムを遣はしけるにイスラエル皆石にて彼を撃て死しめ
 たらばレハベアム王急ぎて其車に登りエルサレムに逃たり 十九 斯イスラエルダビデの家に背きて今日に
 いたる二十爰にイスラエル皆ヤラペアムの歸りしを聞て人を遣して彼を集會に招き彼をイスラエルの全家
 の上に王さ爲りユダの支派の外はダビデの家に從ふ者なし 二一 ソロモンの子レハベアムエルサレムに至りて
 ユダの全家とベニヤミンの支派の者 即ち壯年の武夫十八萬を集む斯してレハベアム國を己に版さんごた
 めにイスラエルの家と戦はんごせし 二二 神の言神の人シマヤに臨みて曰く 二三 ソロモンの子ユダの王レ
 ハベアムおよびユダとベニヤミンの全家並に其餘の民に告て言べし 二四 エホバ斯言ふ 爾等上るべからず
 爾等の兄弟なるイスラエルの子孫と戦ふべからず 各人其家に歸れ 此事は我より出たるなり 二五 若此
 の言を聽きエホバの言に 循ひて轉り去りぬ 二五 ヤラペアムはエフライムの山地にシケムを建て其處に住み
 又其所より出てベヌエルを建たり 二六 爰にヤラペアム其心に謂けるは 國は今ダビデの家に歸らん 二七 若此
 民エルサレムにあるエホバの家に 禮物を獻げんさて上らば 此民の心 ユダの王なる 其主レハベアムに歸
 りて我を殺しユダの王レハベアムに歸らん 二八 是に於て王計議て 二の金の櫃を造り人々に言けるは 爾らの
 エルサレムに上るごさ 既に足りイスラエルと爾をエジプトの地より導き上りし 汝の神を視よ 二九 而して彼

一をベテルに安んずる一をダンに置り三十 此事罪をなれり民は民に迄往て其一の前に詣たればなり三二
 彼又崇 邱の家を建てレビの子孫にあらざる 凡 民を祭司となせり三三 ヤラベアム八月に節期を定め
 たり即ち其月の十五日なりユダにある節期に等し而して壇の上に上りたりベテルにて彼斯爲し其作りたる壇
 に禮物を献たり又彼其造りたる 崇 邱の祭司をベテルに立たり三三 かく彼其ベテルに造れる壇の上
 に八月の十五日に上り是は彼己の心より造り出したる月をり而してイスラエルの人々のために節期
 を定め壇の上にのぼりて香を焚り

第十三章 一視よ爰に神の人エホバの言に由てユダよりベテルに來り時にヤラベアムは壇の上に立て香を
 焚めたり二神の人乃ちエホバの言を以て壇に向ひて呼はり言けるは壇よ壇よエホバ斯言たまふ視よダビ
 デの家にヨシアと名くる一人の子生るべし彼爾の上に香を焚く所の崇 邱の祭司を爾の上に献げん且人
 の骨爾の上に焼れん三三 是日彼異蹟を示して言けるは是はエホバの言たまへる事の異蹟なり視よ壇は裂け
 其上にある灰は傾出ん三四 ヤラベアム王神の人ガベテルにある壇に向ひて呼はり言る時其手を壇
 より伸し彼を執へよと言けるが其彼に向ひて伸したる手枯て再び屈縮るこを得ざりき五しかして神の人ガ
 エホバの言を以て示したる異蹟の如く壇は裂け灰は壇より傾出たり六 王答く神の人に言けるは請ふ爾の神
 エホバの面を和めわが爲に祈りてわが手を本に復しめよ神の人乃ちエホバの面を和めければ王の手に復
 りて前のこさくに成り七 是に於いて王神の人に言けるは我と與に家に來りて身を息めよ我爾に禮物を與へ
 ん八 神の人王に言けるは爾假令爾の家の中を我に與ふるも我は爾さうもに入らざりき九 爰にベテルに一人の
 水を飲ざるべし九 其はエホバの言我にパンを食ふなかれ水を飲なかれ又爾が往る途より歸るなかれ
 命じたればなり十 斯彼他 途を往き自己ガベテルに來れる途より歸らざりき十一 爰にベテルに一人の
 老たる預言者住めたりしが其子等來りて是日神の人ガベテルにて爲たる諸事を彼に宣たり亦神の人の王に言
 たる言をも其父に宣たり十二 其父彼等に彼は何の途を往しやさいふ其子等ユダより來りし神の人の往たる途

を見たればなり十三 彼其子等に言けるは我ために驢馬に鞍おけよ彼等驢馬に鞍おきければ彼之に乗り十四 神
 の人の後に往きて橡の樹の下に坐するを見之にいひけるは汝はユダより來れる神の人なるか 其人然りこ
 言ふ 十五 彼其人にいひけるは我も爾に家に往てパンを食へ十六 其人いふ我は汝も歸る能はず汝も偕に入
 りたば又我は此處にて爾も偕にパンを食ふ水も飲じ十七 其はエホバの言我に爾彼處にてパンを食ふな
 かれ水を飲なかれ又爾が至れる所の途より歸り往なかれ言たればなり十八 彼其人にいひけるは我も
 亦爾の如く預言者なるが天の 使エホバの言を以て我に告て彼を爾も偕に爾の家に攜かへり彼にパンを食
 はしめ水を飲しめよさいへり三 是其人を誑けるなり十九 是に於いて其人彼も偕に歸り其家にてパンを食
 ひ水を飲り二十 彼等が席に坐せし時エホバの言 其人を攜歸し預言者に臨みければ二一 彼ユダより來れる
 神の人に向ひて呼はり言けるはエホバ斯言たまふ 爾エホバの口に違き爾の神エホバの爾に命じたまひし
 命令を守らずして歸り二二 エホバの爾にパンを食ふなかれ水を飲なかれ言たまひし處にてパンを食ひ水を
 飲たれば爾の 屍は爾の父祖の墓に至らざるべし三 其三人のパンを食ひ水を飲し後彼其人のため即ち己
 が攜歸りたる預言者のために驢馬に鞍おけり 二四 斯て其人往けるが獅子途にて之に遇ひて之を殺せり而し
 て其 屍は途に棄られ驢馬は其 傍に立ち獅子も亦其 屍の 側に立り 二五 人々經過て途に棄られ
 たる 屍も其 屍の 側に立る獅子を見て來り彼老たる預言者の住る邑にて語れり 二六 彼人を途より攜歸り
 たる預言者聞て言けるは其はエホバの口に違きたる神の人なりエホバの彼に言たまひし言の如くエホバ彼を
 獅子に付したまひて獅子彼を裂き殺せり二七 しかして其子等に語りて言けるは我のために驢馬に鞍おけよ彼
 等鞍おきければ二八 彼往て其 屍の 途に棄られ驢馬も獅子の 其 屍の 傍に立るを見たり獅子は 屍を
 食はず驢馬をも裂ざりき 二九 預言者乃ち神の人の 屍を取あげて之を驢馬に載せて攜歸れりしかして其老
 たる預言者邑に入り哀哭みて之を葬れり三十 即ち其 屍を自己の墓に置き之がために嗚呼わが 兄弟よ
 さいひて哀哭り三二 彼人を葬りし後彼其子等に語りて言けるは我が死たる時は神の人を葬りたる墓に我を葬

りわが骨を彼の骨の側に置めよ 三三 其は彼がエホバの言を以てベテルにある壇にむかひ又サマリヤの諸邑に在る崇邱の凡の家に向ひて呼はりたる言は必ず成べければなり 三三 斯事の後ヤラベアム其惡き途を離れ歸すして復凡の民を崇邱の祭司を爲り即ち誰にても好む者は之を立てければ其人は崇邱の祭司を爲り 三三 此事ヤラベアムの家の罪戾となりて遂に之をして地の表面より消失せ滅亡に至らしむ

第十四章 當時ヤラベアムの子アビヤ疾ぬたりニヤラベアム其妻に言けるは請ふ起て裝を改へ人をし汝がヤラベアムの妻なるを知しめずしてシロに往け彼處にわが此民の王となるべきを我に告たる預言者アビヤなる三汝の手に十のパン及び菓子一瓶の蜜を取て彼の所に往け汝に此子の如何なるかを示すべしと四ヤラベアムの妻は爲し起てシロに往きアビヤの家に至りしがアビヤは年齢のために其目凝て見ることを得ざりき五エホバアヒヤにいひたまひけるは視よヤラベアムの妻其子疾るに因て其に付て汝に一の事を語んさて來る汝斯彼に言べし其は彼入り來る時其身を他の人さすべければなり六彼が月の所に入來れる時アヒヤ其履聲を聞て言けるはヤラベアムの妻入よ汝何ぞ其身を他の人さするや我汝に嚴酷事を告るを命ぜらる七往てヤラベアムに告べしイスラエルの神エホバ斯言たまふ我汝を民の中より擧げ我民イスラエルの上に汝を君となし八國をダビデの家より裂き離して之を汝に與へたるに汝に我僕ダビデの我が命令を守りて一心に我に従ひ唯わが目に適ふ事のみを爲しが如くならずして九汝の前に在し凡の者よりも惡を爲し往て汝のために他の神を鑄たる像を造り我が怒を激し我を汝の背後に棄たり十是故に視よ我ヤラベアムの家に災害を下しヤラベアムに屬する男はイスラエルにありて繋かれたる者も繋かれざる者も盡く絶ち人の塵埃を残りなく除くがごとくヤラベアムの家の後を除くべし十一ヤラベアムに屬する者の邑に死るをば犬之を食ひ野に死ぬるをば天空の鳥之を食はんエホバ之を語たまへばなり十二爾起て爾の家に往け爾の足の邑に入る時子は死ぬべし十三而してイスラエル皆彼のために哀みて彼を葬らんヤラベアムに屬する

者唯是のみ墓に入るべし其はヤラベアムの家の中に彼はイスラエルの神エホバに向ひて善き意を懐けばなり十四エホバイスラエルの上に一人の王を興さん彼其日にヤラベアムの家を斷絶べし但し何れの時あるか今即ち是なり十五又エホバイスラエルを撃て水に搖撼ぐ蓋の如くになしたまひイスラエルを其父祖に賜ひし此善地より抜き去りて之を河の外に散したまはん彼等其アシラ像を造りてエホバの怒を激したればなり十六エホバヤラベアムの罪の爲にイスラエルを棄たまふべし彼は罪を犯し又イスラエルに罪を犯さしめたり十七ヤラベアムの妻起て去テルサに至りて家の闕に疎れる時子は死り十八イスラエル皆彼を葬り彼の爲に哀めりエホバの其僕預言者アヒヤによりて言たまへる言の如し十九ヤラベアムの其餘の行爲彼が如何に戦ひしか如何に世を治めしかは視よイスラエルの王の歴代志の書に記載る二十ヤラベアムの王たりし日は二十二年なりき彼其父祖に偕に寝りて其子ナダブに代りて王となれり二一ソロモンの子レハベアムはユダに王たりきレハベアムは王と成る時四十一歳なりしがエホバの其名を置んさてイスラエルの諸の支派の中より選みたまひし邑なるエルサレムにて拾七年王たりき其母の名はナアマといひてアンモニ人なり二三ユダ其父祖の爲たる諸の事に超てエホバの目の前に惡を爲し其犯したる罪に由てエホバの震怒を激せり二三其は彼等も諸の高山の上と諸の青木の下に崇邱を築きアシラ像を建たればなり二四其國には亦男色を行ふ者ありき彼等はエホバがイスラエルの子孫の前より逐攘ひたまひし國民の中にありし諸の憎むべき事を傲ひ行へり二五レハベアム王の第五年にエツプトの王シヤクエルサレムに攻上り二六エホバの家の寶物を王の家の寶物を奪ひたり即ち盡く之を奪ひ亦ソロモンを造りたる金の櫃を皆奪ひたり二七レハベアム王其代に銅の櫃を造りて王の家の門を守る侍衛の長の手に付せり二八王のエホバの家に入る毎に侍衛之を買ひ復之を侍衛の房に携歸れり二九レハベアム其餘の行爲はユダの王の歴代志の書に記載るに非ずや三十レハベアムとヤラベアムの間に戦争ありき三一レハベアム其父祖に偕に寝りて其父祖と共にダビデの城に葬らる其母の名はナアマといひてアンモニ人なり其子アビヤム之に代りて王と爲り

第十五章 一子バテの子ヤラベアム王の第十八年にアビヤムユダの王となりニエルサレムにて三年世を治めたり其母の名はマアカといひてアサロムの子なり三 彼は其父己のさきに爲たる諸の罪を行ひ其心其父バテの心の如く其神エホバに完全からざりき然に其神エホババテの爲にエルサレムに於て彼に一の燈明を興へ其子を其後に興しエルサレムを固く立しめ賜へり五 其はバテはヘテ人ウリヤの事の外は一生の間エホバの目に適ふ事を爲て其己に命じたまへる諸の事に背かざりければなり六 レハベアムとヤラベアムの間には其一生の間戦争ありき七 アビヤムの其餘の行爲は凡て其爲たる事はユダの王の歴史の書に記載さるるにあらすやアビヤムとヤラベアムの間戦争ありき八 アビヤム其先祖と俱に隠りしかば之をバテの城に葬りぬ其子アサに代りて王となり九 イスラエルの王ヤラベアムの第二十一年にアサユダの王となりニエルサレムにて四十一年世を治めたり其母の名はマアカといひてアサロムの子なり十一 アサは其父バテの如くエホバの目に適ふ事を爲し十二 男色を行ふ者を國より逐ひ出し其先祖等の造りたる諸の偶像を除けり十三 彼は亦其母マアカのアシラの像を造りしがために之を貶して太后たらしめざりき而してアサ其像を毀ちてキテロン谷に焚棄たり十四 但し崇邱は除かざりき然とアサの心は一生の間エホバに完全かりき十五 彼其父の献納めたる物己の心をさめたる物金銀器をエホバの家に備へり十六 アサイスラエルの王バアシャの間一生の間戦争ありき十七 イスラエルの王バアシャユダに攻上りユダの王アサの所に誰をも往來せざらしめんとすにラマを築けり十八 是に於てアサ王エホバの家府庫と王の家府庫に残れる所の金銀を盡く將て之を其臣僕の手付し之をダマスコに住るスリアの王ヘシヨンの子ダブリモンの子あるベ子ハダテに遣はして言けるは十九 わが父と爾の父の間の如く我と爾の間に約を立ん觀よ我爾に金銀の禮物を餽れり往て爾イスラエルの王バアシャとの約を破り彼をして我を離れて上らしめよ二十 ベ子ハダテアサ王に聽きて自己の軍勢の長等を遣はしてイスラエルの諸邑を攻めイブンダガンとアベルベテマアカおよびキンテレテの全地とナフタリの全地を撃り二十一 バアシャ聞及びラ

マを築くことを罷てテルザに止まり二三 是に於てアサ王命をユダ全國に降したり一人も免れし者なし斯して即ちバアシャが用ひてラマを築きたる石と材木を取きたらしめアサ王之用てベニヤミンのゲバとミズパを築けりニ アサの其餘の行爲は其諸の功業と凡て其爲たる事および其建たる城邑はユダの王の歴史の書に記載さるるにあらすや但し彼は年老るに及びて其足を病たりニ四 アサ其父祖と俱に寝りて其父バテの城に其父祖と俱に葬らる其子ヨシヤバテに代りて王となりニ五 ユダの王アサの第二年にヤラベアムの子ナダブイスラエルの王となり二年イスラエルを治めたりニ六 彼エホバの目のまへに惡を爲其父の道に歩み其イスラエルに犯させたる罪を行へりニ七 爰にイツサカルの家のアヒヤの子バアシャ彼に敵して黨を結びバシテ人ニ屬するギベトンにて彼を撃り其はナダブとイスラエル皆ギベトンを圍み居たればなりニ八 ユダの王アサの第三年にバアシャ彼を殺して彼に代りて王となれりニ九 バアシャ王となれる時ヤラベアムの全家を撃ち氣息ある者は一人もヤラベアムに残さずして盡く之を滅せりエホバの其僕シロ人アヒヤに由て言たまへる言の如し三十 是はヤラベアムが犯し又イスラエルに犯させたる罪の爲又彼がイスラエルの神エホバの怒を惹き起したる事に因るなり三一 ナダブの其餘の行爲は凡て其爲たる事はイスラエルの王の歴史の書に記載さるるにあらすやニ二 アサとイスラエルの王バアシャの間一生のあひだ戦争ありきニ三 ユダの王アサの第三年にアヒヤの子バアシャテルザに於てイスラエルの全地の王となりて二十四年を経たりニ四 彼エホバの目のまへに惡を爲しヤラベアムの道にあゆみ其イスラエルに犯させたる罪を行へり第十六章 一爰にエホバの言ハナニの子エヒウに臨みバアシャを責て曰くニ我爾を塵の中より擧て我民イスラエルの上に君となしたるに爾はヤラベアムの道に歩みわが民イスラエルに罪を犯させて其罪をもてわが怒を激したり三されば我バアシャの後其家の後を除き爾の家をして子バテの子ヤラベアムの家のごくならしむべし四 バアシャに屬する者の城邑に死るをば犬之を食ひ彼に屬する者の野に死るをば天空の鳥これを食はん五 バアシャの其餘の行爲は其爲たる事其功績はイスラエルの王の歴史の書に記載さるるにあ

らすや六バアシア其父祖を俱に陥りてテルザに葬らる其子エラ之に代りて王となれりセエホバの言亦ハナニの子エヒウに由りて臨みバアシアを其家を責む是は彼がエホバの目のまへに諸の悪事を行ひ其手の所爲を以てエホバの怒を激してヤラベアムの家に徹たるに縁り其又ナダブを殺したるに縁てなりハエダの王アサの第二十六年にバアシアの子エラテルザに於てイスラエルの王となりて二年を経たり九彼がテルザにありてテルザの宮殿の宰アルザの家において飲み酔たる時其僕シムリ戦車の牛を督ぐる者之に敵して黨を結べり十即ちエダの王アサの第二十七年にシムリ入て彼を撃ち彼を殺し彼に於りて王となれり十一 彼王となりて其位に上れる時バアシアの全家を殺し男子は其親族にもあれ朋友にもあれ一人も之に遺さざりき十二シムリスバアシアの全家を滅ぼせりエホバが預言者エヒウに由りてバアシアを責て言たまへる言の如し十三是はバアシアの諸の罪を其子エラの罪のためなり彼等は罪を犯し又イスラエルをして罪を犯し其虚物を以てイスラエルの神エホバの怒を激さしめたり十四エラの其餘の爲行さ凡て其爲たる事はイスラエルの王の歴代志の書に記載さるるにあらすや十五エダの王アサの第二十七年にシムリテルザにて七日の間王たりき民はベリシテ人に屬するガベトンに向ひて陣どり居たりしが十六陣される民シムリは黨を結び亦王を殺したりと言を聞き是に於てイスラエル皆其日陣營にて軍の長オムリをイスラエルの王となせり十七オムリ乃ちイスラエルの衆を偕にガベトンより上りてテルザを圍り十八シムリ其邑の陷るを見て王の家の天守に入り王の家に火をかけて其中に死し十九是は其犯したる罪によりて彼エホバの目のまへに惡を爲しヤラベアムの道にあゆみヤラベアムがイスラエルに罪を犯させて爲したるさるの罪を行ひたり二十シムリの其餘の行爲を其なしたる徒黨はイスラエルの王の歴代志の書に記載さるるにあらすや二一其時にイスラエルの民二に分れ民の半はギナテの子テブニに從ひて之を王となさんとし半はオムリに從へり二二 オムリに從へる民ギナテの子テブニに從へる民に勝てテブニは死てオムリ王となれり二三エダの王アサの第三十一年にオムリイスラエルの王となりて十二年を経たり彼テルザにて六年王たりき二四 彼繼二タ

ラントを以てセメルよりサマリア山を買ひ其上に邑を建て其建たる邑の名を其山の故主なりしセメルの名に續ひてサマリアと稱り二五オムリエホバの目のまへに惡を爲し其先に在し凡の者より惡き事を行へり二六 彼は子バテの子ヤラベアムの凡の道にあゆみヤラベアムがイスラエルをして罪を犯し其虚物を以てイスラエルの神エホバの怒を激さしめたる其罪を行へり二七オムリの爲たる其餘の行爲を其なしたる功績はイスラエルの王の歴代志の書に記載さるるにあらすや二八オムリ其父祖を偕に寢りてサマリアに葬らる其子アハアの子アハアサマリアに於て二十二年イスラエルに王たりき三十三オムリの子アハアは其先に在し凡の者より多くエホバの目のまへに惡を爲り三二 彼は子バテの子ヤラベアムの罪を行ふ事を輕き事とあせしシドン人の王エテパアルの女イセベルを妻に娶り往てバアルに事へ之を拜めり三三 彼其サマリアに建たるバアルの家の中にバアルのために壇を築けり三三アハア又アシラ像を作れりアハアは其先にありしイスラエルの諸の王よりも甚だしくイスラエルの神エホバの怒を激すことを爲り三四其代にベテル人ヒエルエリコを建てり彼其基を置る時に長子アピラムを喪ひ其門を立る時に季子セグアを喪へり五ノ子ヨシエアによりてエホバの言たまへるがごとし

第十七章 一ギレアデに居住れるテシベ人エリヤアハアに言ふ吾事ふるイスラエルの神エホバは活くわが言なき時は數年雨露あらざるべし二エホバの言彼に臨みて曰く三 爾此より往て東に赴きヨルダンの前にあるケリテ川に身を匿せ四 爾其川の水を飲べし我鴉に命じて彼處にて爾を養はしむ五 彼往てエホバの言の如く爲り即ち往てヨルダンの前にあるケリテ川に住り六 彼の所に鴉朝にパンと肉亦夕にパンと肉を運べり彼は川に飲り七 しかるに國の雨なかりければ數日の後其川涸ぬ八 エホバの言彼に臨みて曰く九 起てシドンに屬するザレパテに往て其處に住め視よ我彼處の嫠婦に命じて爾を養はしむ十 彼起てザレパテに往けるが邑の門に至れる時一人の嫠婦の其處に薪を採ふを見たり乃ち之を呼て曰けるは

請ふ器に少許の水を我に攜來りて我に飲せよと十一彼之を攜きたらんさて往る時エリヤを呼て言けるは請ふ爾の手に一口のパンを我に取りきたれと十二彼いひけるは爾の神エホバは活く我はパン無し只桶に一握の粉を瓶に少許の油あるのみ視よ我は二の薪を探ふ我いりてわれさわが子のために調理て之をくらひて死んさす十三エリヤ彼に言ふ懼るまなれ往て汝がいへる如くせよ但し先其をもてわが爲に小きパン一を作りて我に攜きたり其後爾のためさ爾の子のために作るべし十四其はエホバの雨を地の面に降したまふ日までは其桶の粉は竭す其瓶の油は絶すイスラエルの神エホバ言たまへばなりと十五彼ゆきてエリヤの言るごとくなし彼其家及びエリヤ久く食へり十六エホバのエリヤに由て言たまひし言のごとく桶の粉は竭す瓶の油は絶りき十七是等の事の後其家の主母なる婦の子疾に罹し其病甚だ劇くして氣息其中に絶て無きに至り十八婦エリヤに言けるは神の人よ汝なんぞ吾事に關渉るべけんや汝はわが罪を憶ひ出さしめんため又わが子を死しめんために我に來れるか十九エリヤ彼に爾の子を我に授けよと云て之を其懐より取り之を己の居る樓に抱のぼりて己の牀に臥しめ二十エホバに呼はりていひけるは吾神エホバ爾は亦吾もに宿る聲に當をくだして其子を死しめたまふやと二一而して三度身を伸して其子のの上に伏しエホバに呼はりて言ふわが神エホバ願くは此子の魂を中に歸しめたまへと二三エホバエリヤの聲を聴いたまひしかば其子の魂の中にへりて生たり二三エリヤ乃ち其子を取て之を樓より家に攜くだり其母に與していひけるは視よ爾の子は生くさ二十四婦エリヤにいひけるは此に縁て我は爾が神の人に於て爾の口にあるエホバの言は眞實なるを知るさ

第十八章一衆多の日を経たるのち第三年にエホバの言エリヤに臨みて曰く往て爾の身をアハバに示せ我爾を地の面に降さんと二エリヤ其身をアハバに示さんさて往り時に饑饉サマリアに甚しかりき三茲にアハバ家宰なるオバデヤを召たり四オバデヤは大にエホバを畏みたる者にてイゼベルがエホバの預言者を絶たる時にオバデヤ百人の預言者を取て之を五十人づつ洞穴に匿しパンと水をもて之を養へり五アハバ

オバデヤにいひけるは國中の水の諸の源さ諸の川に往け馬と騾を生活むる草を得ることあらん然我等牲畜を盡くば失なふに至らじと六彼等巡るべき地を二人に分ちアハバは獨にて此途に往きオバデヤは獨にて彼途に往けり七オバデヤ途にありし時視よエリヤ彼に遣り彼エリヤを識て伏て言けるは我主エリヤ汝は此に居たまふや八エリヤ彼に言けるは然り往て汝の主エリヤは此にありと告よ九彼言けるは我何の罪を犯したれば汝僕をアハバの手に付して我を殺さしめんさする十汝の神エホバは生くわが主の人を遣はして汝を尋ねざる民はなく國はなし若しエリヤは在すといふ時は其國其民をして汝を見ずといふ誓を爲しめたり十一汝今言ふ往て汝の主エリヤは此にありと告よ十二然我汝をばなれて往きエホバの靈我しらざる處に汝を攜へゆかん我至りてアハバに告て彼汝を尋獲ざる時は彼我を殺さん然ながら僕はわが幼少よりエホバを畏むなり十三イゼベルがエホバの預言者を殺したる時に吾なしたる事即ち我がエホバの預言者の中百人を五十人づつ洞穴に匿してパンと水を以て之を養ひし事は吾主に聞わざりしや十四しかるに今汝言ふ往て汝の主エリヤは此にありと告よ然らば彼我を殺すならん十五エリヤいひけるは我が事ふる萬軍のエホバは活く我は必ず今日わが身を彼に示すべしと十六オバデヤ乃ち往てアハバに會ひ之に告ければアハバはエリヤに會んさて往きけるが十七アハバエリヤを見し時アハバエリヤに言けるは汝イゼベルを憐れみ者此に在るか十八彼答へけるは我はイスラエルの神を憐れみ者但汝は汝の父の家之を憐れみ者なり即ち汝等はエホバの命令を棄て且汝はバアルに従ひたり十九されば人を遣てイスラエルの諸の人およびバアルの預言者四百五十人並にアシラ像の預言者四百人イゼベルの席に食ふ者をカルメル山に集めて我に詣しめよと二十是に於いてアハバインラエルの都の子孫の中に人を遣り預言者をカルメル山に集めたり二一時にエリヤ總の民に近づきて言けるは汝等何時まで二の物の間にまよふやエホバ若し神ならば之に従へされどバアル若し神ならば之に従へし民は一言も彼に答ざりき二三エリヤ民に言けるは惟我一人存りてエホバの預言者たり然どバアルの預言者は四百五十人あり二三然ば二の嶺を我等に與へよ彼等は其一

の積を積みて之を載り割き薪の上に載せて火を燃らすに置べし我も其一の積を調理へ薪の上に載せて火を燃らすに置べし二四斯して汝等は汝等の神の名を願へ我はエホバの名を願へ而して火をもて應る神を神と爲すし民皆答て斯言は善き言なり二五エリヤは預言者に言けるは汝等は多ければ一の積を選びて最初に調理へ汝等の神の名を呼ぶべし但し火を燃すなれど二六彼等乃ち其與られたる積を取て調理へ朝より午にいたるまでバアルの名を願てバアルよ我等に應へたまへと言ひ然る何の聲もなく又何の應る者もなかりければ彼等は其造りたる壇のまはりには隔れり二七日中におよびてエリヤは彼等を嘲りていひけるは大聲をあげて呼べ彼は神なればなり彼は黙想をなすか他處に行しか又は旅にあるか或は假寐して醒るべきか二八是に於いて彼等は大聲に呼ばり其例に循ひて刀劍と槍を以て其身を傷つけ血を其身に流すに至れり二九斯して午時するに至りしが彼等なほ預言を言ひて晩の祭物を献ぐる時にまで及べり然るも何の聲もなく又何の應る者も無く又何の願る者もなかりき三〇時にエリヤ都の民にむかひて我に近よれと言ひければ民皆彼に近よれり彼乃ち破壊たるエホバの壇を修理へり三一エリヤはヤコブの子等の支派の數に循ひて十二の石を取れり(エホバの言昔ヤコブに臨みてイスラエルを汝の名とすべしと言ひ)三二彼其石にてエホバの名を以て壇を築き壇の周圍に種子二セヤを容べき溝を作れり三三又薪を陳列べ積を載り薪の上に載せて言けるは四の桶に水を滿て燔祭と薪の上に沃げ三四又いひけるは再び之を爲せと再びこれをなせしければ又言ふ三次これを爲せと三次これをなせり三五水は壇の周圍に流るまた溝にも水をみたり三六晩の祭物を献る時に及びて預言者エリヤは近よりて言けるはアブラハム、イサク、イスラエルの神エホバよ汝のイスラエルにおいて神なることおよび我が汝の僕にして汝の言に循ひて是等の諸の事を爲せることを今日知しめたまへ三七エホバよ我に應へたまへ我に應へたまへ此民をして汝エホバは神なることおよび汝は彼等の心を翻へしたまふさいふことを知しめたまへ三八時にエホバの火降りて燔祭と薪と石と塵とを焚つけせり亦溝の水を乾涸せり三九民皆見て伏ていひけるはエホバは神なりエホバは神なり四〇エリヤは彼等に言

けるはバアルの預言者を執へし其一人をも逃避しむる勿れと即ち之を執へたればエリヤは之をキシヨ川に曳下りて彼處に之を殺せり四一斯てエリヤアハバにいひけるは大雷雨の聲あれば汝上りて食飲すべしと四二アハバ乃ち食飲せんさて上れり然るエリヤはカルメルの嶺に登り地に伏て其面を膝の間に入れり四三其少者にいひけるは請ふ上りて海の方を望め彼上り望みて何もなしといひければ再び往けいひて遂に七次に及びり四四第七次に及びて彼いひけるは視よ海より人の手のごさく微の雲起るこエリヤいひりてアハバに雨に阻められざるやう車を備へて下りたまへと言ふべし四五驟に雲風おこり霄漢黒くなりて大雨ありきアハバはエズレルに乗り往り四六エホバの能力エリヤに臨みて彼其腰を束帯びエズレルの入口までアハバの前に趨りゆけり

第十九章 アハバイゼベルにエリヤの凡て爲たる事および其如何に諸の預言者を刀劍にて殺したるかを告しければ二イゼベル使をエリヤに遣はして言けるは神等斯なし復重て斯なしたまへ我必ず明日の今時分汝の命を彼人々の一人の生命のごさくせん三かれ恐れて起ち其生命のために逃げ往てエダに屬するベエルシバに至り少者を其處に遺して四自ら一日程ほど曠野に入り往て金雀花の下に坐し其身の死んことを求めていふエホバよ足り今わが生命を取たまへ我はわが父祖よりも善にはあらずなりと五彼金雀花の下に伏して寝りしが天の使彼に捫り興て食へと言ければ六彼見しに其頭の側に炭に燒きたるパンと一瓶の水ありき乃ち食ひ飲て復偃臥たり七エホバの使者復再び來りて彼に捫りていひけるは興て食へ其は途長くして汝勝べからざればなりと八彼興て食ひ且飲み其食の力に杖て四十日四十夜行て神の山ホレブに至る九彼處にて彼洞穴に入りて其處に宿りしが主の言彼に臨みて彼に言けるはエリヤよ汝此にて何を爲や十彼いふ我は萬軍の神エホバのために甚だ熱心なり其はイスラエルの子孫汝の契約を棄て汝の壇を毀ち刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり惟我一人存るに彼等我生命を取んことを求むと十一エホバ言たまひけるは出てエホバの前に山の上に立てと茲にエホバ過ゆきたまふにエホバのまへに當りて大なる強き風山を裂

き岩石を砕し、風の中に埃をばらき、風の後に地震ありしが、地震の中にはエホバ在りき。十二又地震の後に火ありしが、火の中にはエホバ在りき。火の後に静なる細き聲ありき。十三エリヤが顔を外套に蒙り、出て洞穴の口に立ちけるに、聲ありて彼に臨み、エリヤよ、汝此にて何をなすや。十四かれいふ、我は萬軍の神エホバの爲に甚だ熱心なり。其はイスラエルの子孫、汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり。惟我一人存れるに、彼等我が生命を取んごを求む。十五エホバかれに言たまひけるは、往て汝の途に返り、ダマスコの曠野に至り、往てハザエルに膏を沃きて、スリアの王をなせ。十六又汝ニムシの子エロウに膏を注ぎて、イスラエルの王をなすべし。又アベルメホラのシヤパテの子エリヤに膏をそそぎ、爾に代りて預言者とならしむべし。十七ハザエルの刀劍を逃るる者をばエロウ殺さん。エロウの刀劍を逃るる者をばエリヤ殺さん。十八又我イスラエルの中に七千人を遣さん。皆其膝をパアルに觸めず、其口を之に接する者なり。十九エリヤ彼處よりゆきて、シヤパテの子エリヤに遣さん。彼は十二耦の牛を其前に行しめて、己は其第十二の牛と偕にありて耕し居たり。エリヤ彼の所にわたりゆきて、外套を其上にかけたれば、二十牛を棄て、エリヤの後に趨ゆきて、言けるは、請ふ我をしてわが父母に接吻せしめよ。しかるのち我爾にしたがはん。エリヤかれに言けるは、行け、還れ我爾に何をなしたるや。二十一エリヤ彼をばなれて、還り一軛の牛をとりて之をこらし、牛の器具を焚て、其肉を煮て民にあたへて食はしめ、起て往き、エリヤに従ひて之に事へたり。

第二十章一スリアの王ベチハダデ其軍勢を悉く集む。王三十二人、彼を偕にあり、又馬と戰車あり、乃ち上りてサマリアを圍み、之を攻む。二彼使をイスラエルの王アハブに遣し、邑に至りて彼に言しめけるは、ベチハダデ斯言ふ、三爾の金銀は我の所有なり。亦爾の妻等、爾の子等の美秀者は、我の所有なり。四イスラエルの王答へて言けるは、王わが主、爾の言の如く我に我の有つ者は皆爾の所有なり。五使者再び來りて言けるは、ベチハダデ斯語て言ふ、我爾に爾の金銀、妻子を付すべし。言遣れり。六然も明日、今頃我が僕を爾に遣さん。彼等爾の家を、爾の臣僕の家を探索りて、凡ての爾目に好ましく見ゆる者を、其手に置て取り去るべし。

さて是においてイスラエルの王國の長老を皆召て言けるは、請ふ爾等見て此人の害をなさん。と求む。知れ、彼人を我に遣りて、我が妻子とわが金銀を索めたり。而るに我之を謝絶せり。七諸の長老もよび、民皆彼に言けるは、爾聽なれ許す。八かれ九是故に彼ベチハダデの使者に言けるは、王わが主に告ふ。爾が最初に僕に言つは、はしたる事は皆我爲べし。然も此事は我爲あたはず。使者往て反命をなせり。十ベチハダデ彼に言つは、しけるは、神等我に斯なし。亦重て斯なしたまへ。サマリアの塵は我に従ふ。諸の民の手に満るに足ざるべし。十一イスラエルの王答へて、帶る者は解く者の如く誇るべからず。告よ。言り、十二ベチハダデ天幕にありて、王等飲みたりしが、此事を聞て其臣僕に言けるは、爾等陣列を爲せ。即ち邑に向ひて陣列をなせり。十三時に一人の預言者イスラエルの王アハブの許に至りて言けるは、エホバ斯言たまふ。爾此諸の大軍を見るや、視よ。我今日之を爾の手に付さん。爾は我がエホバなるを知らん。十四アハブ言けるは、誰を以てせん。かれいひけるは、エホバ斯いひたまふ。諸省の牧伯の少者を以てすべし。アハブ言ふ誰か戰爭を始むべき。彼答けるは、爾なり。十五アハブ乃ち諸省の牧伯の少者を核るに、二百三十二人あり。次に凡の民、即ちイスラエルの凡の子孫を核るに、七千人あり。十六彼等日中出たりし、ベチハダデは天幕にて王等、即ち己を助る。三十二人の王等、さうもに飲て醉居たり。十七諸省の牧伯の少者等先に出たり。ベチハダデ人を出すに、サマリアより人衆出來る。彼に告げれば、十八彼言けるは、和睦のため出來るも之を生擒べし。又戰爭のため出來るも之を生擒べし。十九諸省の牧伯の是等の少者もよび、之に従ふ軍勢、邑より出きたり。二十各其敵手を撃ち殺しければ、スリア人逃たり。イスラエルの王を追ふ。スリアの王ベチハダデは馬に乗り、騎兵を從へて逃遁たり。二イスラエルの王出て馬と戰車を撃ち、又大にスリア人を撃殺せり。三茲に彼預言者イスラエルの王の許に詣て、彼に言けるは、往て爾の力を養ひ、爾の爲すべき事を知り辨ふべし。年歸らば、スリアの王爾に攻上るべけれど、ばなり。三三スリアの王の臣僕王に言けるは、彼等の神等は山崗の神なるが故に、彼等は我等より強かりしなり。然も我等若平地に於て彼等と戰ばば、必ず彼等より強かるべし。三四但し此事を爲せ、即ち王等を除きて

各其處を離しめ方伯を置いて之に代へしニ又爾の失ひたる軍勢に均き軍勢を爾のために備へ馬は馬
 戦車は戦車をもて補ふべし斯して我等平地において彼等と戦はば必ず彼等よりも強かるべしと彼其
 言を聞いて然なせりニ六年の春に及びてベテハダスリア人を核めてアベクに上りイスラエルと戦はん
 ことすニイスラエルの子孫核められ兵糧を受けて彼等に出會んきて往けりイスラエルの子孫は山羊の二の
 小群の如く彼等の前に陣どりしがスリア人は其地に充滿たりニ八時に神の人至りてイスラエルの王に告げて
 ひけるはエホバス言たまふスリア人エホバは山嶽の神にして谿谷の神にあらざる言ふによりて我此諸
 の大軍を爾の手に付すべし爾等は我がエホバなるを知に至らんニ九彼等七日互に相對して陣どり第七日
 にもよびて戦争を交接しがイスラエルの子孫一日にスリア人の歩兵拾萬人を殺しければ三十其餘の者は
 アベクに逃て邑に入ぬ然るに其石垣崩れて其存れる二萬七千人の上になふれたりベテハダテは逃て邑に
 いたり奥の間に入ぬニ一其僕臣彼にいひけるは我等イスラエルの家の王等は仁慈ある王なりと聞り請ふ我等
 粗麻布を腰につけ繩を頸につけてイスラエルの王の所にいたらん彼爾の命を生むることあらんニ三三
 彼等粗麻布を腰にまき繩を頸にまきてイスラエルの王の所にいたりていひけるは爾の僕ベテハダテ請ふ我
 が生命を生しめたまへと言ふニアハバいひけるは彼は尙生なるや彼はわが兄弟なりと三三其人々これを
 吉兆と爲し速に彼の言を承て爾の兄弟ベテハダテといへり彼言けるは爾等ゆきて彼を導きよたるべしと
 是においてベテハダテ彼の所に出來りしかば彼之を車に登しめたり三四ベテハダテ彼に言けるは我が父の爾の
 父より取たる諸邑は我返すべし又我が父のサマリアに造りたる如く爾ダマスに於て汝のために街衢を作
 るべしアハバ言ふ我此契約を以て爾を歸さんと斯彼と契約を爲て彼を歸せり三五爰に預言者の徒の一人
 エホバの言によりて其同儕に請我を撃てといひけるが其人彼を撃つことを肯ぜざりしかば三六彼其人に
 言ふ汝エホバの言を聽ざりしによりて視よ汝の我をばなれて往く時獅子汝をころさん其人彼の側を離
 れて往きけるに獅子之に遇て之を殺せり三七彼また他の人に遺て請ふ我を撃と言ければ其人之を撃ち撃て

傷けたり三八預言者往て王を途に待ち其目に掩巾をあてて儀容を變わたりしが三九王の經過の時王に呼ば
 りていひけるは僕戦争の中に出入し人轉りて一箇の人を我の所に曳きたりて言けるは此人を守れば彼
 失ゆく事あらば汝の生命を彼の生命に代へし或ひは爾銀一タラントを出すべしと四十而るに僕此彼に
 事をなしぬれば彼遂に失たりとイスラエルの王彼にいひけるは汝の疑定は然なるべし爾之を決めたり
 二彼急ぎて其目の掩巾を取除けたればイスラエルの王彼は預言者の一人あるを識り四二彼王に言けるはエ
 ホバス言たまふ爾はわが殲滅んさ定めたる人を爾の手より放ちたれば爾の命は彼の生命に代り爾の民は
 彼の民に代るべしと四三イスラエルの王憂へ且怒て其家に赴きサマリアに至れり

第二十一章 是等の事の後エズレル人ナボテエズレルに葡萄園を有ちぬたりしがサマリアの王アハバ
 の殿の側に在りければニアハバナボテに語て言けるは爾の葡萄園は近くわが家の側にあれば我に與へて蔬
 菜の圃をなさしめ我之がために其よりも美き葡萄園を爾に與へん若し爾の心にかなはば其價を銀に
 て爾に手へんニ三ナボテアハバに言けるはわが父祖の産業を爾に與ふる事は決て爲へからずエホバ禁じたま
 ふと四アハバはエズレル人ナボテの己に言し言の爲に憂へ且怒りて其家に入ぬ其は彼わが父祖の産業を爾
 に與へじと言たればなりアハバ床に臥し其面を轉けて食をなさたりき五其妻イゼベル彼の處にいりて彼に
 言けるは爾の心何を憂へて爾食を爲さるや六彼之に言けるは我エズレル人ナボテに語りて爾の葡萄
 園を銀に易て我に與へよ若また爾好ば我其に易て葡萄園を爾に與へんと言たるに彼答へて我が葡
 萄園を爾に與へじと言たればなりと七其妻イゼベル彼に言けるは爾今イスラエルの國を治むることな
 るや爾と食を爲し爾の心を樂ましめよ我エズレル人ナボテの葡萄園を爾に與へんに入彼アハバの名
 をもて書を書き彼の印を捺し其邑にナボテさまもに住る長老と貴き人に其書をかくれり九彼其書にしるし
 て曰ふ斷食を宣傳てナボテを民の中に高く坐せしめよ又邪なる人二人を彼のまへに坐せしめ彼に對ひ
 て証を爲して爾神と王を詛ひたりと言しめよ斯して彼を曳出し石にて撃て死しめよと十一其邑の人即ち

其邑に住る長老および貴人等イゼベルも己に言つかはしたる如く即ち彼己に遺りたる書に書したる如く爲り十二彼等斷食を宣達てナボテを民の中に高く坐せしめたり十三時に二人の邪なる人入來りて其前に坐し其邪ある人民のまへにてナボテに對て証をなして言ふナボテ神を王を誑ひたり人衆彼を邑の外に曳出し石にて之を撃て死しめたり十四期てイゼベルにナボテ撃れて死たりと言ふくれり十五イゼベルナボテの撃れて死たるを聞きかばイゼベルアハブに言けるは起て彼エズレル人ナボテが銀に易て爾に與ることを拒みし葡萄園を取べし其はナボテは生をらす死たればなりと十六アハブナボテの死たるを聞きかばアハブ起ちエズレル人ナボテの葡萄園を取んとて之に下れり十七時にエホバの言テシベ人エリヤに臨みて曰ふ十八起て下りサマリヤにあるイスラエルの王アハブに會ふべし彼はナボテの葡萄園を取んさて彼處に下りたるあり十九爾彼に告て言べしエホバ斯言ふ爾は殺し亦取たるや又爾彼に告て言ふべしエホバ斯言ふ犬ナボテの血を銘し處にて犬爾の身の血を銘へしと二十アハブエリヤに言けるは我敵よ爾我に遇や彼言ふ我遇ふ爾エホバの目の前に惡を爲す事に身を悉しに縁り二我災害を爾に降し爾の後裔を除きアハブに屬する男はイスラエルにありて繋かれたる者も繋かれざる者も悉く絶ん二三又爾の家をネバテの子ヤラベアムの家の如くなしアヒヤの子バアシヤの家のごとくなすべし是は爾の怒を惹起しイスラエルをして罪を犯させたるに因てなり二三イゼベルに關てエホバ亦語て言たまふ犬エズレルの濠にてイゼベルを食はん二四アハブに屬する者の邑に死なば犬之を食ひ野に死なば天空の鳥之を食はん二五誠にアハブの如くエホバの目のまへに惡をなす事に身をゆだねし者はあらざりき其妻イゼベル之を懲慥たるなり二六彼はエホバがイスラエルの子孫のまへより逐退けたまひしアモリ人の凡てなせし如く偶像に從ひて甚だ惡むべき事を爲り二七アハブ此等の言を聞ける時其衣を裂き粗麻布を體にまきひ食を斷ち粗麻布に臥し遅々に歩行り二八茲にエホバの言テシベ人エリヤに臨て言ふ二九爾アハブの我前に卑下るを見るや彼わがまへに卑下るに緣て我災害を彼の世に降さずして其子の世に災害を彼の家に降すべし

第二十二章一スリアとイスラエルの間に戦争なくして三年を経たり二第三年にエダの王ヨシヤバテイスラエルの王の所に降れり三イスラエルの王其臣僕に言けるはギレアデのラモテは我等の所有なるを爾等知や然るに我等はスリアの王の手より之を取ることなせずして黙しなるなり四彼ヨシヤバテに言けるは爾我と共にギレアデのラモテに戦ひにゆくやヨシヤバテイスラエルの王にいはひけるは我は爾のごとくわが民は爾の民の如くわが馬は爾の馬の如しと五ヨシヤバテイスラエルの王に言けるは請ふ今日エホバの言を問へ六是に於いてイスラエルの王預言者四百人許を集めて之に言けるは我ギレアデのラモテに戦ひにゆくべきや又は罷べきや彼等曰けるは上るべし主之を王の手に付したまふべしと七ヨシヤバテ曰けるは外に我等の由て問べきエホバの預言者此にあらざるや八イスラエルの王ヨシヤバテに言けるは外にイムラの子ミカヤ一人あり之に由てエホバに問ふことを得ん然と彼は我に關て善事を預言せず唯惡事のみを預言すれば我彼を惡むなりとヨシヤバテ曰けるは王然言たまふるか九是によりてイスラエルの王一箇の官吏を呼てイムラの子ミカヤを急ぎ來らしめよとヨシヤバテイスラエルの王ヨシヤバテエダの王ヨシヤバテ王衣を着てサマリヤの門の入口の廣場に各其位に坐しひたり預言者は皆其前に預言せり十一ケナアナの子ゼデキヤ鉄の角を造りて言けるはエホバ斯言たまふ爾是等を以てスリア人を抵觸て之を盡すべしと十二預言者皆斯預言して言ふギレアデのラモテに上りて勝利を獲たまへエホバ之を王の手に付したまふべしと十三茲にミカヤを召んさて往たる使者之に語りて言けるは預言者等の言一の口の如くにして王に善し請ふ汝の言を彼等の一人の言の如くならしめて善事を言へと十四ミカヤ曰けるはエホバは生くエホバの我に言たまふ事は我之を言んぞ十五かくて彼王に至るに王彼に言けるはミカヤよ我等ギレアデのラモテに戦ひに往くべきや又は罷べきや彼王に言けるは上りて勝利を得たまへエホバ之を王の手に付したまふべしと十六王彼に言けるは我我度汝を誓はせたらば汝エホバの名を以て唯眞實のみを我に告るや十七彼言けるは我イスラエルの皆牧者も羊のごとく山に散るるを見たるにエホバ是等の者は主なし各安然に其家に歸るべしと言たまへり

十八 イスラエルの王ヨシヤパテに言けるは我汝に彼は我につきて善き事を預言せず唯惡き事のみを預言す
 告たるにあらすや十九 ミカヤ言けるは然らば汝エホバの言を聽べし我エホバの其位に坐しぬたまひ
 て天の萬軍の其傍に右左に立つを見たるに二十 エホバ言たまひけるは誰かアハブを誘ひて彼をして
 ギレアデのラモテに上りて斃れしめんか即ち一は此の如くせんと言ひ一は彼の如くせんといへり二一
 に出て虚言を言ふ靈となりて其諸て預言者の口にあらんと言ひエホバ言たまひけるは汝は誘ひ亦之を成し
 遂ん出て然らすべし三二 故に視よエホバ虚言を言ふ靈を爾の此諸の預言者の口に入たまへり又エホバ
 爾に關て災禍あらんことを言たまへり三三 四ケナアナの子セデキヤ近よりてミカヤの頰を批て言けるはエホ
 バの靈何途より我を離れゆきて爾に語ふや三五 ミカヤいひけるは爾奥の間に入て身を匿す日に見るに
 いたらん二六 イスラエルの王言けるはミカヤを取て之を邑の宰アモンと王の子ヨアシに曳かへりて言ふべ
 し二七 王斯言ふ此を牢に置いて苦惱のパンと苦惱の水を以て之を養ひ我が平安に來るを待て二八 ミカヤ言
 けるは爾若眞に平安に歸るならばエホバ我によりて言たまはざりしならん又曰けるは爾等民皆聽べ
 し二九 かくてイスラエルの王ヨシヤパテギレアデのラモテに上れり三〇 イスラエルの王ヨシヤパ
 テに言けるは我裝を改て戰陣の中に入らん然爾は王衣を衣るべし三二 イスラエルの王裝を改て戰陣
 の中にいりぬ三一 スリアの王其戰車の長三十二人に命じて言けるは爾等小者も大者も
 戰ふなけれ惟イスラエルの王ヨシヤパテの長等ヨシヤパテを見て是必ずイスラエルの王
 ならんと言ひ身をめぐらして之を戰はんとしければヨシヤパテ號呼れり三三 戰車の長彼がイスラエルの王
 王にあらざるを見しかば之を追ふことをやめて返れり三四 茲に一箇の人偶然弓を挽てイスラエルの王
 の胸當て神擲の間を射たりければ彼其御者に言けるは我傷を受たれば爾の手を旋して我を軍中より出すべ
 し三五 是日戰爭嚴くなりぬ王は車の中に扶持られて立ちスリア人に對ひたりしが晩景にいたりて死たり

創の血車の中に流る 三六 日の没る頃軍中に呼はりて曰ふあり各其邑に各其郷に歸るべし三七 王
 死て携へられてサマリアに至りければ衆人王をサマリアに葬れり三八 又其車をサマリアの池に濯ひける
 に犬其血を舐たり又遊女其所に身をあらへりエホバの言たまへる言の如し三九 アハブの其餘の行爲を凡て
 其爲たる事其建たる象牙の家其建たる諸の邑はイスラエルの王の歴代志の書に記載るにあらすや四〇 ア
 ハブ其父祖と共に寢りて其子アハブア之に於て王となれり四一 アサの子ヨシヤパテイスラエルの王アハ
 ブの第四年にユダの王となれり四二 ヨシヤパテ王となりし時三十五歳なりしがエルサレムにおいて二十五
 年王たりき其母の名はアズバといひてシルヒの女なり四三 ヨシヤパテ其父アサの諸の道に歩行み轉て之を
 離れずエホバの目に適ふ事をなせり但し崇邱は除かざりき民尙崇邱に犠牲を献げ香を焚り四四 ヨ
 シヤパテイスラエルの王和好を結べり四五 ヨシヤパテの其餘の行爲を其なせる功績をよび如何に戰爭をな
 せしかばユダの王の歴代志の書に記載るにあらすや四六 彼其父アサの世に尙ほありし彼の男色を行ふ者
 の殘餘を國の中より逐はらへり四七 當時エドムには王なくして代官王たりき四八 ヨシヤパテタルシの
 船を造りて金を取ためにオフルに往しめんさしたりしが其船エジソンゲベルに壞れたれば遂に往に至らざ
 りき四九 是に於いてアハブの子アハブアヨシヤパテに言けるはわが僕をして爾の僕と偕に船にて往しめよ
 然れどもヨシヤパテ聽ざりき五〇 ヨシヤパテ其父祖とも共に寢りて其父ダビデの城邑に其父祖と共に葬らる
 其子ヨラム之に代て王となれり五一 アハブの子アハブアユダの王ヨシヤパテの第十七年にサマリアにてイ
 スラエルの王となり二年イスラエルの王を治めたり五二 彼はエホバの目のまへに惡をなし其父の道其母の道
 よび彼のイスラエルに罪を犯せたる子パテの子ヤラバアムの道に歩行み五三 パアルに事へて之を拜みイス
 ラエルの神エホバの怒を激せり其父の凡て行へるがごとし

り降りて前の五十人の長二人とその五十人を焼盡せり然どわが生命をば汝の目に貴重き者なしたまへ
 十五時にエホバの使エリヤにいひけるは彼さうもに下れかれをふるよこなかれエリヤすなはち起て
 かれさうもに下り王の許に至り十六之にいひけるはエホバかくいひたまふ汝エクロンの神バアルセブアに
 問んさて使者を遣るはイスラエルにその言を問ふべき神なきがゆゑなるか是によりて汝はその登りし林より
 下ることなかるべし汝かならず死んぞ十七かれエリヤの言たるエホバの言の如く死けるが彼に子なりしか
 ばヨラムこれに代りて王となれり是はエダの王ヨシヤバテの子ヨラムの二年にあたる十八アハツアのなした
 る其餘の事業はイスラエルの王の歴代志の書に記載さるるにあらすや

第二章 エホバ 大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたまふ時エリヤはエリヤさうもにギルガルよ
 り出往りニエリヤエリヤにいひけるは請ふこゝに止まれエホバわれをベテルに遣はしたまふなり エリヤ
 ヤいひけるはエホバは活く汝の靈魂は活く我なんぢをばなれじと彼等つひにベテルに下れり三ベテルに在る
 預言者の徒 エリヤの許に出きたりて之にいひけるはエホバの今日なんぢの主をなんぢの首の上よりさ
 らんとしたまふを汝知やかれいふ然りわれ知り汝等黙すべし四エリヤかれにいひけるはエリヤは請ふ
 汝こゝに止れエホバわれをエリヤに遣したまふなりエリヤいふエホバは活くなんぢの靈魂は活く我なん
 ぢを離じさかれらエリヤにいたる五エリヤに在る預言者の徒 エリヤに詣りて彼にいひけるはエホバの
 今日なんぢの主をなんぢの首の上よりさらんとしたまふを汝知るやエリヤ言ふ然り知り汝ら黙すべし六
 エリヤまたかれにいひけるは請ふこゝに止れエホバわれをヨルダンにつかはしたまふなりさかれいふエホバ
 は活くなんぢの靈魂は活くわれ汝をばなれじと二人進ゆくに七預言者の徒 五十人ゆきて遙に立て望め
 り彼ら二人はヨルダンの濱に立けるが八エリヤその外套をさりて之を巻き水をうちけるに此旁に彼旁にわ
 れたれば二人は乾ける土の上をわたれり九涉りける時エリヤエリヤにいひけるは我が取れてなんぢを離る
 る前に汝わが汝になすべきことを求めよエリヤいひけるはなんぢの靈の二の分の我にならんことを願ふ+

エリヤいひけるは汝難き事を求む汝もしわが取れてなんぢを離るるを見ればこの事なんぢにならんしからず
 ば此事なんぢにならんし十一彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらはれて二人を隔てたりエリヤは大風
 にのりて天に昇れり十二エリヤ見てわが父わが父イスラエルの兵車よと叫びしが再びかれを見
 ざりき是にいてエリヤその衣をさらへて之を二片に裂き十三エリヤの身よりおちたるその外套をさりあ
 げ返りてヨルダンの岸に立ち十四エリヤの身よりおちたる外套をさりて水をうちエリヤの神エホバはいづく
 にいますやと言ひ而して己も水をうちけるに水此旁に彼旁に分れければエリヤすなはち渡れり十五エリヤ
 にある預言者の徒對岸にありて彼を見て言けるはエリヤの靈エリヤの上にとまるとかれら來りてかれ
 を迎へその前に地に伏て十六彼にいひけるは僕等に勇力者五十人あり請ふかれらをして往て汝の主を尋
 れしめよ恐らくはエホバの靈かれを曳あげてこれを或山か或谷に放ちしならんぞエリヤ遺すなかれ言け
 れども十七かれら彼の魂るまでに強ければすなはち遣せさいへり是に於てかれら五十人の者を遣しけるが三
 日の間たづねたれども彼を看いださざりしかば十八エリヤの尙エリヤに止れる時かれら返りてかれの許に
 いたりしにエリヤかれらに言けるはわれ往こさなかれ汝らにいひしにあらすやと十九邑の人々エリ
 ヤにいひけるは視よ吾主の見たまふこゝく此邑の建る處は善しされど水あしくしてこの地流産をおこす
 二十かれ言けるは新しき皿に鹽を盛て我に待ち來れよ乃ちもちきたりければ二彼いでよ水の源に至り
 鹽を其處になげ入ていひけるはエホバかくいひたまふわれこの水を愈す此處よりして重て死あるひは流産お
 こらじと二三其水すなはちエリヤのいひし如くに愈て今日にいたる○二三かれそこよりベテルに上りしが
 上りて途にありけるとき小童等邑よりいでよ彼を嘲り彼にむかひて禿首よのぼれ禿首よのぼれさいひ
 ければ二四かれ回轉りてかれらを見エホバの名をもてかれらを見呪ひければ林の中より二頭の牝熊出てその
 兒子輩の中四十二人をさきたり二五かれ彼處よりカルメル山にゆき其處よりサマリヤにかへれり
 第三章 エダの王ヨシヤバテの十八年にアハツの子ヨラムサマリヤにありてイスラエルを治め十二年

婦神の人にいたりてかく告げればかれいふ往て油をうりてその負債をつくのひその餘分をもて汝の子等生計をなすべし ○八一日エリシヤシユナミにゆきしに其所に一人の大なる婦人ありてしきりにこれに食をすゝめたれば彼がしこを過る毎にそこに入て食をなせり九茲にその婦人夫にいひけるは視よ此つれにわれらを過る人は我これを見るに神の聖き人なり十請ふ小き室を石垣の上につくりそこに臥床と案と榻と燭臺をかゝるために備へん彼われらに至る時はそこに入るべし十一かくてのちある日エリシヤそこに至りその室に入てそこに臥たりしが十二その僕ゲハツにむかひ彼のシユナミ人を召きたれいへり彼の婦人を召たればその前にきたりて立つに十三エリシヤゲハツにいひるは彼に言へ汝かく懇に我らのために意を用ふ、汝のために何をなすべきや王または軍勢の長に汝のこゝを告られんこゝを望むか彼答へてわれはわが民の中になるなりといふ十四エリシヤいひけるは然ばかれのために何をなすべきやゲハツ答へけるは誠にかれば子なくその夫は老たりと十五是においてエリシヤかれを召さいひければこれを呼に來りて月口に立たれば十六エリシヤいふ明る年の今頃汝子を抱くらん彼いひけるはいなわが主神の人よなんぢの婢をあざむきたまふなかれと十七かくて婦つひに孕て明年にいたりてエリシヤのいへるその頃に子を生り十八その子育ちてある日刈獲人の所にいでゆきてその父にいたりしが十九父にわが首わが首さいひたれば父少者に彼を母のまゝに負ゆけと言ひ二十すなはちこれを負て母にいたりしに午まで母の膝に坐り居て遂に死たれば二二母のぼりゆきてこれを神の人の臥床の上に置きこれをさぢこめて出で二三その夫をよびていひけるは請ふ一人の僕と一頭の驢馬を我につかはせ我神の人の許にはせゆきて歸らん二三夫いふ何故に汝は今日かこれにいらんとするや今日は朔日にもあらず安息日にもあらずなるなり彼いひけるは宜しと二四婦するはち驢馬に鞍おきてその僕にいひけるは驅て進め吾が命するこゝなくば我が驢すむるこゝに緩漫あらしめされと二五つひにカルメル山にゆきて神の人にいたるに神の人遙にかれの來るを見て僕ゲハツにいひけるは視よかしこにかのシユナミ人を二六請ふ汝はしりゆきて彼をむかへて言へなんぢは平安なるや

あんぢの夫はやすらかなるやなんぢの子はやすらかなるや彼こたへて平安なりといひ二七遂に山にきたりて神の人にいたりその足を抱きたればゲハツこれを逐ひはらはんさて近よりしに神の人いひけるは容しおけ彼は心の中に苦あるなりまたエホバその事を我にかくしていまだわれに告たまはざるなり二八婦いひけるはわれわが主に子を求めしやわれをあざむきたまふなかれとわれは言ざりしや二九エリシヤすなはちゲハツにいひけるはなんぢ腰をひきからげわが杖を手にもちて行け誰に逢も禮をなすべからず又なんぢに禮をなす者あるともそれに答ふるこゝなかれわが杖をわが子の面の上におけよ三十その子の母いひけるはエホバは活くなんぢの靈魂は生く我は汝を離れじと是をもてエリシヤついに起て婦に從ひ行ぬ三一ゲハツはかれらに先だちゆきて杖をわが子の面の上に置たるが聲もなく聞もせざりしがばかへりきたりてエリシヤに達てこれに子いまだ目をさます言ふ三二エリシヤこゝにおいて家に入て親に子は死ておのれの臥床の上に臥てあれば三三すなはち入り戸をさぢて二人内においてエホバに祈り三四而してエリシヤ上りて子の上に伏し己が口をその口におのが目をその目に己が手をその手の上にあて身をもてその子を掩しに子の身體やうやく温まり來る三五かくしてエリシヤかへり來て家の内に其處此處さあゆみたり又のぼりて身をもて子をほひしに子七度噫して目をひらきしかば三六ゲハツを呼てかのシユナミ人をよべと言ければすなはちこれを呼り三七彼入來りしかばエリシヤなんぢの子を取ゆけと言ひかれすなはち入りてエリシヤの足下に伏し地に身をたかよめて其子を取あげて出づ○三八斯てエリシヤまたギルガルにいたりしがその地に饑饉あり預言者の徒その前に坐しをる是において彼の僕にいひけるは大なる釜をすゝて預言者の徒のために羹を煮よと三九時に一人田野にゆきて菜蔬を摘し野藤のあるを見て其より野瓜を一風呂桶摘きたりて羹の釜の中に載こみたり其は皆それをしらざればあり四十斯てこれを盛て人々に食はせんせしに彼等その羹を食はんとするにあたりて叫びて嗚呼神の人よ釜の中に死をきたらす者ありといひて得食はざりしかば四一エリシヤさらば粉をもちきたれといひてこれを釜になげ入れ盛て人々に食しめよと言ひ釜の中にはすなはち害物

あらずなりぬ○四二茲にパアルシヤリシヤより人來り初穂のパンと大夢のパン二十と圖の初物一袋とを
神の人の許にもちいたりたればエリシヤ衆人にあたへて食はしめよと言ふに四三その奴僕いひけるは如
何にさや我これを百人の前にそなふべきか然るに彼また言ふ衆人にあたへて食はしめよ夫エホバかくいひ
たまふかれら食ふて尙あます所あらん四四すなはち之をその前にそなへたればみな食ふてなほ餘せりエホ
バの言のごとし

第五章一スリア王の軍勢の長ナアマンはその主君のまへにありて大なる者にしてまた貴き者なり是は
エホバ曾て彼をもてスリアに拯救をほごしたまひしが故なり彼は大勇士なりしが癩病をわづらひ居るニ
昔にスリア人隊を組んでたりし時にイスラエルの地より一人の小女を執へゆけり彼ナアマンの妻に事た
りしが三その女主にむかひわが主サマリヤに居る預言者の前にいませば善らん者をかれその癩病を痊すな
らんと言たれば四ナアマン入りてその主君に告てイスラエルの地よりきたれる女子斯々語たれりと言ふに
五スリア王いひけるは往よ往よ我イスラエルの王に書をおくるべし是において彼いでゆき銀十タラントと
金六千および衣服十襲をたづさへ六イスラエルの王にその書をもちゆけりその文に曰くこの書汝にいた
らば視よ我わが臣ナアマンをなんぢに遣はせるありこの汝にその癩病を痊されんがためなり七イスラエ
ルの王その書を讀み衣を裂ていふ我神ならんや争か殺すことをなし生すことをなしえん然るに此人なんぞ癩
病の人を我につかはしてこれを痊さしめんとするや然ば請ふ汝等彼が如何に我に争を求むるかを見て知
れさ入茲に神の人エリシヤイスラエルの王がその衣を裂たることをきき王に言遣しけるは汝何さて汝の
衣を裂しや彼をわがもまにいたらしめよ然ば彼イスラエルの預言者のあることを知にいたるべし九是に
てナアマンその馬と車とをきたがへ來りてエリシヤの家門に立けるに十エリシヤ使をこれに遣して言ふ
汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗へ然ば汝の肉本にかへりて汝は清く爲べし十一ナアマン怒りて去り言け
るは我は彼かならず我もさにいできたりて立ちその神エホバの名を呼てその所の上に手を動して癩病を痊

すあらんと思へり十二ダマスコの河アパナミバルはイスラエルのすべての河水にまさるにあらずや我
れらに身を洗ふて清まることを得ざらんや乃ち身をめぐらし怒りて去る十三時にその僕等近よりてこれ
にいひけるは我父よ預言者なんぢに大なる事をなせよ命するも汝はそれを爲ざらんや況て彼なんぢに身を
洗ひて清くなれさいふをや十四是においてナアマン下りゆきて神の人の言のごとくに七たびヨルダンに身
を洗ひしにその肉本にかへり嬰兒の肉の如くなりて清くなりぬ十五かれすなはちその從者さよもに神の
人の許にかへりきたりてその前に立ていふ我いまイスラエルのほかに全地に神なしと知る然ば請ふ僕より禮
物をうけよ十六エリシヤいひけるはわが事ふまつるエホバは清く肯て禮物をうけじさかれ強て之を受しめん
さしたれども遂にこれを辭したり十七ナアマンいひけるは然ば請ふ驛馬に二駄の土を僕にさらせよ僕は今
よりのち他の神には燔祭をも祭品をもささげずして只エホバにのみ獻げんす十八彼はくは主の事に
つきて僕をゆるしたまへ即ちわが主君リンモンにいでりて崇拝をなしてわが手に倚ることありま
た我リンモンの宮にありて身をかむむることあらんわがリンモンにいでりて身をかむむる時に願くはエホ
バその事につきて僕をゆるしたまへ十九エリシヤ彼になんぢ安じて去れさいひければ彼エリシヤをばなれ
て少しく進みゆきけるに二十神の人エリシヤの僕ケハツいひけるは吾が主人は此スリア人ナアマンをい
たはりて彼が手に携へきたれるものを受ざりしがエホバは清くわれ彼のあさを追かけて彼より少く物をさら
んぞ二一ケハツすなはちナアマンのあさをむひ行くにナアマンはものれのあさに走り來る者あるを見て車よ
り下りこれを迎へて皆平安やと言ふに二二かれ言けるは皆平安しわが主我を遣していはしむ只今エフライ
ムの山より預言者の徒なる二人の少者わが許に來れり請ふ汝かれらに銀一タラントと衣二襲をあたへ
よと二三ナアマンいひけるは望むらくは二タラントを取れさてかれを強ひ銀二タラントと衣二襲をあたへ
よと二四二人の僕に負せられたれば彼等これをケハツの前に負きたりしが二五彼等に至りしとき之をかれら
の手より取て室のうちにをさめかれらを放ちて去しめ二五而して入てその主人のまへに立つにエリシヤこれ

にいひけるは、ゲハツよ何處より來りしや、答へていふ、僕は何處にもゆかず。二六 エリシヤいひけるは、その人、車
 をはなれ來りて、なんちを迎へし時にわが心、其處にあらざりしや、今は金をうけ、衣をうけ、橄欖園、葡萄園、
 羊、牛、僕、婢、をうくべき時ならんや、二七 然らば、ナアマンの癩病はなんちにつき、汝の子孫におよびて、限な
 らん。彼その前より退そくに癩病發して、雪のごとくになりぬ。

第六章 一 茲に預言者の徒、エリシヤに言けるは、視よ、我等が汝のごとくに住ふ所は、かれらのために隘し。請
 ふ、我等をしてヨルダンに往しめよ。我等おの／＼彼處より一の材木を取て、其處に我等の住べき處を設けん。エリ
 シヤ往よと言ふ。三時にその一人、希は、汝も僕等と共に往けと言ければ、エリシヤ答へて、我ゆかんと言ふ。四
 エリシヤかく、彼等のごとくに往り、彼等すなはちヨルダンにいたりて、樹を斫りたふしける。五 一人の材木を斫た
 ぶすに方りて、その斧水におちいりしかば、叫びて、嗚呼、主よ、是は乞得たる者なりと言ふ。六 神の人、其は何處におち
 いらしやと言ふに、その處をしらせしかば、則ち枝を切ちて、其處に投いて、その斧を浮ましめ。七 汝、これを取
 れと言ければ、その人手を伸て、これを取り、八 茲にスリアの王、イスラエルと戦ひをり、その臣僕を評議して、斯や
 の處に我陣を張んと言たれば、九 神の人、イスラエルの王に言ひ、汝、慎んで某の處を過るな。かれ其
 はスリア人、其處に下ればなり。二 イスラエルの王は、是において、神の人が己に告げ己に、教たる處に人を遣して
 其處に自防し、こゝ一二回に止まらざりき。十一 是をもて、スリアの王は、是のために心をなやまし、その臣
 僕を召て、我等の中誰がイスラエルの王と通じたるか、我に告ざるやと言ふに、十二 その臣僕の一人、言ふ、王わが
 主よ、然るにあらず、但イスラエルの預言者、エリシヤ、汝が寢室にて語る所の言語をも、イスラエルの王に告るな
 り。十三 王いひけるは、往て彼が安に居るを見よ、我人をやりて、これを執へん。茲に彼は、ドタンに居る。王に告て
 いふ者ありければ、十四 王そこに馬と車および大軍をつかはせり。彼等すなはち夜の中來りて、その邑を取こ
 みける。十五 神の人の從、屬風に興て、出て見に、軍勢馬と車をもて、邑を取こみ居れば、その少者、エリシヤ
 に言けるは、嗚呼わが主よ、我等如何にすべきや。十六 エリシヤ答へけるは、懼るな。かれ我等のごとみにある者は、彼ら

のごとみにある者よりも多し。十七 エリシヤ祈りて、願はくは、エホバかれの目を開きて見させたまへ。と言ければ、エ
 ホバその少者の眼を開きたまへり。彼すなはち見るに、火の馬と火の車山に、盈てエリシヤの四面に在り。十八 ス
 リア人、エリシヤの所に下りいたれる時、エリシヤ、エホバに祈りて、言ふ、願くは、此人々をして、目昏しめたまへ
 せ。即ちエリシヤの言のごとくに、その目を昏ましめたまへり。十九 是において、エリシヤ彼らに言けるは、是はその
 途にあらず。是はその城にもあらず。我に從ひて來れ。汝らに汝ら尋ねる人の所に携ゆかん。さて、彼等をサマ
 リアにひき至れり。二十 彼等がサマリアに至りし時、エリシヤ言けるは、エホバよ、此人々の目をひらきて見させ
 たまへ。即ちエホバかれらの目を開きたまひたれば、彼等見るに、その身はサマリアの中にあり。二一 イスラエル
 の王、かれらを見て、エリシヤに言けるは、わが父よ、我を撃殺すべきや、撃殺すべきや。二二 エリシヤ答へけるは、撃殺
 すべからず。汝、劍と弓をもて、據にせる者等を撃殺す。こゝを爲んや、パンと水を彼らの前に、そなへて、食飲せし
 めて、その主君に往しむべきなり。二三 王すなはちかれらの爲に、大なる饗宴をまうけ、其食飲をおほるに及びて
 これを去しめたれば、すなはち其主君に歸れり。是をもて、スリアの兵、たゞびイスラエルの地に入ざりき。○

二四 此後、スリアの王、ベチハダデ、その全軍を集めて上りきたりて、サマリアを攻圍みければ、二五 サマリア、大に
 糧食に乏しくなれり。即ちかれら之を攻め、こみたれば、遂に驢馬の頭一箇は、銀八十枚にいたり、鳩の糞一カ
 プの四分の一は、銀五枚にいたる。二六 茲にイスラエルの王、石垣の上を通りたる時、一人の婦人、かれに呼はりて
 我主王よ、助けたまへと言ければ、二七 彼言ふ、エホバも、汝を助けたまはずば、我何を以て、汝を助くることな
 せん。禾場の物をもてせんか、酒醪の中のものをもてせんか。二八 王すなはち婦人に、何事なるやと言はば、答へて、言ふ、此婦
 人、我にむかひ、汝の子を與へよ。我等今日、これを食ひて、明日わが子を食ふべし。言ひ、二九 斯われら、吾子を煮て、こ
 れを食ひける。我次の日にいたりて、彼にむかひ、汝の子を與へよ。我等これを食はん。言ひ、三〇 彼その子を隠した
 り。三十一 王その婦人の言を聞いて、衣を裂き、而して、石垣の上を通りたりしが、民これを見るに、その膚に麻布を着居た
 り。三二 王言けるは、今日シヤパテの子、エリシヤの首、その身の上、にすわりならば、神われに、斯なしまた重れて、かく

成たまへ三時にエリシヤはその家に坐しをり長老等これと共に坐し居る王すなはち己の所より人を遣しけるがエリシヤはその使者の未だ己にいたらざる前に長老等に言ふ汝等この人を殺す者の子が我が首をさらんさて人を遣はすを見るや汝等觀てその使者至らば戸を閉てこれを戸の内にいるるなかれ彼の主君の足音その後にするにあらすや三三期彼等語をその間にその使者かれの許に來りしが王もつとひて來り言けるは此災はエホバより出たるなり我あんぞ此上エホバを待てけんや

第七章 エリシヤ言けるは汝らエホバの言を聽けエホバかく言たまふ明日の今頃サマリアの門にて麥粉一セアを一シケルに賣り大麥二セアを一シケルに賣にいたらん二時に一人の大將すなはち王のその手に依る者神の人に答へて言けるは由やエホバ天に窓をひらきたまふも此事あるべけんやエリシヤいひけるは汝は汝の目をもて之を見ん然らばこれを食ふことばあらじ茲に城邑の門の入口に四人の癩病人をりしが互に言けるは我等なんぞ此に坐して死るを待てけんや我ら若邑にいらんと言はば邑には食物竭てあれば我ら其處に死んもし又此に坐しをらば同く死ん然らば我等ゆきてスリアの軍勢の所にいたらん彼ら我らを生しおかば我等生ん若われらを殺すも死るのみなりと五すなはちスリア人の陣營にいたらんさて黄昏に起あがりしスリアの陣營の邊にいたりて視に一人も其處に在る者なし六是より先に主スリアの軍勢をして車の聲馬の聲大軍の聲を聞しめたまひしかば彼ら互に言けるは視よイスラエルの王われらに敵せんさてヘテ人の王等およびエツプトの王等を備ひきたりて我らを襲はんぞと七すなはち黄昏に起て逃げその天幕を馬を驢馬を棄て陣營をその儘になしおき生命を全うせんさて逃たり八かの癩病人等陣營の邊に至りしが遂に一の天幕にいりて食飲し其處より金銀衣服を持さりて往てこれを隠し又きたりて他の天幕にいり其處より持さりて往てこれを隠せり九かくて彼等互に言けるは我等のなすところ善らす今日は好消息ある日なるに我等は黙し居る若夜明まで待たば當善身におよばん然らば來れ往て王の眷屬に告んそすなはち來りて邑の門を守る者を呼びこれに告て言けるは我等スリア人の陣營にいたりて視に其處には一人も居る者なく亦人の聲もせず但馬

のみ繋ぎてあり驢馬のみ繋ぎてあり天幕は其儘なり十一是において門を守る者呼はりてこれを王の家の中に報せられたれば十二王夜の中に興いでその臣下に言けるは我スリア人が我等になせる所の如何を汝等に示さん彼等はわれらの飢たるを告知故に陣營を去て野に隱る是はイスラエル人邑を出なば生擒て邑に推いらんと言て然せるなり十三その臣下の一人對て言けるは請ふ尙遺されて邑に存れる馬の中五匹を取しめよ我等人を遣て窺はしめん視よ是等は邑の中に遺れるイスラエルの全群衆のごとし視よ是等は滅び亡たるイスラエルの全群衆のごとしなり十四是において二輛の戰車をその馬を取り王すなはち往て見よさいひて人を遣はしてスリアの軍勢の跡を尾しめられたれば十五彼らその跡を尾てヨルダンにいたりしが途には凡てスリア人が狼狽する時に棄たる衣服と器具盈りその使者かへりてこれを王に告ければ十六民いでスリア人の陣營を掠めたり斯在しかば麥粉一セアは一シケルとなり大麥二セアは一シケルと成るエホバの言のごとし十七爰に王その手に依さる所の彼大將を立て門を司らしめたるに民門にて彼を踐たれば死り即ち神の人が王のおのれに下り來し時に言たる言のごとし十八又神の人が王につけて明日の今頃サマリアの門にて大麥二セアを一シケルに賣り麥粉一セアを一シケルに賣にいたらんと言しごしく成ぬ十九彼大將その時に神の言にこたへてエホバ天に窓をひらきたまふも此事あるべけんやと言たりしかば答へて汝目をもてこれを見べけれごもこれを食ふことばあらじと言たりしが二十そのごしくになりぬ即ち民門にてこれを踐て死しめたり

第八章 エリシヤ嘗てその子を甦へらせて與へし婦に言しことあり曰く汝起て汝の家族さうもに往き汝の寄寓んさももふ處に寄寓れ其はエホバ饑饉を呼くだしたまひたれば七年の間この地にのぞむべければなりと二是をもて婦起て神の人の言のごしくに爲しその家族さうもに往てベリシテ人の地に七年寄寓ぬ三かくて七年を経て婦人ベリシテ人の地より歸りしが自己の家と田畝のために王に呼もさめんさて往り四時に王は神の人の僕ゲハツにむかひ請ふエリシヤが爲し諸の大なる事等を我に告よと言てこれ談話を五即ち彼エリシヤが死人を甦らせしことを王にものがりたる時にその子を彼が甦らせし婦自己の家さ

田畝のために王に呼ばれければハツ言ふわが主王よ是すなほちその婦人なり是すなほちエリシヤが魁
 せしその子なり六王すまはちその婦に尋ねけるにこれを陳たれば王彼のために一人の官吏を派出して言ふ
 凡て彼に屬する物並に彼がこの地を去し日より今にいたるまでの其田畝の産出物を悉く彼に還せよ○
 七エリシヤがマスコに至れる事あり時にスリアの王ベ子ハダテ病にひかりたりしがこれにつけて神の人此
 きたる言ふ者ありければ入王ハザエルに言ふ汝手に禮物をさり往て神の人を迎へ彼によりてエホバに
 晋この病は愈るやと言て問へ九是にハザエルかれを迎へんきて出往きマスコのもろくの佳物駱駝
 に四十駄を禮物に携へて到りて彼の前に立ち曰けるは汝の子スリアの王ベ子ハダテ我を汝につかはして晋
 この病は愈るやと言しむ十エリシヤかれに言けるは往てかれに汝はかならず愈べしと言ふ但しエホバかれは
 かならず死んぞ我にしめしたまふあり十一而して神の人瞳子をさだめて彼の羞るまでに見つめ乃て哭いてた
 れば十二ハザエルわが主よ何て哭たまふやと言ふにエリシヤ答へけるは我汝がイスラエルの子孫になさん
 さころの害悪を知ばなり即ち汝は彼等の城に火をかけ壯年の人を劍にころし子等を挫ぎ孕女を刳ん
 十三ハザエル言けるは汝の僕は犬なるか何ぞ斯る大なる事をなさんエリシヤ答へけるはエホバ我にしめし
 たまふ汝はスリアの王なるにいたらん十四斯て彼エリシヤを離れて去てその主君にいたるにエリシヤは汝
 に何と言しや尋ねれば答へて彼汝はかならず愈るあらんぞ我に告たりと言ふ十五翌日にいたりてハザエ
 ル粗き布をとりて水に浸しこれをもて王の面を覆ひたれば死りハザエルすなほち之にかはりて王なる○
 十六イスラエルの王アハバの子ヨラムの五年にはヨシヤパテ尙ユダの王たりき此年にユダの王ヨシヤパテの
 子ヨラム位に即り十七彼位に即し時三十二歳にして八年の間エルサレムにて世を治めたり十八彼は
 アハバの家のませるがごさくにイスラエルの王等の道を行へりアハバの女かれの妻なりければなり斯彼はエ
 ホバの目の前に悪をなせしがごも十九エホバその僕ダビデのためにユダを滅すことを好みたまはざり即
 ち彼にその子孫によりて恒に光明を興んと言たまひしがごさし二十ヨラムの代にエドム叛きてユダの手に服

せず自ら王を立たれば二一ヨラムその一切の戦車をしたがへてザイルに渉りし途に夜の中に起あがり
 て自己を圍めるエドム人を撃ちその戦車の長等を撃り斯して民はその天幕に逃ゆきぬ二二エドムは斯
 叛きてユダの手に服せずなりしが今日まで然り此時にあたりてリブナもまた叛けり二三ヨラムのその餘の行
 爲およびその凡て爲たる事等はユダの王の歴代志の書に記さるるにあらすや二四ヨラムその先祖等ごさくに
 寝りてダビデの邑にその先祖たちと同じく葬られその子アハツアこれに代りて王となれり二五イスラエルの
 王アハバの子ヨラムの十二年にユダの王ヨラムの子アハツア位に即り二六アハツアは位に即し時二十二歳
 にしてエルサレムにて一年世を治めたりその母はイスラエルの王オムリの孫女にして名をアタリヤといふ
 ニセアハツアはアハバの家の道にあゆみアハバの家のごさくにエホバの目の前に悪をなせり是ければアハバ
 の家の婿ありければなり二八茲にアハバの子ヨラム自身ゆきてスリアの王ハザエルとギレアデのラモテに戦
 ひけるがスリア人等ヨラムに傷を負せたり二九是に於てヨラム王はそのスリアの王ハザエルと戦ふにあたり
 てラマに於てスリア人に負せられたるごころの傷を療さんさてエズレルに歸れりユダの王ヨラムの子アハツ
 アはアハバの子ヨラムが病なるをもてエズレルに下りて之を訪ふ
 第九章 一茲に預言者エリシヤ預言者の徒一人を呼てこれに言ふ汝腰をひきからげ此膏の瓶を手にと
 りてギレアデのラモテに往け二而して汝がしこに到らばニムシの子あるヨシヤパテの子エヒウを其處に尋獲
 て内に入り彼をその兄弟の中より起しめて奥の間にしゆき膏の瓶をさりその首に灌ぎて言へエホバの
 く言たまふ我汝に膏をそそぎてイスラエルの王となすを而して戸を開きて逃されよ止ること勿れ四是に
 おいて預言者の僕なるその少者ギレアデのラモテに往けるが五到りて見るに軍勢の長等坐してをりけれ
 ば將軍よ我汝に告べき事ありと言ふにエヒウこたへて我等諸人の中の誰にかと言れば將軍よ汝に言
 言ふ六エヒウすまはち起て家にいりければ彼その首に膏をそそぎて之に言ふイスラエルの神エホバかく言
 たまふ我汝に膏をそそぎてエホバの民イスラエルの王となす汝はその主アハバの家を撃はるほすべし其

によりて我わが僕ある預言者等の血をエホバの諸の僕等の血をイゼベルの身に報いんハアハブの家は
 全く滅亡べしアハブに屬する男はイスラエルにありて繋かれたる者も撃かれざる者もさもに之を絶べし我
 アハブの家を子バテの子ヤラベアムの家のごとくに爲しアヒヤの子バアシヤの家のごとくなさんエズレ
 ルの地において大イゼベルを食ふべし亦これを葬るものあらじと而して戸を啓きて逃されり十一かくてエホ
 ウその主の臣僕等の許にいできたれば一人之に言ふ平安なるやこの狂る者何のために汝にきたりしやエ
 ヒウこたへて汝等はかの人を知りまたその言を聞きしを知らざり言ふに十二彼等言けらく誰なり其を我等に告
 よき是においてエヒウ言けるは彼斯や我につけて言りエホバかく言たまふ我汝に膏をそそぎてイスラエ
 ルの王となす十三彼等すなはち急ぎて各人その衣服をとりこれを階の上エヒウの下に布き喇叭を吹てエ
 ヒウは王なりと言り十四ニムシの子なるヨシヤバテの子エヒウヨラムに叛けりヨラムはイスラエルを盡
 くひきめてギレアテのラモテに於てスリアの王ハザエルを築きたりしが十五ヨラム王はそのスリアの王ハザ
 エルと戦ふ時にスリア人に貢せられたるころの傷を痊さんさてエズレルに歸りてなるエヒウ言けるは若
 なんぢらの心になはば一人もこの邑より走いでこれにエズレルに言ふ者ならしめよ十六エヒウすな
 はちエズレルをさして乗往りヨラムかしこに臥をればなりまたユダの王アハツアはヨラムを訪に下りてなる
 十七エズレルの成樓に一箇の守望者立をりしがエヒウの群衆のきたるを見て我群衆を見るさいひければヨ
 ラム言ふ一人を馬に乗て遣し其に會しめて平安なるや言しめよ十八是において一人馬にて行てこれに會
 ひ王かく宣まふ平安なるや言ふにエヒウ言けるは平安は汝の與るころならんや吾後にまはれし守望
 者また告て言ふ使者のれらの許に往たるが歸り來す十九是をもて再び人を馬にて遣したればその人かれら
 に到りて王かく宣まふ何か變事あるや言ふにエヒウ答て平安は汝の與るころならんや吾後にま
 はれし言ふ二十守望者また告て言ふ彼も彼等の所にまで到りしが歸り來すその車を趨するはニムシの子エ
 ヒウが趨するに似、狂ふて趨らせ來るニ是においてヨラム車を整へよと言ひけるが車整ひたればイ

スラエルの王ヨラムとユダの王アハツアおの／＼その車にて出たり即ちかれらエヒウにむかひて出きたりエ
 ズレル人ナボテの地にて之に會けるが二三ヨラム、エヒウを見てエヒウよ平安なるやさいひたればエヒウこ
 たへて汝の母イゼベルの姦淫と覺術と斯多かれ何の平安あらんや云り二三ヨラムすなはち手をめぐらし
 て逃げアハツアにむかひ反逆をりアハツアよ言ふに二四エヒウ手に弓をひきしほりてヨラムの肩の間を
 射たればその矢かれの心をいぬきて出で彼は車の中に偃ふしづめり二五エヒウその將ビデカルに言けるは
 彼をとりてエズレル人ナボテの地の中に投して其は汝憶ふべし嘗て我汝と一人ともに乗て彼の父ア
 ハブに従へる時にエホバ言ふ我の地において汝にむくゆることあらん然れば彼をとりてその地になげすとエ
 の血を見たりエホバ言ふ我の地において汝にむくゆることあらん然れば彼をとりてその地になげすとエ
 ホバの言のごとくにせよ二七ユダの王アハツアはこれを視て園の家の途より逃ゆきけるがエヒウその後を追
 ひ彼をも車の中に撃ころせ言しかばイブレアムの邊なるゲルの坂にてこれを撃たればメギドンまで逃ゆき
 て其處に死り二八その臣僕等すなはち之を車にのせてエルサレムにたづさへゆきダビデの邑においてかれの
 墓にその先祖等とあまじくこれを葬れり二九アハブの子ヨラムの十一年にアハツアはユダの王となりしな
 り三十斯てエヒウ、エズレルにきたりしかばイゼベル聞てその目を塗り髪をかざりて窓より望みけるが三二
 エヒウ門に入きたりたればその主を弑せしヨムリよ平安なるや言り三三エヒウすなはち面をあけて窓にむ
 かひ誰か我に與のあるや誰かあるや言けるに二三の寺人エヒウを望みたれば三三彼を投おさせ言りす
 なはち之を投おせしたればその血、牆を馬にほさばしりつけりエヒウこれを踏おほれり三四斯て彼内にい
 りて食飲をなし而して言けるは往てかの詛はれし婦を見これを葬れ彼は王の女子なればなり三五是をもて
 彼を葬らんさて往て見るにその頭骨と足と掌とありしのみなりければ三六歸りて彼につくるに彼言ふ
 是すなはちエホバがその僕なるテシベ人エリヤをもて告たまひし言なり云くエズレルの地において犬イゼ
 ベルの肉を食はん三七イゼベルの屍骸はエズレルの地に於て糞土のごとくに野の表にあるべし是をもて是は

イゼベルなりと指て言ふこと能ざらん
 第十章 アハブサマリヤに七十人の子あり茲にエヒウ書をたよめてサマリヤにおくり邑の牧伯等と長老等とアハブの子等の師傳等とに傳へて云ふ汝らの主の子等汝らさうもにあり又汝等は車も馬も城もあり且武器もあれば此書汝らの許にいたらば三汝らの主の子等の中より最も優れる方正き者を選び出してその父の位に置る汝等の主の家のために戦へよ四彼ら大に恐れて言ふ二人の王等すでに彼に當ることを得ざりしなれば我等いかで當ることを得んか五乃ち家宰、邑宰、長老、師傳等エヒウに言ひおくりけるは我等は汝の僕なり凡て汝が我等に命する事を爲ん我等は王を立てるを好まず汝の目に善き見ゆる所を爲せ六是においてエヒウ再度われらに書をあくりて云ふ汝らもし我に與き我言にしたがふならば汝らの主の子なる人々の首をとりて明日の今頃エズレルにきたりて吾許にいたれ當時王の子七十人はその師傳なる邑の貴人等さうもに居る七その書かれらに至りしかば彼等王の子等をさらへてその七十人をこさくく殺しその首を籃につめてこれをエズレルのエヒウの許につかはせり入すなはち使者いたりてエヒウに告て人衆王の子等の首をたづさへ來れりと言ければ明朝までそれを門の入口に二山に積むけと言り九朝におよび彼出て立ちすべの民に言ふ汝等は義し我はわが主にそむきて之を弑したり然る此すべての者等を殺せしは誰なるぞや十然ば汝等知れエホバがアハブの家につきて告たまひしエホバの言は一も地に隕す即ちエホバはその僕エヒウによりて告し事を成たまへり十一斯てエヒウはアハブの家に屬する者のエズレルに遣れるを盡く殺したまたその一切の重立たる者、その親き者、およびその祭司等を殺して彼に屬する者一人も遺さざりき十二エヒウすなはち起て往てサマリヤに至りしがエヒウ途にある時牧者の集會所において十三エダの王アハブの兄弟等に遭ひ汝等は何人なるやと言けるに我等はアハブの兄弟なるが王の子等と王母の子等の安否を問んきて下るなりと答へたれば十四彼等を生擒れと言り即ちかれらを生擒りその集會所の穴の側にて彼等四十二人を盡く殺し一人をも遺さざりき十五斯てエヒウ其處より進みゆきしがレカブの

子ヨナダブの己を迎にきたるに遭ければその安否をさふてこれに汝の心はわが心の汝の心と同一なるがごとくに眞實なるやと言けるにヨナダブ答へて眞實なりと言れば然ば汝の手を我に伸よと言ひその手を伸ければ彼を挽て己の車に登らしめて十六言ふ我さうもに來りて我がエホバに熱心なるを見よ斯かれば己の車に乘しめ十七サマリヤにいたりてアハブに屬する者のサマリヤに遣れるを悉く殺して遂にその一族を滅せりエホバのエヒウに告たまひし言語のごとし十八茲にエヒウ民をこさくく集てこれに言けるはアハブは少くハアルに専たるがエヒウは大にこれに事へんさす十九然ば今ハアルの諸の預言者諸の臣僕、諸の祭司等を我許に召せ一人も來らざる者なからしめよ我大なる祭祀をハアルのためになさんとするなり凡て來らざる者は生しおかしと但しエヒウハアルの僕等を滅さんとして偽りて斯なせるなり二十エヒウすなはちハアルの祭禮を設よと言ければ之を宣たりニ是てエヒウあまれくイスラエルに人をつかはしたればハアルの僕たる者皆きたれり一人も來らずして遣れるものはあらざりき彼等ハアルの家に入りたればハアルは末より末まで充わたれり二三時にエヒウ衣裳を掌ざる者にむかひ禮服をさりいだしてハアルの凡の僕等にあたへよさいひければすなはち禮服をさりいだせり二三期ありてエヒウはレカブの子ヨナダブさうもにハアルの家にいりしがハアルの僕等に言ふ汝等尋れ見て此には只ハアルの僕のみあらしめエホバの僕を一人も汝らの中にあらしめざれと二四彼等犠牲と燔祭を獻んきて入し時エヒウ八十人の者を外に置いて言ふ凡てわがその手にわたすころの人を一人にても逃れしむる者は己の生命をもてその人の生命に代へしと二五斯て燔祭を獻るころの終りし時エヒウその士卒と諸將に言ふ入てかれらを殺せ一人をも出さなれとすなはち刃をもて彼等を撃ころせり而して士卒と諸將これを投げだしてハアルの家の内殿に入り二六諸の像をハアルの家よりさりいだしてこれを焼り二七即ちかれらハアルの像をこぼちハアルの家をこぼち其をもて厠を造りしが今日までのころ二八エヒウかくイスラエルの中よりハアルを絶さりたりしが二九エヒウは尙かのイスラエルに罪を犯させたる子バテの子ヤラバアムの罪に離るることなせざりき即ち彼なほベテルとダンに

あるところの金の贖に事たり三十エホバ、エヒウに言たまひけらく汝わが義を視るところの事を行ふにあたりて善く事をなしたわが心にある諸の事をアハブの家になしたれば汝の子孫は四代までイスラエルの位に坐せんと三三然るにエヒウは心を盡してイスラエルの神エホバの律法をおこなはんとせしむるのイスラエルに罪を犯させたるヤラバアムの罪に離れざりき三三是時にあたりてエホバイスラエルを割くことを始めたまへりハザエルすなはちイスラエルの一切の邊境を侵し三三ヨルダンの東においてギレアデの全地ガド人ルベン人、マナセ人の地を侵しアルノン河の邊なるアロエルよりギレアデにいたりバシヤンにおよべり三三エヒウのその餘の行爲その凡て爲たる事およびその大なる能はイスラエルの王の歴代志の書に記さるるにあらすや三五エヒウその先祖等さうもに寢りたればこれをサマリヤに葬りぬその子エホアハズこれに代て王となれり三六エヒウがサマリヤに在りてイスラエルに王たりし間は二十八年なりき

第十一章 茲にアハツアの母アタリアその子の死たるを見て起て王の種をこさく滅したりしが二ヨラム王の女にしてアハツアの姉妹なるエホシバといふ者アハツアの子ヨアシを王の子等の殺さるる者の中より竊みさり彼をその乳母を夜着の室にいれて彼をアタリアに匿したれば終にころされざりき三ヨアシは彼さうもに六年エホバの家を隠れてをりアタリア國を治めたり四第七年にいたりエホヤダ人を遣して近衛兵の大將等を招きよせエホバの家に至りて己に就しめ彼等と契約を結び彼らにエホバの家にて誓をなさしめて王の子を見し五かれらに命じて言ふ汝等がなすべき事は是なり汝等安息日に入きたる者は三分の一は王家をまもり六三分の一はスル門に在り三分の一は近衛兵の後の門に在るべし斯なんぢら宮殿をまもりて人な

いるべからす七また凡て汝等安息日に出ゆく者はその二手さもにエホバの家において王をまもるべし八すなはち汝らおのゝ武器を手にとりて王を環て立べし凡てその列を侵す者を殺すべし汝等又王の出る時にも入る時にも王さうもに在るべし九是においてその將官等祭司エホヤダが凡て命ぜしごとくにおこなへり即ちかれらおのゝ其手の人の安息日に入らざるべき者安息日に出ゆくべき者等を率て祭司エホヤダに至

りしかば十祭司はエホバの殿にあるダビデ王の槍と楯を大將等にわたせり十一近衛兵はおのゝ手に武器をとりて王の四周に在り殿の右の端より左の端におよびて壇と殿にそひて立つ十二エホヤダすなはち王子を進ませて之に冠冕をいたさかせ律法をわたりし之を王とせしめて之に膏をそそぎければ人衆手を拍て王長壽のれさ言り十三茲にアタリア近衛兵の聲を聞きエホバの殿にいりて民の所にいたり十四見るに王は常例のごとくに高座の上立ち其傍に大將等と喇叭手立をり又國の民みな喜びて喇叭を吹たりしかばアタリアその衣を裂て反逆なり反逆なり叫べり十五時に祭司エホヤダ大將等と軍勢の士官等に命じてこれに言ふ彼をして列の間をさほりて出しめ彼に從ふ者なば劍をもて殺せさ前にも祭司は彼をエホバの家に殺すべからすと言ひけり十六是をもて彼のために路をひらきければ彼王の家の馬道をさほりゆきしが遂に其處に殺されぬ十七斯でエホヤダはエホバと王と民の間にもその皆エホバの民ならんといふ契約を立しめたり亦王と民の間にもこれを立しめたり十八是をもて國の民みなバアルの家にいりてこれを毀ちその壇をその像を全く打碎きバアルの祭司マツタンをその壇の前に殺せり而して祭司エホバの家を監督者を設けたり十九エホヤダすなはち大將等と近衛兵と國の諸の民を率てエホバの家より王をみちびき下り近衛兵の門の途よりして王の家にいたり王の位に坐せしめたり二十斯有しかば國の民はみな喜びて邑は平穩なりきアタリアは王の家に殺されぬ二二ヨアシは位に即し時七歳なりき

第十二章 一ヨアシはエヒウの七年に位に即きエルサレムにおいて四十年世を治めたりその母はベエルシバより出たるものにて名をザビアといへり二ヨアシは祭司エホヤダの己を誨ふる間は恒にエホバの善を視たまふ事をなすなへり三然と崇 耶は除かずしてあり民は尙その崇 耶において犠牲をささげ香を焚り四茲にヨアシ祭司等に言けるは凡てエホバの家に聖別て献納るるところの金即ち核數らるる人の金、估價にしたがひて出さるる身の代の金および人々が心より獻てエホバの家に持きたるところの金五これを祭司等のおのその知人より受をさめ何處にても殿に破壊の見る時これをもちてその破壊を修繕ふべし六然るにヨアシ

シ王の二十三年におよぶまで祭司等殿の破壊を修繕ふにいたらざりしかば七ヨアシ王祭司エホヤダおよび
 その他の祭司等を召てこれに言ふ汝等なご殿の破壊を修繕はざるや然ば今よりは汝等の知人より金を受て
 自己のためにすべからず唯殿の破壊の修理に其を供ふべしと入祭司等は重て民より自己のために金を受す又
 殿の破壊を修理ふことをせじと約せり九期後祭司エホヤダ一箇の匱をとりその蓋に孔を穿ちてこれをエホ
 バの家の入口の右において壇の傍に置り門守の祭司等すなはちエホバの家に入きたるころの金をこさ
 こさくその中に入たり十爰にその匱の中に金の多くあることを見れば王の書記と祭司長と上り來りてそ
 のエホバの家を積りし金を包みてこれを數へ十一その數へし金をこの工事をなす者に付せり即ちエホバの家
 の監督者にこれを付しければ彼等またエホバの家を修理ふころの木匠と建築師にこれを與へ十二石工も
 よび琢石者に與へまたこれをもてエホバの家の破壊を修繕ふ材木と琢石を買ひ殿を修理ふために用ふる諸
 物のためにこれを費せり十三但しエホバの家にいり來れるその金をもてエホバの家のために銀の盃、燈剪、
 鉢、喇叭、金の器、銀の器等を造ることばせざりき十四唯これをその工事をなす者にわたして之をもてエ
 ホバの家を修理はしめたり十五またその金を手にわたして工人にはらはしめたる人々を計算をなすことをせ
 ざりき是は彼等忠厚に事をなしたればなり十六 銀金と罪金はエホバの家にいらずして祭司に歸せり十七當
 時スリアの王ハザエルのぼり來りてガテを攻てこれを取り而してハザエルエルサレムに攻のぼらんさてその
 面をこれに向たり十八是をもてユダの王ヨアシその先祖たるユダの王ヨシヤパテ、ヨラム、アハシア等が聖
 別て獻げたる一切の物および自己が聖別て獻げたる物ならびにエホバの家の庫と王の家とにあるころの金
 を悉く取てこれをスリアの王ハザエルにおくりければ彼すなはちエルサレムを離れて去ぬ十九ヨアシのそ
 の餘の行爲およびその凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書に記さるるにあらすや二十茲にヨアシの臣僕等
 おこりて黨をむすびシラに下るころのミロの家にてヨアシを弑せり二即ちその僕シメアテの子ヨザカ
 ルとシヨメルの子ヨザパテかれを弑して死しめられたればその先祖さあなじくこれをダビデの邑に葬れりその子

アマシヤこれに代りて王となる

第十三章 ユダの王アハシアの子ヨアシの二十三年にエヒウの子ヨアハズサマリアにおいてイスラエルの
 王となり十七年位にありき二彼はエホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯させたる子パテの
 子ヤラベアムの罪を行ひつゞけて之に離れざりき三是においてエホバイスラエルにむかひて怒を發しこれを
 その代のあひだ恒にスリアの王ハザエルの手にわたしおき又ハザエルの子ベシハダテの手に付し置たまひし
 が四ヨアハズエホバに請求められたればエホバつひにこれを聽いたまへり其はイスラエルの苦難を見そなはし
 たらばなり即ちスリアの王これをなやませるなり五エホバつひに救者をイスラエルにたまひたればイスラエ
 ルの子孫はスリア人の手を脱れて曠野のこさくに己々の天幕に住にいたれり六但し彼等はイスラエルに罪
 を犯さしめたるヤラベアムの家の罪をはなれずして之をおこなひつゞけたりサマリアにも亦アシタロテの像
 たちをりぬ七繼にスリアの王は民を滅し踐くたく塵のこさくに是をなして只騎兵五十人、車十輛、歩兵
 一萬人而已をヨアハズに遺せり八ヨアハズ其餘の行爲とその凡て爲たる事およびその能はイスラエルの
 王の歴代志の書にしるさるるに非ずや九ヨアハズその先祖等もに寢りたればこれをサマリアに葬れりそ
 の子ヨアシこれに代りて王となる十ユダの王ヨアシの三十七年にヨアハズの子ヨアシサマリアにおいてイ
 スラエルの王となり十六年位にありき十一彼エホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯させた
 る子パテの子ヤラベアムの諸の罪にはなれずしてこれを行ひつゞけたり十二ヨアシの其餘の行爲とその
 凡て爲たる事およびそのユダの王アマシヤと戦ひし能はイスラエルの王の歴代志の書に記さるるに非ずや
 十三ヨアシその先祖等もに寢りてヤラベアム位にのぼれりヨアシはイスラエルの王等さあなじくサマ
 リアに葬らるる十四茲にエリシヤ死病にかうりて疾をりしかばイスラエルの王ヨアシ彼の許にくだり來て
 その面の上に涙をこぼし吾父、吾父、イスラエルの兵車よその騎兵よと言ひ十五エリシヤかれにむかひり矢
 をされと言ければすなはち弓矢をされり十六エリシヤ、またイスラエルの王に汝の手を弓にかけよと言けれ

ばすなはちその手をかけたり是においてエリシヤその手を王の手の上に按て 十七 東向の窓を開き言たれば
 之を開きけるにエリシヤまた射よ言り彼すなはち射たればエリシヤ言ふエホバよりの拯救の矢スリアに對
 する拯救の矢、汝があらすアヘクにおいてスリヤ人を撃やぶりてこれを滅しつくすにいたらん 十八 エリシヤ
 また矢を取れと言ければ取りエリシヤまたイスラエルの王に地を射よいひけるに三次射て止たれば 十九 神
 の人怒て言ふ汝は五回も六回も射るべかりしを然せしならば汝スリアを撃やぶりて之を滅しつくすこ
 さを得ん然今然せざれば汝がスリアを撃やぶることは三次のみなるべし 二十 エリシヤ終に死たればこれ
 を葬りしが年の立かへるに及てモアアの賊黨國にいりきたれり 二一 時に一箇の人を葬らんとする者ありし
 が賊黨を見たればその人をエリシヤの墓におしいれけるにその人いりてエリシヤの骨にふるよや生かへりて
 起あがりり 〇ニスリアの王ハザエルはヨアハズの一 生の間イスラエルをなやましたりしが 二三 エホバ
 そのアブラハムイサクヤコブと契約をむすびしがためにイスラエルをめぐみ之を憐みこれを眷みたまひ之
 を滅すことを好まず尙これをその前より棄はなちたまはざりき 二四 スリアの王ハザエルつひに死てその子ベ
 子ハダデこれに代りて王とされり 二五 是においてヨアハズの子ヨアシはその父ヨアハズがハザエルに攻取れ
 たる邑々をハザエルの子ベ子ハダデの手より取り取かへせり即ちヨアシは三次かれを敗りてイスラエルの邑々を
 取かへしぬ

第十四章 イスラエルの王ヨアハズの子ヨアシの二年にユダの王ヨアシの子アマツヤ王とされり 彼は王
 となれる時二十五歳にして二十九歳の間エルサレムにて世を治めたりその母はエルサレムの者にして名を
 エホアダンと云り 三 アマツヤはエホバの善き見たまふ事なしたりしがその先祖ダビデのごまきはあらざり
 き彼は萬の事において其父ヨアシがなせしごとくに事をなせり 四 惟崇 邱はのぞかずしてあり民はなほ
 その崇 邱において犠牲をささげ香を焚り 五 彼は國のその手に堅くたつにおよびてその父王を弑せし臣僕
 等を殺したりしが 六 その弑殺人の子女等は殺さざりき 是はモーセの律法の書に記されたる所にしたがへるな

り即ちエホバ命じて言たまはく子女の故によりて父を殺すべからず父の故によりて子女を殺すべからず人は
 みなその身の罪によりて死すべき者なり 七 アマツヤまた 鹽谷においてエドミ人一萬を殺せり亦セラを攻
 ざりてその名をヨクテルと名づけしが 今日まで然り 八 かくてアマツヤ使者をエホバの子ヨアハズの子なるイ
 スラエルの王ヨアシにおくりて來れ我等がひに面をあはせんと言しめければ 九 イスラエルの王ヨアシユダ
 の王アマツヤに言おくりけるはレバノンノ荆棘かつてレバノンノ檜樹に汝の女子をわが子の妻にあたへよと
 言おくりたることありしにレバノンノ野獸さほりてその荆棘を踏みふせり 十 汝は 大にエドムに勝たれば心
 に誇る、その榮譽にやすんじて家に居れなんぞ 禍を惹おこして自己もユダもともに亡んさするや 十一 然
 るにアマツヤ聽こきをせざりしかばイスラエルの王ヨアシのぼり來り是において彼ユダの王アマツヤは
 ユダのベテシメシにてたがひに面をあはせたりしが 十二 ユダイスラエルに敗られて各人その天幕に逃かへり
 ぬ 十三 是においてイスラエルの王ヨアシはアマツヤの子ヨアシの子なるユダの王アマツヤをベテシメシに據
 へ而してエルサレムにいたりてエルサレムの石垣をエフライムの門より隅の門まで凡そ四百キubitを毀ち
 十四 またエホバの家と王の家の庫とにあるところの金銀および諸の器をとりかつ人質をさりてサマリヤに
 かへれり 十五 ヨアシがなしたるその餘の行爲と其の能ふよびそのイスラエルの王アマツヤと戦ひし事はイス
 ラエルの王の歴代志の書にしるさるるにあらすや 十六 ヨアシその先祖等ととも寝りてイスラエルの王等と
 ともにサマリヤに葬られその子ヤラバアムこれに代りて王となれり 十七 ヨアシの子なるユダの王アマツヤは
 ヨアハズの子なるイスラエルの王ヨアシの死てより後なほ十五年生存へたり 十八 アマツヤのその餘の行爲
 はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらすや 十九 茲にエルサレムにおいて黨をむすびて彼に敵する者あ
 りければ彼ラキシに逃ゆきけるにその人々ラキシに人をやりて彼を彼處に殺さしめたり 二十 人衆かれを馬
 に負せてもちきたりエルサレムにおいてこれをその先祖等とともダビデの邑に葬りぬ 二一 ユダの民みなア
 ザリヤをさりて王となしてその父アマツヤに代しめたり 時年十六なりき 二二 彼エラテの邑を建てこれを

再びユダに歸せしめたり是はかの王がその先祖等さうもに寢りし後なりき○二三 ユダの王ヨアシの子アマジヤの十五年にイスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムアマリアにおいて王となり四十二年位にありき 二四 彼はエホバの目の前に悪をなし夫のイスラエルに罪を犯さしめたる子パテの子ヤラベアムの罪に離れざりき 二五 彼ハマテの入處よりアラバの海までイスラエルの邊境を恢復せりイスラエルの神エホバがガテヘルのアミツタイの子あるその僕預言者ヨナによりて言たまひし言のごとしニ六 エホバイスラエルの艱難を見たまふに其は甚だ苦かり即ち驚れたる者もあらず又イスラエルを助る者もあらず 二七 エホバは我イスラエルの名を天下に塗抹んさすと言たまひしこと無し反てヨアシの子ヤラベアムの手をもてこれを採ひたまへりニ八 ヤラベアムその餘の行爲さその凡てなしたる事ふよびその戦争をなせし能その昔にユダに屬し居たることありしがダマスコさハマテを再びイスラエルに歸せしめたる事はイスラエルの王の歴代志の書に記るるにあらすや 二九 ヤラベアムその先祖たるイスラエルの王等さうもに寢りその子ザカリヤこれに代りて王となれり

第十五章 一 イスラエルの王ヤラベアムの二十七年にユダの王アマツヤの子アザリヤ王となれり二 彼は王となれる時に十六歳なりしが五十二年の間エルサレムにおいて世を治めたりその母はエルサレムの者にして名をエコリアと言ふ三 彼はエホバの善を見たまふ事なす萬の事においてその父アマツヤがなしたることく行へり四 惟崇 耶は除かずしてあり民は尙その崇 耶の上に犠牲をささげ香をたけり五 エホバ王を撃たまひしかばその死る日まで癩病人となり別殿に居ぬその子ヨタム家の事を管理て國の民を審判り六 アザリヤのその餘の行爲さその凡てなしたる事はユダの王の歴代志の書に記るるにあらすや七 アザリヤその先祖等さうもに寢りたればこれをダビデの邑にその先祖等さうもに葬れりその子ヨタムこれに代りて王となる○八 ユダの王アザリヤの三十八年にヤラベアムの子ザカリヤアマリアにおいてイスラエルの王となれりその間は六月九 彼の先祖等のなせしごとくエホバの目の前に悪を爲し夫のイスラエルに罪を犯させた

る子パテの子ヤラベアムの罪に離れざりき十 茲にヤベシの子シヤルム黨をむすびて之に敵し民の前にてこれを撃て弑しこれに代りて王となれり十一 ザカリヤのその餘の行爲はイスラエルの王の歴代志の書に記る 十二 エホバのエヒウに告たまひし言は是なり云く汝の子孫は四代までイスラエルの位に坐せん果して然り十三 ヤベシの子シヤルムはユダの王ウツヤの三十九年に王となりアマリアにおいて一月の間王たりき 十四 時にガデの子メナヘム、テルザより上りてアマリアに來りヤベシの子シヤルムをアマリアに撃てこれを殺し之にかはりて王となれり 十五 シヤルムその餘の行爲さその徒黨をむすびし事はイスラエルの王の歴代志の書に記る 十六 その後メナヘムテルザより上りてアマリアに來りてテフササその中にあるさるの者もよびその四周の地を撃り即ちかれら己むために開くことをせざりしかばこれを撃てその中の孕婦をこきく刺したり 十七 ユダの王アザリヤの三十九年にガデの子メナヘムイスラエルの王となりアマリアにおいて十年の間世を治めたり 十八 彼エホバの目の前に悪をなし彼のイスラエルに罪を犯させたる子パテの子ヤラベアムの罪に生涯離れざりき 十九 茲にアツスリヤの王プルその地に攻きたりければメナヘム銀一千タラントをプルにあたへたり是は彼をして己を助けしめ是によりて國を己の手に堅く立しめんさてなりき 二十 即ちメナヘムその銀をイスラエルの諸の大富者に課しその人々に各々銀五十シケルを出さしめてこれをアツスリヤの王にあたへたり是をもてアツスリヤの王は歸りゆきて國に止ることをせざりき 二一 メナヘムその餘の行爲さその凡てなしたる事はイスラエルの王の歴代志の書に記る 二二 二メナヘムその先祖等さうもに寢りその子ベカヒヤこれに代りて王となれり 二三 メナヘムの子ベカヒヤはユダの王アザリヤの五十年にアマリアにおいてイスラエルの王となり二年のあひだ位にありき 二四 彼エホバの目の前に悪をなし彼のイスラエルに罪を犯させたる子パテの子ヤラベアムの罪に離れざりき 二五 茲にその將官なるレマリヤの子ベカ黨をむすびて彼に敵しアマリアにおいて王の家の奥の室にこれを撃ころしアルゴブアマリアをもこれさうもに殺せり時にザレアデ人五十人ベカさうもにありきベカすなはち彼をころしかれに代りて王となれり 二六 ベカヒヤのそ

第十七章 ユダの王アハズの十二年にエラの子ホセア王となりサマリヤにおいて九年イスラエルを治めたり。彼エホバの目の前に惡をなせしがその前にありしイスラエルの王等のごとくばあらざりき。三アッスリヤの王シヤルマ子セル攻のぼりたればホセアこれに臣服して貢を納たりしが。四アッスリヤの王ツひにホセアの已に叛けるを見たり其は彼使者をエジプトの王ソにくり且前に歳々なせしごとくに貢をアッスリヤ王に納ざりければなり是に於いてアッスリヤの王かれを禁錮て獄におけり五すなはちアッスリヤの王せめよりて國中を遍くゆきめぐりサマリヤにのぼりゆきて三年が間これをせめ圍みたりしが。六ホセアの九年におよびてアッスリヤの王ツひにサマリヤを取りイスラエルをアッスリヤに携へゆきてこれをハラミホルゴザン河の邊にメデアの邑々におきぬ。七此事ありしはイスラエルの子孫己をエジプトの地より導きのぼりてエジプトの王パロの手を脱しめたるその神エホバに對て罪を犯し他の神々を敬ひハエホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人の法度にあゆみ又イスラエルの王等の設けし法度にあゆみたるに因てなり。九イスラエルの子孫義からぬ事をもてその神エホバを掩ひかくしその邑々に崇邱をたてたり看守臺より城にいたるまで然り。十彼等一切の高丘の上一切の青樹の上に偶像をアシラ像を立て十一エホバがかれらの前より移したまひし異邦人のなせしごとくにその崇邱に香を焚き又惡を行ひてエホバを怒らせたり。十二エホバかれらに汝等これらの事を爲べからずと言ふたまひしに彼等偶像に事ふるごを爲しなり。十三エホバ諸の預言者諸の先見者によりてイスラエルをユダに見證をたて汝等翻へりて汝らの惡き道を離れわが誠命わが法度をまもり我が汝等の先祖等に命じまたわが僕なる預言者等によりて汝等に傳へし法に率由ふやうにせよと言たまへり。十四然るに彼ら聽ごをせずしてその項を強くせり彼らの先祖等がその神エホバを信ぜずしてその項を強くしたるが如し。十五彼等はエホバの法度を棄てエホバがその先祖等と結びたまひし契約を棄てまたその彼等に見證したまひし證言を棄て且虚妄物にしたがひて虚浮なりまたその周圍なる異邦人の跡をふめり是はエホバが是のごとくに事をなすべからずと彼らに命じ給ひし者なり。十六彼等その神

エホバの諸の誠命を遺て己のために二の牛の像を鑄し又アシラ像を造り天の衆群を拜み且バアルに事へ。十七またその子息息女に火の中を通らしめト篋をよび禁厭をなしエホバの目の前に惡を爲ごに身を委れてその怒を惹起せり。十八是をもてエホバ大にイスラエルを怒りこれをその前より除きたまひたればユダの支派のほかに遺れる者なし。十九然るにユダもまたその神エホバの誠命を守ずしてイスラエルの立てたる法度にあゆみたれば二十エホバイスラエルの苗裔をこまかく棄これを苦しめこれをその掠むる者の手に付して遂にこれをその前より打すてたまへり。二一すなはちイスラエルをダビデの家より裂はなしたまひし。二二エホバにこれをその前より除きたまへり。二三遂にエホバその僕なる諸の預言者をもて言たまひしごとくにイスラエルをその前より除きたまへり。二四イスラエルはすなはちその國よりアッスリヤにうつされて今日にいたる。二五斯てアッスリヤの王バビロン、グタ、アワ、ハマテおよびセパルライムより人をおくりてこれをイスラエルの子孫の代にサマリヤの邑々に置ければその人々サマリヤを有ちてその邑々に住しが。二六その彼處に始めて住る時には彼等エホバを敬ふごをせざりしかばエホバ獅子をかれらの中に送りたまひてその獅子かれら若干を殺せり。二七是に於いてアッスリヤの王に告て言ふ汝が移てサマリヤの邑々におきたまひし。二八是に於てサマリヤの神の道を知ざるが故にその神獅子をかれらの中におくりて獅子かれらを殺せり。是は彼等その國の神の道を知ざるに因てなり。二九アッスリヤの王すなはち命を下して言ふ汝等が彼處より曳きたりし祭司一人を彼處に携ゆけ即ち彼をして彼處にいたりて住しめその國の神の道その人々に教へしめよ。三〇是に於てサマリヤより移れし祭司一人きたりてベテルに住みエホバの敬ふべき事をかれらに教へたり。三一その民はまた各々自分自分の神々を造りてこれをかのサマリヤ人が造りたる諸の崇邱に安置せり。民みなその住る邑々に於いて然なしぬ。三二即ちバビロンの人々はスコテベノテを作りクタの人々は子ルガルを作りハマテの人々は

アシマを作り三アビ人はニアハズミタルタクを作りセパルロイ人は其子女を火に焚てセパルロイムの神ア
 テランメレクおよびアナンメレクに奉げたり三三彼ら又エホバを敬ひ凡俗の民をもて崇 邱の祭司となし
 たらば其人これのために崇 邱の家々にて職務をなせり三三斯その人々エホバを敬ひたりしが亦その携へ
 出されし國々の風俗にしたがひて自己自己の神々に事へたり三四今日にいたるまで彼等は前の習俗にしたが
 ひて事をなしエホバをも敬はず彼等の法度をも例典をも行はず又エホバがイスラエルを名けたまひしヤコブ
 の子孫に命じたまひし律法をも誠命をも行はざるなり 三五昔エホバがイスラエルと契約をたてこれに命じて言たま
 ひけらく汝等は他の神を敬ふべからずまたこれを拜みこれに犠牲をささぐべからず 三六只大なる
 能をもて腕を伸て汝等をエジプトの地より導き上りしエホバをのみ汝等敬ひこれを拜みこれに犠牲をささ
 ぐべし三七またその汝等のために録したまへる法度と例典と律法と誠命を汝等謹みて恒に守るべし他の神
 神を敬ふべからず三八我が汝等とむすびし契約を汝等忘るべからず又他の神々を敬ふべからず 三九只汝
 らの神エホバを敬ふべし彼なんぢらなその 諸の敵の手より救ひいださん 四十然るに彼等は聽こをせずし
 てなほ前の習俗にしたがひて事を行へり四一諸の國々の民は斯エホバを敬ひまたその驕める像に事たりし
 がその子も孫も共に然りその先祖のなせしごとくに今日までも然らずなり

第十八章一イスラエルの王エラの子ホセアの三年にエダの王アハズの子ヒセキヤ王となり二彼は王とな
 れる時二十五歳にしてエルサレムにて二十九年世をおさめたりその母はザカリアの女にして名をアビさいへ
 リ三ヒセキヤはその父ダビデの凡てなせし如くエホバの善を見たまふ事ななし四崇 邱を除き偶像を毀ち
 アシラ像を欲たふしモーセの造りし銅の蛇を打碎けりこの時までイスラエルの子孫その蛇にむかひて香を
 焚たればなり人々これを子ホシタン(銅物)を稱せり五ヒセキヤはイスラエルの神エホバを頼り是をもて彼
 の後にも彼の先にもエダの 諸の王等の中に彼に如きものありき六即ち彼は固くエホバに身をよせてこれに
 従ふことをやめずエホバがモーセに命じたまひしその誠命を守り七エホバ彼さうもに在したれば彼はその

往こざるにて凡て利達を得たり彼はアッスリヤの王に叛きてこれに事へざりき八彼ペリシテ人を擊敗りてガ
 ザにいたりその境に達し看守臺より城にまで及べり九ヒセキヤ王の四年すなはちイスラエルの王エラの子ホ
 セアの七年にアッスリヤの王シヤルマ子セルサマリヤに攻めたりてこれを圍みけるが十三年の後つひに之を
 取りサマリヤの取れしはヒセキヤの六年にしてイスラエルの王ホセアの九年にあたる十一アッスリヤの王イ
 スラエルをアッスリヤに携へゆきてこれをハラミエザン河の邊にメデアの邑々におきぬ 十二是は彼等その
 神エホバの言に違はずその契約を破りエホバの僕 モーセが凡て命じたる事をやぶりこれを聽こも行ふ
 こころもせざるによりてなり十三ヒセキヤ王の十四年にアッスリヤの王セナケリブ攻めたりてエダの 諸の國
 き邑を取れば十四エダの王ヒセキヤ人をラキシにつかはしてアッスリヤの王にいたらしめて言ふ我過て
 り我を離れて歸りたまへ汝が我に蒙しむる者は我これを爲へしアッスリヤの王すなはち銀三百タラント
 金三十タラントをエダの王ヒセキヤに課したり十五是においてヒセキヤ、エホバの家と王の家の庫さにある
 さころの銀をこさくく彼に與へたり十六此時エダの王ヒセキヤまた己が金を着たりしエホバの宮の戸もよ
 び柱を剝てこれをアッスリヤの王に與へたり十七アッスリヤの王またタルタン、ラサリスおよびラアシャ
 ケをしてラキシより大軍をひきめてエルサレムにむかひてヒセキヤ王の所にいたらしめたらばすなはち上り
 てエルサレムにきたりて彼等即ち上り來り漂布場の大路上の池塘の水道の邊にいたりて立ち十八而
 して彼等王を呼たればヒルキヤの子なる宮内卿 エリアキム書記官セブナおよびアサフの子ある史官ヨ
 ア出きたりて彼等に詣りけるに十九ラアシャケこれに言けるは汝等ヒセキヤに言へし大王アッスリヤの
 王かく言たまふ此汝が頼むこころの者は何ぞや 二十汝等戦争をなすの謀計と勇力を言ふも只これ口の先
 の言語たるのみ誰を恃みて我に叛くことをせしや 二一視み汝は折かされる葦の杖あるエジプトを頼む其は人
 の其に倚るあればすなはちその手を刺さほすなりエジプトの王パロは凡てこれを頼む者に斯あるなり 二二汝
 等あるひは我はわれらの神エホバを頼むと我に言ん彼はヒセキヤがその崇 邱と祭壇とを除きたる者にあ

らすやまた彼はエダエエルサレムに告げ汝等はエルサレムに於てこの壇の前に禮拜をなすべしと言しにあら
 すや二三然ば請ふわが主君アッスリヤの王に約をなせ汝もし人を乘しむることを得ば我馬二千匹を汝にあ
 たへん二四汝いかにして我主君の諸臣の中の最も微き一將だにも退くることを得人汝なんぞエツプト
 を頼みて兵車と騎兵をこれに仰かんとするや二五また我も今エホバの旨によらずして此處を滅しに上
 れるならんやエホバ我に此處に攻のぼりてこれを滅せと言たり二六時にヒルキヤの子エリアキムおよびセ
 プナとヨア、ラブシヤケにいひけるは請ふスリアの語をもて我等に語りたまへ我等これを識なり石垣の上に
 なる民の聞るころにてエダヤ語をもて我等に言談たまふなかれ二七ラブシヤケかれらに言ふわが君唯
 我を汝の主と汝さにつかはして此言をのべしめたまふならんや亦石垣の上に坐する人々にも我を遣して
 彼等をして汝等さうもに自己の便溺を食ひ且飲にいたらしめんとしたまふにあらすや二八而してラブシヤ
 ケ起あがりエダヤ語をもて大聲に呼はり言をいだして曰けるは汝等大王アッスリヤの王の言を聴け二九
 王かく言たまふ汝等ヒゼキヤに欺かるるなかれ彼は汝等をわが手より救ひいだすことをえざるなり三十ヒ
 セキヤがエホバかならず我らを救ひたまはん此邑はアッスリヤの王の手に陥らじと言て汝らにエホバを頼ま
 しめんとするとも三二汝等ヒゼキヤの言を聴きかれアッスリヤの王かく言たまふ汝等約をなして我に降
 れ而して各人おのれの葡萄の樹の果を食ひ各人おのれの無花果樹の果をくらひ各人おのれの井水を飲めよ
 三三我來りて汝等を一の國に擲ゆかん其は汝等の國のごとき國穀と酒のある地パンと葡萄園のある地油の
 出る橄欖と蜜とのある地なり汝等は生ることを得人死ることをあらじヒゼキヤエホバ我等を救ひたまはんと言
 て汝らを勸るるもこれを聽なかれ三三國々の神の中孰かその國をアッスリヤの王の手より救ひたりしや
 三四ハマテおよびアルパテの神々は何處にあるセパルロイム、ヘナおよびアラの神々は何處にあるやサマリ
 アをわが手より救ひ出せし神々あるや三五國々の神の中にその國をわが手より救ひいだせし者ありしや然ば
 エホバいひてエエルサレムをわが手より救ひいだすことを得人と三六然ども民は黙して一言もこれに應へざ

りき其は王命じてこれに應ふるまかれと言きたればなり三七かくてヒルキヤの子なる宮内卿エリアキム
 書記官セブナおよびアサの子なる史官ヨアその衣をさきてヒゼキヤの許にいたりラブシヤケの言をこれ
 に告たり

第十九章 一ヒゼキヤ王これを聞てその衣を裂き麻布を身にまきひてエホバの家に入り二宮内卿エリアキ
 ムと書記官セブナと祭司の中の長老等々に麻布を衣せてこれをアモツの子預言者イザヤに遣せり三彼等
 イザヤに言けるはヒゼキヤかく言ふ今日は艱難の日懲罰の日打棄らるる日なり嬰孩すでに産門にたりて之
 を産いだす力なきなり四ラブシヤケその主君なるアッスリヤの王に差遣れて來り活る神を誇る、汝の神エホ
 バあるひは彼の言を聞たまはん而して汝の神エホバその聞る言語を賞罰たまふこともあらん然ば汝この遠る
 者のために祈禱をたてまつれ五ヒゼキヤ王の僕等すなはちイザヤの許にいたりければ六イザヤかれらに言
 けるは汝等の主君にかく言へしエホバかく言たまふアッスリヤの王の臣僕等が我を誇るころの言を汝聞
 て懼るるなかれ七我かれの氣をうつして風聲を聞て己の國にかへるにいたらしめん我また彼をして自己の國
 に於て劍に斃れしむべしと八儲またラブシヤケは歸りゆきてアッスリヤの王がリブナに戦争をなしたるころ
 るに至れり其は彼そのラキシを離れしを聞たればなり九茲にアッスリヤの王はエテオピアの王テルハカ汝
 に攻きたる言ふを聞てまた使者をヒゼキヤにつかはして言しむ十汝等エダの王ヒゼキヤに告て言へし汝
 エルサレムはアッスリヤの王の手に陥らじと言て汝が頼むころの神に欺かるるなかれ十一汝はアッスリヤ
 の王等が萬の國々になしたるころの事を知る即ちこれを滅しつくせしかり然ば汝いかで救らんや十二吾父
 等はゴザン、ハラシ、レセブおよびテラセルのエデンの人々等を滅ぼせしむその國々の神これを救ひたりし
 や十三ハマテの王アルパテの王セパルロイムの邑およびヘナとアラの王等は何處にあるや十四ヒゼキヤ使者
 の手より書を受けてこれを讀みエホバの家にのぼりゆきてエホバの前にこれを展開け十五而してヒゼキヤエホ
 バの前に祈りて言けるはケルビムの間にいますイスラエルの神エホバよ世の國々の中において只汝のみ神

にますなり汝は天地を造りたまひし者にいます十六エホバよ耳を傾けて聞たまへエホバよ目を開きて見たまへセナケリヤが活る神を誇りにおくれる言語を聞たまへ十七エホバよ誠にあつスリヤの王等は諸の民その國々を滅し十八又その神々を火にあげたり其等は神にあらす人の手の作れる者にして木石たればこれを滅せしなり十九今われらの神エホバよ願くは我らをかれの手より拯ひいだしたまへ然は世の國々皆汝エホバのみ神にいますことを知らん二十茲にアモツの子イザヤ、ロセキヤに言つかはしけるはイスラエルの神エホバかく言たまふ汝がセナケリヤの事につきて我に祈ることをの事は我これを聴り二エホバがかれの事につきて言ふことなるの言語は是のごとし云く處女なる女子シオンは汝を藐視し汝を嘲る、女子エルサレムは汝にむかひて頭を搦る二三汝誰を誇りかつ罵詈雑言や汝誰にむかひて聲をあげしや汝はイスラエルの聖者にむかひて汝の目を高く擧たるなり二三汝使者をもて主を誇て言ふ我夥多き兵車をひきゐて山々の巔にのぼりレバノン山の奥にいたり長高き檜樹と美しき松樹を斫たふす我その境の休息所にいたりその園の林にいたる二四我は外國の地をほりて水を飲む我は足の跡をもてエジプトの河々をこきくくふみ潤すあり二五汝聞すや昔われ之を作し古時よりわれ之を定めたり今われ之を奪ふ即ち堅き邑々は汝のために垣墟なるなり二六是をもてそれらの中にすむ民は力弱かり懼れかつ驚くなり彼等は野の草のごとし青葉のごとし屋蓋の草のごとし枯る苗のごとし二七汝の止るさ汝の出るさ汝の入るさ汝の我にむかひて怒くるふさは我の知さるなり二八汝の怒くるふ事汝の傲慢さるの事上りてわが耳にいりたれば我を汝の鼻につけ嚙む汝の唇にはごこして汝を元來し道へひきかへすべし二九是は汝にあたる徴なり即ち一年は糧を食ひ第二年には又その糧を食ふあらん第三年には汝は稼ごさへし糧ごさをし又葡萄園をつくりてその果を食ふべし三〇ユダの家の逃れて遣れる者は復根を下に張り實を上に結ばん三一即ち餘者エルサレムより出て逃避たる者シオン山より出きたらんエホバの熱心これを爲べし三二故にエホバアッスリヤの王の事をかく言たまふ彼は此邑に入じ亦これに矢を發つことあらす循を之にむかひて堅ること

あらす亦壘をきづきてこれを攻ることあらじ三三彼はその來し路より歸らん此邑にいることあらじエホバこれを言ふ三四我わが身のため又わが僕ダビデのためにこの邑を守りてこれを救ふべし三五その夜エホバの使者いでアッスリヤ人の陣營の者十八萬五千人を撃ころせり朝早く起いで見るに皆死て屍となりなる三六アッスリヤの王セナケリヤすなはち起いで歸りゆきて二子べに居しが三七その神ニスロクの家に入りて禮拜をなしたる時にその子アテランメレクとシヤンセルと剣をもてこれを殺せり而して彼等はアララテの地に逃げけり是にいてその子エサルハドンこれに代りて王となれり

第二十章 當時ヒセキヤ病て死なんさせしことありアモツの子預言者イザヤ彼の許にいたりて之にいひけるはエホバかく言たまふ汝家の人に遺命をなせ汝は死ん生ることを得じ二是にいてヒセキヤその面を壁にむけてエホバに祈り三嗚呼エホバよ願くは我が眞實さ一心をもて汝の前にあゆみ汝の目に適ふことを行ひしを記憶たまへとて痛く泣り四かくてイザヤ未だ中の邑を出はなれざる間にエホバの言これに臨みて言ふ五汝還りてわが民の君ヒセキヤに告よ汝の父ダビデの神エホバかく言ふ我汝の祈禱を聴り汝の涙を看たり然ば汝を愈すべし第三日には汝エホバの家に入ん六我汝の齡を十五年増べし我汝この邑を無花果の團塊壹箇を持きたれと言ければすなはち之を持きたりてその腫物に貼ればヒセキヤ愈ぬ八ヒセキヤ、イザヤに言けるはエホバが我を愈したまふ事第三日に我がエホバの家にのぼりゆく事につきては何の徴あるや九イザヤ言けるはエホバがその言しごころを爲たまはん事につきては汝エホバよりの徴を得ん日影進めること十度なり若日影十度退れば如何十ヒセキヤ答へけるは日影の十度進むは易き事なり然せば日影を十度しりぞかしめよ十一是にいて預言者イザヤ、エホバに願はりければアハズの日晷の上に進みし日影を十度しりぞかしめたまへり十二その頃バラダンの子なるバビロンの王メロダクバラダン書ふべし禮物をヒセキヤにおくれり是はヒセキヤの疾なるを聞たればあり十三ヒセキヤこれがために喜びその寶

物の庫金銀香物貴き膏あよび武器庫をらびにその府庫にあるところの一切の物を之に見せたりその家にある物もその國の中にある物も何一箇としてヒセキヤが彼等に見せざる者はなかりき十四 茲に預言者イザヤ、ヒセキヤ王のもこに來りてこれに言けるは夫の人々は何を言しや何處より來りしやヒセキヤ言けるは彼等は遠き國より即ちバビロンより來り十五 イザヤ言ふ彼等は汝の家にて何を見しやヒセキヤ答へて云ふ吾家にある物は皆われら之を見たり我庫の中には我がかれに見せざる者なきなり十六 イザヤすなはちヒセキヤに言けるは汝エホバの言を聞け十七 エホバ言たまふ視よ日いたる凡て汝の家にある物あよび汝の先祖等が今日までに積蓄へたる物はバビロンに擲ゆかれん遺る者なかるべし十八 汝の身より出る汝の生んこころの子等の中を彼等擲へ去ん其等はバビロンの王の殿において官吏なるべし十九 ヒセキヤ、イザヤに言ふ汝が語れるエホバの言は善し又いふ若わが世にある間に太平さ眞實さあらば善にあらすや二十 ヒセキヤのその餘の行爲その能あよびその池塘さ水道を作りて水を邑にひきし事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらすや二十一 ヒセキヤその先祖等ももに寢りてその子マナセこれに代りて王となれり

第二十一章 マナセ十二歳にして王となり五十五年の間エルサレムにて世を治めたりその母の名はヘフツバさいふニマナセはエホバの目の前に惡をなしエホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし國々の人がなすところの憎むべき事に倣へり三 彼はその父ヒセキヤが毀ちたる崇邱を改め築き又イスラエルの王アハブのなせしごとくバアルのために祭壇を築きアシラ像を作り且天の衆群を拜みてこれに事へ四 またエホバの家の中に數箇の祭壇を築けり是はエホバがこれをさして我わが名をエルサレムにおかんと言たまひし家あり五 彼エホバの家の二の庭に祭壇を築き六 またその子に火の中を通らしめ占トをなし魔術をおこなひ口寄者さ卜筮師を取もちエホバの目の前に衆多の惡を爲てその震怒を惹おこせり七 彼はその作りしアシラの銅像を殿にたてたりエホバの殿につきてダビデとその子ソロモンに言たまひしことあり云く我この家さ我がイスラエルの諸の支派の中より選みたるエルサレムに吾名を永久におかん八 彼等もし我が凡てこ

れに命ぜし事わが僕モーセがこれに命ぜし一切の律法を護みて行はせ我これが足をしてわがその先祖等に與へし地より重てさまよひ出ることなからしむべし九 然るに彼等は聽こをせざりきマナセが人々を誘ひて惡をなせしことはエホバがイスラエルの子孫の前に滅したまひし國々の人よりも甚だしかりき十 是においてエホバその僕なる預言者等をもて語て言給はく十一 ユダの王マナセこれらの憎むべき事を行ひその前にありしアモリ人の凡て爲しきころにも論たる惡をなし亦ユダをしてその偶像をもて罪を犯させたれば十二 イスラエルの神エホバが言ふ視よ我エルサレムにユダに災害をくだす是を聞く者はその耳ふたつながら鳴ん十三 我サマリヤを量りし繩をアハブの家にもちひし準繩をエルサレムにほごし人が血を拭ひこれを拭ひて反覆がごとくにエルサレムを拭ひさらん十四 我わが産業の民の殘餘を棄てこれをその敵の手に付さん彼等は其の諸の敵の擄掠にあひ掠奪にあふべし十五 是は彼等その先祖等がエジプトより出し日より今日にいたるまで吾目の前に惡をなすを怒らするが故なり十六 マナセはエホバの目の前に惡をなすをなひてユダに罪を犯させたる上にまた無辜者の血を多く流してエルサレムのこの極よりの極にまで盈せり十七 マナセのその餘の行爲その凡て爲たる事あよびその犯したる罪はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらすや十八 マナセその先祖等ももに寢りてその家の圍すなはちウザの圍に葬られその子アモンこれに代りて王となれり十九 アモンは王となれる時二十二歳にしてエルサレムにおいて二年世を治めたりその母はメテバのハルツの女にしてその名をメシユレメテ云ふ二十 アモンはその父マナセのあせしごとくエホバの目の前に惡をなせり二一 すあはち彼は凡てその父のあゆみし道にあゆみその父の事へし偶像に事へてこれを拜み二三 その先祖等の神エホバを棄てエホバの道にあゆまざりき二三 茲にアモンの臣僕等黨をむすびて王をその家に弑したりしが二四 國の民そのアモン王に敵して黨をむすびし者をこころく撃ころせり而して國の民アモンの子ヨシアを王となしてそれに代らしむ二五 アモンのなしたるその餘の行爲はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらすや二六 アモンはウザの圍にてその墓に葬られその子ヨシアこれに代りて王となれり

第二十二章一ヨシアは八歳にして王となりエルサレムにおいて三十一年世を治めたり其母はボツカテのアドヤの女にして名をエテダと曰ふニヨシアはエホバの目に適ふ事なし其父ダビデの道にあゆみて右にも左にも轉らざりき三ヨシア王の十八年に王メシユラムの子アザリヤの子なる書記官シヤパンをエホバの家に遣せり即ちこれに言けらく曰汝祭司の長ヒルキヤの許にのぼり行てエホバの家にいりし銀すなはち門守の民よりあつめし者を彼に計算しめ五工事を司るエホバの家の監督者の手にこれを付さしめ而してまた彼らをしてエホバの家にありて工事をなすことなる者にこれを付さしめ殿の破壊を修理はしめよ六即ち工匠と建築者石工にこれを付さしめ又これをもて殿を修理ふ材木と砍石を買しむべし七但し彼らは誠實に事をなせば彼らの手にわたすことなるの銀の計算をかれらとするには及ばざるなり八時に祭司の長ヒルキヤ書記官シヤパンに言けるは我エホバの家において律法の書を見いだせりヒルキヤすなはちその書をシヤパンにわたしたれば彼これを讀り九かくて書記官シヤパン王の許にいたり王に返事まをして言ふ僕等殿にありし金を打あけてこれを工事を司るエホバの家の監督者の手に付せり十書記官シヤパンまた王につけて祭司ヒルキヤ我一書をわたせり言ひシヤパン其を王の前に讀けるに十一王その律法の書の言を聞やその衣を裂り十二而して王祭司ヒルキヤとシヤパンの子アヒカムとミカヤの子アクホルと書記官シヤパンと王の内臣アサヤとに命じて言ふ十三汝等往てこの見當し書の言につきて我のため民のためユダ全國のためエホバに問へ其は我等の先祖等は此の書の言に聽したがひてその凡て我等のために記されたることを行ふことをせざりしに因てエホバの我等にむかひて怒を發したまふこと甚だしかるべければなり十四是において祭司ヒルキヤアヒカムアクホルシヤパンおよびアサヤ等シヤラムの妻なる女預言者ホルダの許にいたれりシヤラムはホルダの子にして衣裳の室を守る者なり時にホルダはエルサレムの下邑に住る彼等すなはちホルダに物語せしかば十五ホルダかれらに言けるはイスラエルの神エホバかく言たまふ汝等を我につかはせる人に告よ十六エホバかく言ふ我ユダの王が讀たるこの書の一切の言にしたがひ

て災害をこの處にすめる民に降さんぞす十七彼等はわれを棄て他の神に香を焚きその手に作れる諸の物をもて我を怒らするなり是故に我この處にむかひて怒の火を發す是は滅ざるべし十八但し汝等をつかはして我に問しむるユダの王には汝等かく言へし汝が聞る言につきてイスラエルの神エホバかく言たまふ十九汝はわが此處に此にすめる民にむかひて是は荒地となり呪詛ならんと言しを聞たる時に心柔にしてエホバの前に身を卑し衣を裂て吾前に泣たれば我もまた聽こさなすなりエホバこれを言ふ二十然ば視よ我なんぢを汝の先祖等に歸せしめん汝は安全に歸することなうべし汝はわが此處にくだす諸の災害を目に見ることあらじと彼等すなはち王に返事まをしぬ

第二十三章一是において王人をつかはしてユダとエルサレムの長老をこきくく集め二而して王エホバの家へのぼれりユダの諸の人々エルサレムの一切の民および祭司預言者ならびに大小の民みな之にしたがふ王すなはちエホバの家に見あたりし契約の書の言をこきくくかれらの耳に讀きかせ三而して王高座の上を立てエホバの前に契約をなしエホバにしたがひて歩み心をつくし精神をつくしてその誠命と律法と法度を守り此書にしるされたる此契約の言をおこなはんと言り民みなその契約に加はりぬかくして王祭司の長ヒルキヤとその下にたつことなるの祭司等および門守等に命じてエホバの家よりしてバアルとアシラと天の衆群のために作りたる諸の器を執りださしめエルサレムの外にてキテロン野にこれを焼きその灰をベテラルに持ゆかしめ五又ユダの王等が立てユダの邑々をエルサレムの四圍なる崇邱に香をたかしめたる祭司等を廢しまたバアルと日月星宿と天の衆群を焚く者等をも廢せり六彼またエホバの家よりアシラ像をさりいだしエルサレムの外に持ゆきてキテロン川にいたりキテロン川においてこれを焼きこれを打碎きて粉をなしその粉を民の墓に散し七またエホバの家の旁にある男娼の家を毀てり其處はまた婦人がアシラのために天幕を織ることなりき八彼またユダの邑々より祭司をこきくく召よせまた祭司が香をたきたる崇邱をばゲバよりベエルシバまでこれを汚しまた門にある崇邱を毀てり是等の崇邱は一は邑の

宰ヨシエアの門の入口にあり一は邑の門にありて之に入る人の左にあたる九 崇 邱の祭司等はエルサレムにおいてエホバの壇にのぼることをせざりし但し彼等は其の兄弟の中において無酵パンを食へり十王また人の子息息女に火の中を通らしめて之をモロクにささぐることをなからんためにベンボンノムの谷にあるトバテを汚し十一またユダの王等が日のためにささげてエホバの家の門における馬をうつせりこの馬はパルリムにある侍従ナタンメレクの室にありしなり彼また日の車を皆火に焚り十二またユダの王等がアハズの樓の屋背につくりたる祭壇をマナセがエホバの家の兩の庭につくりたる祭壇を王これを毀ちこれを其處より取くつしてその碎片をキテロン川になげ捨たり十三またイスラエルの王ソロモンが昔シドン人の憎むべき者なるアシタロテとモアブ人の憎むべき者なるケモシとアンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのためニエルサレムの前において滅山の右に築きたる崇 邱も王これを汚し十四また諸の像をうち碎きアシラ像をきりたふし人の骨をもてその處々に充せり十五またベテルにある壇のイスラエルに罪を犯させたる子バテの子ヤラベアムが造りし崇 邱すなはちその壇もその崇 邱も彼これを毀ちその崇 邱を焚てこれを粉にうち碎き十六茲にヨシア身をめぐらして山に墓のあるを見人をやりてその墓より骨をとりきたらしめ之をその壇の上に焚てそれを汚せり即ち神の人が宣たるエホバの言のこし昔神の人の言語を宣しこそありしなり十七ヨシアまた其處に見ゆる碑は何なるや言しに邑の人々これに告て其は汝がベテルの壇にむかひて爲るこの事等をユダより來りて宣たる神の人の墓ありと言ければ十八すなはち其には手をつくるなかれ誰もその骨を移すなかれと言り是をもてその骨をサマリヤより來りし預言者の骨には手をつげざりき十九またイスラエルの王等がサマリヤの邑々に造りてエホバを怒せし崇 邱の家も皆ヨシアこれを取のぞき凡てそのベテルになせしごとくに之に事をなせり二十彼また其處にある崇 邱の祭司等を壇の上にくらし人の骨を壇の上に焚てエルサレムに歸りぬ二十一而して王一切の民に命じて言ふ汝らこの契約の書に記されたるごとくに汝らの神エホバに逾越の節を執行ふべし二十二 士師のイスラエ

ルを治めし日より已來もまたユダの王等とイスラエルの王等の代にも斯のこき逾越の節を守りしことはなかりしが二三ヨシア王の十八年にいたりてエルサレムにて斯のこき逾越の節をエホバに守りしなり二十四ヨシアまた祭司ヒルキヤがエホバの家に見いだせし書に記されたる律法の言を世におこなはんとために口寄者として憲師とテラヒムと偶像およびユダの地とエルサレムに見ゆる諸の憎むべき者を取のぞけり二五ヨシアのこき心に心をつくし精神をつくし力をつくしてモーセの法に全くしたがひてエホバに歸向せし王はヨシアの先にはあらざりきまたかれの後に彼のこき者ばなしニ六斯有しかどもエホバはユダにむかひて怒を發したるその大なる燃たつ震怒を息ることなしたまはざりき是はマナセ 諸の憤らしき事をもてエホバを怒らせしによるなりニ七エホバすなはち言たまはく我イスラエルを移せし如くにユダをもわが目の前より拂ひ移し我が選みし此エルサレムの邑を吾名をそこに置んさいひしこの殿を棄べしとニ八ヨシアのその餘の行爲その凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらすやニ九ヨシアの代にエジプトの王パロ子コアツスリヤの王と戦ばんさてユフラテ河をさして上り來しがヨシア王これを防がんさて進みゆきければ彼これに出あひてメギドンにこれを殺せり三十その僕等すなはちこれ死骸を車にのせてメギドンよりエルサレムに持ゆきこれをその墓に葬れり國の民こくに於てヨシアの子エホアハズを取りこれに膏をそそぎて王となしてその父にかはらしめたり三一エホアハズは王となれる時二十三歳にしてエルサレムにて三月世を治めたりその母はリブナのエレミヤの女にして名をハムタルと云ふ三二エホアハズはその先祖等が凡てなしたるごとくにエホバの目の前に惡をなせしが三三パロ子コ彼をハマテの地のリブラに繋ぎおきてエルサレムにゐいて王となりたることを得ざらしめ且銀百タラント金一タラントの罰金を國に課したり三四而してパロ子コはヨシアの子エリアキムをしてその父ヨシアにかはりて王とならしめ彼の名をエホヤキムと改めエホアハズを曳て去ぬエホアハズはエジプトにいたりて其處に死し三五エホヤキムは金銀をパロにおくれり即ち彼國に課してパロの命のまゝに金を出さしめ國の民各人に割つけて金銀を征取りてこれをパロ子コにおくれり

三六 エホヤキムは二十五歳にして王となりエルサレムにおいて十一年世を治めたりその母はルマのベダヤの女にして名をセアタと云ふ三七 エホヤキムはその先祖等が凡てなしたるごとくにエホバの目の前に悪をなせり

第二十四章一 エホヤキムの代にバビロンの王子アカデ子ザル上り来りければエホヤキムこれに臣服して三年をへたりしが遂にひるがへりて之に叛けりニエホバカルデアの軍兵スリアの軍兵モアの軍兵アモンモンの軍兵をしてエホヤキムの所に攻きたらしめたまへり即ちエダを滅さんがためにこれをエダに遣はしたまふエホバがその僕なる預言者等によりて言たまひし言語のごとし三この事は全くエホバの命によりてユダにのみし者にてユダをエホバの目の前より拂ひ除かんがためなり是はマナセがその凡てなす所において罪を犯したるにより四また無辜人の血をながし無辜人の血をエルサレムに充したるによりてなりエホバはその罪を赦すことなしたまはざりき五エホヤキムのその餘の行爲はその凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらす六エホヤキムその先祖等ごとも寝りその子エホニアこれに代りて王となれり七却説またエシュプトの王は重てその國より出きたらざりき其はバビロンの王エシュプトの河よりエブラテ河まで凡てエシュプトの王に屬する者を悉く取たればなり八エホニアは王となれる時十八歳にしてエルサレムにて三月世を治めたりその母はエルサレムのエルナタンの女にして名を子ホシタと云ふ九エホニアはその父の凡てなしたるごとくにエホバの目の前に悪をなせり十その頃バビロンの王子アカデ子ザルの臣エルサレムに攻のぼりて邑を圍めり十一即ちバビロンの王子アカデ子ザル邑に攻來りてその臣にこれを攻懼せしめたれば十二ユダの王エホニアその母その臣その牧伯等もよびその侍従等ごとも出てバビロンの王に降りバビロンの王すなはち彼を執ふ是はその代の八年にあたり十三而して彼エホバの家の諸の寶物もよび王の家の寶物を其處より携へ去りイスラエルの王ソロモンがエホバの宮に造りたる諸の金の器を切はがせりエホバの言たまひしごとし十四 彼またエルサレムの一切の民もよび一切の牧伯等ご一切の大なる能

力ある者もらびに工匠を鍛冶を一萬人携へゆけり遣れる者は國の民の賤き者のみなりき十五彼すなはちエホニアをバビロンに携ゆきまた王の母王の妻等もよび侍従と國の中の能力ある者をもエルサレムよりバビロンに携へゆつせり十六 凡て能力ある者七千人工匠を鍛冶一千人ならびに強壯して善戰ふ者等をバビロンの王携へてバビロンにうつせり十七 而してバビロンの王またエホニアの父の兄弟マツタニヤを王となしてエホニアに代へ其が名をセデキヤと改めたり十八セデキヤは二十一歳にして王となりエルサレムにて十一年世を治めたりその母はリブナのエレミヤの女にして名をハムタルと曰ふ十九セデキヤはエホヤキムが凡てなしたるごとくにエホバの目の前に悪をなせり二十エルサレムとユダに斯る事ありしはエホバの震怒による者にしてエホバつひにその人々を自己の前よりはらひ棄たまへり債またセデキヤはバビロンの王に叛けり

第二十五章一 茲にセデキヤの代の九年の十月十日にバビロンの王子アカデ子ザルその諸軍勢を率てエルサレムに攻きたりこれにむかひて陣を張り周圍に雪梯を建てこれを攻たりニかくこの邑攻りこまれてセデキヤ王の十一年にまでおよびしが三その四月九日にいたりて城邑の中饑こき甚だしくなりその地の民食物を得ざりき四是をもて城邑つひに打破られければ兵卒はみな王の圍の邊なる二箇の石垣の間の途より夜の中に逃いで皆平地の途にしたがひて立ちゆけり時にカルデア人は城邑を圍みなる五茲にカルデア人の軍勢王を追ゆきエリコの平地にてこれに追つきけるにその軍勢み彼を離れて散しかば六カルデア人王を執へてこれをリブラにをるバビロンの王の許に曳ゆきてその罪をさだめ七セデキヤの子等をセデキヤの目の前に殺しセデキヤの目を抉しこれを銅索につなぎてバビロンにたづさへゆけり八バビロンの王子アカデ子ザルの代の十九年の五月七日にバビロンの王の臣侍衛の長子アザラダンエルサレムにきたり九エホバの室と王の室を焼き火をもてエルサレムのすべての室と一切の大なる室を焼り十また侍衛の長ごともにありしカルデア人の軍勢エルサレムの四周の石垣を毀てり十一侍衛の長子アザラダンすなはち邑に遺されし殘餘の民

あよびバビロンの王に降りし降人ぞ群集の殘餘者を擄へうつせり十二但し侍衛の長その地の或貧者を
のこして葡萄をつくる者ぞなし農夫ぞなせり十三カルデア人またエホバの家の銅の柱と洗盤の臺と銅の
海をくだきてその銅をバビロンに運び十四また銅と火鑪と燈剪と匙あよび凡て役事に用ふる銅の器を取
り十五侍衛の長また火盤と鉢など金銀にて作れる物を取り十六またソロモンがエホバの室に造りしころの
二の柱と一の海と臺とを取り此もろくの銅の重は量るべからず十七この柱は高さ十八キユビトにして
その上に銅の頂ありその頂の高は三キユビトその頂の四周に網子と石榴とありて皆銅なり他の柱と
その網子もこれに同じ十八侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司セバニヤと三人の門守を執へ十九また兵
卒を督する一人の寺人と王の前にはべる者の中邑にて遇しころの者五人とその地の民を募る軍勢の長なる
書記官と城邑の中にて遇しころの六十人の者を邑より擄へされり二十侍衛の長子ブザラダンこれら
を執へてリブラになるバビロンの王の許にいたりければニバビロンの王ハマテの地のリブラにてこれらを
撃殺せりかくユダはものれの地よりさらへ移されたり二三斯てバビロンの王子ブカテ子ザルは自己が遺して
ユダの地に止らしめし民の上にシヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤをたてしこれをその督者となせり
二三 茲に軍勢の長等あよびこれに屬する人々みなバビロンの王がゲダリヤを督者となせしことを聞しかば
すなはち子タニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、子トバ人、タンホメテの子セラヤあよび或アアカ人
の子ヤザニヤあらびに彼らに屬する人々ミツバにきたりてゲダリヤの許にいたり二四ゲダリヤすなはち
彼等とかれらに屬する人々に誓ひてこれに言けるは汝等カルデア人の僕となることを恐るゝなかれこの地
に住てバビロンの王につかへなば汝等幸福ならん二五然るに七月に王の血統なるエリシヤマの子子タ
ニヤの子なるイシマエル十人の者さうもに來りてゲダリヤを撃ころし又彼さうもにミツバにをりしユダヤ
人とカルデア人を殺せり二六是において大小の民あよび軍勢の長等みな起てエツプトにおもむけり是はカ
ルデア人をあそれたればなり二七ユダの王エコニアがさらへ移れたる後三十七年の十二月二十七日

バビロンの王エビルメロダクその代の一年にユダの王エコニアを獄より出してその首をあげしめ二八善
言をもて彼をなぐさめその位をバビロンにさもに居るころの王等の位より高くし二九その獄の衣服を易
しめたりエコニアは一生のあひだつれに王の前に食をなせり三十かれ一生のあひだたえず日々分の
王よりたまはりてその食物をなせり

列王紀略下終

歴代志略上

第一章 アダム、セツ、エノス、ニケナン、マハラレル、ヤレド、ミエノク、メトセラ、ラメク、四ノア、セム、ハム、ヤベテ、○五ヤベテの子等はゴメル、マゴク、マデア、ヤラン、トバル、メセク、テラス、六ゴメルの子等はアシケナズ、リバテ、トガルマ、セヤランの子等はエリシヤ、タルシシ、キツテム、ドダニム、○八ハムの子等はクシ、ミツライム、ブテ、カナン、九クシの子等はセバ、ハビラ、サバタ、ラアマ、サブテカ、ラアマの子等はセバ、セバ、セバ、十クシ、ニムロデを生り、彼はじめて世の権力ある者となり、十一ミツライムはルテ族、アナミ族、レハビ族、ナフト族、十二バテロス族、カスル族、カフトリ族を生り、カスル族よりヘリシテ族出たり、十三カナンその家子シドンおよびヘテを生み、十四またエブス族、アモリ族、ギルガシ族、十五ロビ族、アルキ族、セニ族、十六アルワテ族、ゼマリ族、ハマテ族を生り、○十七セムの子等はエラム、アシユル、アルバクサテ、ルテ、アラム、ウズ、オル、ゲテル、メセク、十八アルバクサテ、シラを生みシラ、エベルを生り、十九エベルに二人の子生れたり、その一人の名をヘレク(分)と曰ふ、其は彼の代に地の人散り分れたればなり、その弟の名をヨクタンと曰ふ、二十ヨクタンはアルモダテ、シヤレフ、ハザルマウテ、エラ、二二ハドラム、ウザル、テクラ、二二エバル、アビマエル、シバ、二三オフル、ハビラおよびヨバブを生り、是等はみなヨクタンの子なり、○二四セム、アルバク、サデ、シラ、二五エベル、ヘレク、リウ、二六セルク、ナホル、テラ、二七アブラム、是すなはちアブラハムなり、二八アブラハムの子等はイサクおよびイシマエル、二九彼らの子孫は左のことしイシマエルの家子は子バヨテ、次はケダル、アデビエル、ミブサム、三十ミシマ、ドマ、マツサ、ハダテ、テマ、三十一エトル、子フシ、ケテマ、イシマエルの子孫は是の如し、三十二アブラハムの妾ケトラの生る子は左のことし、彼シムラン、ヨクシヤン、メダン、ミデアン、イシバク、シユワを生り、ヨクシヤンの子等はシバ、およびテダン、三十三ミデアンの子等はエバ、エベル、ヘンク、アビダ、エルダア、是等はみなケトラの生る子なり、三四アブラハム、イサクを生り、イサクの子等はエサウとイスラエル、○三五エサウの子等はエリバズ、リウエル、エウシ、ヤラ

レキダイシリヤクジャウ

第一章 自一至卅五節

ム、コラ、三六 エリパズの子等はテマン、オマル、ゼビ、ガタム、ケナズ、テムナ、アマレク、三七 リウエルの子等はナハテ、セラ、シヤンマ、ミツザ、三八 セイルの子等はロタン、シヨバル、ザベオン、アナ、デシヨシ、エゼル、デシヤン、三九 ロタンの子等はホリ、ホママ、ロタンの妹はテムナ、四十 シヨバルの子等はアルヤン、マナハテ、エバル、シビ、オナム、ザベオンの子等はアヤミアナ、四一 アナの子等はデシヨシ、デシヨシの子等はムラム、エシバン、イテラン、クラン、四二 エセルの子等はビルハン、ザリン、ヤカン、デシヤンの子等はウズおよびアラン、四三 イスラエルの子孫を治むる王いまだ有ざる前にエドムを治めたる王等は左のごとし、ベオルの子ベラ、その都城の名はデナバといふ、四四 ベラ薨てボヅラの子ヨバブこれに代りて王となり、四五 ヨバブ薨てテマン人の地のホシヤムこれに代りて王となり、四六 ホシヤム薨てバダデの子ハダデこれにかはりて王となり、彼モアブの野にてミデアン人を撃り、その都城の名はアビテといふ、四七 ハダデ薨てマスレカのサムラこれに代りて王となり、四八 サムラ薨て河の傍なるレホボテのサウルこれに代りて王となり、四九 サウル薨てアクホルの子パアルハナンこれに代りて王となり、五十 パアルハナン薨てハダデこれにかはりて王となり、その都城の名はパイといふ、その妻はマテレデの女子にして名をメヘタベルといへり、マテレデはメザハアの女なり、五一 ハダデも薨たり、エドムの諸侯は左のごとし、テムナ侯、アルヤ侯、エテテ侯、五二 アホリバマ侯、エラ侯、ピノン侯、五三 クナズ侯、テマン侯、ミブザル侯、五四 マグデエル侯、イラム侯、エドムの諸侯は是のごとし

第二章 イスラエルの子等は左のごとし、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルン、ニダン、ヨセフ、ベニヤミン、ナフタリ、ガド、アセル、三 ユダの子等はエル、オナン、シラなり、この三人はカナンの女バテシエアがユダによりて生たるなり、ユダの長子エルはエホバの前に悪き事をなしたれば之を殺したまへり、ユダの嫡妻タルはユダによりてハレツとセラとを生り、ユダの子等は都合五人なり、五 ハレツの子等はヘズロンおよびハムル、六 セラの子等はシュリ、エタン、ヘマン、カルコル、ガラ都合五人、七 カルミの子はアカル、

アカルは誣はれし物につきて罪を犯してイスラエルを惱ませし者なり、八 エタンの子はアザリヤ、九 ヘズロンに生れたる子等はエラメル、ラム、ケルバイ、ナラム、アミナダブを生み、アミナダブナシヨシを生り、ナシヨシはユダの子孫の牧伯なり、十一 ナシヨシサルマを生み、サルマ、ボアズを生み、十二 ボアズオベデを生み、オベデエツサイを生り、十三 エツサイの生る者は長子はエリアブその次はアミナダブその三はシヤンマ、十四 その四は子タンエルその五はラダイ、十五 その六はオセムその七はダビデ、十六 これらの姉妹はゼルヤとアビガル、ゼルヤの産る子はアビシヤイ、ヨアブ、アサヘルあはせて三人、十七 アビガルはアマサを生り、アマサの父はイシマエル人エテルといふ者なり、十八 ヘズロンの子カレブはその妻アズバによりてまたエリオテによりて子を擧げたり、その産る子等は左のごとし、エシル、シヨバブおよびアルドン、十九 アズバ死たればカレブまたエフラタを娶り、エフラタ、カレブによりてホルを生り、二十 ホルウリを生み、ウリ、ベザレルを生り、二一 その後ヘズロンはギレアデの父マキルの女の所にいれり、その之を娶れる時は六十歳なりき、彼ヘズロンによりてセグアを生り、ニセグア、ヤイルを生り、ヤイルはギレアデの地に邑二十三を有り、二三 然るにゲシユルおよびアラム、彼等よりヤイルの邑々およびケナテとその郷里など都合六十の邑を取り、是皆ギレアデの父マキルの子等なりき、二四 ヘズロン、カレブエフラタに死て後、ヘズロンの妻アビヤその子アシユルを生り、アシユルはテコアの父なり、二五 ヘズロンの長子エラメルの子等は長子はラム、次はブナ、オレン、オセム、アヒヤ、二六 エラメルはまた他の妻をもてり、その名をアタラといふ、彼はオナムの母なり、二七 エラメルの子等は長子ラムの子等はマアツ、ヤミン、エケル、二八 オナムの子等はシヤンマイ、ヤダ、シヤンマイの子等はナダブおよびアビシユル、二九 アビシユルの妻の名はアビハイルといふ、彼はアバンおよびモリテを生り、三十 ナダブの子等はセラデおよびアツパイム、セラデは子なくして死り、三一 アツパイムの子はイシ、イシの子はセシヤン、セシヤンの子はアヘライ、三二 シヤンマイの兄弟ヤダの子はエテルおよびヨナタン、エテルは子なくして死り、三三 ヨナタンの子等はハレテおよびサザ、エラメルの子孫は斯の如し、三四 セシヤンは男子なくして惟女子ありしのみなる

がセシヤンにヤルハ名くるエジプトの僕ありければ三五セシヤンその女をこの僕ヤルハに與へて妻とな
 せしめたり彼ヤルハによりてアツタイを生り三六アツタイナタンを生み、ナタンザバテを生み三七ザバテエ
 フラルを生みエフラルオベテを生み三八オベテエヒウを生み、エヒウアザリヤを生み、三九アザリヤヘレツ
 を生み、ヘレツ、エレアサを生み 四十エレアサ、シスマイを生みシヤルムを生み 四一シヤルムエカ
 ミヤを生み、エカミヤエリシヤマを生り 四二エラメル兄弟カレブの子等はその長子をメシヤさいふ、是
 はツフの父なり、ツフの子はマレシヤ、マレシヤはヘブロンの子たり 四三ヘブロンの子等はコラ、タツプア、
 レケム、シマ、四四シマはラハムを生り、ラハムはヨルカムの父なり、レケムはシヤンマイを生り、四五シヤ
 ンマイの子はマオン、マオンはベテスルの父なり 四六カレブの妾エバはハラシ、モザおよびガゼズを産り、
 ハランはガゼズを生り、四七エダイの子等はレゲム、ヨタム、ガシヤン、ベレテ、エバ、シヤフ、四八カレブの妾
 マアカはシベルおよびテルハナを生み、四九またマデマンナの父シヤフおよびマクベナギベアの父シロを
 生り、カレブの女子はアサさいふ 五十カレブの子孫は左のごとしエフラタの長子ホルの子はキリアテヤリ
 ムの父シヨバル 五一ベテレヘムの父サルマおよびベテカデルの父ハレフ、五二キリアテヤリムの父シヨバル
 の子等はハロエにメヌコテ人の牛、五三またキリアテヤリムの宗族はイテリ族、ブヒ族、シユマ族、ミシラ族
 是等よりザレア族およびエシタオル族出たり 五四サルマの子孫はベテレヘム、子トバ族アタロテベテヨアア、
 マナハテ族の牛およびソリ族、五五ならびにヤベツに住る諸子の宗族すなはちテラテ族、シメアテ族、スカ
 テ族、是等はケニ人にしてレカアの家の先祖ハマテより出たる者なり

第三章 一ヘブロンにて生れたるダビデの子等は左のごとし、長子はアムノンといひてエズレル人アヒノ
 アムより生れ其次はダニエルといひてカルメル人アビガルより生るニその三はアブサロムといひてゲシユ
 ルの王タルマイの女マアカの生る子、其四はアドニヤといひてハギテの生る子あり三その五はシバテヤさ
 いひてアビタルより生れ、其六はイテレアムといひて妻エグラより生る 四この六人ヘブロンにてかれに生

れたり、ダビデ彼處にて王たりし事七年六箇月またエルサレムにて王たりし事三十三年、五エルサレ
 ムにて生れたるその子等は左のごとしメシヤ、シヨバブ、ナタン、ソロモン、この四人はアンミエルの女バテ
 シユアより生る六またイブハル、エリシヤマ、エリベレテ、セノガ、子ベグ、ヤピア、八エリシヤマ、エリアダ、エ
 リベレテの九人九是みなダビデの子あり、此外にまた妾等の生る子等あり、彼らの姉妹にタマルといふ者
 ありナソロモンの子はレハベアム、その子はアビヤ、その子はアサ、その子はヨシヤバテ、十一その子はヨラ
 ム、その子はアハシア、その子はヨアシ、十二その子はアマツヤ、その子はアザリヤ、その子はヨタム、十三その子
 はアハズ、その子はヒセキヤ、その子はマナセ、十四その子はアモン、その子はヨシア 十五ヨシアの子等は長子
 はヨハナン、その次はエホヤキム、その三はゼデキヤ、その四はシヤルム、十六エホヤキムの子等はその子はエ
 コニアその子はゼデキヤ 十七 俘擄人エコニアの子等はその子シヤルテル、十八マルキラム、ベダヤ、セナザ
 ル、エカミア、ホシヤマ、子ダビヤ、十九 ベダヤの子等はゼルバベルおよびシメイ、ゼルバベルの子等はメシユ
 ラムおよびハナニヤ、その姉妹にシロミテといふ者あり 二十またハシユバ、オヘル、ベレキヤ、ハサテヤ、ユサ
 プヘセテの五人あり 二一 ハナニヤの子等はベラテヤおよびエサヤ、またレバヤの子等アルナンの子等オバテ
 ヤの子等シカニヤの子等あり 二三シカニヤの子はシマヤ、シマヤの子等はハットシ、イガル、バリア、子アリア、
 シヤバテの六人、二三子アリアの子等はエリヨエナイ、ヒセキヤ、アズリカムの三人、二四エリヨエナイの子等
 はホダヤ、エリアシブ、ベラヤ、アックブ、ヨハナン、テラヤ、アナニの七人

第四章 一エダの子等はヘレツ、ヘツロン、ガルミ、ホル、シヨバル、ニシヨバルの子レアヤ、ヤハテを生み、ヤハ
 テ、アホマイおよびラハテを生り、是等はザレア人の宗族なり 三エタムの父の生る者は左のごとしエズレル、
 イシマおよびイデバシ、その姉妹の名はハゼレルホニといふ 四ゲドルの父ヘメエル、ホシヤの父エセル、是等
 はベテレヘムの父エフラタの長子ホルの子等なり、五テコアの父アシユルは二人の妻を有り即ちヘラミナア
 ラ、六ナアラ、アシユルによりてアホザム、ヘベル、テメニおよびアハシタリを産り、是等はナアラの産る子な

リ、セヘラの産る子はゼレテ、エソアル、エテナン、ハハツコツはアマブおよびゾベバを生り、ハルムの子アハ
 ルヘルの宗族も彼より出づルヤベツはその兄弟の中に最も尊ばれたる者なりき、その母我くるしみて
 これを産たればさいひてその名をヤベツ(くるしむ)と名けたりヤベツイスラエルの神に願はり我を祝福に
 祝福て我境を擴め御手をもて我を助け、我をして災難に罹りてくるしむこと無しめたまへき言り、神
 その求むる所を允したまふ○十一シユアの兄弟ケルブはメロルを生り、メロルはエシトンの父なり、十二エ
 シトンはベテラバ、バセアおよびイルナハシの父テヒンナを生り、是等はレカの人なり、十三ケナズの子等は
 オテニエルおよびセラヤ、オテニエルの子はハタテ、十四メオノタイはオフラを生み、セラヤはヨアブを生り、
 ヨアブはカラシム(工匠)谷の人々の父なり、彼處の者は工匠なればかくいふ、十五エフン子の子カレブの子等は
 イル、エラおよびナアム、エラの子等およびケナズ十六エハレルの子等はツフ、ツバ、テリア、アサレル、十七
 エズラの子等はエテル、メレテ、エベル、ヤロン、メレテの妻はミリアム、シヤンマイおよびイシバを生り、イシ
 バはエシテモアの父なり、十八そのユダヤ人なる妻はゲドルの父エレデとシヨコの父ヘベルとザノアの父エ
 テルを生り、是等はメレテが娶りたるバロの女ピテヤの生る子なり十九ナハムの姉妹なるホテアの妻の
 生める子等はガルミ人ケイラの父およびマアカ人エシテモアなり、二十シモンの子等はアムノン、リンナ、ベ
 子ハナン、テロン、イシの子等はゾヘテおよびベ子ソヘテ○二一ユダの子シラの子等はレカの父エル、マレシヤ
 の父ラダおよび織布者の家の宗族すなはちアシベアの家の者等、二三ならびにモアブに主たりしヨキム、コセ
 ムの人々ヨアシおよびサラフ等あり、またヤシユブレハムといふ者ありその記録は古し二三是等の者は陶
 工にして子タイムおよびゲテラに住み、王の地に居りてその用をなせり○二四シメオンの子等は子ムエル、ヤ
 ミン、ヤリア、セラ、シヤウル、二五シヤウルの子はシヤルム、その子はミブサムその子はミシマ、二六ミシマの子
 はハムエルその子はザツクルその子はシメイ、二七シメイには男子十六人女子六人ありしがその兄弟等に
 は多の子あらざりき、また其宗族の者は凡てユダの子孫はシには殖増ざりき二八 彼らの住る處はベエトシバ、

モラダ、ハザルシユアル、二九ビルハ、エセム、トラテ、三十ベトエル、ホルマ、チクラダ、三一ベテマルカボテ、ハ
 ザルスシム、ベテビリ、シヤライム、是等の邑はダビデの世にいたるまで彼等の有たりき 三三その村郷はエタ
 ム、アイン、リンモン、トケン、アシヤンの五の邑なり 三三またこの邑々の周圍に衆多の村ありてバアルにま
 であらべり、彼らの住處は是のこゝくにして彼ら各々系譜あり 三四メシヨバ、ヤムレク、アマシヤの子ヨ
 シヤ、三五ヨエル、アシエルの曾孫セラヤの孫ヨシビアの子エヒウ、三六エリオエナイ、ヤコバ、エシヨハヤ、ア
 サヤ、アデエル、エシミエル、ベナヤ三七およびシビの子、ツザ、シビはアロンの子、アロンはエダヤの子、エ
 ダヤはシムリの子、シムリはシマヤの子なり、三八此に名を擧げたる者等は其の宗族の中の長たる者にして
 その宗家は大に蔓延り 三九 彼等は其の群のために牧場を求めんてゲドルの西にもむき谷の東の方にいた
 り四十つひに膏腴なる善き牧場を見いだせしがその地は廣く僻處にして安寧なりき、其は昔より其處に住
 たりし者はハム人なればなり、四一 即ち上にその名を記したる者等ユダの王ヒセキヤの代に往て彼らの幕
 屋を撃やぶり、彼ら其處に居しメウニ人を盡く滅ぼし、之に代りて其處に住て今日にいたる、是はその
 群を牧へき牧場其處にありたればなり、四二またシメオンの子孫の者五百人許イシの子等ベラテア、子
 アリア、レバヤ、ウシエルを長としてセイル山に攻めしめ 四三アマレキ人の逃れて遣れる者を撃はるぼして今日
 まで其處に住り

第五章 一イスラエルの長子ルベンの子等は左のこゝし、ルベンは長子なりしがその父の床を洗しよによ
 りてその長子の權はイスラエルの子ヨセフの子等に與へらる、然れども系譜は長子の權にしたがひて記すべ
 きに非ずニそはユダその諸兄弟に勝る者となりて君たる者の中より出ればなり、但し長子の權はヨセフ
 に屬す、三 即ちイスラエルの長子ルベンの子等はハノク、バル、ヘツロン、カルミ、四ヨエルの子はシマヤ、
 その子はゴク、その子はシメイ、五その子はミカ、その子はレアヤ、その子はバアル、六その子はベエラ、このベ
 エラはアツスリヤの王テルガテビルセルに擧へられてゆけり、彼はルベン人の中に牧伯たる者なりき、七